

夜明け前

第一部上

島崎藤村

青空文庫

序の章

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨^そづたいに行く^{がけ}崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道^{かいどう}はこの深い森林地帯を貫いていた。

東ざかいの桜沢から、西の十^{じつき}曲^{よく}峠^{とうげ}まで、木曾十一宿^{しゆく}はこの街道に添うて、二十二里余にわたる長い^{けいこく}谿谷の間に散在して

いた。道路の位置も幾たびか改まったもので、古道はいつのまにか深い山間に埋もれた。名高い^{やまあい}山間に^{うず}埋もれた。名高い^{かけはし}栈も、^{つた}蔦のかずらを頼みにしたような危い^{あぶな}場処ではなくなつて、徳川時代の末にはすでに渡ることのできる橋であつた。新規に新規にとできた道はだんだん谷の下の方の位置へと降^{くだ}つて来た。道の狭いところには、木を伐^きつて並べ、^{ふじ}藤づるでからめ、それで街道の狭いのを補つた。長い間にこの木曾路に起こつて来た変化は、いくらかずつでも嶮^{けんそ}岨な山坂の多いところを歩きよくした。そのかわり、大雨ごとにやつて来る河水の氾^{はんらん}濫が旅行を困難にする。そのたびに旅人は最^も寄り最寄りの宿場に^{とうりゆう}逗留して、道路の開通を待つこともめずらしくない。

この街道の変遷は幾世紀にわたる封建時代の発達をも、その制度組織の用心深さをも語っていた。鉄砲を改め女を改めるほど旅行者の取り締まりを嚴重にした時代に、これほどよい要害の地勢もないからである。この谿谷けいこくの最も深いところには木曾福島きそふくしまの関所も隠れていた。

東山道とうさんどうとも言い、木曾街道六十九次つぎとも言った駅路の一部がここだ。この道は東は板橋いたばしを経て江戸に続き、西は天津おおつを経て京都にまで続いて行っている。東海道方面を回らないほどの旅人は、否いやでも応おうでもこの道を踏まねばならぬ。一里ごとに塚つかを築き、榎えのきを植えて、里程を知るたよりとした昔は、旅人はいずれも道中記をふところにして、宿場から宿場へとかかりながら、この街道

筋を往来した。

馬籠まごめは木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の尽きたところにある。西よりする木曾路の最初の入り口にあたる。そこは美濃境みのざかいにも近い。美濃方面から十曲峠に添うて、曲がりくねった山坂をよじ登つて来るものは、高い峠の上の位置にこの宿しゆくを見つける。街道の両側には一段ずつ石垣いしがきを築いてその上に民家を建てたようなところで、風雪をしのぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでいる。宿場らしい高札こうさつの立つところを中心に、本陣ほんじん、問屋といや、年寄としより、伝馬役てんまやく、定歩行役じようほこうやく、水役みずやく、七里役しちりやく（飛脚おも）などより成る百軒ばかりの家々が主な部分で、まだそのほかに宿内の控えとなつている小名こなの家数を加えると六十軒ばかりの

民家を数える。荒町あらまち、みつや、横手よこて、中のかや、岩田いわた、峠とうげなどの部落がそれだ。その宿はずれでは狸たぬきの膏藥こうやくを売る。名物栗くりこわめしの看板を軒に掛けて、往來の客を待つ御休処おやすみどころもある。山の中とは言いながら、広い空は恵那山えなさんのふもとの方にひらけて、美濃の平野を望むことのできるような位置にもある。なんとなく西の空気も通かよつて来るようなところだ。

本陣の当主吉左衛門きちざえもんと、年寄役の金兵衛きんべえとはこの村に生まれた。吉左衛門は青山の家をつぎ、金兵衛は、小竹の家をついだ。この人たちが宿役人として、駅路一切の世話に慣れたころは、二人ふたりともすでに五十の坂を越していた。吉左衛門五十五歳、金兵衛の方は五十七歳にもなった。これは当時としてめずらしいことでもな

い。吉左衛門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を譲つて、ようやく隠居したくらいの人だ。吉左衛門にはすでに半蔵^{はんぞう}という跡継ぎがある。しかし家督を譲つて隠居しようなどとは考えていない。福島役所からでもその沙汰^{さた}があつて、いよいよ引退の時期が来るまでは、まだまだ勤められるだけ勤めようとしている。金兵衛とても、この人に負けてはいなかった。

二

山里へは春の来ることもおそい。毎年旧暦の三月に、恵那^{えな}山脈

の雪も溶けはじめるところになると、にわかには人の往来も多い。中^な津川^{かつがわ}の商人は奥筋^{おくすじ}（三留野^{みどの}、上松^{あげまつ}、福島から奈良井^{ならい}辺までをさす）への諸勘^{かんじよう}定^{じよう}を兼ねて、ぽつぽつ隣の国から登つて来る。伊那^{いな}の谷の方からは飯田^{いいた}の在^あのものが祭礼^{いしりゆう}の衣裳^{いしやう}などを借りにやつて来る。太神樂^{だいかぐら}もはいり込む。伊勢^{いせ}へ、津島^{つしま}へ、金毘羅^{こんびら}へ、あるいは善光寺^{ぜんくわうじ}への参詣^{さんけい}もそのころから始まつて、それらの団体をつくつて通る旅人の群れの動きがこの街道に活気をそそぎ入れる。

西の領地よりする参覲^{さんきん}交代^{こうたい}の大小の諸大名、日光^{にっこう}への例^{れい}幣使^{いし}、大坂^{おさか}の奉行^{ぶぎやう}や御加番衆^{おかげはんしゆう}などはここを通行した。吉左衛門^{きちざゑもん}なり金兵衛^{きんべゑ}なりは他の宿役人を誘い合わせ、羽織^{はおり}に無刀^{むとう}、扇^{せん}

子^{んす}をさして、西の宿^{しゆくざかい}境^{かい}までそれらの一行をうやうやしく出迎える。そして東は陣場^{じんば}か、峠の上まで見送る。宿から宿への継立^{つぎた}てと言え、人足^{にんそく}や馬の世話から荷物の扱いまで、一通行あるごとに宿役人としての心づかいもかなり多い。多人数の宿泊、もしくはお小休み^{こやす}の用意も忘れてはならなかった。水戸^{みと}の御茶壺^{おちやつぼ}、公儀の御鷹方^{おたかかた}をも、こんなふうにして迎える。しかしそれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなぞに干渉されないで済む通行である。福島勘定所の奉行を迎えとか、木曾山一帯を支配する尾張藩^{おわりはん}の材木方を迎えとかいう日になると、ただの送り迎えや継立てだけではなかなか済まされなかった。

多感な光景が街道にひらけることもある。文政九年の十二月に、

黒川村の百姓が牢舎御免ろうやということで、美濃境まで追放を命ぜられたことがある。二十二人の人数が宿籠しゆくかごで、朝の五つ時どきに馬籠ごめへ着いた。師走しわすももう年の暮れに近い冬の日だ。その時も、吉左衛門は金兵衛と一緒に雪の中を奔走して、村の二軒の旅籠屋はたごやで昼じたくをさせるから国境くにぎかいへ見送るまでの世話をした。もつとも、福島からは四人の足輕あしがるが付き添って来たが、二十二人もに残らず腰繩こしなわ手錠であつた。

五十余年の生涯しょうがいの中で、この吉左衛門らが記憶に残る大通行と言へば、尾張藩主の遺骸いがいがこの街道を通つた時のことにとどめをさす。藩主は江戸で亡なくなつて、その領地にあたる木曾谷を輿こしで運ばれて行つた。福島のだ官、山村氏から言へば、木曾谷中

の行政上の支配権だけをこの名古屋の大領主から託されているわけだ。吉左衛門らは二人ふたりの主人をいただいていることになるので、名古屋城の藩主を尾州びしゅうの殿と呼び、その配下にある山村氏を福島だんなの旦那様と呼んで、「殿様」と「旦那様」で区別していた。「あれは天保十年のことでした。全く、あの時の御通行は前ぜん代だい未聞みもんでしたわい。」

この金兵衛の話が出るたびに、吉左衛門は日ごろから「本陣鼻」と言われるほど大きく肉厚にくあつな鼻の先へしわをよせる。そして、「また金兵衛さんの前代未聞が出た」と言わないばかりに、年齢としの割合にはつやつやとした色の白い相手の顔をながめる。しかし金兵衛の言うとおり、あの時の大通行は全く文字どおり前代未聞

の事と言ってよかつた。同勢およそ千六百七十人ほどの人数がこの宿にあふれた。問屋の九太夫くだゆう、年寄役の儀助ぎすけ、同役の新七、同じく与次衛門よじえもん、これらの宿役人仲間から組頭くみがしらのものはおろか、ほとんど村じゅう総がかりで事に当たつた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは、まだそれでも手が足りなくて、千人あまりもの伊那の助郷すけごうが出たのもあの時だ。諸方から集めた馬の数は二百二十四匹にも上つた。吉左衛門の家は村でも一番大きい本陣のことだから言うまでもないが、金兵衛の住居すまいにすら二人の御用人ごようじんのほかには上下合わせて八十人の人数を泊め、馬も二匹引き受けた。

木曾は谷の中が狭くて、田畑もすくない。限りのある米でこの

多人数の通行をどうすることもできない。伊那の谷からの通路にあたる権兵衛街道ごんべえの方には、馬の振る鈴音に調子を合わせるような馬子唄まごうたが起こつて、米をつけた馬匹ばひつの群れがこの木曾街道に続くのも、そういう時だ。

三

山の中の深さを思わせるようなものが、この村の周囲には数知れずあった。林には鹿しかも住んでいた。あの用心深い獣は村の東南を流れる細い下坂川おりさががわについて、よくそこへ水を飲みに降りて来た。

古い歴史のある御坂越みさかごえをも、ここから恵那山脈えなの方に望むことが出来る。大宝たいほうの昔に初めて開かれた木曾路とは、実はその御坂を越えたものであるという。その御坂越から幾つかの谷を隔てた恵那山のすその方には、霧が原の高原もひらけていて、そこにはまた古代の牧場の跡が遠くかすかに光っている。

この山の中だ。時には荒くれた猪いのししが人家の並ぶ街道にまで飛び出す。塩沢というところから出て来た猪は、宿しゆくはずれの陣場から薬師堂やくしどうの前を通り、それから村の舞台の方をあばれ回って、馬場へ突進したことがある。それ猪だと言って、皆々鉄砲などを持ち出して騒いだが、日暮れになってその行くえもわからなかった。この勢いのいい獣に比べると、向山むこうやまから鹿の飛び出した時は、

石屋の坂の方へ行き、七回りの藪^{やぶ}へはいった。おおぜいの村の人が集まって、とうとう一矢^{ひとや}でその鹿を射とめた。ところが隣村の湯舟^{ゆふねざわ}沢の方から抗議が出て、しまいには口論にまでなったことがある。

「鹿よりも、けんかの方がよっぽどおもしろかった。」

と吉左衛門は金兵衛に言つて見せて笑つた。何かというと二人^{ふたり}は村のことに引っぱり出されるが、そんなけんかは取り合わなかつた。

ひのき ^{さわら} あすひ
檜木、樅、明檜、
高野槇、※——これを木曾^{ごぼく}では五木という。

そういう樹木の生長する森林の方はことに山も深い。この地方には^{すやま} 巢山、^{とめやま} 留山、^{あきやま} 明山の区別があつて、巢山と留山とは絶対に

村民の立ち入ることを許されない森林地帯であり、明山のみが自由林とされていた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられていた。これは森林保護の精神より出たことは明らかで、木曾山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生まれて来る良い材木を重く視ていたのである。取り締まりはやかましい。すこしの怠りでもあったと、木曾谷中三十三か村の庄屋しょうやは上松あげまつの陣屋へ呼び出される。吉左衛門の家は代々本陣庄屋問屋の三役を兼ねたから、そのたびに庄屋として、背伐りせぎの厳禁を犯した村民のため言い開きをしなければならなかった。どうして檜木ひのき一本でもばかにならない。陣屋の役人の目には、どうかすると人間の生命いのちよりも重かった。

「昔はこの木曾山の木一本伐ると、首一つなかったものだぞ。」

陣屋の役人の威し文句だ。

この役人が吟味のために村へはいり込むといううわさでも伝わると、猪や鹿どころの騒ぎでなかった。あわてて不用の材木を焼き捨てるものがある。囲って置いた檜板を他へ移すものがある。多分の木を盗んで置いて、板にへいだり、売りさばいたりした村の人などはことに狼狽する。背伐りの吟味と言えば、村じゅう家探しの評判が立つほど嚴重をきわめたものだ。

目証の弥平はもう長いこと村に滞在して、幕府時代の卑い

「おかつぴき」の役目をつとめていた。弥平の案内で、福島役所からの役人を迎えた日のことは、一生忘れられない出来事の一

つとして、まだ吉左衛門の記憶には新しくてある。その吟味は本陣の家の門内で行なわれた。のみならず、そんなにたくさんな怪^け我人^{がにん}を出したことも、村の歴史としてかつて聞かなかつたことだ。前庭の上段には、福島から来た役人の年寄、用人、書役^{かきやく}などが居並んで、そのわきには足輕が四人も控えた。それから村じゅうのものが呼び出された。その科^{とが}によつて腰繩^{こしなわ}手錠で宿役人の中へ預けられることになった。もつとも、老年で七十歳以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは「お叱り^{しか}」というだけにとどめて特別な憐憫^{れんぴん}を加えられた。

この光景をのぞき見ようとして、庭のすみの梨^{なし}の木のかげに隠れていたものもある。その中に吉左衛門^{せがれ}が悴^{せがれ}の半蔵もいる。当時

十八歳の半蔵は、目を据えて、役人のすることや、腰縄につながれた村の人たちのさまを見ている。それに吉左衛門は気がついて、「さあ、行つた、行つた——ここはお前たちなぞの立つてるところじゃない。」

としかつた。

六十一人もの村民が宿役人へ預けられることになったのも、その時だ。その中の十人は金兵衛が預かつた。馬籠まごめの宿役人や組くみが頭しらとしてこれが見ていられるものでもない。福島ふくしまの役人たちが湯舟沢村の方へ引き揚げて行つた後で、「お叱りひまち」のものの赦免せられるようにと、不幸な村民のために一同お日待をつとめた。その時のお札は一枚ずつ村じゅうへ配当した。

この出来事があつてから二十日ばかり過ぎに、^{はつか}「お叱り」のもの残らず手錠を免ぜられる日がようやく来た。福島からは三人の役人が出張してそれを伝えた。

手錠を解かれた小前^{こまえ}のものの一人は、^{ひとり}役人の前に進み出て、おずおずとした調子で言つた。

「畏れながら申し上げます。^{おそ}木曾は御承知のとおりな山の中でございます。こんな田畑もすくないような土地でございます。お役人様の前ですが、山の林にでもすがるよりほかに、わたくしどもの立つ瀬はございません。」

四

新茶屋に、馬籠の宿の一番西のはずれのところに、その路傍みちばたに芭蕉ばしやうの句塚くづかの建てられたころは、なんと言つても徳川の代よはまだ平和であつた。

木曾路の入り口に新しい名所を一つ造る、信濃しなのと美濃みのの国くに境さかいにあたる一里塚いちりづかに近い位置をえらんで街道を往来する旅人の目にもよくつくような緩慢なだらかな丘のすそに翁おきな塚なづかを建てる、山石や躑躅つづじや蘭らんなどを運んで行つて周囲に休息の思ひを与える、土を盛りあげた塚の上に翁の句碑を置く——その楽しい考えが、日ごろ俳諧はいかいなぞに遊ぶと聞いたこともない金兵衛の胸に浮かんだということとは、それだけでも吉左衛門を驚かした。そういう吉左

衛門はいくらか風雅の道に嗜^{たしな}みもあつて、本陣や庄屋の仕事のかたわら、美濃派の俳諧の流れをくんだ句作にふけることもあつたからで。

あれほど山里に住む心^{こころもち}地^ちを引き出されたことも、吉左衛門らにはめずらしかった。金兵衛はまた石屋に渡した仕事もほぼできたと言つて、その都度^{つど}句碑の工事を見に吉左衛門を誘つた。二人とも山家^{やまがふう}風な軽^{かる}衫^{さん}（地方により、もんぺいというもの）をはいて出かけたものだ。

「親父^{おやじ}も俳諧は好きでした。自分の生きているうちに翁塚の一つも建てて置きたいと、口癖のようにそう言っていました。まあ、あの親父の供養^{くよう}にと思つて、わたしもこんなことを思い立ちまし

たよ。」

そう言つて見せる金兵衛の案内で、吉左衛門も工作された石のそばに寄つて見た。碑の表面には左の文字が読まれた。

送られつ送りつ果^{はて}は木曾^{あき}の穠

はせを

「これは達^{たつしや}者に書いてある。」

「でも、この秋という字がわたしはすこし氣に入らん。禾^{のぎ}へんがくずして書いてあつて、それにつくりが龜^{かめ}でしょう。」

「こういう書き方もありますサ。」

「どうもこれでは木曾^{はえ}の蠅^{はえ}としか読めない。」

こんな話の出たのも、ひとむかしまえ一昔前だ。

あれは天保十四年にあたる。いわゆる天保の改革の頃で、世の中建て直しということがしきりに触れ出される。村方一切の諸帳簿の取り調べが始まる。福島役所からは公役、ふしんやく普請役が上つて来る。尾張藩の寺社奉行、じしゃぶぎようまたは材木方の通行も続く。馬籠の荒町あらまちにある村社の鳥居とりいのために檜木ひのきを背伐せぎりしたと言つて、その始末書を取られるような細かい干渉がやつて来る。村民の使用する煙草たばこい入れ、紙入れから、女のかんざしまで、およそ銀といふ銀を用いた類たぐいのものは、すべて引き上げられ、封印をつけられ、目方まで改められて、しようや庄屋預けということになる。それほど政治はこまかくなって、句碑一つもうっかり建てられないような時

世ではあつたが、まだまだそれでも社会にゆとりがあつた。

翁塚の供養はその年の四月のはじめに行なわれた。あいにくと曇つた日で、八つ半や はんどき時より雨も降り出した。招きを受けた客は、おもに美濃の連中で、手土産てみやげも田舎いなからしく、扇子に羊羹ようかんを添えて来るもの、生椎茸なましいたけをさげて来るもの、先代の好きな菓子を仏前へと言つてわざわざ玉あられ一箱用意して来るもの、それらの人たちが金兵衛方へ集まつて見た時は、国も二つ、言葉の訛りなまもまた二つに入れまじつた。その中には、峠一つ降りたところに住む隣宿落おちあい合あひの宗匠すさぼう、崇佐坊も招かれて来た。この人の世話で、美濃派の俳席らしい支考しこうの『三三さんちよう類るいの図』などの壁にかけられたところで、やがて連中の付合つけあいがあつた。

主人役の金兵衛は、自分で五十韻、ないし百韻の仲間入りはできないまでも、

「これで、さぞ親父おやじもよろこびましようよ。」

と言つて、弁当に酒さかななど重じゆうづめ詰めにして出し、招いた人たちの間を幹旋あつせんした。

その日は新たにできた塚のもとに一同集まつて、そこで吟声供養を済ますはずであつた。ところが、記念の一卷を巻き終わるのに日暮れ方までかかつて、吟声は金兵衛の宅で済ました。供養の式だけを新茶屋の方で行なつた。

昔むかし氣質かたぎの金兵衛は亡父の形見かたみだと言つて、その日の宗匠すさ崇佐すさ坊ぼうへ茶縞ちやしまの綿入れ羽織なぞを贈るために、わざわざ自分で落合

まで出かけて行く人である。

吉左衛門は金兵衛に言つた。

「やっぱり君はわたしのよい友だちだ。」

五

暑い夏が来た。旧暦五月の日のあたたた街道を踏んで、伊^{いな}那の方面まで繭買いにと出かける中津川の商人も通る。その草いきれのするあつい空気の中で、上り下りの諸大名の通行もある。月^{つき}の末には毎年福島の方に立つ毛^け付け（馬市）も近づき、各村の駒^{こま}改^{あらた}めということも新たに開始された。当時幕府に勢力のある彦^{ひこ}

根^{こね}の藩主（井伊掃部頭^{いいかもんのかみ}）も、久しぶりの帰国と見え、須原宿^{すはらしゆく}泊まり、妻籠宿^{つまごしゆく}昼食^{ちゆうじき}、馬籠はお小休み^{こやす}で、木曾路を通った。六月にはいつて見ると、うち続いた快晴で、日に増し照りも強く、村じゅうで雨乞い^{あまご}でも始めなければならぬほどの激しい暑気になった。荒町の部落ではすでにそれを始めた。

ちようど、峠の上の方から馬をひいて街道を降りて来る村の小^こ前^{まえ}のものがあつた。福島^{ふくしま}の馬市からの戻り^{もど}と見えて、青毛の親馬のほかに、当歳らしい一匹の子馬をもそのあとに連れている。気の短い問屋の九太夫^{くだゆう}がそれを見つけて、どなつた。

「おい、どこへ行つていたんだい。」

「馬買いよなし。」

「この旱^{ひで}りを知らんのか。お前の留守に、田圃^{たんぼ}は乾^{かわ}いてしまう。荒町あたりじや梵^{ぼん}天^{てん}山^{やま}へ登^{のぼ}つて、雨乞^{うがみ}いを始^{はじ}めている。氏^{うじ}神^{がみ}さまへ行^いつてごらん、お千^{せん}度^ど参^{まゐ}りの騒^{さわ}ぎだ。」

「そう言^いわれると、一^{いち}言^{ごん}もない。」

「さあ、このお天気続^つきでは、伊勢^い木^せを出^いさず^ぎに済^いむまいぞ。」
伊勢^い木^せとは、伊勢太神宮へ祈願をこめるための神^{しん}木^{ぼく}をさす。
こうした深い山の中に古くから行なわれる雨乞^{うがみ}いの習慣である。
よくよくの年でなければこの伊勢木を引き出すということもなかつた。

六月の六日、村民一同は鎌止^{かまど}めを申し合わせ、荒町にある氏神の境内に集まつた。本陣、問屋をはじめ、宿役人から組頭^{くみがしら}ま

で残らずそこに参集して、氏神境内の宮^{みや}林^{はやし}から樅^{もみ}の木一本を
元伐^{もとぎ}りにする相談をした。

「一本じゃ、伊勢木も足りまい。」

と吉左衛門が言い出すと、金兵衛はすかさず答えた。

「や、そいつはわたしに寄付させてもらいましょう。ちようどよ
い樅^{もみ}が一本、吾家^{うち}の林にもありますから。」

元伐^{もとぎ}りにした二本の樅^{もみ}には注連^{しめ}なぞが掛けられて、その前で禰^ね
宜^ぎの祈禱^{きとう}があつた。この清浄な神木が日暮れ方になってようやく
鳥居の前に引き出されると、左右に分かれた村民は声を揚げ、太
い綱でそれを引き合いはじめた。

「よいよ。よいよ。」

互いに競い合う村の人たちの声は、荒町のはずれから馬籠の中央にある高札場こうさつばあたりまで響けた。こうなると、庄屋としての吉左衛門も骨が折れる。金兵衛は自分から進んで神木の櫓を寄付した関係もあり、夕飯のしたくもそこそこにまた馬籠の町内のものを引き連れて行つて見ると、伊勢木はずっと新茶屋の方まで荒町の百姓の力に引かれて行く。それを取り戻そうとして、三つみや表おもてからたたみいし置石の辺で双方のもみ合いが始まる。とうとうその晩は伊勢木を荒町に止めて置いて、一同疲れて家に帰ったころは一どり番鶏が鳴いた。

「どうもことしは年回りがよくない。」

「そう言えば、正月のはじめから不思議なこともありましたよ。」

正月の三日の晩です、この山の東の方から光ったものが出て、それが西にしみなみ南の方角へ飛んだといひます。見たものは皆驚いたそうですよ。馬籠まごめばかりじゃない、妻籠つまごしでも、山口でも、中津川でも見たものがある。」

吉左衛門と金兵衛とは二人でふたりこんな話をして、伊勢木の始末をするために、村民の集まるところへ急いだ。山里に住むものは、すこし変わったことでも見たり聞いたりすると、すぐそれを何かの暗示に結びつけた。

三日がかりで村じゅうのものが引き合つた伊勢木を落合川の方

へ流したあとになつても、まだ御利生ごりしょうは見えなかつた。峠とののものは熊野大権現くまのだいこんげんに、荒町あらかちのものは愛宕山あたごやまに、いずれも百八たいまつの松明をとぼして、思い思いの祈願をこめる。宿内では二組に分かれてのお日待ひまちも始まる。雨乞いの祈祷きとう、それに水の拝借と言つて、村からは諏訪大社すわたいしゃへ二人の代参までも送つた。神前へのお初穂料はつほりょうとして金百疋びき、道中の路用として一人につき一分二朱ぶしゆずつ、百六十軒の村じゅうのものが十九文ずつ出し合つてそれを分担した。

東海道浦賀うらがの宿しゆく、久里が浜くりはまの沖合いに、黒船のおびただしく現われたといううわさが伝わつて来たのも、村ではこの雨乞いの最中である。

問屋の九太夫がまずそれを彦根ひこねの早飛脚はやびきやくから聞きつけて、吉左衛門にも告げ、金兵衛にも告げた。その黒船の現われたため、にわかには彦根の藩主は幕府から現場の詰役つめやくを命ぜられたのと。と。

嘉永六年六月十日の晩で、ちょうど諏訪大社からの二人の代参かえいが村をさして大急ぎに帰って来たころは、その乾ききつた夜かわの空気の中を彦根の使者が西へ急いだ。江戸からの便りたよは中仙道なかせんどうを経て、この山の中へ届くまでに、早飛脚でも相応日数はかかる。黒船とか、唐人船とうじんぶねとかがおびただしくあの沖合いにあらわれたということ以外に、くわしいことはだれにもわからない。ましてアメリカの水師提督ペリイが四艘そうの軍艦を率いて、初めて日本に

到着したなぞとは、知りようもない。

「江戸は大変だということですよ。」

金兵衛はただそれだけを吉左衛門の耳にささやいた。

第一章

一

七月にはいつて、吉左衛門きちざえもんは木曾福島きそふくしまの用事を済まして出張先から引き取つて来た。その用向きは、前の年の秋に、福島ふくしまの勘定所から依頼のあつた仕法しほう立ての件で、馬籠まごめの宿しゆくとしては金百両の調達を引き請け、暮れに五十両の無尽むじんを取り立ててその金は福島の方へ回し、二番口も敷金にして、首尾よく無尽も終会になつたところで、都合全部の上納を終わつたことを届けて置いてあつた。

今度、福島からその挨拶あいさつがあつたのだ。

金兵衛きんべえは待ち兼ね顔に、無事で帰つて来たこの吉左衛門を自分

の家の店座敷みせざしきに迎えた。金兵衛の家は伏見屋ふしみやと言つて、造り酒

屋をしている。街道に添うた軒先に杉の葉すぎの円く束まるにしたのを掛

け、それを清酒の看板に代えてあるようなところだ。店座敷も広

い。その時、吉左衛門は福島から受け取つて来たものを風呂敷包ふろしきづつ

みの中から取り出して、

「さあ、これだ。」

と金兵衛の前に置いた。村の宿役人仲間へ料紙一束ずつ、無尽

の加入者一同への酒肴料しゅこうりょう、まだそのほかに、二巾ふたはばの縮緬ちりめん

の風呂敷が二枚あつた。それは金兵衛と榊田屋ますだやの儀助ぎすけの二人が特

に多くの金高を引き受けたというので、その挨拶の意味のものだ。
吉左衛門の報告はそれだけにとどまらなかった。最後に、一通
の書付かきつけもそこへ取り出して見せた。

「其方儀そのほう、御勝手御仕法立てにつき、頼母子講御世話方格別たのもしこう
に存じ入り、小前の諭し方も行き届き、その上、自身にも別段
御奉公申し上げ、奇特の事に候そうろう。よって、一代苗字みょうじ帯刀御
免なし下され候。その心得あるべきものなり。」

嘉永六年丑六月かえい うし

三逸作みついつさく

いしだんのじよう
石団之丞

おぎじようざえもん
荻丈左衛門

しろしんござえもん
白新五左衛門

青山吉左衛門殿

「ホ。苗字帯刀御免とありますね。」

「まあ、そんなことが書いてある。」

「吉左衛門さん一代限りともありますね。なんにしても、これは

名誉だ。」

と金兵衛が言うと、吉左衛門はすこし苦^{にが}い顔をして、

「これが、せめて十年前だとねえ。」

ともかくも吉左衛門は役目を果たしたが、同時に勘定所の役人たちがいやな臭^{にお}いをもかいで帰って来た。苗字帯刀を勘定所のやり繰り算段に替えられることは、吉左衛門としてあまりいい心持ちではしなかった。

「金兵衛さん、君には察してもらえうでしようが、庄^{しょうや}屋のつとも辛い^{つら}ものだと思つて来ましたよ。」

吉左衛門の述懐だ。

その時、上^{かみ}の伏見屋の仙^{せん}十^{じゅう}郎^{ろう}が顔を出したので、しばらく

ふたり
二人はこんな話を打ち切った。仙十郎は金兵衛の仕事を手伝わされているので、ちよつと用事の打ち合わせに来た。金兵衛を叔父おじと呼び、吉左衛門を義理ある父としているこの仙十郎は伏見家から分家して、別に上の伏見屋という家を持っている。年も半蔵より三つほど上で、腰にした煙草たばこ入れの根付ねつけにまで新しい時の流行はやりを見せたような若者だ。

「仙十郎、お前も茶でも飲んで行かないか。」

と金兵衛が言ったが、仙十郎は吉左衛門の前に出ると妙に改まってしまつて、茶も飲まなかつた。何か氣づまりな、じつとしていられないようなふうで、やがてそこを出て行つた。

吉左衛門は見送りながら、

「みんなどういふ人になつて行きますか——仙十郎にしても、半蔵にしても。」

若者への関心にかけては、金兵衛とても吉左衛門に劣らない。アメリカのペリイ来訪以来のあわただしさはおろか、それ以前からの周囲の空気の中にあるものは、若者の目や耳から隠したいことばかりであつた。殺人、盗賊、かけおち駈落、男女の情死、諸役人の腐敗沙汰ざたなどは、この街道でめずらしいことではなくなった。

同宿三十年——なんと言つても吉左衛門と金兵衛とは、その同じ駅路の記憶につながつていた。この二人に言わせると、日ごろ上に立つ人たちからやかましく督促せらるることは、街道のよい整理である。言葉をかえて言えば、封建社会の「秩序」である。

しかしこの「秩序」を乱そうとするものも、そういう上に立つ人
たちからであつた。博打ばくちはもつてのほかだという。しかし毎年けづの
毛付けけづ（馬市）を賭博場とばくじやうに公開して、土地の繁華を計っている
のも福島ふくしまの役人であつた。袖そでの下はもつてのほかだという。しか
し御着代おさかなだいもしくは御祝儀ごしゅうぎ何両かの献上金を納めさせることな
しに、かつてこの街道を通行したためしのないのも日光への例幣
使であつた。人殺しはもつてのほかだという。しかし八沢やさわの長坂
の路傍みちばたにあたるところで口論の末から土佐とさの家中かちゆうの一人を殺
害し、その仲裁にはいった一人の親指を切り落とし、この街道で
刃傷にんじやうの手本を示したのも小池伊勢こいけいせの家中であつた。女は手形てがた
なしには関所をも通さないという。しかし木曾路を通るごとに女

の乗り物を用意させ、見る人が見ればそれが正式な夫人のものでないのも彦根ひこねの殿様であつた。

「あゝ。」と吉左衛門は嘆息して、「世の中はどうなつて行くかと思うようだ。あの御勘定所のお役人なぞがお殿様からのお言葉だなんて、献金の世話を頼みに出張して来て、吾家うちの床柱の前にでもすわり込まれると、わたしはまたかと思う。しかし、金兵衛さん、そのお役人の行つてしまったあとでは、わたしはどんな無理なことでも聞かなくちゃならないような気がする……」

東海道浦賀の方に黒船の着いたといううわさを耳にした時、最初吉左衛門や金兵衛はそれほど思わなかった。江戸は大変だということであつても、そんな騒ぎは今にやむだらうぐらいに二

人とも考えていた。江戸から八十三里の余も隔たった木曾の山の中に住んで、鎖国以来の長い眠りを眠りつづけて来たものは、アメリカのような異国の存在すら初めて知るくらいの時だ。

この街道に伝わるうわさの多くは、ことわざ諺にもあるようにころがるたびに大きな塊になる雪達磨ゆきだるまに似ている。六月十日の晩に、彦

根の早飛脚が残して置いて行つたうわさもそれで、十四日には黒船八十六艘そくもの信じがたいような大きな話になって伝わって来た。

寛永かんえい十年以来、日本国の一切の船は海の外に出ることを禁じられ、五百石以上の大船を造ることも禁じられ、オランダ、シナ、朝鮮をのぞくのほかは外国船の来航をも堅く禁じてある。その国のおきてを無視して、故意にもそれを破ろうとするものがまっし

ぐらにあの江戸湾を望んで直進して来た。当時幕府が船改めの番所は下田しもだの港から浦賀の方に移してある。そんな番所の所在地まで知って、あの唐人船とうじんぶねがやって来たことすら、すでに不思議の一つであると言われた。

種々な流言が伝わって来た。宿役人としての吉左衛門らはそんな流言からも村民をまもらねばならなかった。やがて通行の前触れだ。間もなくこの街道では江戸出府の尾張おわりの家中を迎えた。尾張藩主（徳川慶勝よしかつ）の名代みようだい、成瀬隼人なるせはやと之正のしょう、その家中のおびただしい通行のあとには、かねて待ち受けていた彦根の家中も追い追いやつて来る。公儀の御茶壺おちやつぼ同様にとの特別扱いのお触れがあつて、名古屋城からの具足長持ぐそくながもちが十棹とさおもそのあとから

続いた。それらの警護の武士が美濃路みのじから借りて連れて来た人足だけでも、百五十人に上った。継立つぎだても難渋であつた。馬籠の宿場としては、山口村からの二十人の加勢しか得られなかつた。例の黒船はやがて残らず帰って行つたとやらで、江戸表へ出張の人たちは途中から引き返して来るものがある。ある朝馬籠まごめから送り出した長持は隣宿の妻籠つまごで行き止まり、翌朝中津川から来た長持は馬籠の本陣の前で立ち往生する。荷物はそれぞれ問屋預けということになったが、人馬継立けんぶんての見分けんぶんとして奉行ぶぎょうまで出張して来るほど街道はごたごたした。

狼狽ろうばいそのもののようなこの混雑が静まつたのは、半月ほど前にあたる。浦賀へ押し寄せて来た唐人船も行くえ知れずになって、

まずまず 恐きようえつ悦だ。そんな報知しらせが、江戸方面からは追ひ追いと伝わつて来たころだ。

吉左衛門は金兵衛を相手に、伏見屋の店座敷で話し込んでいると、ちようどそこへ警護の武士を先に立てた尾張の家中の一隊が西から街道を進んで来た。吉左衛門と金兵衛とは談話はなし半ばに伏見屋を出て、この一隊を迎えるためにほかの宿役人らとも一緒になった。尾張の家中は江戸の方へ大筒おおづつの鉄砲を運ぶ途中で、馬籠の宿の片側に来て足を休めて行くところであつた。本陣や問屋の前あたりは檜木ひのきがさ笠や六尺棒なぞで埋めうずられた。騎馬から降りて休息する武士もあつた。肌脱はだぎになつて背中に流れる汗をふく人足たちもあつた。よくあの重いものをかつぎ上げて、美濃境みのざかいの

じつきよくとうげ
十曲峠を越えることができた、人々はその話で持ちきつ

た。吉左衛門はじめ、金兵衛らはこの労苦をねぎらい、問屋の九太夫はまた榊田屋ますだやの儀助らと共にその間を奔り回はしつて、隣宿妻籠までの継立てのことを幹旋あつせんした。

村の人たちは皆、街道に出て見た。その中に半蔵もいた。彼は父の吉左衛門に似て背せいも高く、青々とした月代さかやきも男らしく目につく若者である。ちようど暑さの見舞いに村へ来ていた中津川の医者と連れだつて、通行の邪魔にならないところに立った。この医者みやがわが宮川寛斎かんさいだ。半蔵の旧い師匠ふるだ。その時、半蔵は無言。寛斎も無言で、ただ医者らしく頭を円まるめた寛斎の胸のあたりに、手にした扇だけがわずかに動いていた。

「半蔵さん。」

上の伏見屋の仙十郎もそこへ来て、考え深い目つきをしている半蔵のそばに立った。目方百十五、六貫ばかりの^{おおづつ}大筒の鉄砲、この人足二十二人がかり、それに七人がかりから十人がかりまでの大筒五挺^{ちよう}、都合六挺が、やがて村の人々の目の前を動いて行つた。こんなに諸藩から江戸の邸^{やしき}へ向けて大砲を運ぶことも、その日までなかったことだ。

間もなく尾張の家中衆は見えなかった。しかし、不思議な沈黙が残った。その沈黙は、何が江戸の方に起こっているか知れないような、そんな心持ちを深い山の中にいるものに起こさせた。六月以来^{ひんぱん}頻繁な諸大名の通行で、江戸へ向けてこの木曾街道を経

由するものに、黒船騒ぎに関係のないものはなかったからで。あるものは江戸湾一帯の海岸の防備、あるものは江戸城下の警固のためであつたからで。

金兵衛は吉左衛門の袖を引いて言つた。

「いや、お帰り早々、いろいろお骨折りで。まあ、おかげでお繼^つ立ても済みました。今夜は御苦労呼びというほどでもありませんが、お玉のやつにたくさせて置きます。あとでおいでを願ひましょう。そのかわり、吉左衛門さん、ごちそうは何もありませんよ。」

酒のさかな。胡瓜きゅうりもみに青紫蘇あおじそ。枝豆。到来物の置たみいわし。それに茄子なすの新漬しんづけ。飯の時にとろろ汁じる。すべてお玉の手料理の物で、金兵衛は夕飯に吉左衛門を招いた。

店座敷も暑苦しいからと、二階を明けひろげて、お玉はそこへふたり二人の席を設けた。山家風やまがふうな風呂ふろの用意もお玉の心づくしであった。招かれて行った吉左衛門は、一風呂よばれたあとのさつぱりとした心持ちで、広い炉ばたの片すみから二階への箱梯子はこばしを登った。黒光りのするほどよく拭ふき込こみであるその箱梯子も伏見屋らしいものだ。西向きの二階の部屋へやには、金兵衛が先代の遺物と見えて、美濃派の俳人らの寄せ書きが灰汁あく抜ぬけのした表装にし、壁に掛けてある。八人のものが集まって馬籠風景の八つの眺ながめ

を思い思いの句と画の中に取り入れたものである。この俳味のある掛け物の前に行つて立つことも、吉左衛門をよろこばせた。

夕飯。お玉は膳ぜんを運んで来た。ほんの有り合わせの手料理ながら、青みのある新しい野菜で膳の上を涼しく見せてある。やがて酒もはじまった。

「吉左衛門さん、何もありませんが召し上がってくださいな。」とお玉が言った。「吾家うちの鶴つる松まつも出まして、お世話さまでございます。」

「さあ、一杯やってください。」と言つて、金兵衛はお玉を顧みて、「吉左衛門さんはお前、苗字みょうじ帯刀御免ということになったんだよ。今までの吉左衛門さんとは違うよ。」

「それはおめでとうございます。」

「いえ。」と吉左衛門は頭をかいて、「苗字帯刀もこう安売りの時世になって来ては、それほどありがたくもありません。」

「でも、悪い気持ちはしないでしょう。」と金兵衛は言つた。

「二本さして、青山吉左衛門で通る。どこへ出ても、大威張りだ

。」

「まあ、そう言わないでくれたまえ。それよりか、盃さかずきでもいただく
こうじゃありませんか。」

吉左衛門も酒はいける口であり、それに勧め上手じょうずなお玉のお
酌しやくで、金兵衛とさしむかいに盃を重ねた。その二階は、かつて翁おきな
塚きなづかの供養のあつたおりに、落合の宗匠崇佐坊すさぼうまで集まつて、

金兵衛が先代の記念のために俳席を開いたところだ。そう言えば、吉左衛門や金兵衛の旧なじみでもはやこの世にいない人も多い。

馬籠の生まれで水墨の山水や花果などを得意にした画家の蘭溪らんけいもその一人だ。ひとりあの蘭溪も、黒船騒ぎなどは知らずに亡くなつた。

「お玉さんの前ですが。」と吉左衛門は言つた。「こうして御酒ごしゅでもいただく、実に一切を忘れますよ。わたしはよく思い出す。金兵衛さん、ほら、あのアトリ（子鳥）三十羽に、茶漬ちやづけ三杯

――

「それさ。」と金兵衛も思い出したように、「わたしも今それを言おうと思つていたところさ。」

アトリ三十羽に茶漬け三杯。あれは嘉永かえい二年にあたる。山里で

は小鳥のおびただしく捕とれた年で、ことに大平村おおだいらむらの方では毎日三千羽ずつものアトリが驚くほど鳥網にかかると言われ、この馬籠の宿までたびたび売りに来るものがあつた。小鳥の名所として土地のものが誇る木曾の山の中でも、あんな年はめつたにあるものでなかつた。仲間のもものが集まつて、一興を催すことにしたのもその時だ。そのアトリ三十羽に、茶漬け三杯食えほうびば、褒美ほうびとして別に三十羽もらえる。もしまた、その三十羽と茶漬け三杯食えなかつた時は、あべこべに六十羽差し出さなければならぬという約束だ。場処は蓬菜屋ほうらいや。時刻は七どきつ時。食い手は吉左衛門と金兵衛の二人。食わせる方くみがしらのものは組頭ささや。笹屋しょうべえの庄兵衛と小笹屋こささやの勝七。それには勝負を見届けるものもなくてはならぬ。

蓬萊屋の新七がその審判官を引き受けた。さて、食った。約束のとおり、一人で三十羽、茶漬け三杯、残らず食い終わって、褒美の三十羽ずつは吉左衛門と金兵衛とでもらった。アトリは形もちいさく、骨も柔らかく、^{つぐみ}鵜のような小鳥とはわけが違う。それでもなかなか食いではあったが、二人とも腹もはらないで、その会で会所の店座敷へ押し掛けてたくさん茶を飲んだ。その時の二人の年齢もまた忘れられずにある。吉左衛門は五十一歳、金兵衛は五十三歳を迎えたころであった。二人はそれほど盛んな食欲を競い合ったものだ。

「あんなおもしろいことはなかった。」

「いや、大笑いにも、なんにも。あんなおもしろいことは前代^み未

もん
聞き。
」

「出ましたね、金兵衛さんの前代未聞が――」

こんな話も酒の上を楽しくした。隣人同志でもあり、宿役人同志でもある二人の友だちは、しばらく街道から離れる思いで、尽きない夜^{よばなし}咄に、とろろ汁に、夏の夜のふけやすいことも忘れていた。

馬籠^{まごめ}の宿^{しゆく}で初めて酒を造ったのは、伏見屋でなくて、榊田屋^{ますだや}であつた。その初代と二代目の主人、惣右衛門^{そうえもん}親子のものであつた。榊田屋の親子が協力して水の量目を計ったところ、下坂川^{おりさががわ}で四百六十目、榊田屋の井戸で四百八十目、伏見屋の井戸で四百九十目あつたという。その中で下坂川の水をくんで、惣右衛門親

子は初めて造り酒の試みに成功した。馬籠の水でも良い酒のできることを実際に示したのも親子二人のものであった。それまで馬籠には造り酒屋というものはなかった。

この惣右衛門親子は、村の百姓の中から身を起こして無遠慮に頭を持ち上げた人たちであるばかりでなく、後の金兵衛らのためにも好^よかれ悪^あしかれ一つの進路を切り開いた最初の人たちである。榊田屋の初代が伏見屋から一軒置いて上隣りの街道に添うた位置に大きな家を新築したのは、宝暦七年の昔で、そのころに初代が六十五歳、二代目が二十五歳であつた。親代々からの百姓であつた初代惣右衛門が本家の梅屋から分かれて、別に自分の道を踏み出したのは、それよりさらに四十年も以前のことにあたる。

馬籠は田畠たはたの間にすら大きくあらわれた石塊いしころを見るような地方で、古くから生活も容易でないとされた山村である。初代惣右衛門はこの村に生まれて、十八歳の時から親の名跡みょうせきを継ぎ、岩石の間をもちとわず百姓の仕事を励んだ。本家は代々の年寄役でもあつたので、若輩じゃくはいながらにその役をも勤めた。旅人相手の街道に目をつけて、旅籠屋はたごやの新築を思い立ったのは、この初代が二十八、九のころにあたる。そのころの馬籠は、一分ぶか二分の金を借りるにも、隣宿つまどの妻籠か美濃の中津川まで出なければならなかった。師走しわすも押し詰まったころになると、中津川の備前屋びぜんやの親仁おやしが十日あまりも馬籠へ来て泊まっていて、町中へ小貸こがしなどした。その金でようやく村のものが年を越したくらいがらの土地柄で

あつた。

四人の子供を控えた初代惣右衛門夫婦の小歴史は、馬籠のような困窮な村にあつて激しい生活苦とたたかった人たちの歴史である。百姓の仕事とする朝草あさくさも、春先青草を見かける時分から九月十月の霜をつかむまで毎朝二度ずつは刈り、昼は人並みに会所の役を勤め、晩は宿泊の旅人を第一にして、その間に少しずつの米商いもした。かみさんはまたかみさんで、内職に豆腐屋をして、三、四人の幼いものを控えながら夜通し石臼いしうすをひいた。新宅の旅籠屋はたごやもできあがるころは、普請ふしんのおりに出た木の片きれを燈とぼして、それを油火あぶらびに替え、夜番の行燈あんどんを軒先へかかげるにも毎朝夜明け前に下掃除したそうじを済まし、同じ布で戸障子としょうじの敷居などを拭ふい

たのも、そのかみさんだ。貧しさにいる夫婦二人のものは、自分の子供らを路頭に立たせまいとの願いから、夜一夜ろくろく安氣あんきに眠ったこともなかったほど働いた。

そのころ、本家の梅屋では隣村湯舟沢から来る人足たちの宿をしていた。その縁故から、初代夫婦はなじみの人足に頼んで、春先の食米くいまい三斗ずつ内証で借りうけ、秋米あきまいで四斗ずつ返すことにしていた。これは田地を仕付けるにも、旅籠屋片手間では芝草の用意もなりかねるところから、麦で少しずつ刈り造ることに生活の方法を改めたからで。

初代惣右衛門はこんなところから出発した。旅籠屋の営業と、そして骨の折れる耕作と。もともと馬籠にはほかによい旅籠屋も

なかったから、新宅と言って泊まる旅人も多く、追い追いと常得意の客もつき、こおんな小女まで置き、その奉公人の給金も三分がものは翌年は一両に増してやれるほどになった。飯はんまい米一升買いの時代のあとには、一俵買いの時代も来、後には馬で中津川から呼ぶ時代も来た。新宅榊田屋の主人はもうただの百姓でもなかった。旅籠屋営業のほかには少しづつ商売などもする町人であつた。

二代目惣右衛門はこの夫婦の末子として生まれた。親から仕来しきたつた百姓は百姓として、惣そうりよう領にはまだ家の仕事を継ぐ特権もある。次男三男からはそれも望めなかった。十三、四のころから草刈り奉公に出て、末は雲くもすけ助にでもなるか。末子と生まれたものが成人しても、馬追いか駕籠かごかきにきまつたものとされたほど

の時代である。そういう中で、二代目惣右衛門は親のそばにいて、物心づくころから草刈り奉公にも出されなかったというだけでも、親惣右衛門を徳とした。この二代目がまた、親の仕事を幾倍かにひろげた。

人も知るように、当時の諸大名が農民から収めた年貢米ねんぐまいの多くは、大坂の方に輸送されて、金銀に替えられた。大坂は米取引の一大市場であつた。次第に商法も手広くやるころの二代目惣右衛門は、大坂の米相場にも無関心ではなかつた人である。彼はまた、優に千両の無尽にも応じたが、それほど実力を積み蓄えた分ぶ限者げんしゃは木曾谷中にも彼のほかにないと言われるようになった。彼は貧困を征服しようとした親惣右衛門の心を飽くまでも持ちつ

づけた。誇るべき伝統もなく、そうかと言って煩わされやすい過去もなかった。腕一本で、無造作に進んだ。

天明^{てんめい}六年は二代目惣右衛門が五十三歳を迎えたころである。

そのころの彼は、大きな造り酒屋の店にすわって、自分の子の酒の一番火入れなどをさせながら、初代在世のころからの八十年にわたる過去を思い出すような人であつた。彼は親先祖から譲られた家督財産その他一切のものを天からの預かり物と考えよと自分の子に誨^{おし}えた。彼は金銭を日本の宝の一つと考えよと誨^{おし}えた。それをみだりにわが物と心得て、私用に費やそうものなら、いつか「天道^{てんどう}」に泄^もれ聞こえる時が来るとも誨^{おし}えた。彼は先代惣右衛門の出発点を忘れそうな子孫の末を心配しながら死んだ。

伏見屋の金兵衛は、この惣右衛門親子の衣鉢いはつを継いだのである。そういう金兵衛もまた持ち前の快活さで、家では造り酒屋のほか、質屋を兼ね、馬も持ち、田も造り、時には米の売買にもたずさわり、美濃の久々里くくりあたりの旗本にまで金を貸した。

ふたり
二人の隣人——吉左衛門と金兵衛とをよく比べて言う人に、中津川の宮川寛斎がある。この学問のある田舎医者いなかに言わせると、馬籠は国境くにぎかいだ、おそらく町人氣質かたぎの金兵衛にも、あの惣右衛門親子にも、商才に富む美濃人の血が混り合まじっているのだらう、そこへ行くと吉左衛門は多分に信濃しなのの百姓であると。

吉左衛門が青山の家は馬籠の裏山にある本陣林のように古い。

木曾谷の西のはずれに初めて馬籠の村を開拓したのも、そうしゅうみ相州

三浦うらの方から移つて来た青山けんもつ監物の第二子であつた。ここに

一字を建こんりゅう立して、万福寺まんぷくじと名づけたのも、これまた同じ人

であつた。万福寺まんぷくじ殿昌屋まんぷくじ常久まんぷくじ禅定門、俗名青山次郎

左衛門、隠居しての名を道斎どうさいと呼んだ人が、自分で建立した寺

の墓地に眠つたのは、天てんしょう正十二年の昔にあたる。

「金兵衛さんの家と、おれの家とは違う。」

と吉左衛門が自分の忤せがれに言つて見せるのも、その家族の歴史を

さす。そういう吉左衛門が青山の家を継いだころは、十六代も連なり続いて来た木曾谷での最も古い家族の一つであつた。

遠い馬籠の昔はくわしく知るよしもない。青山家の先祖が木曾にはいったのは、木曾義昌よしまさの時代で、おそらく福島山村氏よりも古い。その後この地方の郷士ごうしとして馬籠その他数か村の代官を勤めたらしい。慶長年代のころ、石田三成いしだみつなりが西国の諸侯をかたらつて濃州関ヶ原へ出陣のおり、徳川台徳院は中仙道なかせんどうを登つて関ヶ原の方へ向かつた。その時の御先立おさきだちには、山村甚兵衛じんべえ、馬場半左衛門ばばはんざえもん、千村平右衛門ちむらへいえもんなどの諸士を数える。馬籠の青山庄しようざぶろう

三郎、またの名重長しげなが（青山二代目）もまた、徳川方がたに味方し、馬籠の砦とりでにこもつて、犬山勢いぬやまぜいを防いだ。当時犬山城の石川備前は木曾へ討手うってを差し向けたが、木曾の郷士らが皆徳川方の味方をするといひ、激しくも戦わないで引き退いた。その後、青

山の家では帰農して、代々本陣、庄屋、問屋の三役を兼ねるようになったのも、当時の戦功によるものであるという。

青山家の古い屋敷は、もと石屋の坂をおりた辺にあつた。由ゆいし緒よのある武具馬具などは、寛永年代の馬籠の大火に焼けて、二

本の鎗やりだけが残つた。その屋敷跡には代官屋敷の地名も残つたが、

尾張藩への遠慮から、享きやうほう保九年の検地の時以来、代官屋敷の

字あざを石屋に改めたともいう。その辺は岩石の間で、付近に大きな岩があつたからで。

子供の時分の半蔵を前にすわらせて置いて、吉左衛門はよくこんな古い話をして聞かせた。彼はまた、酒の上のきげんのよい心持ちなぞから、表玄関の長押ながしの上に掛けてある古い二本の鎗の下

へ小^こ倅^{せがれ}を連れて行つて、

「御覧、御先祖さまが見ているぞ。いたずらするとこわいぞ。」
と戯れた。

隣家の伏見屋などには古い伝統が年^{とし}若^{わか}な半蔵の頭に深く刻みつけられたのは、幼いころから聞いたこの父の炬燵^{こたつ}話^{ばなし}からで、自分の倅に先祖のことでも語り聞かせるとなると、吉左衛門の目はまた特別に輝いたものだ。

「代官造りという言葉は、地名で残っている。吾^{うち}家の先祖が代官を勤めた時分に、田地を手造りにした場所だというので、それで代官造りさ。今の町田^{まちだ}がそれさ。その時分には、毎年五月に村じゅうの百姓を残らず集めて植え付けをした。その日に吾^{うち}家から酒

を一斗出した。酔って田圃たんぼの中に倒れるものがあれば、その年は豊年としたものだそうだ。」

この話もよく出た。

吉左衛門の代になって、本陣へ出入りの百姓の家は十三軒ほどある。その多くは主従の關係に近い。吉左衛門が隣家の金兵衛とも違つて、村じゅうの百姓をほとんど自分の子のように考えているのも、由来する源は遠かった。

二

「また、黒船ですぞ。」

七月の二十六日には、江戸からの御隠使ごおんしが十二代將軍徳川家いえよ慶しの薨こうきよ去を伝えた。道どうちゆうぶぎよう中奉行から、普請鳴り物類一切停止の触れも出た。この街道筋では中津川の祭礼のあるころに当たったが、狂言もけいこぎりで、舞台の興行なしに謹慎の意を表することになった。問屋九太夫の「また、黒船ですぞ」が、吉左衛門をも金兵衛をも驚かしたのは、それからわずかに三日過ぎのことであつた。

「いったい、きようは幾日です。七月の二十九日じゃありませんか。公儀の御隠使ごおんしが見えてから、まだ三日にしかならない。」

と言つて吉左衛門は金兵衛と顔を見合わせた。長崎へ着いたというその唐人船とうじんぶねが、アメリカの船ではなくて、ほかの異国の船

だといううわさもあるが、それさえこの山の中では判然^{はつきり}しなかった。多くの人は、先に相州浦賀の沖合いへあらわれたと同じ唐人船だとした。

「長崎の方がまた大変な騒動だそうですよ。」

と金兵衛は言ったが、にわかに長崎奉行の通行があるというだけで、先荷物^{さきにもつ}を運んで来る人たちの話はまちまちであつた。奉行は通行を急いでいるとのこととで、道割もいろいろに変わつて来るので、宿場宿場では継立^{つぎた}てに難渋した。八月の一日には、この街道では栗色^{くりいろ}なめしの鎗^{やり}を立てて江戸方面から進んで来る新任の長崎奉行、幕府内でも有数の人材に数えられる水野筑後^{みずのちくご}の一行を迎えた。

ちようど、吉左衛門が羽織を着かえに、大急ぎで自分の家へ歸つた時のことだ。妻のおまんは刀に脇わきざし差なぞをそこへ取り出して来て勧めた。

「いや、馬籠の駅長で、おれはたくさんだ。」

と吉左衛門は言つて、晴れて差せる大小も身に着けようとしなかつた。今までどおりの丸腰で、着慣れた羽織だけに満足して、やがて奉行の送り迎えに出た。

諸公役が通過の時の慣例のように、吉左衛門は長崎奉行の駕籠かごの近く挨拶あいさつに行つた。旅を急ぐ奉行は乗り物からも降りなかつた。本陣の前に駕籠を停とめさせてのほんのお小休みであつた。料紙を載せた三三さんぼう宝なぞがそこへ持ち運ばれた。その時、吉左衛門

は、駕籠のそばにひざまずいて、言葉も簡単に、

「当宿本陣の吉左衛門でございます。お目通りを願います。」
と声をかけた。

「おゝ、馬籠の本陣か。」

奉行の碎けた挨拶だ。

水野筑後^{ちくご}は二千石の知行^{ちぎよう}ということであるが、特にその旅は

十萬石の格式で、重大な任務を帯びながら遠く西へと通り過ぎた。

街道は暮れて行った。会所に集まった金兵衛はじめ、その他の宿役人もそれぞれ家の方へ帰って行った。隣宿落合まで荷をつけ

て行つた馬方なぞも、長崎奉行の一行を見送つたあとで、ぽつぽつ馬を引いて戻つて来るころだ。

子供らは街道に集まつていた。夕空に飛びかう蝙蝠こうもりの群れを追ひ回しながら、遊び戯れているのもその子供らだ。山の中のとで、夜鷹よたかもなき出す。往来一つ隔てて本陣とむかい合つた梅屋の門口には、夜番の軒行燈のきあんどんの燈火あかりもついた。

一日の勤めを終わつた吉左衛門は、しばらく自分の家の外に出て、山の空気を吸っていた。やがておまんが二人の下女げじよを相手に働いている炉ばたの方へ引き返して行つた。

「半蔵は。」

と吉左衛門はおまんにたずねた。

「今、今、仙十郎さんと二人でここに話していましたよ。あなた、異人の船がまたやって来たというじゃありませんか。半蔵はだれに聞いて来たんですか、オロシヤの船だと言う。仙十郎さんはアメリカの船だと言う。オロシヤだ、いやアメリカだ、そんなことを言い合つて、また二人で屋外^{そと}へ出て行きましたよ。」

「長崎あたりのことは、てんで様子がわからない——なにしろ、きようはおれもくたぶれた。」

山家らしい風呂^{ふろ}と、質素な夕飯^{ふた}とが、この吉左衛門を待つていた。ちょうど、その八月朔^{ついたち}日は吉左衛門が生まれた日にも当たっていた。だれしもその日となるといういろいろ思い出すことが多いように、吉左衛門もまた長い駅路の経験を胸に浮かべた。雨にも

風にもこの交通の要路を引き受け、旅人の安全を第一に心がけて、
馬方^{うまかた}、牛方^{うしかた}、人足の世話から、道路の修繕、助郷^{すけごう}の掛合^{かけあい}
まで、街道一切のめんどろを見て来たその心づかいは言葉にも尽
くせないものがあつた。

吉左衛門は炉ばたにいて、妻のおまんが温^{あた}めて出した一本の銚
子と、到来物の鮎^{あゆ}の塩焼きとで、自分の五十五歳を祝おうとした。
彼はおまんに言った。

「きょうの長崎奉行にはおれも感心したねえ。水野筑後^{ちくご}の守^{かみ}——
あの人は二千石の知行^{ちぎよう}取りだそうだが、きょうの御通行は十万
石の格式だぜ。非常に破格な待遇さね。一足飛びに十万石の格式
なんて、今まで聞いたこともない。それだけでも、徳川様の代^よは

変わって来たような気がする。そりや泰平無事な日なら、いくら無能のものでも上に立つお武家様でいばっていられる。いったん、事ある場合に際会してごらん——」

「なにしろあなた、この唐人船の騒ぎですもの。」

「こういう時世になって来たのかなあ。」

寛くつろぎの間まと名づけてあるのは、一方はこの炬たきばたにつづき、一方は広い仲なかの間まにつづいている。吉左衛門が自分の部屋へやとして臥ね起おきをしているのもその寛おぎの間だ。そこへも行つて周囲を見回しながら、

「しかし、御苦勞、御苦勞。」

と吉左衛門は繰りかえした。おまんはそれを聞きとがめて、

「あなたはだれに言っていらっしゃるの。」

「おれか。だれも御苦勞とも言ってくれるものがないから、おれは自分で自分に言ってるところさ。」

おまんは苦笑いした。吉左衛門は言葉をついで、

「でも、世の中は妙なものじゃないか。名古屋の殿様のために、

お勝手向きのお世話でもしてあげれば、みょうじ苗字帯刀御免というこ

とになる。三十年この街道の世話をしても、だれも御苦勞とも言い手がない。このおれにとつては、目に見えない街道の世話の方がどれほど骨が折れたか知れないがなあ。」

そこまで行くと、それから先には言葉がなかった。

馬籠の駅長としての吉左衛門は、これまでにどれほどの人を送

ったり迎えたりしたか知れない。彼も殺風景な仕事にあくせくとして来たが、すこしは風雅の道を心得ていた。この街道を通るほどのものは、どんな人でも彼の目には旅人であつた。

遠からず来る半蔵の結婚の日のことは、すでにしばしば吉左衛門夫婦の話に上るころであつた。隣宿妻籠つまごの本陣、青山寿平じゅへい次の妹、お民たみという娘が半蔵の未来の妻に選ばれた。この忤せがれの結婚には、吉左衛門も多くの望みをかけていた。早くも青年時代にやつて来たような濃い憂鬱ゆううつが半蔵を苦しめたことを想おもつて見て、もつと生活を変えさせたいと考えることは、その一つであつた。六十六歳の隠居半六から家督を譲り受けたように、吉左衛門自身もまた勤められるだけ本陣の当主を勤めて、あとから来るものに

代よを譲つて行きたいと考えることも、その一つであつた。半蔵の結婚は、やがて馬籠の本陣と、妻籠の本陣とを新たに結びつけることになる。二軒の本陣はもともと同姓を名乗るばかりでなく、遠い昔は相州三浦の方から来て、まず妻籠に落ち着いた、青山監け物んもつを父祖とする兄弟関係の間柄でもある、と言ひ伝えられている。二人ふたりの兄弟は二里ばかりの谷間をへだてて分かれ住んだ。兄は妻籠に。弟は馬籠に。何百年来のこの古い関係をもう一度新しくして、末頼すえもしい寿平次を半蔵の義理ある兄弟と考えて見ることも、その一つであつた。

この縁談には吉左衛門は最初からその話を金兵衛の耳に入れて、相談相手になつてもらつた。吉左衛門が半蔵を同道して、親子二

人づれで妻籠の本陣を訪ね^{たず}に行つて来た時のことも、まずその報告をもたらずのは金兵衛のもとであつた。ある日、二人は一緒になつて、秋の祭礼までには間に合わせたいという舞台普請の話などから、若い人たちのうわさに移つて行つた。

「吉左衛門さん、妻籠の御本陣の娘さんはおいくつにおなりでしたつけ。」

「十七さ。」

その時、金兵衛は指を折つて数えて見て、

「して見ると、半蔵さんとは六つ違いでおいでなさる。」

よい一対の若夫婦ができ上がるであらうというふう^にそれを吉左衛門に言つて見せた。そういう金兵衛にしても、吉左衛門にし

ても、二十三歳と十七歳とで結びつく若夫婦をそれほど早いとは考えなかった。早婚は一般にあたりまえの事と思われ、むしろよい風習とさえ見なされていた。当時の木曾谷には、新郎十六歳、新婦は十五歳で行なわれるような早い結婚もあつて、それすら人は別に怪しみもしなかった。

「しかし、金兵衛さん、あの半蔵のやつがもう祝言しゅうげんだなんて、早いものですね。わたしもこれで、平素ふだんはそれほどにも思いませんが、こんな話が持ち上がると、自分でも年を取ったかと思ひますよ。」

「なにしろ、吉左衛門さんもお大抵じゃない。あなたのところのお嫁取りなんて、御本陣と御本陣の御婚礼ですからねえ。」

「半蔵さま——お前さまのところへは、妻籠の御本陣からお嫁さまが来^こさつせるそうだなし。お前さまも大きくならつせいたものだ。」

半蔵のところへは、こんなことを言い寄る出入りのおふき婆^{ばあ}さんもある。おふきは乳母^{うば}として、幼い時分の半蔵の世話をした女だ。まだちいさかつたころの半蔵を抱き、その背中に載せて、歩いたりしたのもこの女だ。半蔵の縁談がまとまつたことは、本陣へ出入りの百姓のだれにもまして、この婆さんをよろこばせた。おふきはまた、今の本陣の「姉^{あね}さま」（おまん）のいないとこ

ろで、半蔵のそばへ来て齒のかけた声で言った。

「半蔵さま、お前さまは何も知らつせまいが、おれはお前さまのお母様つかをよく覚えてゐる。お袖そでさま——美しい人だったぞなし。

きりよう

あれほどの容色は江戸にもないと言つて、通る旅の衆が評判したくらいの人だったぞなし。あのお袖そでさまが煩わづらつて亡くなつたの

は、あれはお前さまを生んでから二十日はつかばかり過ぎだったずら。

おれはお前さまを抱いて、お母つかさまの枕まくらもとへ連れて行つたこと

がある。あれがお別れだった。三十二の歳としの惜しい盛りよなし。

それから、お前さまはまた、間もなく黄痘おうだんを病やまつせる。あの

時は助かるまいと言われたくらいよなし。大旦那おおだんな（吉左衛門）

の御苦労も一通りじゃあらすか。あのお母つかさまが今まで達者たっしゃで

いて、今度のお嫁取りの話などを聞かっせいたら、どんなだずら

――

半蔵も生みの母を想像する年ごろに達していた。また、一人ひとりで

両親を兼ねたような父吉左衛門が養育の辛苦を想像する年ごろにも達していた。しかしこのおふき婆さんを見るたびに、多く思いつくのは少年の日のことであつた。子供の時分の彼が、あれが好きだつたとか、これが好きだつたとか、そんな食物のことをよく覚えていて、木曾の焼き米の青いにおい、蕎麦そば粉と里芋さといもの子で造る芋焼餅いもやきもちなどを数えて見せるのも、この婆さんであるから。

山地としての馬籠は森林と岩石との間であるばかりでなく、村の子供らの教育のことなぞにかけては耕されない土も同然であつ

た。この山の中に生まれて、周囲には名を書くことも知らないようなものの多い村民の間に、半蔵は学問好きな少年としての自分を見つけたものである。村にはろくな寺小屋もなかった。人を化かす狐や狸きつねたぬき、その他種々さまざまな迷信はあたりに暗く跋扈ばつこしていた。そういう中で、半蔵が人の子を教えることを思い立ったのは、まだ彼が未熟な十六歳のころからである。ちようど今の隣家の鶴つる松が榊田屋ますだやの子息むすこなどと連れだつて通つて来るように、多い年には十六、七人からの子供が彼のもとへ読書習字珠算などのけいこに集まつて来た。峠からも、荒町あらまちからも、中のかやからも。時には隣村の湯舟沢、山口からも。年若な半蔵は自分を育てようとするばかりでなく、同時に無学な村の子供を教えることから始

めたのであった。

山里にいて学問することも、この半蔵には容易でなかった。良師の不在が第一の困難であった。信州上田うえだの人で児玉政雄こだままさおとい

う医者がひところ馬籠に来て住んでいたことがある。その人に

『詩經しきよう』の句読くとうを受けたのは、半蔵が十一歳の時にあたる。小しょう

雅ようがの一章になって、児玉は村を去つてしまつて、もはや就ついて

学ぶべき師もなかった。馬籠の万福寺には桑園そうえん和尚おしょうのような

禅僧もあつたが、教えて倦うまない人ではなかった。十三歳のころ、

父吉左衛門について『古文真宝こぶんしんぼう』の句読を受けた。当時の半蔵

はまだそれほど勉強する心があるでもなく、ただ父のそばにいて習字をしたり写本をしたりしたに過ぎない。そのうちに自ら奮つ

て『四書』の集ししよ しゅうちゅう註しゅを読み、十五歳には『易書』や『春しゅん秋』の類たぐいにも通じるようになった。寒さ、暑さをいとわなかつた独学の苦心が、それから十六、七歳のころまで続いた。父吉左衛門は和算を伊那いなの小野村おのの小野甫邦ほほうに学んだ人で、その術には達していたから、半蔵も算術のことは父から習得した。村には、やれ魚釣つりだ碁将棋だと言つて時を送る若者の多かつた中で、半蔵ひとりはそのような方に目もくれず、また話相手の友だちもなくて、読書をそれらの遊戯に代えた。幸い一人の学友を美濃の中津川の方に見いだしたのはそのころからである。蜂谷香蔵はちや こうぞうと言つて、もつと学ぶことを半蔵に説き勧めてくれたのも、この香蔵だ。二人の青年の早い友情が結ばれはじめてからは、馬籠と中津川との

三里あまりの間を遠しとしなかった。ちょうど中津川には宮川寛齋がある。寛齋は香蔵が姉の夫にあたる。医者ではあるが、漢学に達していて、また国学にもくわしかつた。馬籠の半蔵、中津川の香蔵——二蔵は互いに競い合つて寛齋の指導を受けた。

「自分は独学で、そして固陋だ。もとよりこんな山の中にいて見聞も寡い。^{すくな}どうかして自分のようなものでも、もつと学びたい。」

と半蔵は考え考えた。古い青山のような家に生まれた半蔵は、この師に導かれて、国学に心を傾けるようになって行つた。二十三歳を迎えたころの彼は、言葉の世界に見つけた学問のよろこびを通して、賀茂真淵、^{かものまぶち}本居宣長、^{もとおり}平田篤胤^{のりなが}などの諸先輩がのこして置いて行つた大きな仕事を想像するような若者であつた。

黒船は、実にこの半蔵の前にあらわれて来たのである。

三

その年、嘉永^{かえい}六年の十一月には、半蔵が早い結婚の話も妻籠^{つまご}の本陣あてに結納^{ゆいのう}の品を贈るほど運んだ。

もはや恵那山^{えなさん}へは雪が来た。ある日、おまんは裏の土蔵の方へ行こうとした。山家のならわしで、めぼしい器物という器物は皆土蔵の中に持ち運んである。皿^{さら}何人前、膳^{ぜん}何人前などと箱書きしたものを出したり入れたりするだけでも、主婦の役^{ひとやく}だ。

ちようど、そこへ会所の使いが福島^{さしがみ}の役所からの差紙^{さしがみ}を置いて

て行つた。馬籠まごめの庄屋しょうやあてだ。おまんはそれを渡そうとして、
おつとさが
夫を探した。

「おおだんな大胆那は。」

と下女にきくと、

「蔵の方へおいでだぞなし。」

という返事だ。おまんはその足で、母屋もやから勝手口の横手につ
いて裏の土蔵の前まで歩いて行つた。石段の上には夫の脱いだ下げ
駄たもある。戸前の錠もはずしてある。夫もやはり同じ思いで、婚
礼用の器物でも調べているらしい。おまんは土蔵の二階の方にこ
とごと音のするのを聞きながら梯子はしごを登つて行つて見た。そこに
吉左衛門がいた。

「あなた、福島からお差紙さしがみですよ。」

吉左衛門はわずかの閑ひまの時を見つけて、その二階に片づけ物なぞをしていた。壁によせて幾つとなく古い本箱たぐいの類も積み重ねてある。日ごろ彼の愛蔵する俳書、和漢の書籍などもそこに置いてある。その時、彼はおまんから受け取ったものを窓に近く持つて行つて読んで見た。

その差紙には、海岸警衛のため公儀の物入りも莫ばくだい大だとある。国恩を報ずべき時節であると言つて、三都の市中はもちろん、諸国ごりようしよの御料所、在方村々ざいかたまで、めいめい冥加みようがのため上納金を差し出せとの江戸からの達しだということが書いてある。それに
はまた、浦賀表うらがおもてへアメリカ船四艘そう、長崎表へオロシヤ船四艘交

易のため渡来したことが断わつてあつて、海岸防禦ぼうぎよのためとも書き添えてある。

「これは国恩金の上納を命じてよこしたんだ。」と吉左衛門はおまんに言つて見せた。「外は風雨しけだというのに、内では祝言のしたくだ——しかしこのお差紙さしがみの様子では、おれも一肌脱ひとはずだがずばなるまいよ。」

その時になつて見ると、半蔵の祝言を一つのくぎりとして、古い青山の家にもいろいろな動きがあつた。年老いた吉左衛門の養母は祝言のごたごたを避けて、土蔵に近い位置にある隠居所の二階に隠れる。新夫婦の居間にと定められた店座敷へは、晝屋かよも通つて来る。長いこと勤めていた下男も暇を取つて行つて、そのか

わり佐吉という男が今度新たに奉公に来た。

おまんが梯子はしごを降りて行つたあと、吉左衛門はまた土蔵の明り

窓に近く行つた。鉄格子てつこうしを通してさし入る十一月の光線もあた

りを柔らかに見せている。彼はひとりで手をもんで、福島から差

紙のあつた国防献金のことを考えた。徳川幕府あつて以来いまだ

かつて聞いたこともないような、公儀おかげぐらの御金蔵がすでにからつ

ぽになつてゐるといふ内ないない々の取り沙汰ざたなぞが、その時、胸に浮

かんだ。昔氣質かたぎの彼はそれらの事を思い合わせて、若者の前でも

なんでもおかまいなしに何事も大げさに触れ回るような人たちを

憎んだ。そこから子に対する心持ちをも引き出されて見ると、年

もまだ若く心も柔らかく感じやすい半蔵なぞに、今から社会の奥

をのぞかせたくないと考えた。いかなる人間同志の醜い秘密にも、その刺激に耐えられる年ごろに達するまでは、ゆつくりしたくさせたいと考えた。権威はどこまでも権威として、子の前には神聖なものとして置きたいとも考えた。おそらく隣家の金兵衛とても親としてのその心持ちに変わりはなからう。そんなことを思い案じながら、吉左衛門はその蔵の二階を降りた。

かねて前触れのあつた長崎行きの公儀衆も、やがて中津川泊まりで江戸の方角から街道を進んで来るようになった。空は晴れても、大雪の来たあとであつた。のじりしゆく野尻宿のつぎしょ継所からおちあい落合まで通し人足七百五十人の備えを用意させるほどの公儀衆が、さくさく音のする雪の道を踏んで、長崎へと通り過ぎた。この通行が三

日も続いたあとには、妻籠つまごの本陣からその同じ街道を通つて、新しい夜具のぎつしり詰なかもちまつた長持ながもちなぞが吉左衛門の家へかつぎ込まれて来た。

吉日として選んだ十二月の一日が来た。金兵衛は朝から本陣へ出かけて来て、吉左衛門と一緒に客の取り持ちをした。台所でもあり応接間でもある広い炬たきばたには、手伝いとして集まつて来ているお玉、お喜佐、おふきなどの笑い声も起こつた。

せんじゅうろう

仙十郎せんじゅうろうも改まつた顔つきでやつて来た。寛くわんぎの間まと店座敷の間を往いつたり来たりして、半蔵を退屈させまいとしていたのもこの人だ。この取り込みの中で、金兵衛はちよつと半蔵を見に来て言つた。

「半蔵さん、だれかお前さんの呼びたい人がありますかい。」

「お客にですか。宮川寛齋先生に中津川の香蔵さん、それに景^{けいぞ}蔵^うさんも呼んであげたい。」

浅見^{あさみ}景蔵は中津川本陣の相続者で、同じ町に住む香蔵を通して

知るようになった半蔵の学友である。景蔵はもと漢学^{はたけ}の畠の人であるが、半蔵らと同じように国学に志すようになったのも、寛齋の感化であつた。

「それは半蔵さん、言うまでもなし。中津川の御連中はあすということにして、もう使いが出してありますよ。あの二人は黙^{ふたり}って置いたつて、向こうから祝いに来てくれる人たちでさ。」

そばにいた仙十郎は、この二人の話を引き取つて、

「おれも——そうだなあ——もう一度祝言の仕直しでもやりたくなつた。」

と笑わせた。

山家にはめずらしい冬で、一度は八寸も街道に積もつた雪が大雨のために溶けて行つた。そのあとには、金兵衛のような年配のものが子供の時分から聞き伝えたこともないと言うほどの暖かさが来ていた。寒がりの吉左衛門ですら、その日は炬燵こたつや火鉢ひばちでなしに、煙草盆たばこぼんの火だけで済ませるくらいだ。この陽気は本陣の慶事を一層楽しく思わせた。

午後に、寿平次兄きょうだい妹がすでに妻籠つまごの本陣を出発したろうと思われるころには、吉左衛門は定紋じようもん付きのかみしも姿で、表玄

関前の広い板の間を歩き回った。下男の佐吉もじっとしていられないというふうで、表門を出たりはいたりした。

「佐吉、めずらしい陽気だなあ。この分じや妻籠の方も暖かいだろう。」

「そうよなし。今夜は門の前で篝かがりでも焚たかずと思つて、おれは山から木を背負しよつて来た。」

「こう暖かじや、篝かがりにも及ぶまいよ。」

「今夜は高張たかはりだけにせずか、なし。」

そこへ金兵衛も奥から顔を出して、一緒に妻籠から来る人たちのうわさをした。

「一昨日おとといの晩でさ。」と金兵衛は言った。「榊田屋ますだやの儀助さんが

夜行で福島へ出張したところが、往還の道筋にはすこしも雪がない。茶屋へ寄つて、店先へ腰掛けても、凍えるということがない。どうもこれは世間一統の陽気でしょう。あの儀助さんがそんな話をしていましたつけ。」

「金兵衛さん——前代未聞^{みもん}の冬ですかね。」

「いや、全く。」

日の暮れるころには、村の人たちは本陣の前の街道に集まつて来て、梅屋の格子^{こうし}先あたりから問屋の石垣^{いしがき}の辺へかけて黒山を築いた。土地の風習として、花嫁を載せて来た駕籠^{かご}はいきなり門の内へはいらない。峠の上まで出迎えたものを案内にして、寿平次らの一行はまず門の前で停^とまった。提灯^{ちようちん}の灯^ひに映る一つの

駕籠を中央にして、木曾の「なかのりさん」の唄が起こつた。荷物をついで妻籠から供をして来た数人のものが輪を描きながら、唄の節につれて踊りはじめた。手を振り腰を動かす一つの影の次ぎには、またほかの影が動いた。この鄙びた舞踏の輪は九度も花嫁の周囲を回つた。

その晩、盃をすましたあとの半蔵はお民と共に、冬の夜とも思われないような時を送つた。半蔵がお民を見るのは、それが初めての時でもない。彼はすでに父と連れだって、妻籠にお民の家を訪ねたこともある。この二人の結びつきは当人同志の選択からではなくて、ただ父兄の選択に任せたのであつた。親子の間柄でも、当時は主従の關係に近い。それほど二人は従順であつたが、しか

し決して安閑としてはいなかった。初めて二人が妻籠の方で顔を見合わせた時、すべてをその瞬間に決定してしまった。長くかかって見るべきものではなくて、一目に見るべきものであったのだ。店座敷は東向きで、戸の外には半蔵の好きな松の樹きもあった。新しい青い部屋へやの畳は、鶯うぐいすでもなき出すかと思われるような温あたた暖かい空気かおに香かって、夜遊び一つしたことのない半蔵の心を逆上のぼせるばかりにした。彼は知らない世界にでもはいつて行く思いで、若さとおそろしさのために震えているようなお民を自分のそばに見つけた。

「お父さん——わたしのためでしたら、祝いはなるべく質素にしてください。」

「それはお前に言われるまでもない。質素はおれも賛成だねえ。でも、本陣には本陣の慣例しきたりというものもある。呼ぶだけのお客はお前、どうしたって呼ばなけりやならない。まあ、おれに任せて置け。」

半蔵が父とこんな言葉をかわしたのは、客振舞きやくぶるまいの続いた三日目の朝である。

思いがけない尾張藩の徒士目付かちめつけと作事方さくじかたとがその日の午前馬籠しゆくの宿に着いた。来たる三月には尾張藩主が木曾路を経て江戸へ出府のことに決定したという。この役人衆の一行は、冬のうち

に各本陣を見分けんぶんするためということであつた。

こういう場合に、なくてはならない人は金兵衛と問屋の九太夫とであつた。万事扱い慣れた二人は、吉左衛門の当惑顔をみて取つた。まず二人で梅屋の方へ役人衆を案内した。金兵衛だけが吉左衛門のところへ引き返して来て言つた。

「まずありがたかつた。もう少しで、この取り込みの中へ乗り込まれるところでした。オット。皆さま、当宿本陣には慶事がございます、取り込んでおります、恐れ入りますが梅屋の方でしばらくお休みを願いたい、そうわたくしが言いましてね。そこはお役人衆も心得たものでさ。お昼のしたくもあちらで差し上げることにして来ましたよ。」

梅屋と本陣とは、呼べば応えるほどの対い合つた位置にある。

午後、徒士目付かちめつけの一行は梅屋で出した福草履ふくぞうりにはきかえて、

乾かわいた街道を横ぎつて来た。大きな鬚まげのにおい、帯刀の威、袴はかまの

摺すれる音、それらが役人らしい挨拶あいさつと一緒に、本陣の表

玄関には時ならぬいかめしきを見せた。やがて、吉左衛門の案内で、部屋へや部屋の見分があつた。

吉左衛門は徒士目付にたずねた。

「はなはだ恐縮ですが、中納言様ちゅうなごんの御通行は来春のようにうけ

たまわります。当宿しゆくではどんな心じたくをいたしたものでしょう

か。」

「さあ、ことによるとお昼食ひるを仰せ付けられるかもしれない。」

婚礼の祝いは四日も続いて、最終の日の客振舞きやくぶるまいにはこの慶

事に来て働いてくれた女たちから、出入りの百姓、会所の定じょうづ

使かいなどまで招かれて来た。大工も来、畳屋も来た。日ごろ吉左

衛門や半蔵のところへ油じみた台箱だいばこをさげて通つて来る髪結い

直次なおじまでが、その日は羽織着用でやって来て、膳ぜんの前にかしこま

つた。

町内の小前こまえのものの前に金兵衛、髪結い直次の前に仙十郎、涙

を流してその日の来たことを喜んでいるようなおふき婆ばあさんの前

には吉左衛門がすわって、それぞれ取り持ちをするころは、酒も

始まった。吉左衛門はおふきの前から、出入りの百姓たちの前へ

動いて、

「さあ、やつとくれや。」

とそこにある銚子ちようしを持ち添えて勧めた。百姓の一人ひとりは膝ひざをか

き合わせながら、

「おれにかなし。どうも大旦那おおだんなにお酌しやくしていただいては申しわ

けがない。」

隣席にいるほかの百姓が、その時、吉左衛門に話しかけた。

「大旦那おおだんな——こないだの上納金のお話よなし。ほかの事とも違

いますから、一同申し合わせをして、お受けをすることにしましたわい。」

「あゝ、あの国恩金のことかい。」

「それが大旦那、百姓はもとより、豆腐屋、按摩あんままで上納するよ

うな話です、おれたちも見えていられますか。十八人で二両二分とか、五十六人で三両二分とか、村でも思い思いに納めるようだが、おれたちは七人で、一人がいっしゅ一朱ずつと話をまとめましたわい。」

仙十郎は酒をついで回っていたが、ちようどその百姓の前まで来た。

「よせ。こんな席で上納金の話なんか。伊勢いせの神風の一つも吹いてごらん、そんな唐人とうじんぶね船なぞはどこかへ飛んでしまふ。くよくよするな。それよりか、一杯行こう。」

「どうも旦那はえらいことを言わさせる。」と百姓は仙十郎さかすきの盃をうけた。

「上の伏見屋の旦那。」と遠くの席から高い声で相槌あいづちを打つも

のもある。「おれもお前さまに賛成だ。徳川さまの御威光で、四艘や五艘ぐらいの唐人船がなんだなし。」

酒が回るにつれて、こんな話は古風な石場搗いしばづきの唄うたなぞに変わりにかけて行つた。この地方のものは、いったいに酒に強い。だれでも飲む。若い者にも飲ませる。おふき婆さんのような年をとつた女ですら、なかなか隅すみへは置けないくらいだ。そのうちに仙十郎が半蔵の前へ行つてすわつたころは、かなりの上きげんになつた。半蔵も方々から来る祝いの盃をことわりかねて、顔をあか紅くしていた。

やがて、仙十郎は声高くうたい出した。

木曾のナ

なかのりさん、

木曾の御嶽おんたけさんは

なんちやらほい、

夏でも寒い。

よい、よい、よい。

半蔵とは対むかい合いに、お民の隣には仙十郎の妻で半蔵が異母妹にあたるお喜佐も来て膳ぜんに着いていた。お喜佐は目を細くして、若い夫のほれぼれとさせるような声に耳を傾けていた。その声は一座のうちのだれよりも清すずしい。

「半蔵さん、君の前でわたしがうたうのは今夜初めてでしょう。」
と仙十郎は軽く笑って、また手拍子てびょうしを打ちはじめた。百姓の

仲間からおふき婆さんまでが右に左にからだを振り動かしながら
手を拍うつて調子を合わせた。塩しお辛い声を振り揚げる髪結い直次
の音頭おんどと取りで、鄙ひなびた合唱がまたそのあとに続いた。

あわせ
拾あナ

なかのりさん、

拾あやりたや

なんちやらほい、

足袋たび添えて。

よい、よい、よい。

本陣とは言つても、吉左衛門の家の生活は質素で、芋焼餅いもやきもちな

ぞを冬の朝の代用食とした。祝言のあつた六日目の朝には、もは

や客振舞きやくぶるまいの取り込みも静まり、一日がかりのあと片づけも済

み、出入りの百姓たちもそれぞれ引き取つて行つたあとなので、

おまんは炉ばたにいて家の人たちの好きな芋焼餅を焼いた。

店座敷に休んだ半蔵もお民もまだ起き出さなかつた。

「いつも早起きの若旦那が、この二、三日はめずらしい。」

そんな声が二人の下女の働いている勝手口の方から聞こえて来

る。しかしおまんは奉公人の言うことなぞに頓とんちやく着ちやくしないで、

ゆつくり若い者を眠らせようとした。そこへおふき婆さんが新夫

婦の様子を見に屋外そとからはいつて来た。

「姉^{あね}さま。」

「あい、おふきか。」

おふきは炉ばたにいろおまんを見て入り口の土間のところに立つたまま声をかけた。

「姉さま。おれはけさ早く起きて、山の芋^{いも}を掘りに行つて来た。

大旦那も半蔵さまもお好きだで、こんなものをさげて来た。店座敷ではまだ起きさつせんかなし。」

おふきは※苞^{わらつと}につつんだ山の芋にも温^{あた}かい心を見せて、半蔵の乳母^{うば}として通^{かよ}つて来た日と同じように、やがて炉ばたへ上がった。

「おふき、お前はよいところへ来てくれた。」とおまんは言つた。
「きようは若夫婦に御幣餅^{ごへいもち}を祝うつもりで、胡桃^{くるみ}を取りよせて

置いた。お前も手伝っておくれ。」

「ええ、手伝うどころじゃない。農家も今は閑^{ひま}だ。御幣餅とはお前さまもよいところへ気がつかつせいた。」

「それに、若夫婦のお相^{しょうばん}伴^{ばん}に、お隣^{むすこ}の子息さんでも呼んであげようかと思つてさ。」

「あれ、そうかなし。それじゃおれが伏見屋へちよつくら行つて来る。そのうちには店座敷でも起きさつせるずら。」

氣候はめずらしい暖かさを續けていて、炉ばたも楽しい。黒く煤^{すす}けた竹筒、魚の形、その自在^{じざいかぎ}鍵の天井から吊^つるしてある下では、あかあかと炉の火が燃えた。おふきが隣家まで行つて歸つて見たころには、半蔵とお民とが起きて来ていて、二人で松薪^{まつまき}を

くべていた。渡し金がねの上に載せてある芋焼餅も焼きぎましになつたころだ。おふきはその里芋さと芋の子の白くあらわれたやつを温め直して、大根おろしを添えて、新夫婦に食べさせた。

「お民、おいで。髪でも直しましょう。」

おまんは奥の坪庭に向いた小座敷のところへお民を呼んだ。妻つま籠かごの本陣から来た娘を自分の嫁として、「お民、お民」と名を呼んで見ることもおまんにはめずらしかつた。おとなの世界をのぞいて見たばかりのようなお民は、いくらか羞はじらいを含みながら、十七の初島田はつしまだの祝いのおりに妻籠の知人から贈られたという櫛くし箱ばこなぞをそこへ取り出して来ておまんに見せた。

「どれ。」

おまんは襷たすき掛けになつて、お民を古風な鏡台に向かわせ、人形でも扱うようにその髪をといてやつた。まだ若々しく、娘らしい髪感覚は、おまんの手にあまるほどあつた。

「まあ、長い髪の毛だこと。そう言えば、わたしも覚えがあるが、これで眉まゆでも剃そり落とす日が来てごらん——あの里帰りというものは妙に昔の恋しくなるものですよ。もう娘の時分ともお別れですなあ。女はだれでもそうしたものですからなあ。」

おまんはいろいろに言つて見せて、左の手に油じみた髪の根元を堅く握り、右手に木曾名物のお六ろく櫛くしというやつを執とつた。額ひたいから鬢びんの辺へかけて、梳すき手ての力がいゝるたびに、お民は目を細くして、これから長く姑しゅうとめとして仕えなければならぬ人のするま

まに任せていた。

「熊くまや。」

とその時、おまんはそばへ寄つて来る黒毛ねこの猫の名を呼んだ。

熊は本陣に飼われていて、だからもかわいがられるが、ただ年老いた隠居からは憎まれていた。隠居が熊を憎むのは、みんなの愛がこの小さな動物にそそがれるためだともいう。どうかすると隠居は、おまんや下女たちの見ていないところで、人知れずこの黒猫に拳固げんこを見舞うことがある。おまんはお民の髪を結いながらそんな話までして、

「吾家うちのおばあさんも、あれだけ年をとったかと思ひますよ。」
とも言ひ添えた。

やがて本陣の若い「御新造」^{ごしんぞ}に似合わしい髪のかたちができ上がった。儀式ばった晴れの装いはとれて、さつぱりとした蔦絵^{まきえ}の櫛^{くし}なぞがそれに代わった。林檎^{りんご}のように紅^{あか}くて、そして生き生きとしたお民の頬^{ほお}は、まるで別の人のように鏡のなかに映った。

「髪はできました。これから部屋^{へや}の案内です。」

というおまんのあとについて、間もなくお民は家の内部^{ななか}をすみずみまでも見て回った。生家^{さと}を見慣れた目で、この街道に生^はえたような家を見ると、お民にはいろいろな似よりを見いだすことも多かった。奥の間、仲の間、次の間、寛^{くつろ}ぎの間というふうに、部屋部屋に名のつけてあることも似ていた。上段の間という部屋が一段高く造りつけてあって、本格な床の間、障子から、白地に黒

く雲形を織り出したような高麗縁こうらいべりの畳まで、この木曾路を通る諸大名諸公役の客間にあててあるところも似ていた。

熊は鈴の音をさせながら、おまんやお民の行くところへついて来た。二人が西向きの仲の間の障子の方へ行けば、そこへも来た。この黒毛の猫は新来の人をもおそれないで、まだ半分お客さまのようなお民の裾すそにもまといつて戯れた。

「お民、来てごらん。きようは恵那山えなさんがよく見えますよ。妻籠つまごの方はどうかねえ、木曾川の音が聞こえるかねえ。」

「えゝ、日によつてよく聞こえます。わたしどもの家は河かわのすぐそばでもありませんけれど。」

「妻籠じゃそうだろうねえ。ここでは河の音は聞こえない。その

かわり、恵那山の方で鳴る風の音が手に取るように聞こえますよ。
」

「それでも、まあよいながめですこと。」

「そりや馬籠まごめはこんな峠の上ですから、隣の国まで見えます。どうかするとお天気の良い日には、遠い伊吹山いぶきまで見えることがありますよ——」

林も深く谷も深い方に住み慣れたお民は、この馬籠に来て、西の方に明るく開けた空を見た。何もかもお民にはめずらしかった。わずかに二里を隔てた妻籠と馬籠とでも、言葉の訛なまりからしていくら違っていた。この村へ来て味わうことのできる紅あかい「ずいき」の漬物つけものなども、妻籠の本陣では造らないものであった。

まだ半蔵夫婦の新規な生活は始まったばかりだ。午後には、おま
んは一通り屋敷のなかを案内しようと言つて、土蔵の大きな鍵かぎを
さげながら、今度は母屋もやの外の方へお民を連れ出そうとした。

炬ばたでは山家らしい胡桃くるみを割る音がしていた。おふきは二人
の下女を相手に、堅い胡桃の核たねを割つて、御幣餅ごへいもちのしたくに取
りかかつていた。その時、上がり端はなにある杖つえをさがして、おまん
やお民と一緒に裏の隠居所まで歩こうと言ひ出したのは隠居だ。
このおばあさんもひところよりは健康を持ち直して、食事のたび
に隠居所から母屋もやへ通かよつていた。

馬籠の本陣は一二棟ふたむねに分かれて、母屋もや、新屋しんやより成り立つ。新屋は表門の並びに続いて、すぐ街道と対むかい合つた位置にある。別に入り口のついた会所（宿役人詰め所）と問屋場の建物たけものがそこにある。石垣いしがきの上に高く隣家の伏見屋を見上げるのもその位置からで、大小幾つかの部屋がその裏側に建て増してある。多人数の通行でもある時は客間に当てられるのもそこだ。おまんは雨戸のしまった小さな離れ座敷をお民にさして見せて、そこにも本陣らしい古めかしさがあることを話し聞かせた。ずっと昔からこの家の習慣で、女が見るものを見るころは家族のものからも離れ、ひとりひとりで煮焚にたきまでして、そこにこもり暮らすという。

「お民、来てごらん。」

と言いながら、おまんは隠居所の階下したにあたる味噌納屋みそなやの戸をあけて見せた。味噌、たまり、漬物の桶おけなどがそこにあつた。おまんは土蔵の前の方へお民を連れて行つて、金網の張つてある重い戸をあけ、薄暗い二階の上までも見せて回つた。おまんの古い長持と、お民の新しい長持とが、そこに置き並べてあつた。

土蔵の横手について石段を降りて行つたところには、深い掘り井戸を前に、米倉、木小屋などが並んでいる。そこは下男の佐吉の世界だ。佐吉も案内顔に、伏見屋寄りの方の裏木戸を押して見せた。街道と並行した静かな村の裏道がそこに続いていた。古い池のある方に近い木戸をあけて見せた。本陣の稲荷いなりの祠ほくらが檜ひのきや柃えびらぎの間に隠れていた。

その晩、家のもの一同は炉ばたに集まった。隠居はじめ、吉左衛門から、佐吉まで一緒になった。隣家の伏見家からは少年の鶴つるまつも招かれて来て、半蔵の隣にすわった。おふきが炉で焼く御幣餅の香気はあたりに満ちあふれた。

「鶴さん、これが吾家うちの嫁ですよ。」

とおまんは隣家の子息むすこにお民を引き合わせて、串差くしざしにした御幣餅をその膳ぜんに載せてすすめた。こんがりきつねいろと狐色きつねいろに焼けた胡く桃もも醤油しょうゆのうまそうなやつは、新夫婦の膳にも上った。吉左衛門夫婦はこの質素な、しかし心のこもった山家料理で、半蔵やお民の前途を祝福した。

第二章

一

十曲峠 じつきよくとうげ

の上にある新茶屋には出迎えのものが集まった。

今度いよいよ京都本山の許しを得、僧智現ちげんの名も松雲しょううんと改めて、馬籠まごめ万福寺の跡を継ぐとする新住職がある。組頭くみがしら笹屋

の庄兵衛しょうべえはじめ、五人組仲間、その他のものが新茶屋に集まつ

たのは、この人の帰国を迎えるためであつた。

山里へは旧暦二月末の雨の来るころで、年も安政あんせい元年と改ま

った。一同が待ち受けている和尚おしょうは、前の晩のうちに美濃みのの手賀野村のしょうげんじの松源寺までは帰つて来ているはずで、村からはその朝早く五人組ひとりの一人を発たせ、人足ふたりも二人つけて松源寺まで迎えに出してある。そろそろあの人たちも帰つて来ていいころだった。

「きようは御苦労さま。」

出迎えの人たちに声をかけて、本陣の半蔵もそこへ一緒になつた。半蔵は父吉左衛門の名代みようだいとして、小雨の降る中をやつて来た。

こうした出迎えにも、古い格式のまだ崩くずれずにあつた当時には、だれとだれはどこまでというようなことをやかましく言つたものだ。たとえば、村の宿役人仲間は馬籠の石屋の坂あたりまでとか、

五人組仲間は宿はずれの新茶屋までとかというふう^にに。しかし半蔵はそんなことに頓^{とんちやく}着^{ちやく}しない男だ。のみならず、彼はこうした場処^{ばう}に来て腰掛けるのが好きで、ここへ来て足を休めて行く旅人、馬をつなぐ馬方、または土足のまま茶屋の囲炉裏^{いろり}ばたに踏^ふみ込んで木曾風^{きそふう}な「めんぱ」（木製割籠^{わりご}）を取り出す人足なぞの話にまで耳を傾けるのを楽しみにした。

馬籠の百姓総代とも言うべき組頭庄兵衛は茶屋を出たりはいつたりして、和尚の一行を待ち受けたが、やがてまた仲間のものこそばへ来て腰掛けた。御^{おやすみどころ}休^{やすみ}処^{どころ}とした古い看板や、あるものは青くあるものは茶色に諸講^{しゆくじやう}中^{ちゆう}のしるしを染め出した下げ札などの掛かった茶屋の軒下から、往来一つ隔てて向こうに翁^{おきなづか}塚^{づか}

が見える。芭蕉ばしやうの句碑もその日の雨にぬれて黒い。

間もなく、半蔵のあとを追って、伏見屋つるまつの鶴松が馬籠しゆくの宿の方からやって来た。鶴松も父金兵衛きんべえの名代みようだいという改まった顔つきだ。

「お師匠さま。」

「君も来たのかい。御覧、翁塚のよくなったこと。あれは君のお父さんとつの建てたんだよ。」

「わたしは覚えがない。」

半蔵が少年の鶴松を相手にこんな言葉をかわしていると、庄兵衛も思い出したように、

「そうだと、鶴さまは覚えがあらうまい。」

と言ひ添えた。

小雨は降つたりやんだりしていた。松雲和尚の一行はなかなか見えそうもないので、半蔵は鶴松を誘つて、新茶屋の周囲を歩きに出た。路傍みちばたに小高く土を盛り上げ、榎えのきを植えて、里程を示すたよりとした築山つきやまがある。駅路時代の一里塚だ。その辺は信濃しなのと美濃みのの国境くにぎかいにあたる。西よりする木曾路の一番最初の入り口でもある。

しばらく半蔵は峠の上にいて、学友の香蔵や景蔵の住む美濃の盆地の方に思いを馳はせた。今さら関東関西の諸大名が一大合戦かつせんに運命を決したような関ヶ原の位置を引き合いに出すまでもなく、古くから東西両勢力の相接触する地点と見なされたのも隣の国で

ある。學問に、宗教に、商業に、工芸に、いろいろなものがそこに発達したのに不思議はなかったかもしれない。すくなくもそこに修業時代を送って、そういう進んだ地方の空氣の中に僧侶そうりよとしてのたましいを鍛えて来た松雲が、半蔵にはうらやましかった。その隣の国に比べると、この山里の方にあるものはすべておそい。あだかも、西から木曾川を伝わって来る春が、兩岸に多い櫟けやきや雑木の芽を誘いながら、一か月もかかって奥へ奥へと進むように。万事がそのとおりおくれた。

その時、半蔵は鶴松を顧みて、

「あの山の向こうが中津川なかつがわだよ。美濃はよい国だねえ。」

と言つて見せた。何かにつけて彼は美濃尾張おわりの方の空を恋しく

思つた。

もう一度半蔵が鶴松と一緒に茶屋へ引き返して見ると、ちょうど伏見屋の下男がそこへやつて来るのにあつた。その男は庄兵衛の方を見て言つた。

「吾家の旦那^{うちだんな}はお寺の方でお待ち受けだけな。和尚さまはまだ見えんかなし。」

「おれはさつきから来て待つてゐるが、なかなか見えんよ。」

「弁当持ちの人足も二人出かけたはずだが。」

「あの衆は、いずれ途中で待ち受けているすらで。」

半蔵がこの和尚を待ち受ける心は、やがて西から歸つて来る人

を待ち受ける心であつた。彼が家と万福寺との縁故も深い。最初にあの寺をこんりゆう建立して万福寺と名づけたのも青山の家の先祖だ。しかし彼は今度帰国する新住職のことを想像し、その人の尊信する宗教のことを想像し、人知れずある予感に打たれずにはいられなかつた。早い話が、彼は中津川の宮川寛斎に就ついた弟子でしである。寛斎はまた平田派ひらたの国学者である。この彼が日ごろ先輩から教えられることは、暗い中世の否定であつた。中世以来学問道德の權威としてこの国に臨んで来た漢からまな学ふうび風の因習からも、仏の道で教えるような物の見方からも離れよということであつた。それらのものの深い影響を受けない古代の人の心に立ち帰つて、もう一度心こころゆた寛かにこの世を見直せということであつた。一代の先駆、

かだのあずまろ
荷田春満をはじめ、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤、それら

の諸大人が受け継ぎ受け継ぎして来た一大反抗の精神はそこから生まれて来ているということであつた。彼に言わせると、「物学びするともがら」の道は遠い。もしその道を追い求めて行くとしたら、彼が今待ち受けている人に、その人の信仰に、行く行く反對を見いだすかもしれない。なかつた。

こんな本陣の子息が待つとも知らずに、松雲の一行は十曲峠むすこの険しい坂路さかみちを登つて来て、予定の時刻よりおくれで峠の茶屋に着いた。

松雲は、出迎えの人たちの予想に反して、それほど旅やつれの様子もなかった。六年の長い月日を行脚あんぎやの旅に送り、さらに京都本山まで出かけて行つて来た人とは見えなかった。一行六、七人のうち、こちらから行つた馬籠の人足たちのほかに、中津川からは宗泉寺の老和尚も松雲に付き添つて来た。

「これは恐れ入りました。ありがとうございました。」

と言いながら松雲は笠かさの紐ひもをといて、半蔵の前にも、庄兵衛たちの前にもお辞儀をした。

「鶴さんですか。見ちがえるように大きくお成りでしたね。」

とまた松雲は言つて、そこに立つ伏見屋の子息むすこの前にもお辞儀をした。手賀野村からの雨中の旅で、笠かさも草鞋わらじもぬれて来た松雲

の道中姿は、まず半蔵の目をひいた。

「この人が万福寺の新住職か。」

と半蔵は心の中で思わずにはいられなかった。和尚としては年も若い。まだ三十そこそこの年配にしかない。そういう彼よりは六つか七つも年としようえ長にあたるくらいの青年の僧侶だ。そうりよとりあえず峠の茶屋に足を休めるとあつて、京都の旅の話なぞがぽつぽつ松雲の口から出た。京都に十七日、名古屋に六日、それから美濃路回りで三日目に手賀野村の松源寺に一泊——それを松雲は持ち前の禅僧らしい調子で話し聞かせた。ものの小半時こはんときも半蔵が一緒にいるうちに、とてもこの人を憎むことのできないような善良な感じのする心の持ち主を彼は自分のそばに見つけた。

やがて一同は馬籠の本宿をさして新茶屋を離れることになった。途中で松雲は庄兵衛を顧みて、

「ほ。見ちがえるように道路がよくなっていますな。」

「この春、びしゅう尾州の殿様が江戸へ御出府だけな。お前さまはまだ何も御存じなしか。」

「その話はわたしも聞いて来ましたよ。」

「新茶屋の境から峠の峰までみちぶしん道普請よなし。尾州からはもう宿し
ゆくわり割の役人まで見えていますぞ。道造りの見分けんぶん、見分で、み

んないそがしい思いをしましたに。」

うわさのある名古屋の藩主（尾張慶勝よしかつ）の江戸出府は三月のはじめに迫っていた。来たる日の通行の混雑を思わせるような街

道を踏んで、一同石屋の坂あたりまで帰って行くと、村の宿役人仲間がそこに待ち受けるのにあつた。といや問屋の九太夫をはじめ、くだゆう梺ますだや田屋の儀助、ほうらいや蓬萊屋の新七、梅屋の与次衛門、よじえもんいずれも袴着用かみしもに雨傘あまがさをさしかけて松雲の一行を迎えた。

当時の慣例として、新住職が村へ帰り着くところは寺の山門ではなくて、まず本陣の玄関だ。出家の身としてこんな歓迎を受けることはあながち松雲の本意ではなかったけれども、万事は半蔵が父の計らいに任せた。付き添いとして来た中津川の老和尚の注意もあつて、松雲が装束しょうぞくを着かえたのも本陣の一室であつた。乗り物、先箱さきばこ、台傘だいがさで、この新住職が吉左衛門きちざえもんの家を出ようとすると、それを見ようとする村の子供たちはそろそろ寺の道ま

でついて来た。

万福寺は小高い山の上にある。門前の墓地に茂る杉すぎの木立こだちの間を通して、傾斜を成した地勢に並び続く民家の板屋根を望むことのできるような位置にある。松雲が寺への帰参は、沓くつばきで久しぶりの山門をくぐり、それから方丈ほうじょうへ通つて、一礼座いちれいざりよ了うで式が済んだ。わざとばかりの饅飩うどんぶるまい振舞のあとには、隣村てらかたの寺方、村の宿役人仲間、それに手伝いの人たちなどもそれぞれ引き取つて歸つて行つた。

「和尚さま。」

と言つて松雲のそばへ寄つたのは、長いことここに身を寄せている寺男だ。その寺男は主人が留守中のことを思い出し顔に、

「よつぽど伏見屋の金兵衛さんには、お礼を言わっせるがいい。お前さまがお留守の間にもよく見舞いにおいでで、本堂の廊下には大きな新しい太鼓が掛かったし、すっかり屋根の葺き替えもできました。あの萱^{かや}だけでも、お前さま、五百二十把^ばからかかりましたよ。まあ、おれは何からお話していいか。村へ大風の来た年には鐘つき堂が倒れる。そのたびに、金兵衛さんのお骨折りも一通りじゃあらずか。」

松雲はうなずいた。

諸国を遍歴して来た目でこの境内を見ると、これが松雲には馬籠の万福寺であつたかと思われるほど小さい。長い留守中は、ここへ来て世話をしてくれた隣村の隠居和尚任せで、なんとなく寺

も荒れて見える。方丈には、あの隠居和尚が六年もながめ暮らし
たような古い壁もあつて、そこには達磨だるまの画像が帰参の新住職を
迎え顔に掛かつていた。

「寺に大地小地なく、住持じゅうじに大地小地あり。」

この言葉が松雲を励ました。

松雲は周囲を見回した。彼には心にかかるかずかずのことがあ
つた。当時の戸籍簿とも言うべき宗門帳は寺で預かつてある。あ
の帳面もどうなっているか。位牌いはいどう堂の整理もどうなっているか。
数えて来ると、何から手を着けていいかもわからないほど種々雑
多な事が新住職としての彼を待っていた。毎年の献鉢けんぱちを例とす
る開山忌かいざんきの近づくことも忘れてはならなかった。彼は考えた。

ともかくもあすからだ。朝早く身を起こすために何かの目的を立てることだ。それには二人の弟子ふたりでしや寺男任せでなしに、まず自分で庭の鐘楼に出て、十八声の大鐘を撞くことだと考えた。

翌朝は雨もあがった。松雲は夜の引き明けに床を離れて、山から来る冷たい清水しみずに顔を洗った。法鼓ほうこ、朝課ちようかはあと回しとして、まず鐘楼の方へ行った。恵那山えなさんを最高の峰としてこの辺一帯の村々を支配して立つような幾つかの山嶽さんかくも、その位置からは隠れてよく見えなかったが、遠くかすかに鳴きかわす鶏ひいらぎの声を谷の向こうに聞きつけることはできた。まだ本堂の前の柵ひいらぎも暗い。その時、朝の空気の静かさを破つて、澄んだ大鐘の音が起こった。力をこめた松雲の撞つき鳴らす音だ。その音は谷から谷を伝い、畠はたけか

ら畠を匍はつて、まだ動きはじめない村の水車小屋の方へも、半分眠っているような馬小屋の方へもひびけて行つた。

二

ある朝、半蔵は妻のそばに目をさまして、街道を通る人馬の物音を聞きつけた。妻のお民は、と見ると、まだ娘のような顔をして、寝心地ねごちのよい春の暁を寝惜しんでいた。半蔵は妻の目をさまさせまいとするように、自分ひとり起き出して、新婚後ふたり二人の居間となっている本陣の店座敷の戸を明けて見た。

旧暦三月はじめのめずらしい雪が戸の外へ来た。暮れから例年

にない暖かさだと言われたのが、三月を迎えてかえってその雪を見た。表庭の堀へいの外は街道に接していて、雪を踏んで行く人馬の足音がする。半蔵は耳を澄ましながらその物音を聞いて、かねてうわさのあつた尾張藩主の江戸出府がいよいよ実現されることを知った。

「尾州の御先荷おさきにがもうやつて来た。」

と言つて見た。

宿継ぎ差立さしたてについて、尾張藩から送られて来た駄賃だちんがね金が馬籠の宿だけでも金四十一両に上った。駄賃金は年寄役金兵衛が預かったが、その金高を聞いただけでも今度の通行のかなり大げさなものであることを想像させる。半蔵はうすうす父からその話を

聞いて知っていたので、部屋^{へや}にじつとしていられなかった。台所
に行つて顔を洗うとすぐ雪の降る中を屋外^{そと}へ出て見ると、会所で
は朝早くから継^{つぎ}立てが始まる。あとからあとからと坂路^{さかみち}を上つ
て来る人足たちの後ろには、鈴の音に歩調を合わせるような荷馬
の群れが続く。朝のことで、馬の鼻息は白い。時には勇ましい
ななきの声さえ起こる。村の宿役人仲間でも一番先に家を出て、
雪の中を奔走していたのは問屋の九太夫であつた。

前の年の六月に江戸湾を驚かしたアメリカの異国船は、また正
月からあの沖合いにかかつているところで、今度は四隻の軍艦を八、
九隻に増して来て、武力にも訴えかねまじき勢いで、幕府に開港
を迫っているとのうわさすら伝わっている。全国の諸大名が江戸

城に集まって、交易を許すか許すまいかの だいひようじょう大評定も始まるうとしているという。半蔵はその年の正月二十五日に、尾州から江戸送りの おおづつ大筒の大砲や、軍用の長持が二十二棹 さおもこの街道に続いたことを思い出し、一人持ちの荷物だけでも二十一荷 かもあつたことを思い出して、目の前を通る人足や荷馬の群れをながめていた。

半蔵が家の方へ もと戻って行つて見ると、吉左衛門はゆつくりしたもので、炬ばたで朝茶をやっていた。その時、半蔵はきいて見た。
「お父 とつさん、けさ着いたのはみんな尾州の荷物でしょう。」

「そうさ。」

「この荷物は幾日ぐらい続きましょう。」

「さあ、三日も続くかな。この前に唐人船とうじんぶねの来た時は、上のもも下のものも大あわてさ。今度は戦争にはなるまいよ。何にしても尾州の殿様も御苦労さまだ。」

馬籠の本陣親子が尾張藩主おわりに特別の好意を寄せていたのは、ただあの殿様が木曾谷きそだにや尾張地方の大領主であるというばかりではない。吉左衛門には、時に名古屋まで出張するおりなぞには藩主のお目通りを許されるほどの親しみがあつた。半蔵は半蔵で、

『神祇宝典』じんぎや『類聚日本紀』るいじゅうにほんぎなどをえらんだ源敬公以来の尾

張藩主であるということが、彼の心をよろこばせたのであつた。

彼はあの源敬公の仕事を水戸みとの義公ぎこうに結びつけて想像し、『大日本史』の大業を成就したのもそういう義公であり、僧の契けいちゆう沖

をして『万葉代だい匠しやう記』をえらばしめたのもこれまた同じ人であることを想像し、その想像を儒仏の道がまだこの国に渡つて来ない以前のまじりけのない時代にまでよく持つて行つた。彼が自分の領主を思う心は、当時の水戸の青年がその領主を思う心に似ていた。

その日、半蔵は店座敷にこもつて、この深い山の中に住むさみしきの前に頭をたれた。障子の外には、堀へに近い松の枝をすべる雪の音がする。それが恐ろしい響きを立てて庭の上に落ちる。街道から聞こえて来る人馬の足音も、絶えたかと思うとまた続いた。「こんな山の中にばかり引つ込んでいると、なんだかおれは氣でも違いそうだ。みんな、のんきなことを言つてるが、そんな時世

じゃない。」

と考えた。

そこへお民が来た。お民はまだ十八の春を迎えたばかり、妻籠^{つまご}本陣への里帰りを済ましたところから眉^{まゆ}を剃^そり落としていて、いくら顔のかたちはちがったが、動作は一層生き生きとして来た。

「あなたの好きなねぶ茶をいれて来ました。あなたはまた、何をそんなに考えておいでなさるの。」

とお民がきいた。ねぶ茶とは山家で手造りにする飲料である。

「おれか。おれは何も考えていない。ただ、こうしてぼんやりしている。お前とおれと、二人一緒になってから百日の余にもなるが——そうだ、百日どころじゃないや、もう四か月にもなるんだ

——その間、おれは何をしていたかと思うようだ。阿爺おやじの好きな煙草たばこの葉を刻んだことと、祖母おばあさんの看病をしたことと、まあそれくらいのものだ。」

半蔵は新婚のよろこびに酔ってばかりもいなかった。学業の怠りを嘆くようにして、それをお民に言つて見せた。

「わたしはお節句のことを話そうと思うのに、あなたはそんなに考えてばかりいるんですもの。だって、もう三月は来てるじゃないませんか。この御通行が済むまでは、どうすることもできないじゃありませんか。」

新婚のそもそもは、娘の昔に別れを告げたばかりのお民にとつて、むしろ苦痛でさえもあつた。それが新しいよろこびに変わつ

て来たところから、とかく店座敷を離れかねている。いつのまにか半蔵の膝はひざはお民の方へ向いた。彼はまるで尻餅しりもちでもついたように、後ろ手を畳の上に落として、それで身をささえながら、妻籠から持って来たという記念の雛人形ひなの話などをするお民の方をながめた。手織り縞しまでこそあれ、当時の風俗のように割合に長くひいた裾すその着物は彼女に似合つて見える。剃り落とした眉まゆのあとも、青々として女らしい。半蔵の心をよろこばせたのは、ことにお民の手だ。この雪に燃えているようなその娘らしい手だ。彼は妻と二人ぎりだけで、その手に見入るのを楽しみに思った。

実に突然に、お民は夫のそばですすり泣きを始めた。

「ほら、あなたはよくそう言うじやありませんか。わたしに学問

の話なぞをしても、ちつともわけがわからんなんて。そりや、あのお母さんつか（姑しゅうとめ、おまん）のまねはわたしにはできない。今まで、妻籠の方で、だれもわたしに教えてくれる人はなかったんですもの。」

「お前は機はたでも織はつていてくれれば、それでいいよ。」

お民は容易にすすり泣きをやめなかった。半蔵は思いがけない涙を聞きつけたというふうに、そばへ寄つて妻をいたわろうとすると、

「教えて。」

と言いながら、しばらくお民は夫の膝ひざに顔をうずめていた。

ちようと本陣では隠居が病みついているころであつた。あの婆ばあ

さんももう老衰の極度にあつた。

「おい、お民、お前は祖母^{おばあ}さんをよく看^みてくれよ。」

と言つて、やがて半蔵は隠居^ねの臥^ねている部屋^{へや}の方へお民を送り、自分でも氣を取り直した。

いつでも半蔵が心のさみしいおりには、日ごろ慕っている平田^{あつたね}篤^{たか}胤^{たね}の著書を取り出して見るのを癖^{くせ}のようにしていた。『靈^{たま}の

真柱^{まはしら}』、『玉だすき』、それから講本の『古道大意』などは読

んでも読んでも飽きるということを知らなかつた。大判の薄藍^{うすあゐ}

いろ色の表紙から、必ず古紫の糸で綴^とじてある本の装幀^{そうてい}までが、

彼には好ましく思われた。『静^{しず}の岩屋^{いわや}』、『西籍概論^{さいせきがいろん}』の筆

記録から、三百部を限りとして絶版になつた『毀誉相半ばする書^{きよ}』

のような気吹いぶきの舎やの深い消息までも、不便な山の中で手に入れて
いるほどの熱心さだ。平田篤胤は天保てんぽう十四年に没している故人
で、この黒船騒ぎなぞをもとより知りようもない。あれほどの強
さに自国の学問と言語の独立を主張した人が、嘉永かえい安政の代に生
きるとしたら——すくなくもあの先輩はどうするだろうとは、半
蔵のような青年の思いを潜めなければならないことであつた。

新しい機運は動きつつあつた。全く氣質を相異あいことにし、全く傾

向を相異にするようなものが、ほとんど同時に踏み出そうとして
いた。長州ちやうしゅうはぎ萩の人、吉田よしだしやういん松陰は当時の嚴禁たる異国への

密航を企てて失敗し、信州まつしろ松代の人、佐久間さくましやうざん象山はその件に
連座して獄に下つたとのうわさすらある。美濃おのがきの大垣あたりに

生まれた青年で、異国の学問に志し、遠く長崎の方へ出発したという人の話なぞも、決してめずらしいことではなくなつた。

「黒船。」

雪で明るい部屋へやの障子に近く行つて、半蔵はその言葉を繰り返して見た。遠い江戸湾のかなたには、実に八、九艘そうもの黒船が来てあの沖合に掛かっていることを胸に描いて見た。その心から、彼は尾張藩主の出府も容易でないと思つた。

木曾きそ寄せの人足七百三十人、伊那いなの助郷すけごう千七百七十人、この人数合わせて二千五百人を動かすほどの大通行が、三月四日に馬

籠の宿を経て江戸表へ下ることになった。宿場に集まった馬の群れだけでも百八十匹、馬方百八十人にも上った。

松雲和尚は万福寺の方にいて、長いこと留守にした方丈にもろくろく落ちつかないうちに、三月四日を迎えた。前の晩に来たはげしい雷鳴もおさまり、夜中ごろから空も晴れて、人馬の継ぎ立てはその日の明け方から始まった。

尾張藩主が出府と聞いて、寺では徒弟僧とていそうも寺男もじつとしていない。大領主のさかなな通行を見ようとして裏山越しこみちに近在から入り込んで来る人たちは、門前の石段の下に小径の続いている墓地の間を急ぎ足に通る。

「お前たちも行つて殿様をお迎えするがいい。」

と松雲は二人の弟子にも寺男にも言った。

旅にある日の松雲はかなりわびしい思いをして来た。京都の宿で患わずらいついた時は、書きにくい手紙を伏見屋の金兵衛にあてて、余分な路銀の心配までかけたこともある。もし無事に行脚あんぎやの修業を終わる日が来たら、村のためにも役に立とう、貧しい百姓の子供をも教えよう、そう考えて旅から帰って来た。周囲にある空気のあわただしさ。この動揺の中に僧侶そうりよの身をうけて、どうして彼は村の幼く貧しいものを育てて行こうかとさえ思った。

「和尚さま。」

と声をかけて裏口からはいって来たのは、日ごろ、寺へ出入りせんたくばあの洗濯婆さんだ。腰に鎌かまをさし、※草履わらぞうりをはいて、男のよ

うな 頑^{がんじょう} 丈な手をしている山家の女だ。

「お前さまはお留守居かなし。」

「そうさ。」

「おれは今まで畠^{はたけ}にいたが、餅草^{もちぐさ}どころじゃあらずか。きょうのお通りは正^{しょう}五^{いつ}つ時^{とき}だけな。殿様は下町の笹屋^{ささや}の前まで馬に騎^のつておいでで、それから御本陣までお歩^{ひろ}行^いだけな。お前さまも出て見さつせれや。」

「まあ、わたしはお留守居だ。」

「こんな日にお寺に引つ込んでいるなんて、そんなお前さまのような人があらずか。」

「そう言うものじゃないよ。用事がなければ、親類へも行かない。」

それが出家の身なんだもの。わたしはお寺の番人だ。それでたくさんだ。」

婆さんは鉄漿おはぐろのはげかかった半分黒い齒を見せて笑い出した。庭の土間での立ち話もそこそこにして、また裏口から出て行つた。やがて正五つ時も近づくころになると、寺の門前を急ぐ人の足音も絶えた。物音一つしなかった。何もかも鳴りをひそめて、静まりかえつたようになった。ちょうど例年より早くめずらしい陽気は谷間に多い花の蕾つぼみをふくらませている。馬に騎のりかえて新茶屋あたりから進んで来る尾張藩主が木曾路の山ざくらのかげに旅の身を見つけようというころだ。松雲は戸から外へ出ないまでも、街道の両側に土下座する村民の間を縫ってお先案内をうけたまわ

る問屋の九太夫をも、まのあたり藩主を見ることを光栄としてあ
りがたい仕合わせだとささやき合っているような宿役人仲間をも、
うやうやしく大領主を自宅に迎えようとする本陣親子をも、あり
ありと想像で見ることができた。

方丈もしんかんとしていた。まるでそこいらはからっぽのよう
になっていた。松雲はただ一人ひとりもくねん黙然として、古い壁にかかる達だ
磨るまの画像の前にすわりつづけた。

三

なんとなく雲くもあし脚の早さを思わせるような諸大名諸公役の往来

は、それからも続きに続いた。尾張藩主の通行ほど大がかりではないまでも、としゅう土州、うんしゅう雲州、さんしゅう讃州などの諸大名は西から。長崎奉行 ながいいわのじょう永井岩之丞の一行は東から。五月の半ばには、八百人の同勢を引き連れた肥後ひごの家老長岡ながおかけんもつ監物の一行が江戸の方から上つて来て、いずれも鉄砲持参で、一人ずつ腰弁当でこの街道を通つた。

せんとうごしよ仙洞御所の出火のうわさ、その火は西陣にしじんまでの町通りを焼き尽くして天明年度の大火よりも大變だといううわさが、京都方面から伝わって来たのもそのころだ。

この息苦しさの中で、年若な半蔵なぞが何物かを求めてやまないのにひきかえ、村の長老たちの願いとしていることは、結局現

状の維持であつた。黒船騒ぎ以来、諸大名の往来は激しく、伊那あたりから入り込んで来る助郷すけごうの数もおびただしく、その弊害は覲面てきめんに飲酒賭博とばくの流行にあらわれて来た。庄屋しょうやとしての吉左衛門が宿役人らの賛成を得て、賭博嚴禁ということを言い出し、それを村民一同に言い渡したのも、その年の馬市が木曾福島の方で始まろうとするころにあたる。

「あの時分はよかった。」

年寄役の金兵衛が吉左衛門の顔を見るたびに、よくそこへ持ち出すのも、「あの時分」だ。同じ駅路の記憶につながれている二人の隣人は、まだまだ徳川の代が平和であつた時分のことを忘れかねている。新茶屋に建てた翁塚おきなづか、伏見屋の二階に催した供

養はいかいの俳諧、蓬萊屋ほうらいやの奥座敷でうんと食ったアトリ三十羽に茶漬やづけ三杯——「あの時分」を思い出させるようなものは何かにつけ恋しかつた。この二人には、山家が山家でなくなつた。街道はいとわしいことで満たされて来た。もつとゆつくり隣村の湯舟沢や、山口や、あるいは妻籠つまごからの泊まり客を家に迎え、こちらからも美濃の落合の祭礼や中津川あたりの狂言を見に出かけて行つて、すくなくも二日や三日は泊まりがけで親戚しんせき知人の家の客となつて来るようではなくては、どうしても二人には山家のような気がしなかつた。

その年の祭礼狂言をさかんにするということが、やがて馬籠の本陣で協議された。組頭庄兵衛もこれには賛成した。ちようど村

では金兵衛の胆煎りきもいで、前の年の十月あたりに新築の舞台普請を
ほぼ終わっていた。付近の山の中に適当な普請木ふしんぎを求めることか
ら、舞台の棟上げむなあ、投げ餅もちの世話まで、多くは金兵衛の骨折りで
できた。その舞台は万福寺の境内に近い裏山の方に造られて、も
はや楽しい秋の祭りの日を待つばかりになっていた。

この地方で祭礼狂言を興行する歴史も古い。それだけ土地の人
たちが歌舞伎かぶきそのものに寄せている興味も深かった。当時の南信
から濃尾地方のうびへかけて、演劇の最も発達した中心地は、近くは飯
田いだ、遠くは名古屋であって、市川海老蔵いちかわえびぞうのような江戸の役者が
飯田の舞台を踏んだこともめずらしくない。それを聞きたびに、
この山の中に住む好劇家連は女中衆まで引き連れて、
おおだいらとう
大 平

峠^げを越しても見に行つた。あの蘭^{あららぎ}、広瀬あたりから伊那の谷の

方へ出る深い森林の間も、よい芝居^{しばい}を見たいと思う男や女には、

それほど遠い道ではなかつたのである。金兵衛もその一人だ。彼

は秋の祭りの来るのを待ちかねて、その年の閏七月^{うるし}にしばらく村

を留守にした。伏見屋もどうしたろう、そう言つて吉左衛門など

がうわさをしているところへ、豊川^{とよかわ}、名古屋、小牧^{こまき}、御嶽^{おんたけ}、

大井^{おおい}を経て金兵衛親子が無事に歸つて来た。そのおりの土産^{みやげ}話

が芝居好きな土地の人たちをうらやましがらせた。名古屋の若宮

の芝居では八代目市川團十郎が一興行を終わつたところであつた

けれども、橘^{たちばな}町^{ちやう}の方には同じ江戸の役者三桙^{みすず}大五郎、関三

十郎、大谷広右衛門などの一座がちやうど舞台に上るころであつ

たという。

九月も近づいて来るころには、村の若いものは祭礼狂言のけいこに取りかかった。荒町からは十一人も出て舞台へ通う村の道を造った。かねて金兵衛が秘蔵子息むすこのために用意した狂言用の大小の刀も役に立つ時が来た。彼は鶴つる松ばかりでなく、上の伏見屋の仙十郎せんじゅうろうをも舞台に立たせ、日ごろの溜りゅう飲いんを下げようとした。好ましい鬘かづらを子にあてがうためには、一分二朱しゆぐらいの金は惜しいとは思わなかった。

狂言番組。

式三番叟しきさんばそう。

碁盤太平記ごばんたいへいき。

白石しらいしばなし噺三の切り。

おぐらしきし
小倉色紙。最後にもと戻り籠かご。このうち式三番叟と小倉色紙に出る役と、その二役は仙十郎が引きうけ、戻り籠に出る難波治郎作なにわじろさくの役は鶴松がすることになった。金兵衛がはじめて稽古場けいこばへ見物に出かけるころには、ともかくも村の若いものでこれだけの番組を作るだけの役者がそろった。

その年の祭りの季節には、馬籠以外の村々でもめずらしいにぎわいを呈した。各村はほとんど競争の形で、神輿みこしを引き出そうとしていた。馬籠でさかんにやると言えば、山口でも、湯舟沢でも負けてはいないというふうで。中津川での祭礼狂言は馬籠よりも一月ほど早く催されて、そのおりは本陣のおまんも仙十郎と同行し、金兵衛はまた吉左衛門とそろって押しかけて行つて来た。目

にあまる街道一切の塵埃ほこりッぽいことも、このにぎやかな祭りの気分には埋うずめられそうになつた。

そのうちに、名古屋の方へ頼んで置いた狂言衣裳いしやうの荷物が馬で二駄だも村に届いた。舞台へ出るけいこ最中の若者らは他村に敗ひけを取るまいとして、振付ふりつけは飯田の梅藏に、唄うたは名古屋の治兵衛じへえに、三味線しやみせんは中村屋鍵藏かぎぞうに、それぞれ依頼する手はずをさだめた。祭りの楽しさはそれを迎えた当日ばかりでなく、それを迎えるまでの日に深い。浄瑠璃方じようるりかたがすでに村へ入り込んだとか、化粧方が名古屋へ飛んで行つたとか、そういううわさが伝わるだけでも、村の娘たちの胸にはよろこびがわいた。こうなると、金兵衛はじつとしていられない。毎日のように舞台へ詰めて、棧敷さじき

をかける世話までした。伏見屋の方でも鶴松に初舞台を踏ませるとあつて、お玉の心づかいは一通りでなかった。中津川からは親戚んせきの女まで来て衣裳ごしらえを手伝った。

「きょうもよいお天気だ。」

そう言つて、金兵衛が伏見屋の店先から街道の空を仰いだころは、旧暦九月の二十四日を迎えた。例年祭礼狂言の初日だ。朝早くから金兵衛は髪結いの直次を呼んで、年齢とし相応の髪まげに結わせた。五十八歳まで年寄役を勤続して、村の宿役人仲間での年長者と言われる彼も、白い元結もとゆいで堅く鬚の根を締めた時は、さすがにさわやかな、祭りの日らしい心持ちに返った。剃り立てた顚あざのあたりも青く生き生きとして、平素の金兵衛よりもかえつて若々しく

なつた。

「鶴、うまくやっておくれよ。」

「大丈夫だよ。お父さん、^{とつ}安心しておいでよ。」

伏見屋親子はこんな言葉をかわした。

そこへ仙十郎もちよつと顔を出しに來た。金兵衛はこの義理ある甥^{おい}の方を見た時にも言つた。

「仙十郎すっかり頼むぜ。式三番と言え、お前、座頭^{ざがしら}の勤める役だぜ。」

仙十郎は美濃の本場から來て、上の伏見屋を継いだだけに、こうした祭りの日なぞには別の人かと見えるほど快活な男を發揮した。彼はこんな山の中に惜しいと言われるほどの美貌^{びぼう}で、その享

樂的な氣質は造り酒屋の手伝いなぞにはあまり向かなかつた。

「さあ。きようは、うんと一つあばれてやるぞ。村の舞台が抜けるほど踊りぬいてやるぞ。」

仙十郎の言い草だ。

まだ狂言の蓋ふたもあけないうちから、金兵衛の心は舞台の樂屋の方へも、棧敷さじきの方へも行つた。だんだら模様の烏帽子えぼしをかぶり、三番叟さんばそうらしい寛濶かんかつな狂言の衣裳をつけ、鈴を手にした甥おいの姿が、彼の目に見えて来た。戻り籠もどかごに出る籠かき姿の子が杖つえでもついて花道にかかる時に、棧敷の方から起こる喝采かつさいは、必ず「伏見屋」と来る。そんな見物の掛け声まで、彼の耳の底に聞こえて来た。

「ほんとに、おれはこんなばかな男だ。」

金兵衛はそれを自分で自分に言つて、束にして掛けた杉すぎの葉のしるしも酒屋らしい伏見屋の門口を、出たりはいったりした。

三日続いた狂言はかなりの評判をとつた。たとい村芝居でも仮か借しやくはしなかつたほど藩の検閲は嚴重で、風俗壊乱、その他の取り締まりにと木曾福島の役所の方から来た見届け奉ぶぎよう行なども、狂言の成功を祝つて引き取つて行つたくらいであつた。

いたるところの囲い炉ろ裏りばたでは、しばらくこの狂言の話で持ち切つた。何しろ一年に一度の楽しい祭りのことで、顔だちから仕し

草^{ぐさ}から衣裳まで三拍子そろった仙十郎が三番叟の美しかったことや、十二歳で初舞台を踏んだ鶴松が難波治郎作のいたいけであつたことなどは、村の人たちの話の種になつて、そろそろ大根引きの近づくころになつても、まだそのうわさは絶えなかつた。

旧曆十一月の四日は冬至^{とうじ}の翌日である。多事な一年も、どうやら滞りなく定例の恵比須講^{えびすこう}を過ぎて、村では冬至を祝うまでにこぎつけた。そこへ地震だ。あの家々に簾^{すだれ}を掛けて年寄りから子供まで一緒になつて遊んだ祭りの日から数えると、わずか四十日ばかりの後に、いつやむとも知れないようなそんな地震が村の人たちを待つていようとは。

吉左衛門の家では一同裏の竹藪^{たけやぶ}へ立ち退いた^の。おまんも、お

民も、皆足袋^{たびはだし}跣足で、半蔵に助けられながら木小屋の裏に集まつた。その時は、隠居はもはやこの世にいなかった。七十三の歳^{とし}まで生きたあのおばあさんも、孫のお民が帯祝いの日にあわずじまいに、ましてお民に男の子の生まれたことも、生まれる間もなくその子の亡^なくなったことも、そんな慶事と不幸とがほとんど同時にやって来たことも知らずじまいに、その年の四月にはすでに万福寺の墓地の方に葬られた人であった。

「あなた、遠くへ行かないでくださいよ。皆と一緒にいてくださいよ。」

とおまんが吉左衛門のことを心配するそばには、産後三十日あまりにしかないお民が青ざめた顔をしていた。また揺れて来

たと言つたびに、下男ふたりの佐吉も二人の下女までも、互いに顔を見合せて目の色を変えた。

太い青竹の根を張つた藪やぶの中で、半蔵は帯を締め直した。父と連れだつてそこいらへ見回りに出たころは、本陣の界限かいわいに住むもので家の中にいるものはほとんどなかった。隣家のことも氣にかかつて、吉左衛門親子が見舞いに行くと、伏見屋でもお玉や鶴松なぞは舞台下の日刈ひかりごや小屋の方に立ち退いたあとだった。さすがに金兵衛はおちついたもので、その不安の中でも下男の一人を相手に家に残つて、京都から来た飛脚に駄賃だちんを払つたり、判取り帳をつけたりしていた。

「ことしどうも今年は正月の元日から、いやに陽氣が暖かで、おかしい

おかしいと思つていましたよ。」

それを吉左衛門が言い出すと、金兵衛も想い当たるように、

「それさ。元日に草履ぞうりばきで年始が勤まったなんて、木曾きそじや聞

いたこともない。おまけに、寺道の向こうに椿つばきが咲き出す、若わかも

餅ちでも搗つこうという時分に蓬よもぎが青々としてる。あれはみんなこ

の地震の来る知らせでしたわい。なにしろ、吉左衛門さん、吾家うち

じや仙十郎の披露ひろうを済ましたばかりで、まあおかげであれも組くみ

頭しらのお仲間入りができた。わたしも先祖への顔が立った、そう

思つて祝いの道具を片づけているところへ、この地震でしょう。」

「申年しんねんの善光寺の地震が大きかったなんて言つたつてとても比

べものにはなりますまいよ、ほら、寅年とらねん六月の地震の時だつて、

こんなじゃなかった。」

「いや、こんな地震は前代未聞にも、なんにも。」

とりあえず宿役人としての吉左衛門や金兵衛が相談したことは、老人女子供以外の町内のものを一定の場所に集めて、火災盗難等からこの村を護る^{まも}ことであつた。場所は問屋と伏見屋の前に決定した。そして村民一同お日待^{ひまち}をつとめることに申し合わせた。天変地異に驚く山の中の人たちの間には、春以来江戸表や浦賀辺を騒がしたアメリカの船をも、長崎から大坂の方面にたびたび押し寄せたというオロシヤの船をも、さては仙洞御所^{せんとうごしよ}の出火までも引き合いに出して、この異変を何かの前兆に結びつけるものもある。夜一夜、だれもまんじりとしなかった。半蔵もその仲間に加

わつて、産後の妻の身を案じたり、竹たけ藪やぶや背戸田せどたに野宿する人たちのことを思ったりして、太陽の登るのを待ち明かした。

翌日は雪になったが、揺り返しはなかなかやまなかった。問屋、

伏見屋の前には二組に分れた若者たちが動いたり集まったりして、

美濃の大井や中津川辺は馬籠まづめよりも大地震だとか、隣宿の妻籠つまごも

同様だとか、どこから聞いて来るともなくいろいろなうわさを持

つては帰つて来た。恵那山えなさん、川上山かおれやま、鎌沢山かまざわやまのかなたには大お

おおくくずず

崩れができて、それが根の上あたりから望まれることを知らせ

に来るのも若い連中だ。その時になると、まれに見るにぎわいだ

つたと言われた祭りの日のよろこびも、狂言の評判も、すべて地

震の騒ぎの中に浚さらわれたようになった。

揺り返し、揺り返しで、不安な日がそれから六日も続いた。^{しゆく}宿
では十八人ずつの夜番が交替に出て、街道から裏道までを警戒し
た。^{きとう}祈祷のためと言つて村の代参を名古屋の熱田神社^{あつた}へも送つた。
そのうちに諸方からの通知がぼつぽつ集まつて来て、今度の大地
震が関西地方にことに劇^{はげ}しかったこともわかつた。東海道 岡崎^{おかざき}
宿^{じゆく}あたりへは海嘯^{つなみ}がやつて来て、新井^{あらい}の番所などは海嘯^{つなみ}のため
に浚^{さくら}われたこともわかつて来た。

熱田からの代参の飛脚が村をさして帰つて来たところには、怪し
い空の雲行きもおさまり、そこいらもだいぶ穏やかになつた。吉

左衛門は会所の定^{じようづかい}使に言いつけて、熱田神社祈祷の札を村じゅう軒別に配らせていると、そこへ金兵衛の訪^{たず}ねて来るのにあつた。

「吉左衛門さん、もうわたしは大丈夫と見ました。時に、あすは十一月の十日にもなりますし、仏事をしたいと思つて、お茶湯^{ちやとう}のしたくに取りかかりましたよ。御都合がよかつたら、あなたにも出席していただきたい。」

「お茶湯とは君もよいところへ気がついた。こんな時の仏事は、さぞ身にしみるだろうねえ。」

その時、金兵衛は一通の手紙を取り出して吉左衛門に見せた。舌^{ぜつだい}代として、病中の松雲和尚^{おしょう}から金兵衛にあてたものだ。そ

れには、伏見屋の仏事にも弟子^{でし}を代理として差し出すという詫^わびからはじめて、こんな非常時には自分のようなものでも村の役に立ちたいと思い、行脚^{あんぎや}の旅にあるころからそのことを心がけて帰つて来たが、あいにくと病に臥^ふしていてそれのできないのが残念だという意味を書いてある。寺でも経堂その他の壁は落ち、土蔵にもエミ（亀裂^{きれつ}）を生じたが、おかげで一人^{ひとり}の怪我^{けが}もなく済んだと書いてある。本陣の主人へもよろしくと書いてある。

「いや、和尚さまもお堅い、お堅い。」

「なにしろ六年も行脚に出ていた人ですから、旅の疲れぐらいは出ましようよ。」

それが吉左衛門の返事だった。

「お宅では。」

「まだみんな裏の竹藪たけやぶです。ちよつと、おまんにもあつてやつてください。」

そう言つて吉左衛門が金兵衛を誘つて行つたところは、おそろしげに壁土の落ちた土蔵のそばだ。木小屋を裏へ通りぬけると、暗いほど茂つた竹藪がある。その辺に仮小屋を造りつけ、戸板で囲つて、たいせつな品だけは母屋もやの方から運んで来てある。そこにおまんや、お民なぞが避難していた。

「わたしはお民さんがお気の毒でならない。」と金兵衛は言つた。「妻籠つまごからお嫁にいらしつて、翌年にはこの大地震なんて全くやり切れませんねえ。」

おまんはその話を引き取って、「お宅でも、皆さんお変わりもありませんか。」

「えゝ、まあおかげで。たった一人おもしろい人物がいまして、これだけは無事とは言えないかもしれません。実は吾家うちで使つてゐる源吉のやつですが、この騒ぎの中で時々どこかへいなくなつてしまふ。あれはすこし足りないですよ。あれはアメリカという人相ですよ。」

「アメリカという人相はよかつた。金兵衛さんの言いそうなことだ。」

と吉左衛門もかたわらにいて笑つた。

こんな話をしているとところへ、生家さとの親たちを見に来る上の伏

見屋のお喜佐、半蔵夫婦を見に来る乳母うばのおふき婆ばあさん、いずれも立ち退き先からそこへ一緒になった。主従の關係もひどくやましかつた封建時代に、下男や下女までそこへ膝ひざを突き合わせて、目上目下の区別もなく、互いに食うものを分け、互いに着るものを心配し合う光景は、こんな非常時でなければ見られなかった筈だ。

村民一同が各自の家に帰って寝るようになったのは、ようやく十一月の十三日であつた。はじめて地震が来た日から数えて実に十日目に当たる。夜番に、見回りに、ごく困窮な村民の救恤きゆうじゆつに、その間、半蔵もよく働いた。彼は伏見屋から大坂地震の絵図なぞを借りて来て、それを父と一緒に見たが、震災の実際はうわ

さよりも大きかった。大地震の区域は伊勢^{いせ}の山田辺から志州^{ししゅう}の鳥羽^{とば}にまで及んだ。東海道の諸宿でも、出火、潰れ家^{つぶや}など数えきれないほどで、宮^{みや}の宿^{しゆく}から吉原^{よしわら}の宿までの間に無難なところはわずかに二宿しかなかった。

やがて、その年初めての寒さも山の上へやって来るようになって。一切を沈黙させるような大雪までが十六日の暮れ方から降り出した。その翌日は風も立ち、すこし天気の良い時もあったが、夜はまた大雪で、およそ二尺五寸も積もった。石を載せた山家の板屋根は皆さびしい雪の中に埋^{うづ}もれて行つた。

「九太夫さん、どうもわたしは年回りがよくないと思う。」

「どうでしょう、馬籠でも年を祭り替えることにしては。」

「そいつはおもしろい考えだ。」

「この街道筋でも祭り替えるようなうわさで、村によつてはもう松を立てたところもあるそうです。」

「早速、年寄仲間や組頭の連中を呼んで、相談して見ますか。」

本陣の吉左衛門と問屋の九太夫とがこの言葉をかわしたのは、村へ大地震の来た翌年安政二年の三月である。

流言。流言には相違ないが、その三月は実に不吉な月で、悪病が流行するか、大風が吹くか、大雨が降るかないし大饑饉だいききんが来るか、いずれ天地の間に恐ろしい事が起こる。もし年を祭り替え

るなら、その災難からのがれることができる。こんなうわさがどこの国からともなくこの街道に伝わって来た。九太夫が言い出したこともこのうわさからで。

やがて宿役人らが相談の結果は村じゅうへ触れ出された。三月節句の日を期して年を祭り替えること。その日およびその前日は、農事その他一切の業務を休むこと。こうなると、流言の影響も大きかった。村では時ならぬ年越しのしたくで、暮れのような餅搗もちつきの音が聞こえて来る。松を立てた家もちらほら見える。「そえご」と組み合わせた門松の大きなのは本陣の前にも立てられて、日ごろ出入りの小前こまえのものは勝手の違った顔つきでやって来る。その中の一人は、百姓らしい手をもみもみ吉左衛門にたずねた。

「おおだんな大旦那、

ちよつくら物を伺いますが、正月を二度すると言え
ば、年を二つ取ることだずら。村の衆の中にはそんなことを言つ
て、たまげてるものもあるわなし。おれの家じゃ、お前さま、去
年の暮れに女の子が生まれて、まだ数え歳どし二つにしかない。
あれも三つと勘定したものかなし。」

「待つてくれ。」

この百姓の言うようにすると、吉左衛門自身は五十七、五十八
と一時に年を二つも取ってしまう。伏見屋の金兵衛などは、一足
飛びに六十歳を迎える勘定になる。

「ばかなことを言うな。正月のやり直しと考えたらいいじゃない
か。」

そう吉左衛門は至極^{しごく}まじめに答えた。

一年のうちに正月が二度もやつて来ることになった。まるでうそのように。気の早い連中は、屠蘇^{とそ}を祝え、雑煮^{ぞうに}を祝えと言つて、節句の前日から正月のような気分になった。当日は村民一同夜のひきあけに氏神諏訪社^{すわしゃ}への参詣^{さんけい}を済まして来て、まず吉例として本陣の門口に集まつた。その朝も、吉左衛門は麻^{かみしも}の着用で、にこにこした目、大きな鼻、静かな口に、馬籠の駅長らしい表情を見せながら、一同の年賀を受けた。

「へい、大旦那^{おおだんな}、明けましておめでとうございます。」

「あい、めでたいのい。」

これも一時の気休めであつた。

その年、安政二年の十月七日には江戸の大地震を伝えた。この山の中のものは彦根^{ひこね}の早飛脚からそれを知った。江戸表は七分通りつづれ、おまけに大火を引き起こして、大部分焼失したという。震災後一年に近い地方の人たちにとって、この報知^{しらせ}は全く他事^{ひとごと}ではなかった。もつとも、馬籠のような山地でもかなりの強震を感じて、最初にどしんと来た時は皆屋外^{そと}へ飛び出したほどであった。それからの昼夜幾回とない微弱な揺り返しは、八十余里を隔てた江戸方面からの余波とわかった。

江戸大地震の影響は避難者の通行となつて、次第にこの街道にもあらわれて来た。村では遠く江戸から焼け出されて来た人たちに物を与えるものもあり、またそれを見物するものもある。月も

末になるころには、吉左衛門は家のものを集めて、江戸から届いた震災の絵図をひろげて見た。いちおうさいくにちか一鶯齋国周画、あるいは芳

綱な画として、浮世絵師の筆になった悲惨な光景がこの世ながら

の地獄じごくのようにそこに描き出されている。したやひろこうじ下谷広小路から金きんり

龍ゆうさん山の塔までを遠見にして、町の空には六か所からも火の手

が揚がつている。右に左にと逃げ惑う群衆は、京橋しほうぐら四方蔵から

竹河岸たけがしあたりに続いている。ふかがわ深川方面を描いたものは武家、町

家いちめんの火で、煙につつまれた火見櫓ひのみやぐらも物すごい。目もく

らむばかりだ。

半蔵が日ごろその人たちのことを想望していた水戸の藤田東湖ふじたとうこ、

戸田蓬軒とだほうけんなども、この大地震の中に巻き込まれた。おそらく水戸

ほど当時の青年少年の心を動かしたところはなかったろう。彰しょう

考こう館かんの修史、弘道館こうどうかんの学問は言うまでもなく、義公、武公、

烈公のような人たちが相続いてその家に生まれた点で。御三家ごさんけの

一つと言われるほどの親藩でありながら、大義名分を明らかにし

た点で。『常陸帯ひたちおび』を書き『回天詩史かいてんしし』を書いた藤田東湖はこ

の水戸をささえる主要な人物ひとりの一人として、少年時代の半蔵の目

にも映じたのである。あの『正気せいぎの歌』なぞを諳あんしやう誦しやうした時の

心は変わらずにある。そういう藤田東湖は、水戸内部の動揺どうごうがよ

うやくしげくなろうとするころに、開港けいこうか攘夷じやういかの舞台の序幕

の中で、倒れて行つた。

「東湖先生か。せめてあの人だけは生かして置きたかった。」

と半蔵は考えて、あの藤田東湖の死が水戸にとつても大きな損失であろうことを想おもつて見た。

やがて村へは庚申こうしん講の季節がやって来る。半蔵はそのめつきり冬らしくなつた空をながめながら、自分の二十五としという歳もむなく暮れて行くことを思い、街道の片すみに立ちつくす時も多かった。

四

安政三年は馬籠まごめの万福寺で、松雲和尚おしろうが寺小屋を開いた年である。江戸の大地震後一年目という年を迎え、震災のうわさもや

や薄らぎ、この街道を通る避難者も見えないころになると、なんとなくそこいらは嵐あらしの通り過ぎたあとのようになった。当時の中心地とも言うべき江戸の震災は、たしかに封建社会の空気を一転させた。嘉永六年かえいの黒船騒ぎ以来、続き続いた一般人心の動揺も、震災の打撃のために一時取り沈められたようになった。もつとも、尾張藩主が江戸出府後の結果も明らかでなく、すでに下田しもだの港は開かれたとうわさも伝わり、交易を非とする諸藩の抗議には幕府の老中もただただ手をこまねいているとうわさすらある。しかしこの地方としては、一時の混乱も静まりかけ、街道も次第に整理されて、米の値までも安くなった。

各村儉約の申し渡しとして、木曾福島からの三人の役人が巡回

して来たところは、山里も震災のあとらしい。土地の人たちは正月の味噌^{みそ}搗^つきに取りかかるころから、その年の豊作を待ち構え、あるいは杉^{すぎ}苗^{なえ}植え付けの相談なぞに余念もなかった。

ある一転機が半蔵の内部^{なか}にもきざして来た。その年の三月には彼も父となっていた。お民は彼のそばで、二人^{ふたり}の間に生まれた愛らしい女の子を抱くようになった。お糸^{くめ}というのがその子の名で、それまで彼の知らなかったちいさなものの動作や、物を求めるような泣き声や、無邪気なあくびや、無心なほほえみなぞが、なんとなく一人前になったという心持ちを父としての彼の胸の中によび起こすようになった。その新しい経験は、今までのような遠いところにあるものばかりでなしに、もっと手近なものに彼の目を

向けさせた。

「おれはこうしちやいられない。」

そう思つて、辺鄙^{へんぴ}な山の中の寂しさ不自由さに突き当たるたびに、半蔵は自分の周囲を見回した。

「おい、峠の牛方衆^{うしかたしゅう}——中津川の荷物がさっぱり来ないが、どうしたい。」

「当分休みよなし。」

「とぼけるなよ。」

「おれが何を知らずか。当分の間、角十^{かどじゅう}の荷物を付け出すな

と言って、仲間のものから差し留めが来た。おれは一向知らんが、仲間のことだから、どうもよんどころない。」

「困りものだな。荷物を付け出さなかったら、お前たちはどうして食うんだ。うしぎょうじ牛行司にあつたらよくそう言ってくれ。」

往来のまん中で、尋ねるものは問屋の九太夫、答えるものは峠の牛方だ。

最初、半蔵にはこの事件の真相がはつきりつかめなかった。今いりまで入荷出荷とも付つけ送りを取り扱って来た中津川の間屋角かどじゅ十うに対抗して、牛方仲間が団結し、荷物の付け出しを拒んだことは彼にもわかった。角十の主人、角屋かどや十兵衛が中津川からやつて来て、伏見屋の金兵衛にその仲裁を頼んだこともわかった。事

件の当事者なる角十と、峠の牛行司ふたり二人の間に立つて、六十歳の金兵衛が調停者としてたつこともわかった。双方示談の上、牛馬共に今までどおりの出入りをするように、それにはよく双方の不都合を問いただそうというのが金兵衛の意思らしいこともわかった。西は新茶屋から東は桜沢まで、木曾路の荷物は馬ばかりでなく、牛の背で街道を運搬されていたので。

荷物送り状の書き替え、駄賃だちんの上刎うわはね——駅路時代の問屋の弊害はそんなところに潜んでいた。角十ではそれがはなはだしかったのだ。その年の八月、小草山の口明けの日から三日にわたって、金兵衛は毎日のように双方の間に立って調停を試みたが、紛争は解けそうもない。中津川からは角十側の人がある。峠からは牛行

司の利三郎、それに十二兼村じゅうにかねむらの牛方までが、呼び寄せられる。峠の組頭、平助は見るに見かねて、この紛争の中へ飛び込んで来たが、それでも埒らちは明きそうもない。

半蔵が本陣の門を出て峠の方まで歩き回りに行つた時のことだ。崖がけに添うた村の裏道には、村民の使用する清い飲料水が樋といをつたつてあふれるように流れて来ている。そこは半蔵の好きな道だ。その辺にはよい樹陰こかげがあつたからで。途中で彼は峠の方からやつて来る牛方の一人に行きあつた。

「お前たちもなかなかやるねえ。」

「半蔵さま。お前さまも聞かつせいたかい。」

「どうも牛方衆は苦手にがてだなんて、平助さんなぞはそう言ってるぜ

。」「

「冗談でしょう。」

その時、半蔵は峠の組頭から聞いた言葉を思い出した。いずれ中津川からも人が出張しているから、とくと評議の上、随分いっさ一いっさ札も入れさせ、今後無理非道のないように取り扱いたい、それが平助を通して聞いた金兵衛の言葉であることを思い出した。

「まあ、そこへ腰を掛けろよ。場合によつては、吾家うちの阿父おやじに話してやつてもいい。」

牛方は杉すぎの根元にあつた古い切り株を半蔵に譲り、自分はその辺こかげの樹陰にしゃがんで、路傍みちばたの草をむしりむしり語り出した。

「この事件は、お前さま、きのうやきように始まつたことじやあ

らすか。角十のような問屋は断わりたい。もつと他の問屋に頼みたい、そのことはもう四、五年も前から、しもかいどう下海^し道^も辺^うの問屋でも今渡^{いまど}（水陸荷物の集散地）の問屋仲間でも、荷主まで一緒になつて、みんな申し合わせをしたことよなし。ところが今度という今度、角十のやり方がいかにも不実だ、そう言つて峠の牛行司が二^ふ人^{たり}とも怒^{おこ}つてしまつたもんだで、それからこんなことになりましたたわい。伏見屋の旦那^{だんな}の量見じゃ、『おれが出たら』と思わつせるか知らんが、この事件がお前さま、そうやすやすと片づけられすか。そりや峠の牛方仲間は言うまでもないこと、宮^{みや}の越^{こし}の弥治^{やじ}えもん衛門に弥吉から、水上村の牛方や、山田村の牛方まで、そのほかアンコ馬まで申し合わせをしたことです。まあ、見ていさつせ

れ——牛方もなかなか粘りますぞ。いったい、角十は他の問屋よりも強欲ごうよくすぎるわなし。それがそもそも事の起こりですぞ。」

半蔵はいろいろにしてこの牛方事件を知ることになった。彼が手に入れた「牛方より申し出の個条かじょう」は次ぎのようなものであった。

一、これまで駄賃だちんの儀、すべて送り状は包み隠し、控えの付つけにて駄賃等書き込みにして、別に送り状を認め荷主方へ付送つけおくりのこと多く、右にては一同掛念けねんやみ申さず。今後は有体ありていに、実意になし、送り状も御見せ下さるほど万事親切に御取

り計らい下さらば、一同安心致すべきこと。

一、牛方どものうち、平生心安き者は荷物もよく、また駄賃

等も御贖^{ごひいき}あり。しかるに向きに合わぬ牛方、並びに丸亀^{まるがめ}

屋^や出入りの牛方どもには格別不取り扱いにて、有り合わせ

し荷物も早速には御渡しなく、願ひ奉る上ならでは付送^{つけおく}り

方^{かた}に御回し下さらず、これも御出入り牛方同様に不憫^{ふびん}を加え、

荷物も早速御出し下さるよう御取り計らいありたきこと。

（もつとも、寄せ荷物なき時は抛^{よんどころ}なく、その節はいずれなり

とも御取り計らいありたし。）

一、大豆売買の場合、これを一駄四百五十文と問屋の利分を定め、その余は駄賃として牛方どもに下されたきこと。

一、送り荷の運賃、運上うんじょうは一駄いちぶわり一分割と御定めもあるこ

となれば、その余を駄賃として残らず牛方どもへ下さるよう、今後御取り極めきぎありたきこと。

一、通し送り荷駄賃、名古屋より福島まで半分はんぶん割の運上引き去り、その余は御忒おはねなく下されたきこと。

一、荷物送り出しの節、心安き牛方にて、初めて参り候牛方そうろうにても、同様に御扱い下され、すべて今渡いまどの間屋同様に、依え怙こひ鼻いなきよう願いたきこと。

一、すべて荷物、問屋に長く留め置き候ては、荷主催促に及び、はなはだ牛方にて迷惑難渋つかまつ仕り候間、早速付送り方つけおく、御取り計らい下され候よう願いたきこと。

一、このたび組くみじよう定とりきめ候上は、双方堅く相守り申すべ

く、万一問屋無理非道の儀を取り計らい候わば、その節は牛方どもにおいて問屋を替え候とも苦しからざるよう、その段御引き合い下されたく候こと。

これは調停者の立場から書かれたもので、牛方仲間がこの個条書をそつくり認めるか、どうかは、峠の牛行司でもなんとも言えないとのことであつた。はたして、水上村から強い抗議が出た。

八月十日の夜、峠の牛方仲間のものが伏見屋へ見えての話に、右の書付を一同に読み聞かせたところ、少々腑ふに落ちないところもあるから、いずれ仲間どもで別の案文を認しためた上のことになしたい、それまで右の証文は二人の牛行司の手に預かつて置くというよう

なことで、またまた交渉は行き悩んだらしい。

ちようど、中津川の医者で、半蔵が旧いふる師匠にあたる宮川寛齋

がますだや梶田屋の病人を見に馬籠まごめへ頼まれて来た。この寛齋からも、半

蔵は牛方事件の成り行きを聞くことができた。牛方仲間に言わせ

ると、とかく角十の取り扱い方には依怙えこひ鬚い肩きがあつて、駄賃書き

込み等の態度は不都合もはなはだしい、このまま双方得とく心しんとい

うことにはどうしても行きかねる、今一応仲間のもので相談の上、

伏見屋まで挨拶あいさつしようという意向であるらしい。牛方仲間は従

順ではあつたが、決して屈してはいなかった。

とうとう、この紛争は八月の六日から二十五日まで続いた。長引けば長引くほど、事件は牛方の側に有利に展開した。下海道の

荷主が六、七人も角十を訪れて、峠の牛方と同じようなことは何も言わないで、今まで世話になった礼を述べ、荷物問屋のことは他の新問屋へ依頼すると言つて、お辞儀をしてさつさと歸つて行つた時は、角屋十兵衛もあつけに取られたという。その翌日には、六人の瀬戸物商人が中津川へ出張して来て、新規の問屋を立てることに談判を運んでしまつた。

中津川の和泉屋は、半蔵から言えば親しい学友蜂谷香蔵の家である。その和泉屋が角十に替つて問屋を引き受けるなぞも半蔵にとつては不思議な縁故のように思われた。もみにもんだこの事件が結局牛方の勝利に歸したことは、半蔵にいろいろなことを考えさせた。あらゆる問屋が考えて見なければならぬような、こ

んな新事件は彼の足もとから動いて来ていた。ただ、彼ら、名もない民は、それを意識しなかったまでだ。

生みの母を求める心は、早くから半蔵を憂鬱ゆううつにした。その心は友だちを慕わせ、師とする人を慕わせ、親のない村の子供にまで深い哀憐あわれみを寄せさせた。彼がまだ十八歳のころに、この馬籠の村民が木曾山の嚴禁を犯して、多分の木を盗んだり背伐せぎりをしたりしたという科とがで、村から六十一人もの罪人を出したことがある。その村民が彼の家の門内に呼びつけられて、福島から出張して来た役人の吟味を受けたことがある。彼は庭のすみの梨なしの木の

かげに隠れて、腰繩こしなわ手錠をかけられた不幸な村民を見ていたことがあ
るが、貧窮な黒鋤くろくわや小前こまえのものを思う彼の心はすでにそのころから養
われた。馬籠本陣のような古い歴史のある家柄に生まれながら、彼の目
が上に立つ役人や權威の高い武士の方に向かわないで、いつでも名も
ない百姓の方に向かい、従順で忍耐深いものに向かい向かいしたとい
うのも、一つは継母まははに仕えて身を慎んで来た少年時代からの心の満
たされがたさが彼の内部なかに奥深く潜んでいたからで。この街道に荷物を運搬する牛方仲間のよう
な、下層にあるものの動きを見つけるようになったのも、その彼の目だ。

五

「御免ください。」

馬籠まごめの本陣の入り口には、伴ともを一人連れた訪問の客があつた。

妻籠つまごからお客さまが見えたぞなし。」

という下女の声を聞きつけて、お民は奥から囲炉裏いろり裏りばたへ飛んで出て来て見た。兄の寿平次だ。

「まあ、兄さん、よくお出かけでしたねえ。」

とお民は言つて、奥しゅうとめにいる姑しゅうとめのおまんにも、店座敷にいる半蔵にもそれと知らせた。広い囲炉裏いろりばたは、台所でもあり、食堂たきびでもあり、懇意なものの応接間でもある。山家らしい焚火たきびで煤すすけた

高い屋根の下、黒光りのするほど古い太い柱のそばで、やがて主客の挨拶あいさつがあつた。

「これさ。そんなところに腰掛けていないで、草鞋わらじでもおぬぎよ。」

おまんは本陣の「姉さまあね」らしい調子で、寿平次の供をして来た男にまで声をかけた。二里ばかりある隣村からの訪問者でも、供を連れて山路やまみちを踏んで来るのが当時の風習であつた。ちょうど、木曾路は山の中に多い栗くりの落ちるころで、妻籠から馬籠までの道は楽しかったと、供の男はそんなことをおまんにもお民にも語つて見せた。

間もなくお民は明るい仲の間を片づけて、秋らしい西の方の空

の見えるところに席をつくった。馬籠と妻籠の両本陣の間には、宿場の連絡をとる上から言っても絶えず往来がある。半蔵が父の代理として木曾福島の役所へ出張するおりなぞは必ず寿平次の家を訪れる。その日は半蔵もめずらしくゆつくりやって来てくれた寿平次を自分の家に迎えたわけだ。

「まず、わたしの失敗しくじり話ばなしから。」

と寿平次が言い出した。

お民は仲の間と囲炉裏いりばたの間を往ったり来たりして、茶道具なぞをそこへ持ち運んで来た。その時、寿平次は言葉をついで、「ほら、この前、お訪ねたずした日ですねえ。あの帰りに、藤蔵とうぞうさんの家の上道を塩野へ出ましたよ。いろいろな細い道があつて、

自分ながらすこし迷ったかと思えますね。それから林の中の道を回つて、下り坂の平蔵さんの家の前へ出ました。狸たぬきにでも化かされたように、ぼんやり妻籠へ帰ったのが八つ時どきごろでしたさ。」

半蔵もお民も笑い出した。

寿平次はお民と二人ふたりぎりの兄きょうだい妹で、その年の正月にようや

く二十五歳やくよ厄除けのお日待ひまちを祝ったほどの年ごろである。先代が

木曾福島へ出張中に病死してからは、早く妻籠の本陣の若主人と

なっただけに、年齢としの割合にはふけて見え、口のききようもおと

なびていた。彼は背せいの低い男で、肩の幅で着ていた。一つ上の半

蔵とそこへ対むかい合ったところは、どっちが年とし長うえかわからないく

らいいに見えた。年ごろから言つても、二人はよい話し相手であつ

た。

「時に、半蔵さん、きょうはめずらしい話を持って来ました。」
と寿平次は目をかがやかして言った。

「どうもこの話は、ただじゃ話せない。」

「兄さんも、勿^{もつ}体^{たい}をつけること。」とお民はそばに聞いていて
笑った。

「お民、まあなんでもいいから、お父^{とつ}さんやお母^{つか}さんをお呼んで来
ておくれ。」

「兄さん、お喜佐さんも呼んで来ましようか。あの人も仙^{せん}十^{じゅう}
郎^{ろう}さんと別れて、今じゃ家にいますから。」

「それがいい、この話はみんなに聞かせたい。」

「大笑い。大笑い。」

吉左衛門はちようど屋外そとから帰つて来て、まず半蔵の口から寿平次の失敗しくじりばなし話とつというのを聞いた。

「お父さん、寿平次さんは塩野から下り坂の方へ出たと言うんですかね、どこの林をそんなに歩いたものでしょう。」

「きつと梅屋林の中だぞ。寿平次さんも狸たぬきに化かされたか。そいつは大笑いだ。」

「山の中らしいお話ですねえ。」

とおまんもそこへ来て言い添えた。その時、お喜佐も挨拶あいさつに

来て、母のそばにいて、寿平次の話に耳を傾けた。

「兄さん、すこし待って。」

お民は別の部屋へやに寝かして置いた乳呑児ちのみごを抱きに行つて来た。目をさまして母親さがを探す子の泣き声を聞きつけたからで。

「へえ、くめ糸を見てやつてください。こんなに大きくなりました。」

「おゝ、これはよい女の子だ。」

「寿平次さん、御覧なさい。もうよく笑いますよ。女の子は知恵のつくのも早いものですねえ。」

とおまんは言つて、お民に抱かれている孫娘の頭をなでて見せた。

その日、寿平次が持つて来た話というは、供の男を連れて木曾

路を通り過ぎようとしたある旅人が妻籠の本陣に泊まり合わせた
ことから始まる。偶然にも、その客は妻籠本陣の定じようもん紋を見つ
けて、それが自分の定紋と同じであることを発見する。窠かに木もっこ
瓜うがそれである。客は主人を呼びよせて物を尋ねようとする。

そこへ寿平次が挨拶に出る。客は定紋の暗合に奇異な思いがする
と言って、まだこのほかに替え紋はないかと尋ねる。丸まるに三みつつ引びき
がそれだと答える。客はいよいよ不思議がつて、ここの本陣の先
祖に相そうしゆう州みうらの三浦から来たものはないかと尋ねる。答えは、そ
のとおり。その先祖は青山監物けんもつとは言わなかったか、とまた客
が尋ねる。まさにそのとおり。その時、客は思わず膝ひざを打って、
さてさて世には不思議なこともあればあるものだという。そうい

う自分は相州三浦に住むやまがみしちろうざえもん山上七郎左衛門というものである。かねて自分の先祖のうちには、分家して青山監物と名のつた人があると聞いている。その人が三浦から分かれて、木曾の方へ移り住んだと聞いている。して見ると、われわれは親類である。その客の言葉は、寿平次にとつても深い驚きであつた。とうとう、一夜の旅人と親類さかずきの盃までかわして、系図の交換と再会の日とを約束して別れた。この奇遇のものは、妻籠と馬籠の両青山家に共通なか窠もつこうに木瓜と、丸に三つ引びきの二つの定紋からであつた。それから系図を交換して見ると、二つに割つた竹を合わせたようで、妻籠の本陣なぞに伝わらなかつた祖先が青山監物以前にまだまだ遠く続いていることがわかつたという。

「これにはわたしも驚かされましたねえ。自分らの先祖が相州の三浦から来たことは聞いていましたがね、そんな古い家がまだ立派に続いているとは思いませんでしたねえ。」と寿平次が言い添えて見せた。

「ハーン。」吉左衛門は大きな声を出してうなつた。

「寿平次さん、吾家うちのこともそのお客に話してくれましたか。」と半蔵が言つた。

「話したとも。青山監物に二人の子があつて、兄が妻籠の代官をつとめたし、弟は馬籠の代官をつとめたと話して置いたさ。」

何百年となく続いて来た青山の家には、もつと遠い先祖があり、もつと古い歴史があつた。しかも、それがまだまだ立派に生きて

いた。おまん、お民、お喜佐、そこに集まっている女たちも皆何
がなしに不思議な思いに打たれて、寿平次の顔を見まもっていた。
「その山上さんとやはらは、どんな人柄のお客さんでしたかい。」
とおまんが寿平次にきいた。

「なかなか立派な人でしたよ。なんでも話の様子では、よほど古
い家らしい。相州の方へ帰るとすぐ系図と一緒に手紙をくれまし
てね、ぜひ一度訪ねて来てくれと言つてよこしましたよ。」

「お民、店座敷へ行つて、わたしの机の上にある筆と紙を持つと
いで。」半蔵は妻に言いつけて置いて、さらに寿平次の方を見て
言つた。「もう一度、その山上という人の住所を言つて見てくれ
ませんか。忘れないように、書いて置きたいと思うから。」

半蔵は紙をひろげて、まだ若々しくはあるがみごとな筆で、寿平次の言うとおりを写し取った。

相州三浦、横須賀^{よこすか}在、公郷^{くごう}村

山上七郎左衛門

「寿平次さん。」と半蔵はさらに言葉をつづけた。「それで君は

――

「だからさ。半蔵さんと二人^{ふたり}で、一つその相州三浦を訪ね^{たず}て見たらと思うのさ。」

「訪ねて行って見るか。えらい話になって来た。」
しばらく沈黙が続いた。

「山上の方の系図も、持って来て見せてくださるとよかった。」

「あとから届けますよ。あれで見ると、青山の家は山上から分かれる。山上は三浦家から出ていますね。つまりわたしたちの遠い祖先は鎌倉時代かまくらに活動した三浦一族の直系らしい。」

「相州三浦の意味もそれで読める。」と吉左衛門は言葉をはさんだ。

「寿平次さん、もし相州の方へ出かけるとすれば、君はいつごろのつもりなんですか。」

「十月の末あたりはどうでしょう。」

「そいつはおれも至極しごく賛成だねえ。」と吉左衛門も言い出した。

「半蔵も思い立って出かけて行つて来るがいいぞ。江戸も見て来るがいい——ついでに、日光あたりへも参詣さんけいして来るがいい。」

その晩、おまんは妻籠から来た供の男だけを帰らせて、寿平次を引きとめた。半蔵は店座敷の方へ寿平次を誘つて、昔風な行^{あんど}燈^んのかげでおそくまで話した。青山氏系図として馬籠の本陣に伝わったものをもそこへ取り出して来て、二人でひろげて見た。その中にはこの馬籠の村の開拓者であるという祖先青山道斎のことも書いてあり、家中女子ばかりになった時代に妻籠の本陣から^{こうけん}後見^{もすけ}に^{もすけ}来た百助^{もすけ}というような隠居のことも書いてある。道斎から見れば、半蔵は十七代目の子孫にあたつた。その晩は半蔵は寿平次と枕^{まくら}を並べて寝たが、父から許された旅のことなぞが胸に満ちて、よく眠られなかつた。

偶然にも、半蔵が江戸から横須賀の海の方まで出て行つて見る
思いがけない機会はこんなふうにして恵まれた。翌日、まだ朝の
うちに、お民は万福寺の墓地の方へ寿平次と半蔵を誘つた。寿平
次は久しぶりで墓参りをして行きたいと言ひ出したからで。お民
が夫と共に看病に心を砕いたあの祖母おばあさんもはやそこに長く眠
っているからで。

半蔵と寿平次とは一ひと歩あし先に出た。二人は本陣の裏木戸から、
隣家の伏見屋の酒蔵さかぐらについて、暗いほど茂つた苦竹まだけと淡竹はちくの藪やぶ
の横へ出た。寺の方へ通う静かな裏道がそこにある。途中で二人
はお民を待ち合わせたが、煙の立つ線香や菊の花などを家から用

意して来たお民と、お糸を背中にのせた下女とが細い流れを渡つて、田圃たんぼの間の寺道を踏んで来るのが見えた。

小山の上に立つ万福寺は村の裏側から浅い谷一つ隔てたところにある。墓地はその小川に添うて山門を見上げるような傾斜の位置にある。そこまで行くと、墓地の境内もよく整理されていて、以前の住職の時代とは大違いになった。村の子供を集めてちいさく寺小屋をはじめている松雲和尚のもとへは、本陣へ通学するこゝとを遠慮するような髪結いの娘や、大工の忤せがれなぞが手習い草紙を抱いて、毎日通つて来ているはずだ。隠れたところに働く和尚の心は墓地の掃除そうじにまでよく行き届いていた。半蔵はその辺に立掛けてある竹箒たけぼうきを執つて、古い墓石の並んだ前を掃こうとし

たが、わずかに落ち散っている赤ちやけた杉の古葉を取り捨てるぐらいで用は足りた。和尚の心づかいと見えて、その辺の草までよくむしらせてあつた。すべて清い。

やがて寿平次もお民も亡くなつた隠居の墓の前に集まつた。

「兄さん、おばあさんの名は生きてる時分からおじいさんと並べて刻んであつたんですよ。ただそれが赤くしてあつたんですよ。」

とお民は言つて、下女の背中にいるお糸の方をも顧みて、

「御覧、ののさんだよ。」

と言つて見せた。

古く苔蒸した先祖の墓石は中央の位置に高く立っていた。何百年の雨にうたれ風にもまれて来たその石の面には、万福寺殿昌屋

常久禪定門の文字が読まれる。青山道齋がそこに眠っていた。あだかも、自分で開拓した山村の発展と古い街道の運命とを長い目でそこにながめ暮らして来たかのように。

寿平次は半蔵に言った。

「いかにも昔の人のお墓らしいねえ。」

「このかいみよう戒名は万福寺を建こんりゅう立した記念でしょう。まだこの

ほかに、村の年寄りの集まるところがなくちや寂しかろうと言つて、薬師堂を建てたのもこの先祖だそうですよ。」

二人の話は尽きなかった。

裏側から見える村の眺ちようぼう望は、その墓場の前の位置から、杉

の木立こだ立ちの間にひらけていた。半蔵は寿平次と一緒に青い杉の葉

のにおいをかぎながら、しばらくそこに立つてながめた。そういう彼自身の内部なかには、父から許された旅のことを考えて見たばかりでも、もはや別の心持が湧わき上がって来た。その心持ちから、彼は住み慣れた山の中をいくらかでも離れて見るようにして、あそこに柿かきの梢こずえがある、ここに白い壁があると、寿平次にさして言つて見せた。恵那山えなさんのふもとに隠れている村の眺ちようぼう望は、妻籠つまごから来て見る寿平次をも飽きさせなかった。

「寿平次さん、旅に出る前にもう一度ぐらいあえましようか。」

「いろいろな打ち合わせは手紙でもできましよう。」

「なんだかわたしは夢のような気がする。」

こんな言葉をかわして置いて、その日の午後に寿平次は妻籠を

さして歸つて行つた。

長いこと見聞の寡い^{すくな}ことを嘆き、自分の固陋^{ころう}を嘆いていた半蔵

の若い生命^{いのち}も、ようやく一歩^{ひとあし}踏み出して見る機会をとらえた。

その時になって見ると、江戸は大地震後一年目の復興最中である。

そこには国学者としての平田鉄胤^{かねたね}もいる。鉄胤は篤胤^{あつたねうし}大人の相

続者である。かねて平田篤胤没後の門人に加わることを志してい

た半蔵には、これは得がたい機会でもある。のみならず、横須賀

海岸の公郷村^{くこうむら}とは、黒船上陸の地点から遠くないところとも聞

く。半蔵の胸はおどつた。

第三章

一

「蜂谷君、^{はちや}近いうちに、自分は江戸から相州三浦方面へかけて出
発する。妻の兄、妻籠本陣^{つまご}の寿平次と同行する。この旅は横須賀
在の公郷村^{くこうむら}に遠い先祖の遺族を訪ねるためであるが、江戸をも
見たい。自分は長いことこもり暮らした山の中を出て、初めての
旅に上ろうとしている。」

こういう意味の手紙を半蔵は中津川にある親しい学友の蜂谷香

蔵あてに書いた。

「君によるこんでもらいたいことがある。自分はこの旅で、かねての平田入門の志を果たそうとしている。最近に自分は佐藤信淵さとうのぶひの著書を手に入れて、あのすぐれた農学者が平田大人うしと同郷の人であることを知り、また、いかに大人うしの深い感化を受けた人であるかをも知った。本居もとおり、平田諸大人の国学ほど世に誤解されているものはない。古代の人に見るようなあの直すぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分らはあの出発点に帰りたい。そこからもう一度この世を見直したい。」

という意味をも書き添えた。

馬籠まごめのような狭い片田舎かたいなかでは半蔵の江戸行きのうわさが村の

すみまでもすぐに知れ渡った。半蔵が幼少な時分からのことを知っていて、遠い旅を案じてくれる乳母うばのおふきのような婆ばあさんもある。おふきは半蔵を見に来た時に言った。

「半蔵さま、男はそれでもいいぞなし。どこへでも出かけられて。まあ、女の身になって見さつせれ。なかなかそんなわけにいかすか。おれも山の中にいて、江戸の夢でも見ずかい。この辺鄙へんぴな田舎には、お前さま、せめて一生のうちに名古屋でも見て死にたいなんて、そんなことを言う女もあるに。」

江戸をさして出発する前に、半蔵は平田入門のことを一応は父

にことわって行こうとした。平田篤胤はすでに故人であつたから、半蔵が入門は先師没後の門人に加わることであつた。それだけでも彼は一層自分をはつきりさせることであり、また同門の人たちと交際する上にも多くの便宜があろうと考えたからで。

父、吉左衛門きちざえもんはもう長いことこの忤せがれを見まもつて来て、行く行

く馬籠の本陣を継ぐべき半蔵が寝食を忘れるばかりに平田派の学問に心を傾けて行くのを案じないではなかつた。しかし吉左衛門は根が好学の人で、自分で学問の足りないのを嘆いているくらいだから、

「お前の学問好きも、そこまで来たか。」

と言わないばかりに半蔵の顔をながめて、結局子の願いを容れ

た。

当時平田派の熱心な門人は全国を通じて数百人に上ると言われ、南信から東美濃^{みの}の地方へかけてもその流れをくむものは少なくな^い。篤胤^{あつぎん}ののこした仕事はおもに八人のすぐれた弟子^{でし}に伝えられ、その中でも特に選ばれた養嗣^{ようし}として平田家を継いだのが当主^{かねた}鉄胤^{てつぎん}であつた。半蔵が入門は、中津川の宮川^{みやがわ}寛齋^{かんさい}の紹介によ^るもので、いづれ彼が江戸へ出た上は平田家を訪ね^{たず}て、鉄胤からその許しを得ることになつていた。

「お父^{とつ}さんに賛成していただいて、ほんとにありがたい。長いこと私はこの日の来るのを待つていたようなものですよ。」

と半蔵は先輩を慕う真実を顔にあらわして言った。同じ道を踏

もうとしている中津川の浅見景蔵も、蜂谷香蔵も、さぞ彼のためによろこんでくれるだろうと父に話した。

「まあ、何も試みだ。」

と吉左衛門は持ち前の大きな本陣鼻の上へしわを寄せながら言った。父は半蔵からいろいろと入門の手続きなどを聞いたのみで、そう深入りするなとも言わなかった。

安政の昔は旅も容易でなかった。木曾谷の西のはずれから江戸へ八十三里、この往復だけでも百六十六里の道は踏まねばならない。その間、峠を四つ越して、関所を二つも通らねばならない。

吉左衛門は関西方面に明るいほど東の方の事情に通じてもないなかったが、それでも諸街道問屋の一人として江戸の道ひとり中奉行どうちゆうぶぎようし

所^よへ呼び出されることがあつて、そんな用向きで二、三度は江戸の土を踏んだこともある。この父は、いろいろ旅の心得になりそうなことを子に教えた。寿平次のようなよい連れがあるにしても、若い者二人^{ふたり}ぎりではどうあろうかと言つた。遠く江戸から横須賀辺までも出かけるには、伴^{とも}の男を一人連れて行けと勧めた。当時の旅行者が馬や人足を雇い、一人でも多く連れのあるのをよろこび、なるべく隊伍^{たいご}をつくるようにしてこの街道を往^いつたり来たりするのも、それ相応の理由がなくてはかなわぬことを父は半蔵に指摘して見せた。

「ひとり旅のものは宿屋でも断^{こと}わられるぜ。」
とも注意した。

かねて妻籠の本陣とも打ち合わせの上、出発の日取りも旧暦の十月上旬に繰りあげてあつた。いよいよその日も近づいて、継母のおまんは半蔵のために青地あおじの錦にしきの守り袋を縫い、妻のお民は晒さ木綿らしの胴巻きなどを縫つたが、それを見る半蔵の胸にはなんとなく前途の思いがおごそかに迫つて来た。遠く行くほどのものは、河止かわどめなぞの故障の起こらないかぎり、たとい強い風雨を冒しても必ず予定の宿しゆくまではたどり着けと言われているころだ。遊山ゆうさん半分にできる旅ではなかつた。

「佐吉さん、お前は半蔵さまのお供だそうなのい。」

「あい、半蔵さまもそう言ってくれるし、おおだんな大旦那からもお許しが出たで。」

おふきはだれよりも先に半蔵の門出かどでを見送りに来て、もはや本陣の囲炉裏いろりばたのところで旅したくをしている下男しもやめの佐吉を見つけた。佐吉は雇われて来てからまだ年も浅く、半蔵といくつも違わないくらいの若さであるが、今度江戸への供ともに選ばれたことをこの上もないよろこびにして、留守中主人の家の炉いろりで焚たくだけの松薪まつまきなどはすでに山から木小屋へ運んで来てあつた。

いよいよ出発の時が来た。半蔵は青い河内木綿かわちもめんの合羽かつばを着、脚き絆やはんをつけて、すつかり道中姿になった。旅の守り刀は綿更紗めんざらさの袋つばもとで鍰つばもと元を包んで、それを腰にさした。

「さあ、これだ。これさえあれば、どんな関所でも通られる。」
と吉左衛門は言つて、一枚の手形てがたを半蔵の前に置いた。関所の通り手形だ。それには安政三年十月として、宿役人の署名があり、馬籠宿の印が押してある。

「このお天気じゃ、あすも霜でしょう。半蔵も御苦労さまだ。」
という継母にも、女の子のお糸くめを抱きながら片手に檜木ひのきがさ笠を持つて来てすすめる妻にも別れを告げて、やがて半蔵は勇んで家を出た。おふきは、目にいっぱい涙をためながら、本陣の女衆と共に門口に出て見送つた。

峠には、組頭くみがしら平助の家がある。名物栗くりこわめしの看板をかけた休み茶屋もある。吉左衛門はじめ、組頭庄兵衛しょうべえ、そのほか

隣家の鶴松つるまつのような半蔵の教え子たちは、峠の上まで一緒に歩

いた。当時の風習として、その茶屋で一同別れの酒をくみかわして、思い思いに旅するものの心得になりそうなことを語った。出発のはじめはだれしも心がはやって思わず荒く踏み立てるものがある、とかくはじめは足をたいせつにすることが肝要だ、と言うのは庄兵衛だ。旅は九日路ここのかじのものなら、十日かかって行け、と言つて見せるのはそこへ来て一緒になつた平助だ。万福寺の松雲和尚さまが禅僧らしい質素な法衣に茶色の袈裟けさがけで、わざわざ見送りに来たのも半蔵の心をひいた。

「夜道は気をつけるがいいぜ。なるべく朝は早く立つようにして、日の暮れるまでには次ぎの宿しゆくへ着くようにするがいいぜ。」

この父の言葉を聞いて、間もなく半蔵は佐吉と共に峠の上から離れて行った。この山地には俗に「道知らせ」と呼んで、螢^{ほたる}の形したやさしい虫があるが、その青と紅のあざやかな色の背を見せたやつまでが案内顔に、街道を踏んで行く半蔵たちの行く先に飛んだ。

隣宿妻籠^{つまご}の本陣には寿平次がこの二人^{ふたり}を待つていた。その日は半蔵も妻籠泊まりときめて、一夜をお民の生家^{さと}に送って行くことにした。寿平次を見るたびに半蔵の感ずることは、よくその若さ^{しょうやといや}で本陣庄屋問屋三役の事務を処理して行くことであつた。寿平

次の部屋へやには、先代からつけて来たという覚え帳がある。諸大名宿泊しゆくだいのおりの人数、旅籠はたごちん賃から、入り用の風呂ふろ何本、火鉢ひばち何個、燭しゆくだい台何本というようなことまで、事こまかに記しるしつけてある。当時の諸大名は、各自に寝具、食器たぐいの類を携帯して、本陣へは部屋代を払うというふうであつたからで。寿平次の代になつてもそんなめんどくさいことを一々書きとめて、後日の参考とすることを怠おろそかしていない。半蔵が心深くながめたのもその覚え帳だ。

「寿平次さん、今度の旅は佐吉に供をさせます。そのつもりで馬籠から連れて来ました。あれも江戸を見たがつていますよ。君の荷物はあれにかつがせてください。」

この半蔵の言葉も寿平次をよろこばせた。

翌朝、佐吉はだれよりも一番早く起きて、半蔵や寿平次が目をさましたところには、二足の草鞋わらじをちゃんとそろえて置いた。自分の檜木笠ひのきがさ、天秤棒てんびんぼうまで用意した。それから囲炉裏いろりばたにかしこまつて、主人らのしたくのできるのを待った。寿平次は留守中のことを脇本陣わきほんの扇屋おうぎやの主人、得右衛門とくえもんに頼んで置いて、柿か色きいろの地じに黒羅紗くろらしやの襟えりのついた合羽かっぱを身につけた。関所の通り手形も半蔵と同じように用意した。

妻籠の隠居はもういい年のおばあさんで、孫にあたる寿平次をそれまでに守り立てた人である。お民の女の子のうわさを半蔵にして、寿平次に迎えた姫よめのお里にはまだ子がないことなどを言つて見せる人である。隠居は家の人たちと一緒に門口に出て、寿平

次を見送る時に言った。

「お前にはもうすこし背をくれたいなあ。」

この言葉が寿平次を苦笑させた。隠居は背の高い半蔵に寿平次を見比べて、江戸へ行つて恥をかいて来てくれるなというふうにそれを言つたからで。

半蔵や寿平次は檜木笠をかぶつた。佐吉も荷物をかついでそのあとについた。同行三人のものはいずれも軽い草鞋で踏み出した。

二

木曾十一宿はおおよそ三つに分けられて、馬籠、妻籠、三留野、

のじりしも
 野尻を下四宿といい、須原、上松、福島を中三宿といい、宮
 の越、藪原、奈良井、贄川を上四宿という。半蔵らの進んで
 行つた道はその下四宿から奥筋への方角であるが、こうしてそろ
 って出かけるということがすでにめずらしいことであり、興も三
 人の興で、心づかいも三人の心づかいであつた。あそこの小屋の
 前に檜木の実が乾してあつた、ここに山の中らしい耳のとがつた
 茶色な犬がいた、とそんなことを語り合つて行く間にも楽しい笑
 い声が起こつた。一人の草鞋の紐が解けたと言え、他の二人は
 それを結ぶまで待った。

深い森林の光景がひらけた。妻籠から福島までの間は寿平次の
 よく知つてゐる道で、福島役所からの差紙でもあるおりには

半蔵も父吉左衛門の代理としてこれまで幾たびとなく往来したことがある。幼い時分から街道を見る目を養われた半蔵らは、馬方や人足や駕籠かごかきなぞの隠れたところに流している汗を行く先に見つけた。九月から残った蠅はえは馬にも人にも取りついて、それだけでも木曾路の旅らしい思いをさせた。

「佐吉、どうだい。」

「おれは足は達者たっしゃだが、お前さまは。」

「おれも歩くことは平気だ。」

寿平次と連れだって行く半蔵は佐吉を顧みて、こんな言葉をかわしては、また進んだ。

秋も過ぎ去りつつあった。色づいた霜葉しもはは谷に満ちていた。季

節が季節なら、木曾川の水流を利用して山から伐り出した材木を流しているさかな活動のさまがその街道から望まれる。小谷狩にはややおそく、大川狩にはまだ早かった。河原には堰を造る日傭の群れの影もない。木鼻、木尻の作業もまだ始まつていない。諸役人が沿岸の警戒に出て、どうかすると、鉄砲まで持ち出して、盗木流材を取り締まろうとするような時でもない。半蔵らの踏んで行く道はもはや幾たびか時雨の通り過ぎたあとだった。気の置けないものばかりの旅で、三人はときどき路傍の草の上に笠を敷いた。小松の影を落としている川の中洲を前にして休んだ。対岸には山が迫って、檜木、樺の直立した森林がその断層を覆っている。とがった三角を並べたように重なり合った木と木の

梢こずえの感じも深い。奥筋の方から渦巻うずまき流れて来る木曾川の水は青緑の色に光つて、乾かわいたりぬれたりしている無数の白い花崗石みかげいしの間におどつていた。

その年は安政の大地震後初めての豊作と言われ、馬籠の峠の上のような土地ですら一部落で百五十俵からの増収があつた。木曾も妻籠から先は、それらの自然の恵みを受くべき田畠たはたとてもすくない。中三宿となると、次第に谷の地勢も狭せばまって、わずかの河岸しの傾斜、わずかの崖がけの上の土地でも、それを耕地にあててある山のなかに成長して樹木も半分友だちのような三人には、その河岸さやに莢さいをたれた皂莢かいちの樹きがある、ここの崖の上に枝の細い棗なつめの樹があると、指さして言うことができた。土地の人たちが路傍に

設けた意匠もまたしおらしい。あるところの石垣いしがきの上は彼らの花壇であり、あるところの崖の下は二十三夜もしくは馬頭観音ばとうかんのんなぞの祭壇である。

この谷の中だ。木曾地方の人たちが山や林を力にしているのに不思議はない。当時の木曾山一帯を支配するものは尾張藩で、おわりはん巢山すやま、留山とめやま、明山あきやまの区域を設け、そのうち明山のみは自由林であつても、許可なしに村民が五木を伐採することは禁じられてあつた。言つて見れば、檜木ひのき、榧さわら、明檜あすひ、高野槇こうやまき、※の五種類が尾張藩の厳重な保護のもとにあつたのだ。半蔵らは、名古屋から出張している諸役人の心が絶えずこの森林地帯に働いていることを知っていた。いちこくとち一石柅しらきにある白木の番所から、あげまつ上松の陣屋

の辺へかけて、諸役人の目の光らない日は一日もないことを知っていた。

しかし、巢山、留山とは言つても、絶対に村民の立ち入ることを許されない区域は極少部分に限られていた。自由林は木曾山の大部分を占めていた。村民は五木の厳禁を犯さないかぎり、意のままに明山を跋ばっしょう渉して、雑木を伐採したり薪炭しんたんの材料を集めたりすることができた。檜木笠、めんぱ（木製割籠）、お六ろくご櫛し、諸種の塗り物——村民がこの森林に仰いでいる生活の資本もとでもかなり多い。耕地も少なく、農業も難渋で、そうかと言つて塗り物渡世の材料も手に入れがたいところでは、「御免ごめんの檜物ひもの」ととな称えて、毎年千数百駄だずつの檜木を申し受けている村もある。あ

るいはまた、そういう木材で受け取らない村々では、けいちよう慶長年

度の昔から谷中一般人民に許された白木六千駄のかわりに、それ

を「御切替えおきりか」と称えて、代金で尾張藩から分配されて来た。こ

れらは皆、歴史的に縁故の深い尾張藩が木曾山保護の精神にもと
づく。どうしても、山や林なしに生きられる地方ではないのだ。半

蔵らの踏んで行つたのも、この大きな森林地帯を貫いている一筋
道だ。

ねぐさめ寢覚まで行くと、あげまつ上松の宿の方から荷をつけて来る牛の群れ

が街道に続いた。

「半蔵さま、どちらへ。」

とその牛方仲間から声をかけるものがある。見ると、馬籠の峠

ものだ。この界限かいわいに顔を知られている牛行司うしぎようじ利三郎だ。その牛行司は福島から積んで来た荷物の監督をして、美濃みのの今渡いまだへの通し荷を出そうとしているところであつた。

その時、寿平次が尋ね顔に佐吉の方をふりかえると、佐吉は笑つて、

「峠の牛よなし。」

と無造作に片づけて見せた。

「寿平次さん、君も聞いたでしょう。あれが牛方事件の張本人でさ。」

と言つて、半蔵は寿平次と一緒に、その荒い縞しまの回し合羽まわがっぱを着た牛行司の後ろ姿を見送つた。

下民百姓の目をさまさせまいとすることは、長いこと上に立つ人たちが封建時代に執つて来た方針であつた。しかし半蔵はこの街道筋に起こつて来た見のがしがたい新しい現象として、あの牛方事件から受け入れた感銘を忘れなかつた。不正な問屋を相手に血戦を開き、抗争の意気で起^たつて来たのもあの牛行司であつたことを忘れなかつた。彼は旅で思いがけなくその人から声をかけられて見ると、たとい自分の位置が問屋側にあるとしても、そのために下層に黙つて働いているような牛方仲間を笑えなかつた。

木曾福島の関所も次第に近づいた。三人ははらはら舞い落ちる

木の葉を踏んで、さらに山深く進んだ。時には岩石が路傍に迫つて来ていて、高い杉すぎの枝は両側からおおいかぶさり、昼でも暗いような道を通ることはめずらしくなかった。谷も尽きたかと思えるところまで行くと、またその先に別の谷がひらけて、そこに隠れている休み茶屋の板屋根からは青々とした煙が立ちのぼった。栈かけはじうど、合渡から先は木曾川も上流の勢いになつて、山坂の多い道はだんだん谷底へと降くだつて行くばかりだ。半蔵らはある橋を渡つて、御嶽おんたけの方へ通う山道の分かれるところへ出た。そこが福島の城下町であつた。

「いよいよ御関所ですかい。」

佐吉は改まつた顔つきで、主人らの後ろから声をかけた。

福島の関所は木曾街道中の関門と言われて、大手橋の向こうに正門を構えた山村氏の代官屋敷からは、河かわ一つ隔てた町はずれのところにある。「出女でんな、入り鉄砲でっぽう」と言った昔は、西よりする鉄砲の輸入と、東よりする女の通行をそこで取り締まった。ことに女の旅は嚴重をきわめたもので、髪あまの長いものはもとより、そうでないものも尼びく、比丘尼びくに、髪切かみきり、少女おとめなどと通行者の風俗を区別し、乳まで探つて真偽を確かめたほどの時代だ。これは江戸を中心とする参観さんきん交代の制度を語り、一面にはまた婦人の位置のいかなるものであるかを語っていた。通り手形を所持する普通の旅行者にとって、なんのはばかるところはない。それでもいよいよ関所にかかるとなると、その手前から笠かさや頭巾ずきんを脱ぎ、思

わず襟えりを正したものであるという。

福島では、半蔵らは関所に近く住む植松うえまつしやうすけ菖助あやすけの家を訪ねた。

父吉左衛門からの依頼で、半蔵はその人に手紙を届けるはずであったからで。菖助は名古屋藩の方に聞こえた宮谷家から後妻を迎えている人で、関所を預かる主おも給きゆう人にんであり、砲術の指南役であり、福島でも指折りの武士の一人ひとりであつた。ちようど非番の日で、菖助は家にいて、半蔵らの立ち寄つたことをひどくよろこんだ。この人は伏見屋あたりへ金の融ゆう通ずうを頼むために、馬籠の方へ見えることもある。それほど武士も生活には骨の折れる時になつて来ていた。

「よい旅をして来てください。時に、お二人ふたりとも手形をお持ちで

すね。ここの関所は堅いというので知られていまして、大名のお女中がたでも手形のないものは通しません。とにかく、私が御案内しましょう。」

と菖助は言つて、せんべつ 餞別のしるしにと先祖伝来の秘法による自家製の丸薬なぞを半蔵にくれた。

ひらばかま 平袴 はおり に紋付の羽織で大小を腰にした菖助のあとについて、

半蔵らは関所にかかった。そこは西の門から東の門まで一町ほどの広さがある。一方は傾斜の急な山林に倚より、一方は木曾川の断崖んがいに臨んだ位置にある。山村じんべえ甚兵衛代理格の奉行ぶぎよう、加番の給人らが四人も調べ所の正面に控えて、そのそばには足輕が二人ずつ詰めていた。西に一人、東に二人の番人がさらにその要害のよ

い門のそばを堅めていた。半蔵らは門内に敷いてある米石こめいしを踏
 んで行つて、先着の旅行者たちが取り調べの済むまで待った。由緒いしよ
 のある婦人の旅かと見えて、門内に駕籠かごを停めさせ、乗り物
 のまま取り調べを受けているのもあつた。

半蔵らはかなりの時を待った。そのうちに、

「髪長かみなが、御一人ごいちにん。」

と乗り物のそばで起こる声を聞いた。駕籠で来た婦人はいくら
 かの袖そでの下を番人の妻に握らせて、型のように通行を許されたの
 だ。半蔵らの順番が来た。調べ所の壁に掛かる突棒つくぼう、さす又またな
 ぞのいかめしく目につくところで、階段の下に手について、かね
 て用意して来た手形を役人たちの前にささげるだけで済んだ。

菖助にも別れを告げて、半蔵がもう一度関所の方を振り返った時は、いかにすべてが形式的であるかをそこに見た。

とりいとうげ

鳥居峠はこの関所から宮の越、みやこし藪原二宿を越したところにある。

風は冷たくても、日はかんかん照りつけた。前途の遠さは曲がりくねった坂道に行き悩んだ時よりも、かえってその高い峠の上に御嶽遙拜所おんたけようはいじよなどを見つけた時にあつた。そこは木曾川の上流とも別れて行くところだ。

「寿平次さん、江戸から横須賀まで何里とか言いましたね。」

「十六里さ。わたしは道中記でそれを調べて置いた。」

「江戸までの里数を入れると、九十九里ですか。」

「まあ、ざっと百里というものでしょう。」

供の佐吉も、この主人らの話を引き取って、

「まだこれから先に木曾二宿もあるら。江戸は遠いなし。」

こんな言葉をかわしながら、三人とも日暮れ前の途を^{みち}急いで、
やがてその峠を降りた。

「お泊まりなすっておいでなさい。奈良井のお宿は^{やど}こちらでござ
います。^{なにわこう}浪花講の御定宿は^{おじょうやど}こちらでございます。」

しきりに客を招く声がする。街道の両側に軒を並べた家々から
は、競うようにその招き声が聞こえる。半蔵らが鳥居峠を降りて、
そのふもとにある奈良井に着いた時は、他の旅人らも思い思いに

旅籠屋はたごやを物色しつつあつた。

半蔵はかねて父の懇意にする庄屋仲間しやうやの家に泊めてもらうことにして、寿平次や佐吉をそこへ誘つた。往来の方へ突き出したようなどこの家の低い二階にもきまりで表廊下が造りつけてあつて、馬籠や妻籠に見る街道風の屋造りはその奈良井にもあつた。

「半蔵さん、わたしはもう胼胝まためをこしらえてしまつた。」

と寿平次は笑いながら言つて、草鞋わらじのために水腫みずばれのした足を盥たらひの中の湯に浸した。半蔵も同じように足を洗つて、広い囲炉裏いろりばたから裏庭の見える座敷へ通された。きのこ、豆、唐とう辛がらし、紫蘇しそなどが障子の外の縁に乾ほしてあるようなところだ。気の置けない家だ。

「静かだ。」

寿平次は腰にした道どうちゆうぎ中差しを部屋へやの床の間へ預ける時に言つた。その静かさは、河かわの音の耳につく福島あたりにはないものだつた。そのこの庄屋の主人は、半蔵が父とはよく福島の方で顔を合わせると言い、この同じ部屋に吉左衛門を泊めたこともあると言ひ、そんな縁故からも江戸行きの若者をよろこんでもてなそうとしてくれた。ちようど鳥屋とやのさかりのころで、木曾名物の小鳥でも焼こうと言つてくれるのもその主人だ。鳥居峠つぐみの鶇つぐみは名高い。鶇ばかりでなく、裏山には駒鳥こまどり、山郭公やまほととぎすの声がきかれる。仏法僧ぶつぽうそうも来て鳴く。ここに住むものは、表の部屋に向かうの鳥の声をきき、裏の部屋にこちらの鳥の声をきく。そうしたことを

語り聞かせるのもまたその主人だ。

半蔵らは同じ木曾路でもずっと東寄りの宿場の中に来ていた。

鳥居峠一つ越しただけでも、親たちや妻子のいる木曾の西のはず
れはにわかに遠くなった。しかしそこはなんとなく気の落ち着く
山のすそで、旅の合羽もかつば脚絆もきやはん脱いで置いて、田舎風な風呂に
峠道の汗を忘れた時は、いずれも活いき返ったような心地こころちになった。

「ここの家は庄屋を勤めてるだけなんです。本陣問屋は別にあ
るんですね。」

「そうらしい。」

半蔵と寿平次は一風呂浴びたあとのさっぱりした心地で、奈良井の庄屋の裏座敷に互いの旅の思いを比べ合つた。朝晩はめつきり寒く、部屋には炬燵こたつができていくらいだ。寿平次は下女がさげて来てくれた行燈あんどんを引きよせて、そのかげに道中の日記や矢立てを取り出した。藪原やぶはらで求めた草鞋わらじが何文もん、峠の茶屋での休みが何文というようなことまで細かくつけていた。

「寿平次さん、君はそれでも感心ですね。」

「どうしてさ。」

「妻籠の方でもわたしは君の机の上に載つてゐる覚え帳を見て来ました。君にはそういう綿密なところがある。」

どうして半蔵がこんなことを言い出したかというに、本陣庄屋

問屋の仕事は将来に彼を待ち受けていたからで。二人は十八歳のふたりにころから、すでにその見習いを命ぜられていて、福島役所への出張といい、諸大名の送り迎えといい、二人が少年時代から受けて来た薫陶はすべてその準備のためでないものはなかった。半蔵がまだ親の名跡みようせきを継がないのに比べると、寿平次の方はすでに青年の庄屋であるの違いだ。

半蔵は嘆息して、

「吾家うちの阿爺おやじの心持ちはわたしによくわかる。家を放擲ほうてきしてまで学問に没頭するようなものよりも、よい本陣の跡継ぎを出したというのが、あの人の本意なんです。阿爺おやじももう年を取っていませんからね。」

「半蔵さんはため息ばかりついてるじやありませんか。」

「でも、君には事務の執れるように具そなわつてるところがあるからいい。」

「そう君のように、むずかしく考えるからさ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に参加すると想おもつて見たまえ。とにかく、働きのいはありますぜ。」

囲炉裏いろりばたの方で焼く小鳥の香氣は、やがて二人のいる座敷の方まで通つて来た。夕飯には、下女が来て広い炬こた燵ついた板の上を取り片づけ、そこを食卓の代わりとしてくれた。一本つけてくれた銚ちようし子くしぎ、串差さしにして皿さらの上に盛られた鰯つぐみ、すべては客を扱い慣れた家の主人の心づかいからであつた。その時、半蔵は次ぎの間

に寛くつろいでいる佐吉を呼んで、

「佐吉、お前もここへお膳ぜんを持って来ないか。旅だ。今夜は一杯やれ。」

この半蔵の「一杯」が佐吉をほほえませた。佐吉は年若ながらに、半蔵よりも飲める口であつたから。

「おれは囲炉裏ばたでいただく。その方が勝手だで。」
と言つて佐吉は引きさがつた。

「寿平次さん、わたしはこんな旅に出られたことすら、不思議のような気がする。実に一切から離れますね。」

「もうすこし君は楽な気持ちでもよくはありませんか。まあ、その盃さかずきでも乾ほすさ。」

若いもの二人は旅の疲れを忘れる程度に盃を重ねた。主人が馳ち走そうぶ振りの鵜も食った。焼きたての小鳥の骨をかむ音も互いの耳には楽しかった。

「しかし、半蔵さんもよく話すようになった。以前には、ほんとに黙っていたようですね。」

「自分でもそう思いますよ。今度の旅じゃ、わたしも平田入門を許されて来ました。吾家の阿爺うち おやじもああいいう人ですから、快く許してくれましたよ。わたしも、これで弟でもあると、家はその弟に譲って、もっと自分の勝手な方へ出て行って見たいんだけど。」

「今から隠居でもするようなことを言い出した。半蔵さん——君は結局、宗教にでも行くような人じゃありませんか。わたしはそ

う思つて見ているんだが。」

「そこまではまだ考えていません。」

「どうでしょう、平田先生の学問というものは宗教じゃないでしょうか。」

「そうも言えましょう。しかし、あの先生の説いたものは宗教でも、その精神はいわゆる宗教とはまるきり別のものです。」

「まるきり別のものはよかった。」

こたつばなし

炬燵話に夜はふけて行つた。ひっそりとした裏山に、奈良井川の上流に、そこへはもう東木曾の冬がやって来ていた。山気は二人の身にしみて、翌朝もまた霜かと思わせた。

追分おいわけ

の宿まで行くと、江戸の消息はすでにそこでいくらかわ

かった。同行三人のものは、

塩尻しおじり、

下諏訪しもすわ

から和田峠を越え、

千曲川ちくまがわ

を渡つて、木曾街道と善光寺道との交叉点こうさてんにあたるそ

の高原地の上へ出た。そこに住む追分なぬしの名主で、年寄役を兼ねた

文太夫ぶんだゆうは、

かねて寿平次が先代とは懇意にした間柄で、そんな

縁故から江戸行きの若者らの素通りを許さなかった。

名主文太夫は、

野半天のぼんてん、

割羽織わりばおりに、

捕縄とりなわで、

御領私領の

入れ交まじつた十一か村の秣場まぐさばを取り締ま

つているような人であつ

た。その地方にある山林の枯れ痛み、風折れ、雪折れ、あるいは

枝卸しなどの見回りをしているような人であつた。半蔵らはこの

客好きな名主の家に引き留められて、佐久の味噌汁や堅い地大根たくあんの沢庵などを味わいながら、赤松、落葉松からまつの山林の多い浅間山腹がいかに郷里の方の谿たにと相違するかを聞かされた。曠野こうやと、焼け石と、砂と、烈風と、土地の事情に精通した名主の話は尽きるということを知らなかった。

しかし、そればかりではない。半蔵らが追分に送った一夜の意味でなかったことは、思いがけない江戸の消息までもそこで知ることができたからで。その晩、文太夫が半蔵や寿平次に取り出して見せた書面は、ある松まつ代しろの藩士から借りて写し取って置いたというものであった。嘉永六年六月十一日付として、江戸屋敷の方にいる人の書き送ったもので、黒船騒ぎ当時の様子を伝えた

ものであった。

「このたび、異国船渡り来り候きたそうろうにつき、江戸表はことのほかな

る儀にて、東海道筋よりの早注進はやちゆうしん矢のごとく、よつて諸国

御大名とところどころの御堅め仰せ付けられ候。しかるところ、

異国船神奈川沖へ乗り入れ候おもむき、御老中御屋敷へ注進ごろうしゅう

あり。右につき、夜分急に御登城にて、それぞれ御下知ごげち仰せ付

けられ、七日夜までに出陣の面々は左の通り。

一、松平越前守様、まつだいらえちぜんのかみ（越前福井藩主）品川御殿山お

かた堅め。

一、細川越中守様、ほそかわえつちゆうのかみ（肥後熊本藩主）大森村お堅め。

一、松平大膳太夫様、だいぜんだゆう（長州藩主）鉄砲洲および佃島。てつぱうず

一、松平阿波守様、あわのかみ（阿州徳島藩主）御浜御殿。
 一、酒井雅楽頭様、さかうたのかみ（播州姫路藩主）深川一円。
 一、立花左近将監様、たちばなざこんしようげん伊豆大島一円。松平下総守様、いずのおおしま
あわかずさ安房上総の両国。その他、川越城主松平大和守様をはじ
 め、万石以上にて諸所にお堅めのため出陣の御大名数を知ら
 ず。

公儀御目付役、戸川中務少輔様、なかつかさしようゆう松平十郎兵衛様、じゅうろべえ
 右御両人は異国船見届けのため、陣場見回り仰せ付けられ、
 六日夜浦賀表へ御出立にこれあり候。

さて、このたびの異国船、国名相尋ね候ところ、北アメリ
 カと申すところ。大船四艘着船。そうもつとも船の中より、朝夕

一、兩度ずつ大筒^{おおづつ}など打ち放し申し候よし。町人並びに近在のものは賦役^{ふえき}に遣^{つか}わされ、海岸の人家も大方はうちつぶして諸家様のお堅め場所となり、民家の者ども妻子を引き連れて立ち退^のき候もあり、米石^{べいこく}日に高く、目も当てられず。実に戦国の習い、是非もなき次第にこれあり候。八日の早曉にいたり、御触れの文面左の通り。

一、異国船万一にも内海へ乗り入れ、非常の注進これあり候節は、老中より八代洲^{やしろすがし}河岸火消し役へ相達し、同所にて平日の出火に紛れざるよう早鐘^{いだ}うち出し申すべきこと。

一、右の通り、火消し役にて早鐘うち出し候節は、出火の通り相心得、登城の道筋その他相堅め候よういたすべきこと。

一、右については、江戸場末まで早鐘行き届かざる場合もこれあるべく、万石以上の面々においては早^{はや}半^{はん}鐘^{しょう}相鳴らし申すべきこと。

右のおもむき、御用番御老中よりも仰せられ候。とりあえず当地のありさま申し上げ候。

以上。」

実に、一息に、かねて心にかかっていたことが半蔵の胸の中を通り過ぎた。これだけの消息も、木曾の山の中までは届かなかつたものだ。すくなくも、半蔵が狭い見聞の世界へは、漠^{ばく}然^{ぜん}としてたうわさとしてしかはいって来なかつたものだ。あの彦根^{ひこね}の早飛脚が一度江戸のうわさを伝えてからの混雑、狼^{ろう}狽^{ばい}そのものとも

言うべき諸大名がおびただしい通行、それから引き続きこの街道に起こつて来た種々な変化の意味も、その時思い合わされた。

「寿平次さん、君はこの手紙をどう思いますね。」

「さあ、わたしもこれほどとは思わなかった。」

半蔵は寿平次と顔を見合わせたが、激しい精神の動揺は隠せなかった。
こころ

三

郷里を出立してから十一日目に三人は板橋の宿を望んだ。戸田川の舟渡しを越して行くと、木曾街道もその終点で尽きている。

そこまでたどり着くと江戸も近かった。

十二日目の朝早く三人は板橋を離れた。江戸の中心地まで二里と聞いただけでも、三人が踏みしめて行く草鞋わらじの先は軽かった。道中記のたよりになるのも板橋いたばしまでで、巢鴨すがもの立場たちばから先は江戸の絵図にでもよるほかはない。安政の大地震後一年目で、震災当時多く板橋に避難したという武家屋敷の人々もすでに帰って行ったところであるが、仮小屋の屋根、傾いた軒、新たに修繕の加えられた壁などは行く先に見られる。三人は右を見、左を見して、ほんごう本郷森川宿から神田かんだみょうじん明神の横手に添い、すじかいみつけ筋違見附へと取つて、復興最中の町にはいった。

「これが江戸か。」

半蔵らは八十余里の道をたどつて来て、ようやくその筋違すじかいの
 広場に、見附の門に近い高札場こうさつばの前に自分らを見つけた。広場
 の一角に配置されてある大名屋敷、向こうの町の空に高い火見ひのみや
 櫓ぐらまでがその位置から望まれる。諸役人は騎馬で市中を往来す
 ると見えて、鎗持やりもちの奴やつこ、その他の従者を従えた馬上の人が、そ
 の広場を横ぎりつつある。にわかに講武所こうぶしょの創設されたとも聞
 くところで、旗本はたもと、御家人ごけにん、陪臣ばいしん、浪人ろうにんに至るまでもけいこ
 の志望者を募るなどの物々しい空氣が満ちあふれていた。

半蔵らがめざして行つた十一屋という宿屋は、両国りやうごくの方にあ

る。小網町こあみちよう、馬喰町ばくろちよう、日本橋数寄屋町すきやちよう、諸国旅人の泊まる定

宿ようやど もいろいろある中で、半蔵らは両国の宿屋を選ぶことにし

た。同郷の人が経営しているというだけでもその宿屋は心やすく
思われたからで。ちようど、昌平橋しょうへいばしから両国までは船で行か
れることを教えてくれる人もあつて、三人とも柳の樹きの続いた土
手の下を船で行つた。うわさに聞く浅草橋あさくさばしまで行くと、筋違すじかい
で見たような見附みつの門はそこにもあつた。両国の宿屋は船の着い
た河岸かしからごちやごちやとした広小路ひろこうじを通り抜けたところにあ
つて、十一屋とした看板かんばんからして堅気風かたぎふうな家だ。まだ昼前のこ
とで、大きな風呂敷包ふろしきづつみを背負しよつた男、帳面をぶらさげて行く小
僧なぞが、その辺の町中を往いつたり来たりしていた。

「皆さんは木曾きその方から。まあ、ようこそ。」

と言つて迎えてくれる若いかみさんの声を聞きながら、半蔵も

寿平次も草鞋わらじの紐ひもを解いた。そこへ荷を卸した佐吉のそばで、二人とも長い道中のあとの棒のようになつた足を洗つた。

「ようやく、ようやく。」

二階の部屋へやへ案内されたあとで、半蔵は寿平次と顔を見合わせ
て言つたが、まだ二人とも脚絆きやはんをつけたままだつた。

「ここまで来ると、さすがに陽気は違いますなあ。宿屋の女中な
ぞはまだ裕あわせを着ていますね。」

と寿平次も言つて、その足で部屋へやのなかを歩き回つた。

半蔵が江戸へ出たころは、木曾の青年でこの都会に学んでいる

という人のうわさも聞かなかつた。ただ一人、木曾福島たけいせの武居ひとり拙藏つぞう、その人は漢学者としての古賀侗庵こがどうあんに就つき、塩谷宕陰しおのやとういん、松崎慊堂まつざきけんどうにも知られ、安井息軒やすいそつけんとも交わりがあつて、しばらく御茶の水の昌平おちやみずしょうへいこうに学んだが、親は老い家は貧しくて、数年前に郷里の方へ歸つて行つたといううわさだけが残つていた。半蔵もまだ若かつた。青年として生くべき道を求めていた彼は、そうした方面のうわさにも心をひかれた。それにもまして彼の注意をひいたのは、幕府で設けた蕃書調所ばんしよしらべしよなぞのすでに開かれていると聞くことだつた。箕作阮甫みつくりげんぽ、杉田成卿すぎたせいけいなぞの蘭学者を中心らんに、諸人所蔵の蕃書の翻訳がそこで始まつていた。

この江戸へ出て来て見ると、日に日に外国の勢力の延びて来て

いることは半蔵なぞの想像以上である。その年の八月には三隻の英艦までが長崎にはいったことの報知しらせも伝わっている。品川沖しながわおきには御台場おだいばが築かれて、多くの人の心に海防の念をよび起こしたとも聞く。外国御用掛ごようがかりの交代に、江戸城を中心にした交易大評定のうわさに、震災後めぐつて来た一周年を迎えた江戸の市民は毎日のように何かの出来事を待ち受けるかのようにでもある。

両国へ着いた翌日、半蔵は寿平次と二人で十一屋の二階にいて、遠く町の空に響いて来る大砲調練の音なぞをききながら、旅に疲れたからだを休めていた。佐吉も階下したで別の部屋へやに休んでいた。同郷と聞いてはなつかしいと言って、半蔵たちのところへ話し込みに来る宿屋の隠居もある。その話し好きな隠居は、木曾の山の

中を出て江戸に運命を開拓するまでの自分の苦心なぞを語った末に、

「あなたがたに江戸の話を聞かせろとおっしゃられても、わたしも困る。」

と断わって、なんと言つても忘れがたいのは嘉永^{かえい}六年の六月に十二代將軍の薨^{こうきよ}去を伝えたころだと言ひ出した。

受け売りにしても隠居の話はくわしかった。ちようどアメリカのペリイが初めて浦賀に渡来した翌日あたりは、將軍は病の床にあつた。強い暑さに中^{あた}つて、多勢の医者^あが手を尽くしても、將軍の疲労は日に日に増すばかりであつた。將軍自身にももはや起^たてないことを知りながら、押して老中を呼んで、今回の大事は開^{かいび}

闕やく 以来の珍事である、自分も深く心を痛めているが、不幸にし

て大病に冒され、いかんともすることができないと語ったという。

ついては、水戸みとの隠居（烈公）は年来海外のことに苦心して、定

めしよい了りようけん 簡かんもあろうから、自分の死後外国処置の件は隠居

に相談するようにといい置いたという。アメリカの軍艦が内海に

乗り入れたのは、その夜のことであった。宿直のものから、ただ

いま伊勢いせ（老中阿部あべ）登城、ただいま備後びんご（老中牧野）登城と上

申するのを聞いて、將軍はすぐにこれへ呼べと言ひ、「肩衣かたぎぬ、

肩衣」と求めた。その時將軍はすでに疲れ切っていた。極度ごくどに困くる

しんで、精神も次第に恍惚こうこつとなるほどだった。それでも人に扶たす

けられて、いつものように正しくすわり直し、肩衣を着けた。そ

れから老中を呼んで、二人の言うことを聞こうとしたが、アメリカの軍艦がまたにわかには外海へ出たという再度の報知しらせを得たので、二人の老中も拜謁はいえつを請うには及ばないで引き退いた。翌日、將軍は休息の部屋へやで薨じた。

十一屋の隠居はこの話を日ごろ出入りする幕府奥詰おくづめの医者で喜多村瑞見きたむらずいけんという人から聞いたと半蔵らに言い添えて見せた。

さらに言葉を継いで、

「わたしはあの公方様くほうさまの話を思い出すと、涙が出て来ます。何にしろ、あなた、初めて異国の船が内海に乗り入れた時の江戸の騒ぎはありませんや。諸大名は火事具足かじぐそくで登城するか、持ち場持ち場を堅めるかというんでしょう。火の用心のお触れは出る。鉄

砲や具足の値は平常の倍になる。海岸の方に住んでるものは、みんな荷物を背負^{しよ}つて逃げましたからね。わたしもこんな宿屋商売をして見ていますが、世の中はあれから変わりましたよ。」

半蔵も、寿平次も、この隠居の出で行ったあとで、ともかくも江戸の空気の濃い町中に互いの旅の身を置き得たことを感じた。木曾の山の中にいて想像したと、出て来て見たとでは、実にたいした相違であることも感じた。

「半蔵さん、きょうは国へ手紙でも書こう。」

「わたしも一つ、馬籠^{まごめ}へ出すか。」

「半蔵さん、君はそれじゃ佐吉を連れて、あす平田先生を訪ねる
としたまえ。」

とりあえずそんな相談をして、その日一日は二人とも休息することにした。旅に限りがあつて、そう長い江戸の逗留は予定の日取りが許さなかつた。まだこれから先に日光行き、横須賀行きも二人を待っていた。

寿平次は手を鳴らして宿のかみさんと呼んだ。もうすこし早く三人が出て来ると、夷講えびすこうに間に合つて、大伝馬町おおでんまちようの方に立つべつたら市のにぎわいも見られたとかみさんはいう。芝居しばいは、と尋ねると、市村いちむら、中村、森田三座とも狂言名題なだいの看板が出たばかりのころで、茶屋のかざり物、燈籠とうろう、提灯ちようちん、つみ物な

ぞは、あるいは見られても、狂言の見物には月のかわるまで待てという。当時売り出しの作者の新作で、世話に砕けた小団次こだんじの出し物が見られようかともいう。

「朔日ついたちの顔見世は明けの七つ時どきでございますよ。太夫たゆうの三番さんば叟うでも御覧になるんですしたら、暗いうちからお起きにならないと、間に合いません。」

「江戸の芝居見物も一日がかりですね。」

こんな話の出るのも、旅らしかった。

夕飯後、半蔵はかねて郷里を出る時に用意して来た一通の書面を旅の荷物の中から取り出した。

「どれ、一つ寿平次さんに見せますか。これがあす持つて行く誓せ

詞いしです。」

と言つて寿平次の前に置いた。

誓詞

「このたび、御門入り願たてまをうろうい奉り候ところ、御許容なし下され、

御門人の列に召し加えられ、本懷の至りに存じ奉り候。しかる

上は、専もはら皇国の道を尊信いたし、最も敬神の儀怠慢いたすま

じく、生しょうがい涯あゐそむ師弟の儀忘却仕るまじき事。

公おおやけの御制法に相あひそむ背き候儀は申すに及ばず。すべて古学を申し

立て、世間に異様の行ないをいたし、人の見聞を驚かし候よう
の儀これあるまじく、ことさら師伝と偽り奇怪の説など申し立
て候儀、一切仕るまじき事。

御流儀においては、秘伝口授など申す儀、かつてこれなき段、堅く相守り、さようの事申し立て候儀これあるまじく、すべてひれつ鄙劣の振舞をいたし古学の名を穢けがし申すまじき事。

学の兄弟相かわらず随分睦むつまじく相交わり、互いに古学興隆の志を相励み申すべく、我がしゅう執を立て争論なぞいたし候儀これあるまじき事。

右の条々、謹つつしんで相守り申すべく候。もし違乱に及び候わば、やおよろず八百万の天津神、あまつかみ国津神、くにつかみ明らかに知ろしめすべきところなり。よつて、誓詞 如くだんのごとし件。」「

信州、木曾、馬籠村

青山半蔵

安政三年十月

平田鉄胤かねたね大人

御許おんもと

「これはなかなかやかましいものだ。」

「まだそのほかに、名簿を出すことになっています。行年こうねん何歳、

父はだれ、職業は何、だれの紹介ということまで書いてあるんです。」

その時、半蔵は翌朝の天気を気づかい顔に戸の方へ立つて行つた。
隅田川すみだがわに近い水辺の夜の空がその戸に見えた。

「半蔵さん。」と寿平次はまたそばへ来てすわり直した相手の顔をながめながら、「君の誓詞には古学ということがしきりに出て来ますね。いったい、国学をやる人はそんなに古代の方に目標を置いてかかるんですか。」

「そりや、そうさ。君。」

「過去はそんなに意味がありますかね。」

「君のいう過去は死んだ過去でしょう。ところが、篤胤^{あつたね}先生なぞの考えた過去は生きてる過去です。あすは、あすはッて、みんなあすを待つてるけれど、そんなあすはいつまで待つても来やしません。きようは、君、またたく間に^ま通り過ぎて行く。過去こそ^{まこと}真じやありませんか。」

「君のいうことはわかります。」

「しかし、国学者だつて、そう一概に過去を目標に置こうとはしていません。中世以来は濁つて来ていると考えるんです。」

「待つてくれたまえ。わたしはそうくわしいことも知りませんがね、平田派の学問は偏^{かた}より過ぎるような気がしてしかたがない。

こんな時世になつて来て、そういう古学はどんなものでしょうかね。」

「そこですよ。外国の刺激を受ければ受けるほど、わたしたちは古代の方を振り返つて見るようになりました。そりや、わたしばかりじゃありません、中津川の景蔵さんや香蔵さんだつても、そうです。」

どうやら定めない空模様だった。さびしくはあるが、そう寒くない時雨しぐれの来る音も戸の外にした。

江戸は、初めて来て見る半蔵らにとって、どれほどの広さに伸びている都会とも、ちよつと見当のつけられなかつたような大きなところである。そこに住む老若男女ろうにやくなんによの数はかつて正確に計算せられたことがないと言うものもあるし、およそ二百万の人口はあろうと言うものもある。半蔵が連れと一緒に、この都会に足を踏み入れたのは武家屋敷の多い方面で、その辺は割合に人口も稀薄きはくなところであつた。両国まで来て初めて町の深さにはいつて

見た。それもわずかに江戸の東北にあたる一つの小さな区域というにとどまる。

数日の滞在の後には、半蔵も佐吉を共に連れて山下町の方に平田家を訪問し、持参した誓詞のほかに、酒魚料、扇子せんす壺箱を差し出したところ、先方でも快く祝い納めてくれた。平田家では、彼の名を誓詞帳（平田門人の台帳）に書き入れ、先師没後の門人となったと心得よと言つて、東脩そくしゅうも篤胤うし大人の霊前に供えた。彼は日ごろ敬慕する鉄胤かねたねから、以来懇意にするように、学事にも出精するようと言われて帰つて来たが、その間に寿平次は猿さるわかちよう若町ふたりの芝居見物などに出かけて行つた。そのころになると、二人はあちこちと見て回つた町々の知識から、八百八町はっぴやくやちようから

成るといふこの大きな都会の広がりをいくらかうかがい知ることができた。町中にある七つの橋を左右に見渡すことのできる一^{いちこ}

石橋^{くぼし}の上に立つて見た時。国への江戸土産^{みやげ}に、元結^{もとゆい}、油、楊^よ

枝^{うじたぐい}の類を求めるなら、親父橋^{おやじばし}まで行けと十一屋の隠居に教えら

れて、あの橋の畔^{たもと}から鎧^{よろい}の渡しの方を望んで見た時。目に入るか

ぎり無数の町家がたて込んでいて、高い火見櫓^{ひのみやぐら}、並んだ軒、深

い暖簾^{のれん}から、いたるところの河岸^{かし}に連なり続く土蔵の壁まで――

そこからまとまって来る色彩の黒と白との調和も江戸らしかった。

しかし、世は封建時代だ。江戸大城の関門とも言うべき十五、

六の見附^{みつけ}をめぐりにめぐる内濠^{うちぼり}はこの都会にある橋々の下へ流

れ続いて来ている。その外廓^{そとがわ}にはさらに十か所の関門を設けた

外濠そとぼりがめぐらしてある。どれほどの家族を養い、どれほどの土地の面積を占め、どれほどの庭園と樹木とをもつかと思われるような、諸国大小の大名屋敷が所要所に配置されてある。どこに親藩の屋敷を置き、どこに外様とざまだいみょう大名の屋敷を置くかというような意匠の用心深さは、日本国の縮図かどを見る趣もある。言つて見れば、ここは大きな関所だ。町の角には必ず木戸があり、木戸のそばには番人の小屋がある。あの木曾街道の関所の方では、そこにいる役人が一切の通行者を監視するばかりでなく、役人同志が互いに監視し合っていた。どうかすると、奉行ぶぎようその人ですら下役から監視されることをまぬかれなかった。それを押しひろげたような広大な天地が江戸だ。

半蔵らが予定の日取りもいつのまにか尽きた。いよいよ江戸を去る前の日が来た。半蔵としては、この都会で求めて行きたい書籍の十が一をも手に入れず、思うように同門の人も訪ねず、賀茂の大人が旧居の跡も見ずじまいであつても、ともかくも平田家を訪問して、こころよく入門の許しを得、鉄胤はじめその子息さんの延胤とも交わりを結ぶ端緒を得たというだけにも満足して、十一屋の二階でいろいろと荷物を片づけにかかった。

半蔵が部屋へやの廊下に出て見たところは夕方に近い。

「半蔵さん、きようはひとりで町へ買い物に出て、それはよい娘を見て来ましたぜ。」

と言つて寿平次は国への江戸土産にするものなぞを手になげな

がら歸つて来た。

「君にはかなわない。すぐにそういうところへ目がつくんだから。」

半蔵はそれを言いかけて、思わず顔を染めた。二人は宿屋の二階の欄てすりに身を倚よせて、目につく風俗なぞを話し合いながら、しばらくそこに旅らしい時を送った。髪を結ゆい綿わたというものにして、紅あかい鹿かの子この帯なぞをしめた若いさかりの娘の洗練された風俗も、こうした都会でなければ見られないものだ。国の方で素すが枯がれた葱ねぎなぞを吹いている年ごろの女が、ここでは酸ほ漿おすきを鳴らしている。渋かきいろい柿色の「けいし」を小脇こわきにかかえながら、唄うたのけいこにでも通うらしい小娘のあどけなさ。黒くろ縹じゆす子の襟えりのかかった着物を

着て水茶屋の暖簾のれんのかげに物思わしげな女のなまめかしき。極度に爛らんじゆく熟した江戸趣味は、もはや行くところまで行き尽くしたかとも思わせる。

やがて半蔵は佐吉を呼んだ。翌朝出かけられるばかりに旅の荷物をまとめさせた。町へは鰯いわしを売りに来た、蟹かにを売りに来たと言つて、物売りの声がするたびにきき耳を立てるのも佐吉だ。佐吉は、山下町の方の平田家まで供をしたおりのことを言い出して、主人と二人で帰りの昼じたくにある小料理屋へ立ち寄ろうとしたことを寿平次に話した末に、その下足番げそくばんの客を呼ぶ声が高い調子であるには驚かされたと笑った。

「へい、いらつしやい。」

と佐吉は木訥^{ぼくとつ}な調子で、その口調をまねて見せた。

「あのへい、いらつしやいには、おれも弱つた。そこへ立ちすくんでしまったに。」

とまた佐吉は笑つた。

「佐吉、江戸にもお別れだ。今夜は一緒に飯でもやれ。」

と半蔵は言つて、三人して宿屋の台所に集まつた。夕飯の膳^{ぜん}が出た。佐吉がそこへかしこまつたところは、馬籠の本陣の囲炉裏ばたで、どんどん焚火^{たきび}をしながら主従一同食事する時と少しも変わらない。十一屋では膳部も質素なものであるが、江戸にもお別れだという客の好みとあつて、その晩にかぎり刺身^{さしみ}もついた。木曾の山の中のことにして見たら、深い森林に住む野鳥を捕え、熊^{くま}、

鹿^{しかいのしし}、猪などの野獣の肉を食い、谷間の土に巢をかける地蜂^{じばち}の子を賞美^{さかな}し、肴^{さかな}と言えは塩辛いさんまか、鰯^{いわし}か、一年に一度の塩鰯^{しおぶり}が膳につくのは年取りの祝いの時ぐらいにきまったものである。それに比べると、ここにある鮪^{まぐろ}の刺身の新鮮な紅^{あか}さはどうだ。その皿^{さじら}に刺身のツマとして添えてあるのも、繊細をきわめたものばかりだ。細い緑色の海髪^{うご}。小さな茎のままの紫蘇^{しそ}の実。黄菊。一つまみの大根おろしの上に青く置いたような山葵^{わさび}。

「こう三人そろったところは、どうしても山の中から出て来た野蠻人^{えり}ですな。」

赤い襟^{えり}を見せた給仕^{きゆうじ}の女中を前に置いて、寿平次はそんなことを言い出した。

「こんな話があるで。」と佐吉も膝ひざをかき合わせて、「木曾福島
の山村様が江戸へ出るたびに、山猿やまざる、山猿と人にかかわれる
のが、くやしくてしかたがない。ある日、口の悪い人たちを屋敷
に招よんだと思わっせれ。そこが、お前さま、福島ふまの山村様だ。こ
れが木曾名物の焼き栗ぐりだと言つて、生の栗なまを火鉢ひばちの灰の中にくべ
て、ぽんぽんはねるやつをわざと鏟やじりでかき回したげな。」

「野性を發揮したか。」

と寿平次がふき出すと、半蔵はそれを打ち消すように、

「しかし、寿平次さん、こう江戸のように開け過ぎてしまつたら、
動きが取れますまい。わたしたちは山猿でいい。」

と言つて見せた。

食後にも三人は、互いの旅の思いを比べ合つた。江戸の水茶屋には感心した、と言うのは寿平次であつた。思いがけない屋敷町の方で読書の声を聞いて来た、と言うのは半蔵であつた。

その晩、半蔵は寿平次と二人枕を並べて床についたが、夜番の拍子木ひょうしぎの音なぞが耳について、よく眠らなかつた。枕もとにあるしよんぼりとした行燈あんどんのかけで、敷いて寝た道中用の脇差わきざしを探つて見て、また安心して蒲団ふとんをかぶりながら、平田家を訪ねたずた日のことなぞを考えた。あの鉄胤かねたねから古学の興隆に励めと言われて来たことを考えた。世は濁り、江戸は行き詰まり、一切のものが実に雑然紛然として互いに叫びをあげている中で、どうして国学者の夢などをこの地上に実現し得られようと考えた。

「自分のような愚かなものが、どうして生きよう。」

そこまで考えつづけた。

翌朝は、なるべく早く早く出立しようということになった。時が来て、半蔵は例の青い合羽^{かつぱ}、寿平次は柿色^{かきいろ}の合羽に身をつつんで、すっかりしたくができた。佐吉はすでに草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を結んだ。三人とも出かけられるばかりになった。

十一屋の隠居はそこへ飛んで出て来て、

「オヤ、これはどうも、お粗末さまでございました。どうかまた、お近いうちに。」

と手をもみながら言う。江戸生まれで、まだ木曾を知らないというかみさんまでが、隠居のそばにいて、

「ほんとに、木曾のかたはおなつかしい。」

と別れぎわに言い添えた。

十一屋のあるところから両国橋まではほんのひとあし一歩だ。江戸の

なごりに、隅田川すみだがわを見て行こう、と半蔵が言い出して、やがて

三人で河岸の物揚げ場の近くへ出た。早い朝のことで、大江戸はまだ眠りからさめきらないかのようなのである。ちょうど、渦巻うずまき流

れて来る隅田川の水に乗って、川上の方角から橋の下へ降くだつて来

る川船があつた。あたりに舳もやつている大小の船がまだ半分夢を見

ている中で、まず水の上へ活気をそそぎ入れるものは、その船頭

たちの掛け声だ。十一屋の隠居の話で、半蔵らはそれが埼玉川さいたまが

わづえ越の方から伊勢町河岸いせちようがしへと急ぐ便船びんせんであることを知つた。

「日の出だ。」

言い合わせたようなその声が起こった。三人は互いに雀躍こおどりして、本所方面ほんじょの初冬らしい空に登る太陽を迎えた。紅あかくはあるが、そうまぶしく輝かない。木曾の奥山に住み慣れた人たちは、谷間からだんだん空の明るくなることは知っていても、こんな日の出は知らないのだ。間もなく三人は千住せんじゅの方面をさして、静かにその橋のたもとからも離れて行つた。

四

千住から日光への往復九十里、横須賀への往復に三十四里、そ

れに江戸と木曾との間の往復の里程を加えると、半蔵らの踏む道はおよそ二百九十里からの旅である。

日光への寄り道を済まして、もう一度三人が千住まで引き返して来たころは、旅の空で旧暦十一月の十日過ぎを迎えた。その時は、千住からすぐに高輪たかなわへと取り、札の辻ふだつじの大木戸、番所を経て、東海道へと続く袖が浦そでうらの岸へ出た。うわさに聞く御台場おだいば、五つの堡壘ほうるいから成るその建造物はすでに工事を終わって、沖合いの方に遠く近く姿をあらわしていた。大森おおもりの海岸まで行つて、半蔵はハツとした。初めて目に映る蒸汽船——徳川幕府がオランダ政府から購かい入れたという外輪型がいりんがたの観光丸がその海岸から望まれた。

とうとう、半蔵らの旅は深い藍色あいいろの海の見えるところまで行った。神奈川かながわから金沢かなざわへと進んで、横須賀行きの船の出る港まで行つた。客や荷物を待つ船頭が波打ちぎわで船のしたくをしているところまで行つた。

「なんだか遠く来たような気がする。郷里くにの方でも、みんなどうしていきましょう。」

「さあ、ねえ。」

「わたしたちが帰って行く時分には、もう雪が村まで来ていますよう。」

「なんだぞなし。きつと、けさはサヨリ飯でもたいて、こつちのうわさでもしているぞなし。」

三人はこんなことを語り合いながら、金沢の港から出る船に移った。

海は動いて行く船の底でおどった。もはや、半蔵らはこれから尋ねて行こうとする横須賀在、公郷村くごうむらの話で持ち切った。五百年からの歴史のある古い山やまがみ上の家族がそこに住むかと語り合った。三浦一族の子孫にあたるといふ青山家の遠祖が、あの山上の家から分かれて、どの海を渡り、どの街道を通って、遠く木曾谷の西のはずれまではいって行ったものだろうと語り合った。

当時の横須賀はまだ漁村である。船から陸を見て行くことも生まれて初めてのような半蔵らには、その辺を他の海岸に比べて言うこともできなかったが、大島小島の多い三浦半島の海岸に沿う

て旅を続けていることを想おもつて見ることはできた。ある岬みさきのかげまで行つた。海岸の方へ伸びて来ている山のふところに抱かれたような位置に、横須賀の港が隠かくれていた。

公郷村くごうむらとは、船の着いた漁師町りようしまちから物の半道と隔たつてい

なかつた。半蔵らは横須賀まで行つて、山上のうわさを耳にした。公郷村に古い屋敷と言へば、土地の漁師にまでよく知られていた。三人がはるばる尋ねて行つたところは、木曾の山の中で想像したとは大違ちがいなところだ。長閑のどかなことも想像以上だ。ほのかな鶏の聲が聞こえて、漁師たちの住む家々の屋根からは静かに立ちのぼる煙を見るような仙郷せんきようだ。

妻籠^{つまご}本陣青山寿平次殿へ、短刀一本。ただし、古刀。銘なし。
馬籠^{まごめ}本陣青山半蔵殿へ、蓬萊^{ほうらい}の図掛け物一軸。ただし、光琳^{こうりん}
筆。山上家の当主、七郎左衛門は公郷村^{くさむら}の住居^{すまい}の方^{かた}にいて、こ
んな記念の二品までも用意しながら、二人^{ふたり}の珍客^{ちんかく}を今か今かと待ち
受けていた。

「もうお客さまも見えそうなものだぞ。だれかそこいらまで見
行つて来い。」

と家に使っている男衆に声をかけた。

半蔵らが百里の道も遠しとしないで尋ねて来るという報知^{しらせ}は七
郎左衛門をじつとさせて置かなかった。彼は古い大きな住宅の持

ち主で、二十畳からある広間を奥の方へ通り抜け、人一人隠れられるほどの太い大極柱だいごくばしらのわきを回つて、十五畳、十畳と二部屋や続いた奥座敷のなかをあちこちと静かに歩いた。そこは彼が客をもてなすために用意して待つていたところだ。心をこめた記念の二品は三宝さんぼうに載せて床の間に置いてある。先祖伝来の軸物などは客待ち顔に壁の上に掛かっている。

七郎左衛門の家には、三浦氏から山上氏、山上氏から青山氏と分かれて行つたくわしい系図をはじめ、祖先らの遺物と伝えらるる古い直垂ひたれから、武具、書画、陶器たぐいの類まで、何百年となく保存されて来たものはかなり多い。彼が客に見せたいと思う古文書などは、取り出したら際限きりのないほど長櫃ながびつの底に埋うずまっている。

あれもこれとも思う心で、彼は奥座敷から古い庭の見える方へ行
った。松林の多い裏山つづきに樹木をあしらった昔の人の意匠が
そこにある。硬質な岩の間に躑躅つづじ、楓かえでなどを配置した苔蒸こけむした築
きやま山がそこにある。どつしりとした古風な石燈籠いしどうろうが一つ置いて
あつて、その辺には円く厚ぼつたい「つわぶき」なども集めてあ
る。遠い祖先の昔はまだそんなところに残つて、子孫の目の前に
息づいているかのようにもある。

「まあ、客が来たら、この庭でも見て行つてもらおう。これは自
分が子供の時分からながめて来た庭だ。あの時分からほとんど変
わらない庭だ。」

こんなことを思いながら待ち受けているところへ、半蔵と寿平

次の二人が佐吉を供に連れて着いた。その時、七郎左衛門は家のものを呼んで袴はかまを持って来させ、その上に短い羽織を着て、古い鎗やりなぞの正面の壁の上に掛かっている玄関まで出て迎えた。

「これは。これは。」

七郎左衛門は驚きに近いほどのよろこびのこもった調子で言った。

「これ、お供の衆。まあ草鞋わらじでも脱いで、上がってください。」と彼の家内かないまでそこへ出て言葉を添える。案内顔な主人のあとについて、寿平次は改まった顔つき、半蔵も眉まゆをあげながら奥の方へ通ったあとで、佐吉は二人の脱いだ草鞋の紐ひもなど結び合わせた。

やがて、奥座敷では主人と寿平次との一別以来の挨拶あいさつ、半蔵との初対面の挨拶などがあつた。主人の引き合わせで、幾人の家の人が半蔵らのところへ挨拶に来るとも知れなかつた。これは忤せがれ、これはその弟、これは嫁、と主人の引き合わせが済んだあとには、まだ幼い子供たちが目を円まるくしながら、かわるがわるそこへお辞儀をしに出て来た。

「青山さん、わたしどもには三夫婦もそろっていますよ。」

この七郎左衛門の言葉がまず半蔵らを驚かした。

古式を重んずる款待もてなしのありさまが、間もなくそこにひらけた。

土器かわらけなどを三宝の上に載せ、挨拶かたがたはいって来る髪の毛の白いおばあさんの後ろからは、十六、七ばかりの孫娘が瓶子へいじを運ん

で来た。

「おゝ、おゝ、よい子息むすこさんがただ。」

とおばあさんは半蔵の前にも、寿平次の前にも挨拶に来た。

「とりあえず一つお受けください。」

とまたおばあさんは言いながら、三つ組の土器かわらけを白木の三宝

のまま丁寧に客の前に置いて、それから冷酒れいしゅを勧めた。

「改めて親類のお盃さかずきとやりますかな。」

そういう七郎左衛門の愉快げな声を聞きながら、まず年若な寿平次が土器を受けた。続いて半蔵も冷酒を飲みほした。

「でも、不思議な御縁じゃありませんか。」と七郎左衛門はおばあさんの方を見て言った。「わたしが妻籠つまごの青山さんのお宅へ一

晩泊めていただいた時に、同じ定紋じようもんから昔がわかりましたよ。えゝ、丸まるに三つ引びきと、窠かに木瓜もっこうとでさ。さもなかつたら、わたしは知らずに通り過ぎてしまふところでしたし、わざわざお二人で訪ねて来てくださるなんて、こんなめずらしいことも起こつて来やしません。こうしてお盃を取りかわすなんて、なんだか夢のような気がします。」

「そりや、お前さん、御先祖さまが引き合わせてくださったのさ。」

おばあさんは、おばあさんらしいことを言った。

相州三浦の公郷村まで動いたことは、半蔵にとって黒船上陸の地点に近いところまで動いて見たことであつた。

その時になると、半蔵は浦賀に近いこの公郷村の旧家に身を置いて、あの追分おいわけの名主文太夫なぬしぶんだゆうから見せてもらつて来た手紙も、両国十一屋の隠居から聞いた話も、すべてそれを胸にまとめて見ることができた。江戸から踏んで来た松並樹まつなみきの続いた砂の多い街道は、三年前丑年うしどしの六月にアメリカのペリイが初めての着船を伝えたころ、早飛脚の織るように往来したところだ。当時木曾きそ路じを通過した尾張藩おわりの家中、続いて彦根ひこねの家中などがおびただしい同勢で山の上を急いだのも、この海岸一帯の持ち場持ち場を堅めるため、あるいは浦賀の現場へ駆けつけるためであつたのだ。

そういう半蔵はここまで旅と一緒にして来た寿平次にたんとお礼を言つてもよかつた。もし寿平次の誘つてくれることがなかつたら、容易にはこんな機会は得られなかつたかもしれない。供の佐吉にも感謝していい。雨の日も風の日も長い道中と一緒にして、影の形に添うように何くれと主人の身をいたわりながら、ここまですてやつて来たのも佐吉だ。おかげと半蔵は平田入門のころざしを果たし、江戸の様子をも探り、日光の地方をも見、いくらかでもこれまでの旅に開けて来た耳でもつて、七郎左衛門のような人の話をきくこともできた。

半蔵の前にいる七郎左衛門は、事あるごとに浦賀の番所へ詰めるという人である。この内海へ乗り入れる一切の船舶は一応七郎

左衛門のところへ断わりに来るといふほど土地の名望を集めてい
る人である。

古風な盃の交換も済んだころ、七郎左衛門の家内の茶菓などを
そこへ運んで来て言った。

「あなた、茶室の方へでも御案内したら。」

「そうさなあ。」

「あちらの方が落ち着いてよくはありませんか。」

「いろいろお話を伺いたいこともある。とにかく、吾家うちにある古
い系図をここでお目にかけよう。それから茶室の方へ御案内する
としよう。」

そう七郎左衛門は答えて、一丈も二丈もあるような巻き物を奥

座敷の小襖こぶすまから取り出して来た。その長巻の軸を半蔵や寿平次の前にひろげて見せた。

この山上の家がまだ三浦の姓を名乗っていた時代の遠い先祖のことがそこに出て来た。三浦の祖で鎮守府將軍ちんじゅふであつた三浦忠ただみち

通だみちという人の名が出て来た。衣笠城きぬがさじょうを築き、この三浦半島

を領していた三浦平太夫という人の名も出て来た。治承四年じしようの

八月に、八十九歳で衣笠城に自害した三浦大介おおすけよしあき義明という人

の名も出て来た。宝治元年ほうじの六月、前將軍よりつね頼經よりつねを立てようとし

て事あらわ覚うってれ、討手のために敗られて、一族共に法華堂で自害した

三浦若狭守わかさのかみやすむら泰村という人の名なども出て来た。

「ホ。半蔵さん、御覧なさい。ここに三浦兵衛尉ひようえのじようよしかつ義勝とあ

りますよ。この人は從五位じゆげ下だ。元弘二年新田義貞げんこうを輔たすけて、
鎌倉かまくらを攻め、北条高時ほうじようたかときの一族を滅ぼす、先世の讐あだを復かえすと
いうべしとしてありますよ。」

「みんな戦場を駆け回った人たちなんですね。」

寿平次も半蔵も互いに好奇心に燃えて、そのくわしい系図に見
入った。

「つまり三浦の家は一度北条早雲そううんに滅ぼされて、それからまた
再興したんですね。」と七郎左衛門は言った。「五千町の田地を
もらって、山上と姓を改めたともありますね。昔はこの辺を公郷くこう
の浦とも、大田津とも言ったそうです。この半島には油壺あぶらつぼと
いうところがありますが、三浦道寸どうすん父子の墓石なぞもあそこに

残っていますよ。」

やがて半蔵らはこの七郎左衛門の案内で、茶室の方へ通う庭の小径こみちのところへ出た。裏山うらやまつづきの稲荷いなりの祠ほこらなどが横手に見える庭石の間を登って、築山つきやまをめぐる位置まで出たころに、寿平次は半蔵を顧みて言った。

「驚きましたねえ。この山上の二代目の先祖は楠くすのき家から養子なんこうに来ていますよ。毎年正月には楠公の肖像を床の間に掛けて、鏡餅かがみもちや神酒みきを供えるというじやありませんか。」

「わたしたちの家が古いと思ったら、ここの家はもっと古い。」

松林の間に海の見える裏山の茶室に席を移してから、七郎左衛門は浦賀の番所通いの話などを半蔵らの前で始めた。二千人の水兵を載せたアメリカの艦隊が初めて浦賀に入港した当時のことがそれからそれと引き出された。

七郎左衛門の話はくわしい。彼は水師提督すいしペリイの座乗ざじようした三本マストの旗艦ミスシッパイ号をも目撃した人である。浦賀の奉行ぶぎようがそれと知った時は、すぐに要所要所を堅め、ここは異国の人と応接すべき場所でない、アメリカ大統領の書翰しよかんを呈したいとあるなら長崎の方へ行けと諭さとした。けれども、アメリカが日本の開国を促そうとしたは決して一朝一夕のことではないらしい。先方は断然たる決心をもつて迫つて来た。もし浦賀で国書を受け

取ることができないなら、江戸へ行こう。それでも要領を得ないなら、艦隊は自由行動を執ろう。この脅迫の影響は実に大きかった。のみならずペリイは測量艇隊を放って浦賀付近の港内を測量し、さらに内海に向かわしめ、軍艦がそれを掩護して観音崎から走水はしりみずの付近にまで達した。浦賀奉行とペリイとの久里くりが浜での会見がそれから開始された。海岸に幕を張り、弓矢、鉄砲を用意し、五千人からの護衛の武士が出て万一の場合に具そなえた。なにしろ先方は二千人からの水兵が上陸して、列をつくって進退する。軍艦から打ち出す大筒おおづつの礼砲は近海から遠い山々までもとどろき渡る。かねての約束のとおり、奉行は一言をも発しないで国書だけを受け取って、ともかくも会見の式を終わった。その間

半時はんとときばかり。ペリイは大いに軍容を示して、日本人の高い鼻をへし折ろうとでも考えたものか、脅迫がましい態度がそれからも続きに続いた。全艦隊は小柴沖こしばおきから羽田沖はねだまで進み、はるかに江戸の市街を望み見るところまでも乗り入れて、それから退帆たいはんのおりに、万一国書を受けつけないなら非常手段に訴えるという言葉を残した。そればかりではない。日本で飽くまで開国がえんを肯じないなら、武力に訴えてもその態度を改めさせなければならぬ、日本人はよろしく国法によつて防戦するがいい、米国は必ず勝つて見せる、ついては二本の白旗を贈る、戦いくさに敗けて講和を求めるときにそれを掲げて来るなら、その時は砲撃を中止するであらうと
の言葉を残した。

「わたしはアメリカの船を見ました。二度目にやって来た時は九艘そうも見ました。さよう、二度目の時などは三か月もあの沖合に掛かっていましたよ。そりや、あなた、日本の国情がどうあろうと、こつちの言い分が通るまでは動かないというふうに——てこ檣てこでも動かない巖いわのような権幕けんまくで。」

これらの七郎左衛門の話は、半蔵にも、寿平次にも、容易ならぬ時代に際会したことを悟らせた。当時の青年として、この不安はまた当然覚悟すべきものであることを思わせた。同時に、この仙郷せんきょうのような三浦半島の漁村へも、そうした世界の新しい暗潮うしろが遠慮なく打ち寄せて来ていることを思わせた。

「時に、お話はお話だ。わたしの茶も怪しいものですが、せつか

くおいでくだすつたのですから、一服立てて進ぜたい。」

そう言いながら、七郎左衛門はその茶室にある炉の前にすわり直した。そこにある低い天井も、簡素な壁も、静かな窓も、海の方から聞こえて来る濤の音も、すべてはこの山上の主人がたましいを落ち着けるためにあるかのように見える。

「なにしろ青山さんたちは、お二人ともまだ若いのがうらやましい。これからの時世はあなたがたを待っていますよ。」

七郎左衛門は手にした袱紗ふくさで夏目の蓋ふたを掃き浄めながら言った。
匂においこぼれるような青い挽茶ひきちやの粉は茶碗ちやわんに移された。湯と水きせんひんぷとに対する親しみの力、貴賤貧富の外にあるむなしさ、渋さと甘さと濃さと淡さとを一つの茶碗に盛り入れて、泡あわも汁しるも一緒に溶

け合つたような高い茶の香氣をかいで見た時は、半蔵も寿平次もしばらくそこに旅の身を忘れていた。

母屋もやの方からは風呂ふろの沸いたことを知らせに来る男があつた。

七郎左衛門は起たちがけに、その男と寿平次とを見比べながら、

「妻籠つまごの青山さんはもうお忘れになつたかもしれない。」

「へい、手前は主人のお供をいたしましたして、木曾のお宅へ一晩泊めていただいたものでございますよ。」

その男は手をもみもみ言った。

夕日は松林の間に満ちて来た。海も光つた。いずれこの夕焼けでは翌朝も晴れだろう、一同海岸に出て遊ぼう、網でも引かせよう、ゆつくり三浦に足を休めて行つてくれ、そんなことを言つて

客をもてなそうとする七郎左衛門が言葉のはしにも古里の人の心がこもっていた。まったく、木曾の山村を開拓した青山家の祖先にとつては、ここが古里なのだ。裏山の崖がけの下の方には、岸へ押し寄せ押し寄せする潮が全世界をめぐる生命の脈みやくはく搏はくのように、間まをおいては響き砕けていた。半蔵も寿平次もその裏山の上の位置から去りかねて、海を望みながら松林の間に立ちつくした。

五

異国——アメリカをもロシヤをも含めた広い意味でのヨーロッパ——シナでもなく朝鮮でもなくインドでもない異国に対するこ

の国の人の最初の印象は、決して後世から想像するような好ましいものではなかった。

もし当時のいわゆる黒船、あるいは唐人とうじんぶね船が、二本の白旗をこの国の海岸に残して置いて行くような人を乗せて来なかったなら。もしその黒船が力に訴えても開国を促そうとするような人でなしに、真に平和修好の使節を乗せて来たなら。古来この国に住むものは、そう異邦から渡って来た人たちを毛ぎらいする民族でもなかった。むしろそれらの人たちをよろこび迎えた早い歴史をさえ持っていた。シナ、インドは知らないこと、この日本の関するかぎり、もし真に相互の国際の義務を教えようとして渡来した人があったなら、よろこんでそれを学ぼうとしたに違いない。ま

た、これほど深刻な国内の動揺と狼^{ろう}狽^{ばい}と混乱とを経験せずには済んだかもしれない。不幸にも、ヨーロッパ人は世界にわたつての土地征服者として、まずこの島国の人の目に映つた。「人間の組織的な意志の壮大な権化^{ごんげ}、人間の合理的な利益のためにはいかなる原始的な自然の状態にあるものをも克服し尽くそうというごとき勇猛な目的を決定するもの」——それが黒船であつたのだ。

当時この国には、紅毛^{こうもう}という言葉があり、毛唐^{けとうじん}人という言葉が あつた。当時のそれは割合に軽い意味での毛色の変つた異国の人というほどにとどまる。一種のおかし味をまじえた言葉でさえある。黒船の載せた外国人があべこべにこの国の住民を想像して来たように、決してそれほど未開な野蛮人をば意味しなかつ

た。

しかし、この国には嘉永年代よりずっと以前に、すでにヨーロッパ人が渡つて来て、二百年も交易を続けていたことを忘れてはならない。この先着のヨーロッパ人の中にはポルトガル人もあつたが、主としてオランダ人であつた。彼らオランダ人は長崎蘭医らんいの大家として尊敬されたシイボルトのような人ばかりではなかつたのだ。彼らがこの国に来て交易からおさめた利得は、年額の小こ判ばん十五万両ではきくまいという。諸種の毛織り物、羅紗らしゃ、精巧な「びいどろ」、「ぎやまん」の器うつわ、その他の天産および人工に係る珍品をヨーロッパからもシャムからも東インド地方からも輸入して来て、この国の人に取り入れるためにいかなる機会をも見のが

さなかつたのが彼らだ。自由な貿易商としてよりも役人の奴隷扱いに甘んじたのが彼らだ。港の遊女でも差し向ければ、異人はどうにでもなる、そういう考えを役人に抱かせたのも、また、その先例を開かせたのも彼らだ。

このオランダ人がまず日本を世界に吹聴した。事実、オランダ人はこの国に向かつて、ヨーロッパの紹介者であり、通訳者であり、ヨーロッパ人同志としての激しい競争者でもあった。アメリカのペリイが持参した国書にすら、一通の蘭訳を添えて来たくらいだ。この国の最初の外交談判もおもに蘭語によつてなされた。すべてはこのとおりオランダというものを通してであつて、直接にアメリカ人と会話を交えうるものはなかったのである。

この言葉の不通だ。まして東西道德の標準の相違だ。どうして先方の話すこともよくわからないものが、アメリカ人、ロシヤ人、イギリス人とオランダ人とを区別し得られよう。長崎に、浦賀に、下田に、続々到着する新しい外国人が、これまでのオランダ人の執った態度をかなぐり捨てようとは、どうして知ろう。全く対等の位置に立つて、一国を代表する使節の威厳を損ずることなしに、重い使命を果たしに来たとは、どうして知ろう。この国のものは、ヨーロッパそのものを静かによく見るようなまず最初の機会を失った。迫り来るものは、誠意のほども測りがたい全くの未知数であった。求めらるるものは幾世紀もかかって積み重ね積み重ねして来たこの国の文化ではなくて、この島に産する硫黄^{いおう}、樟^{しょうの}

脳、生糸きいと、それから金銀たぐいの類たぐいなぞが、その最初の主おもなる目的物であつたのだ。

十一月下旬のはじめには、半蔵らは二日ほど逗とまり留りゆうした公郷村をも辞し、山上の家族にも別れを告げ、七郎左衛門から記念として贈られた古刀や光琳こうりんの軸などをそれぞれ旅の荷物に納めて、故郷の山へ向かおうとする人たちであつた。おそらく今度の帰り途みちには、国を出て二度目に見る陰暦十五夜の月も照らそう。その旅の心は、熱い寂しい前途の思いと一緒になつて、若い半蔵の胸にまじり合つた。別れぎわに、七郎左衛門は街道から海の見えるところまで送つて来て、下田の方の空を半蔵らにさして見せた。もはや異国の人は粗末な板画はんがなどで見るような、そんな遠いところ

ろにいる人たちがばかりではなかった。相模灘^{さがみなだ}をへだてた下田の港の方には、最初のアメリカ領事ハリス、その書記ヒュースケンが相携えてすでに海から陸に上り、長泉寺を仮の領事館として、赤と青と白とで彩^{いろど}った星条の国旗を高くそこに掲げていたところである。

第四章

一

中津川の商人、よろずややすべえ万屋安兵衛、てだいかきち手代嘉吉、同じ町の大和屋李助、これらの人たちが生糸売り込みに目をつけ、開港後まだ間もない横浜へとところざして、みの美濃を出発して来たのはやがて安政六年の十月を迎えたところである。中津川の医者で、半蔵の旧いふる師匠にあたる宮川みやがわかんさい寛齋も、この一行に加わって来た。もともと、寛齋はただの横浜見物ではなく、やはり出稼でかせぎの一人として——万

屋安兵衛の書役かきやくという形で。

一行四人は中津川から馬籠峠まごめとうげを越え、木曾街道きそを江戸へと取

り、ひとまず江戸両国の十一屋に落ち着き、あの旅籠屋はたごやを足だま

りとして、それから横浜へ出ようとした。木曾出身で世話好きな

十一屋の隠居は、郷里に縁故の深い美濃衆のためにも何かにつけ

て旅の便宜を計ろうとするような人だ。この隠居は以前に馬籠本

陣の半蔵を泊め、今また寛斎の宿をして、弟子でしと師匠とを江戸に

迎えるということは、これも何かの御縁であらうなどと話した末

に言った。

「皆さまは神奈川かながわ泊まりのつもりでお出かけになりませんと、浜

にはまだ旅籠屋はたごやもございますまいよ。神奈川の牡丹屋ぼたんや、あそこは

古くからやっております。牡丹屋なら一番安心でございまずぞ。」
こんな隠居の話を聞いて、やがて一行四人のものは東海道筋を
横浜へ向かった。

横浜もさみしかった。地勢としての横浜は神奈川より岸^{きし}深^{ぶか}で、
海岸にはすでに波止場^{はとば}も築^つき出^だされていたが、いかに言つてもま
だ開けたばかりの港だ。たまたま入港する外国の貿易船があつて
も、船員はいずれも船へ歸つて寝るか、さもなくば神奈川まで
来て泊まった。下田を去つて神奈川に移つた英国、米国、仏国、
オランダ等の諸領事はさみしい横浜よりもにぎやかな東海道筋を
よろこび、いったん^{かぐう}仮寓と定めた本覺寺その他の寺院から動こう
ともしない。こんな事情をみて取つた寛齋らは、やはり十一屋の

隠居から教えられたとおりに、神奈川の牡丹屋に足をとどめるところにした。

この出稼でかせぎは、美濃から来た四人のものにとって、かなりの冒険とも思われた。中津川から神奈川まで、百里に近い道を馬の背で生糸の材料を運ぶということすら容易でない。おまけに、相手は、全く知らない異国の人たちだ。

当時、異国のことについては、実にいろいろな話が残っている。ある異人が以前に日本へ来た時、この国の女を見て懸想けそうした。異人はその女をほしいと言ったが、許されなかった。そんなら女の

髪の毛を三本だけくれると言うので、しかたなしに三本与えた。ところが、どうやらその女は異人の魔法にでもかかったかして、とうとう異国へ往いつてしまったという。その次ぎに來た異人がまた、女の髪のの毛を三本と言い出したから、今度はふるい篩ふるいの毛を三本抜いて与えた。驚くべきことには、そのふるい篩ふるいが天に登つて、異国へ飛んで往いつたともいう。これを見たものはびつくりして、これは必ず切支丹キリシタンに相違ないと言つて、皆大いに恐懼おそれを抱いだいたとの話もある。

異国に対する無知が、およそいかなる程度のものであつたかは、黒船から流れ着いた空あきびん壘びんの話にも残っている。アメリカのペリイが來航當時のこと、多くの船員を乗せた軍艦からは空壘あきびんを海の

中へ投げすてた。その投げすてられたものが風のない時は、底の方が重く口ばかり海面に出ていて、水がその中にはいるから、浪なみのまにまに自然と海岸に漂着する。それを拾つて黙つて家に持ちかえるものは罰せられた。だから、こういうものが流れ着いたと言つて、一々届け出なければならぬ。その時の役人の言葉に、これは先方で毒を入れて置くものに相違ない、もしこの中に毒がはいつていたら大変だ、さもなければこんなものを流す道理もない、きつと毒が盛つてあつて日本人を苦しめようという軍略であろう、ついては一か所捨て置く場所を設ける、心得違いのものがあつて万一届け出ない場合があつたら直ちに召し捕とるとのきびしい触れを出したものだ。そこであつちの村から五本、こつちの村

から三本、と続々届け出るものがある。役人らは毎日それを取り上げ、一軒の空屋あきやを借り受け、そのなかに積んで置いて、嚴重な戸締まりをした。それが異人らの日常飲用する酒の空壇であるということすらわからなかったという。

すべてこの調子だ。籐椅子とういすが風のために漂着したと言つては不

思議がり、寝椅子が一個漂着したと言つては不思議がつた。ペリ

イ出帆の翌日、アメリカ側から幕府への献上物の中には、壇詰びんづめ、

罐詰かんづめ、その他の箱詰があり、浦賀奉行への贈り物があつたが、

これらの品々は江戸へ伺い済みの上で、浦賀の波止場で焼きすてたくらいだ。後日の祟たたりをおそれたのだ。実際、寛齋が中津川の

商人について神奈川へ出て来たのは、そういう黒船の恐怖からま

だ離れ切ることができなかつたところである。

ちようど、時は安政大獄あんせいのだいごくのあとにあたる。彦根ひこねの城主、井

伊掃部頭直弼いかもんのかみなおすけが大老の職に就いたころは、どれほどの暗闘と反

目とがそこにあつたかしのれない。彦根と水戸。紀州と一橋ひとつばし。

幕府内の有司と有司。その結果は神奈川条約調印の是非と、徳川世子の継嗣問題とにからんであらわれて来た。しかもそれらは大きな抗争の序幕であつたに過ぎぬ。井伊大老の期するところは沸騰した国論の統一にあつたろうけれど、彼は世にもまれに見る闘士として政治の舞台にあらわれて来た。いわゆる反対派の張本人なる水戸の御隠居（烈公）を初め、それに荷担した大名有司らが謹慎や蟄居ちつきよを命ぜられたばかりでなく、強い圧迫は京都を中心

に渦巻うずまき始めた新興勢力の苗床なえどこにまで及んで行つた。京都にある鷹司たかつかさ、近衛このえ、三条の三公は落飾らくしよくを迫られ、その他の公卿けたちの関東反対の嫌疑けんぎのかかったものは皆謹慎を命ぜられた。老女と言われる身で、囚人として江戸に護送されたものもある。民間にある志士、浪人、百姓、町人などの捕縛と嚴刑とが続きに続いた。一人ひとりは切腹に、一人は獄門に、五人は死罪に、七人は遠島に、十一人は追放に、九人は押込おしこめに、四人は所ところ払はらいに、三人は手鎖てじように、七人は無構かまいなしに、三人は急度叱きつとしかりに。勤王きん攘夷うじよういの急先鋒きゆうせんぽうと目ざされた若狭の梅田雲浜わかさ うめだうんぴんのように、獄中で病死したものが別に六人もある。水戸の安島帶刀あじまたてわき、越前えちぜの橋本左内さない、京都の頼鴨崖らいおうがい、長州の吉田松陰よしだしよういんなどは、

いずれも恨みをのんで倒れて行った人たちである。

こんな周囲の空気の中で、だれもがまだ容易に信用しようとし
ない外国人の中へ、中津川の商人らは飛び込んで来た。神奈川
条約はすでに立派に調印されて、外国貿易は公然の沙汰^{さた}となつて
いる。生糸でも売り込もうとするものにとつて、なんの憚^{はば}るところ
はない。寛永十年以来の嚴禁とされた五百石以上の大船を造る
ことも許されて、海はもはや事実において解放されている。遠い
昔の航海者の夢は、二百何十年の長い鎖国の後に、また生き還^{かえ}
るような新しい機運に向かつて来ている。

寛齋がこの出稼ぎに来たころは六十に近かった。田舎^{いなか}医者としての彼の漢方で治療の届くかぎりどんな患者でも診^みないことはなかつたが、中にも眼科を得意にし、中津川の町よりも近在回りを主にして、病家から頼まれれば峠越しに馬籠^{まごめ}へも行き、三留野^{みどの}へも行き、蘭^{あららぎ}、広瀬から清内路^{せいのちじ}の奥までも行き、余暇さえあれば本を読み、弟子^{でし}を教えた。学問のある奇人のように言われて来たこの寛齋が医者^{いいだ}の玄関も中津川では張り切れなくなつたと言つて、信州飯田^{いいだ}の在に隠退しようと考えようになつたのも、つい最近のことである。今度一緒に来た万屋^{よろずや}の主人は日ごろ彼が世話になる病院先のことであり、生糸売り込みもよほどの高に上ろうとの見込みから、彼の力にできるだけの手伝いもして、その利得を

分けてもらおうという約束で来ている。彼ももう年をとって、何かにつけて心細かった。最後の「隠れ家」に余生を送るよりほかの願ひもなかった。

さしあたり寛齋の仕事は、安兵衛らを助けて横浜貿易の事情をさぐることであった。新参の西洋人は内地の人を引きつけるために、なんでも買い込む。どうせ初めは金を捨てなければいけないくらいのことは外国商人も承知していて、気に入らないものでも買って見せる。江戸の食い詰め者で、二進も三進も首の回らぬ連中なぞは、一つ新開地の横浜へでも行つて見ようという気分で出かけて来る時だ。そういう連中が持つて来るような、二文か三文の資本で仕入れられるおもちゃの類たぐいでさえ西洋人にはめずらしがもとで

られた。徳川大名の置き物とさえ言えば、仏壇の蠟燭ろうそく立てを造りかえたような、いかがわしい骨董品こつとうひんでさえ二両の余に売れたという。まだ内地の生糸商人はいくらかも入り込んでいない。万よろず屋や安兵衛、大和屋李助やまとやりすけなぞにとつて、これは見のがせない機会だつた。

だんだん様子がわかつて来た。神奈川在留の西洋人は諸国領事から書記まで入れて、およそ四十人は来ていることがわかつた。紹介してもらおうとさえ思えば、適当な売り込み商の得られることもわかつた。おぼつかないながらも用を達たすぐらいの通弁は勤まるというものも出て来た。

やがて寛齋は安兵衛らと連れだつて、一人の西洋人を見に行つ

た。二十戸ばかりの異人屋敷、最初の居留地とは名ばかりのよう
に隔離した一区域が神奈川台の上にある。そこに住む英国人で、
ケウスキイという男は、横浜の海岸通りに新しい商館でも建てら
れるまで神奈川に仮住居かりずまいするという貿易商であつた。初めて寛
斎の目に映るその西洋人は、羅紗らしゃの丸羽織を着、同じ羅紗の股ももひ
引きをはき、羽織の紐ひものかわりに釦ぼたんを用いている。手まわりの小
道具一切を衣裳いしやうのかくしにいられているのも、異国の風俗だ。た
とえば手ぬぐいは羽織のかくしに入れ、金入れは股引ももひきのかくし
に入れ、時計は胴着のかくしに入れて鎖を釦ぼたんの穴に掛けるという
ふうに。履物はきものも変わっている。獣の皮で造つた靴くつが日本で言っ
て見るなら雪駄せったの代わりだ。

安兵衛らの持つて行つて見せた生糸の見本は、ひどくケウスキを驚かした。これほど立派な品ならどれほどでも買おうと言うらしいが、先方の言うことは燕つばめのように早口で、こまかいことまでは通弁にもよくわからない。ケウスキはまた、安兵衛らの結い立ての鬚まげや、すっかり頭を円まるめている寛齋の医者らしい風俗をめずらしそうにながめながら、煙草たばこなぞをそこへ取り出して、客にも勧めれば自分でもうまそうに服のんで見せた。寛齋が近く行つて見たその西洋人は、髪の色こそ違い、眸ひとみの色こそ違っているが、黒船の連想と共に起こつて来るような恐ろしいものでもない。幽霊でもなく、化け物でもない。やはり血の氣かよの通つてゐる同じ人間の仲間だ。

「糸目百匁あれば、一両で引き取ろうと言っています。」

この売り込み商の言葉に、安兵衛らは力を得た。百匁一両は前代未聞の相場であつた。

早い貿易の様子もわかり、糸の値段もわかつた。この上は一日も早く神奈川を引き揚げ、来る年の春までにはできるだけ多くの糸の仕入れもして来よう。このことに安兵衛と李助^{りすけ}は一致した。^{ふたり}二人が見本のつもりで持って来て、牡丹屋^{ぼたんや}の亭主^{ていしゅ}に預かつてもらつた糸まで約束ができて、その荷だけでも一個につき百三十両に売れた。

「宮川先生、あなただけは神奈川に残っていてもいますぜ。」
と安兵衛は言つたが、それはもとより寛齋も承知の上であつた。

「先生も一人で、鼠にでも引かれないうようにしてください。」
手代の嘉吉は嘉吉らしいことを言つて、置いて行くあとの事を
堅く寛齋に託した。中津川と神奈川の連絡を取ることは、一切寛
齋の手にまかせられた。

二

十一月を迎えるころには、寛齋は一人牡丹屋の裏二階に残つた。
「なんだかおれは島流しにでもなつたような気がする。」
と寛齋は言つて、時には孤立のあまり、海に見える神奈川台へ
登りに行つた。坂になつた道を登れば神奈川台の一角に出られる。

目にある横浜もさびしかった。あるところは半農半漁の村民を移住させた町であり、あるところは運上^{うんじょうしよ}所（税関）を中心に掘^ほ立^{つたて}小屋の並んだ新開の一区域であり、あるところは埋め立てと縄張り^{なわばり}の始まったばかりのような畑と田圃^{たんぼ}の中である。弁天の杜^{もり}の向こうには、ところどころにぽつんぽつん立っている樹木が目につく。全体に湿っぽいところで、まだ新しい港の感じも浮かばない。

長くは海もながめていられなくて、寛齋は逃げ帰るように自分^{はたごや}の旅籠屋へ戻^{もど}った。二階の窓で聞く鴉^{からす}の声も港に近い空を思わせる。その声は郷里にある妻や、子や、やがては旧い弟子^{ふるでし}たちの方へ彼の心を誘った。

古い桐きりの机がある。本が置いてある。そのそばには弟子たちが集まっている。馬籠本陣の子息むすこがいる。中津川和泉屋いずみやの子息がいる。中津川本陣の子息も来ている。それは十余年前に三人の弟子の顔のよくそろった彼の部屋へやの光景である。馬籠の青山半蔵、中津川の蜂谷香蔵はちや、同じ町の浅見景蔵——あの三人を寛齋が戯れに三蔵と呼んで見るのを楽しみにしたほど、彼のもとへ本を読みに通かよつて来たかずかずの若者の中でも、末頼もしく思つた弟子たちである。ことに香蔵は彼が妻の弟にあたる親戚しんせきの間柄でもある。みんなどういう人になつて行くかと見ている中にも、半蔵の一本気と正直さと来たら、一度これが自分らの行く道だと見さだめをつけたら、それを改めることも変えることもできないのが半蔵だ。

考え続けて行くと、寛齋はそばにいない三人の弟子の前へ今の自分を持って行つて、何か弁解せずにはいられないような矛盾した心持ちに打たれて来た。

「待てよ、いずれあの連中はおれの出稼でかせぎを疑問にしているに相違ない。」

「金銀欲ほしからずといふは、例の漢からやうの虚偽いつわりにぞありける。」
この大先達だいせんの言葉、『玉かつま』の第十二章にある本居もとおり宣長ながのこの言葉は、今の寛齋にとっては何より有力な味方だつた。金もほしいと思ひながら、それをほしくないようなことを言

うのは、例の漢学者流の虚偽だと教えてあるのだ。

「だれだって金のほしくないものはない。」

そこから寛斎のように中津川の商人について、横浜出稼ぎということも起こって来た。本居大人うしのような人には虚きよしん心たんかい坦たん懐かいというものがある。その人の前にはなんでも許される。しかし、血氣さか壯さかんで、単純なものは、あの寛大な先達のように貧しい老人を許しそうもない。

そういう寛斎は、本居、平田諸大人の歩いた道をたどって、早くも古代復帰の夢想を抱いだいた一人ひとりである。この夢想は、京都を中心に頭を持ち上げて来た勤王家の新しい運動に結びつくべき運命のものであった。彼の教えた弟子の三人が三人とも、勤王家の運

動に心を寄せているのも、実は彼が播まいた種だ。今度の大獄に連れ座んざした人たちはいずれもその渦かちゅう中に立っていないものはない。その中には、六人の婦人さえまじっている。感じやすい半蔵らが郷里の方でどんな刺激を受けているかは、寛斎はそれを予想でありありと見る事ができた。

その時になつて見ると、旧ふるい師匠と弟子との間にはすでによほどの隔たりがある。寛斎から見れば、半蔵らの学問はますます実行的な方向に動いて来ている。彼も自分の弟子を知らないではない。古代の日本人に見るような「雄おご心ころ」を振るい起こすべき時がやって来た、さもなくて、この国創はじまって以来の一大危機とも言うべきこんな艱かん難なんな時を歩めるものではないという弟子の心

持ちもわかる。

新たな外来の勢力、五か国も東になってやって来たヨーロッパの前に、はたしてこの国を解放したものでどうかのやかましい問題は、その時になってまだ日本国じゅうの頭痛の種になっていた。先入主となった黒船の強い印象は容易にこの国の人の心を去らない。横浜、長崎、函館はこだての三港を開いたことは井伊大老の専断であつて、朝廷の許しを待ったものではない。京都の方面も騒がしくて、賢い帝みかどの心を悩ましていることも一通りでないと言ひ伝えられている。開港か、攘夷じやういか。これほど矛盾を含んだ言葉もない。また、これほど当時の人たちの悩みを言いあらわした言葉もない。前者を主張するものから見れば攘夷は実に頑執がんしゆう妄排もうはいで

あり、後者を主張するものから見れば開港は屈從そのものである。どうかして自分らの内部なかにあるものを護まもり育てて行こうとしているような心ある人たちは、いずれもこの矛盾に苦しみ、時代の悩みを悩んでいたのだ。

牡丹屋ぼたんやの裏二階からは、廊下の廂ひさしに近く枝をさし延べている榎きこずえの梢が見える。寛齋はその静かな廊下に出て、ひとりで手をもんだ。

「おれも、平田門人の一人として、こんな恐ろしい大獄に無関心でいられるはずもない。しかし、おれには、あきらめというものができた。」

「さぞ、御退屈さまでございましょう。」

そう言つて、牡丹屋の年とつた亭主ていしゅはよく寛齋を見に来る。

東海道筋にあるこの神奈川の宿は、古いといへば古い家で、煙たばこ

草盆ぼんは古風な手さげのついたのを出し、大きな菓子鉢かしぼちには扇子せんす

形がたの箸入れはしひいを添えて出すような宿だ。でも、わざとらしいところ

ろは少しもなく、客扱いも親切だ。

寛齋は日に幾たびとなく裏二階の廊下を往つたり来たりするうちに、目につく椎しいの風情ふぜいから手習いすることを思いついた。枝に枝のさした冬の木にながめ入つては、しきりと習字を始めた。そこへ宿の亭主が来て見て、

「オヤ、御用事のほかはめったにお出かけにならないと思ひましたら、お手習いでございますか。」

「六十の手習いとはよく言つたものさね。」

「手前どもでも初めての孫が生まれまして、昨晩は七夜しちやを祝ひました。いろいろごだごだいたしました。さだめし、おやかましかろうと存じます。」

こんな言葉も、この亭主の口から聞くと、ありふれた世辞とは響かなかつた。横浜の海岸近くに大きな玉楠たまぐすの樹きがしげつてゐる、世にやかましい神奈川条約はあの樹の下で結ばれたことなぞを語つて見せるのも、この亭主だ。あの辺は駒形こまがたすいじん水神もりの杜と呼ばれるところで、玉楠たまぐすの枝には巢をかける白い鴉からすがあるが、

毎年冬の来るころになるとどこともなく飛び去ると言つて見せるのも、この亭主だ。生糸の売り込みとはなんと言つてもよいところへ目をつけたものだ、外国貿易もはや売ろうと買おうと勝手次第だ、それでも御紋付きの品々、雲上の明鑑、武鑑、兵学書、その他 甲 かつちゆう 冑 刀劍 たぐいの類は嚴禁であると数えて見せるのも、この亭主だ。

旧曆十二月のさむい日が来た。港の空には雪がちらついた。例のように寛齋は宿の机にむかつて、遠く来ている思いを習字にまぎらわそうとしていた。そこへ江戸両国の十一屋から届いたと言つて、宿の年とったかみさんが二通の手紙を持って来た。その時、かみさんは年老いた客をいたわり顔に、盆に載せた井 どんぶり したを階下から

女中に運ばせた。見ると、寛齋の好きなうどんだ。

「うどんのごちそうですか。や、そいつはありがたい。」

「これはうでまして、それからダシで煮て見ました。お塩で味がつけてございます。これが一番さっぱりしているかと思いますが、一つ召し上がって見てください。」

「うどんとはよい物を造つてくださった。わたしはお酒の方ですがね、寒い日にはこれがまた何よりですよ。」

「さあ、お口に合いますか、どうですか。手前どもではよくこれをこしらえまして、年寄りに食べさせます。」

牡丹屋ではすべてこの調子だ。

一通の手紙は木曾^{きそ}から江戸を回って来たものだ。馬籠^{まごめ}の方に

伏見屋金兵衛ふしみやきんべえからのめずらしい消息だ。最愛の一人息子ひとりむすこ、鶴つるま
 松まつの死がその中に報じてある。鶴松も弱かった子だ。あの少年
 のからだは、医者としての寛齋も診てよく知っている。馬籠の伏
 見屋から駕籠かごで迎いが来るたびに、寛齋は藥箱をさげて、美濃みのと
 信濃しなのの国境くにぎかいにあたる十曲峠じつきよくとうげをよく急いだものだ。筆ま
 めな金兵衛はあの子が生前に寛齋の世話になつた礼から始めて、
 どうかして助けられるものならの願いから、あらゆる加持祈祷かじきとうを
 試み、わざわざ多賀の大社まで代参のものをやって病氣全快を祈
 らせたことや、あるいは金毘羅大権現こんぴらだいこんげんへ祈願のために落合おちあいの
 大橋から神酒みき一樽たるを流させたことまで、口説くどくように書いてよこ
 した。病氣の手当ては言うまでもなく、寛齋留守中は大垣おおがきの医

者を頼み、おりから木曾路を通行する若^{じやくしゅう}州の典医、水戸姫君の典医にまですがつて診察を受けさせたことも書いてよこした。とうとう養生もかなわなかったという金兵衛の残念がる様子が目に見えるように、その手紙の中にあらわれている。

平素懇意にする金兵衛が六十三歳でこの打撃を受けたということは、寛斎にとって他^{ひとごと}事とも思われない。今一通の手紙は旧^{ふる}いなじみのある老人から来た。それにはまた、筆に力もなく、言葉も短く、ことのほかに老い衰えたことを訴えて、生きているというばかりのような心細いことが書いてある。ただ、昔を思うたびに人恋しい、もはや生前に面会することもあるまいかと書いてある。「貴君には、いまだ御^ご往^{おう}生^{じょう}もなされず候^{そうろう}よし、」ともある。

「いまだ御往生もなされず候よしは、ひどい。」

と考へて、寛齋は哭^ないていいか笑^なつていいかわからないようなその手紙の前に頭をたれた。

寛齋の周囲にある旧知も次第に亡^なくなつた。達者で働いているものは数えるほどしかない。今度十七歳の鶴松を先に立てた金兵衛、半蔵の父吉左衛門——指を折つて見ると、そういう人たちはもはや幾人も残つていない。追い追いの無常の風に吹き立てられて、早く美濃へ逃げ帰りたいと思うところへ、横浜の方へは浪士来襲のうわさすら伝わつて来た。

とうとう、寛齋は神奈川の旅籠屋はたごやで年を越した。彼の日課は開港場の商況を調べて、それを中津川の方へ報告することで、その都度万屋つどよろずやからの音信にも接したが、かんじんの安兵衛らはまだいつ神奈川へ出向いて来るともわからない。

年も万延まんえん元年と改まるころには、日に日に横浜への移住者がふえた。寛齋が海をながめに神奈川台へ登って行つて見ると、そのたびに港らしいにぎやかさが増している。弁天寄りの沼地は埋め立てられて、そこに貸し長屋ができ、外国人の借地を願かい出るものが二、三十人にも及ぶと聞くようになった。吉田橋架かけ替えの工事も始まっていて、神奈川から横浜の方へ通う渡し舟も見え

る。ある日も寛齋は用達ようたしのついでに、神奈川台の上まで歩いたが、なんとなく野毛山のげやまも霞かすんで見え、沖の向こうに姿をあらわしている上総辺かずさの断崖だんがいには遠い日があたつて、さびしい新開地に春のめぐつて来るのもそんなに遠いことではなからうかと思われた。

時には遠く海風を帆にうけて、あだかも夢のように、寛齋の視野のうちにはいつて来るものがある。日本最初の使節を乗せた咸か臨丸んりんまるがアメリカへ向けて神奈川沖を通過した時だ。徳川幕府がオランダ政府から購かい入れたというその小さな軍艦は品川沖から出帆して来た。艦長木村摂津守せつつのかみ、指揮官勝麟太郎かつりんたろうをはじめ、運用方、測量方から火夫水夫まで、一切西洋人の手を借りること

なしに、オランダ人の伝習を受け初めてからようやく五年にしかならない航海術で、とにもかくにも大洋を乗り切ろうという日本人の大胆さは、寛齋を驚かした。薩摩さつまの沖で以前に難船して徳川政府の保護を受けていたアメリカの船員らも、咸臨丸で送りかえされるという。その軍艦は港の出入りに石炭を焚たくばかり、航海中はただ風をたよりに運転せねばならないほどの小型のものであったから、煙も揚げずに神奈川沖を通過しただけが、いささか物足りなかった。大変な評判で、神奈川台の上には人の黒山を築いた。不案内な土地の方へ行くために、使節の一行は何千何百足の草鞋わらじを用意して行ったかしのれないなぞといううわさがそのあとに残った。当時二十六、七歳の青年福沢諭吉ふくざわゆきちが木村摂津守のお供

という格で、その最初の航海に上って行つたといううわさなども残つた。

二月にはいつて、寛齋は江戸両国十一屋の隠居から思いがけない便りを受け取つた。^{たよ}それには隠居が日ごろ出入りする幕府奥詰^めの医師を案内して、横浜見物に出向いて来るとある。その節は、よろしく頼むとある。

旅の空で寛齋が待ち受けた珍客は、喜多村瑞見^{きたむらざいけん}と言つて、幕府奥詰の医師仲間でも製薬局の管理をしていた人である。汽船觀光丸の試乗者募集のあつた時、瑞見もその募りに応じようとした

が、時の御匙法師おさじほうしににらまれて、譴責けんせきを受け、蝦夷移住えぞを命ぜられたという閱歴をもった人である。この瑞見は二年ほど前に家を挙げ蝦夷の方に移つて、函館はこだて開港地の監督なぞをしている。今度函館から江戸までちよつと出て来たついでに、新開の横浜をも見て行きたいというので、そのことを十一屋の隠居が通知してよこしたのだ。

瑞見は供の男を一人連れひとり、十一屋の隠居を案内にして、天氣のよい日の夕方に牡丹屋ぼたんやへ着いた。神奈川には奉行組ぶぎようくみ頭がしらもある、そういう役人の家よりもわざわざ牡丹屋のような古い旅籠屋はたごやを選んで微行で瑞見のやつて来たことが寛齋をよろこばせた。あつて見ると、思ひのほか、年も若い。三十二、三ぐらいにしか見

えない。

「きょうのお客さまは名高い人ですが、お目にかかつて見ると、まだお若いかたのようですね。」

と牡丹屋の亭主^{ていしゅ}が寛齋の袖^{そで}を引いて言つたくらいだ。

翌日は寛齋と牡丹屋の亭主とが先に立つて、江戸から来た三人をまず神奈川台へ案内し、黒い館^{やかたもん}門^{もん}の木戸を通つて、横浜道へ向かつた。番所のあるところから野毛山^{のげやま}の下へ出るには、内浦に沿うて岸を一回りせねばならぬ。程^{ほど}ヶ谷^やからの道がそこへ続いて来ている。野毛には奉行の屋敷があり、越前^{えちぜん}の陣屋もある。そこから野毛橋を渡り、土手通りを過ぎて、仮の吉田橋から関^{かん}内^なにはいった。

「横浜もさびしいところですね。」

「わたしの来た時分には、これよりもつとさびしいところでした。
」

瑞見と寛斎とは歩きながら、こんな言葉をかわして、高札場こうさつばの立つあたりから枯れがれな太田新田の間の新道を進んだ。

瑞見は遠く蝦夷えぞの方で採薬、薬園、病院、疏水そすい、養蚕等の施設

を早く目論もくろんでいる時で、函館の新開地にこの横浜を思い比べ、

牡丹屋の亭主を顧みてはいろいろと土地の様子をきいた。当時の横浜関内は一羽の蝶ちようのかたちにとえられる。海岸へ築つき出した

二か所の波止場はとばはその触角であり、中央の運上所付近はそのから

だであり、本町通りと商館の許可地は左右の翹はねにあたる。一番左

の端にある遊園で、樹木のしげった弁天の境内けいだいは、蝶の翅に置く唯一の美しい斑紋はんもんとも言われよう。しかしその翅の大部分はまだ田圃たんぼと沼地だ。そこには何か開港一番の思いつきでもあるかのように、およそ八千坪からの敷地から成る大規模な遊女屋の一郭もひらけつつある。横浜にはまだ市街の連絡もなかったから、一丁目ごとに名主を置き、名主の上に総年寄を置き、運上所わきの町会所で一切の用事を取り扱っていると語り聞かせるのも牡丹屋の亭主だ。

やがて、その日同行した五人のものは横浜海岸通りの波止場に近いところへ出た。西洋の船にならって造った二本マストもしくは一本マストの帆前船ほまえせんから、従来あつた五大力ごだいりきの大船、種々

な型の荷船、便船、漁り船いさぶね、小舟まで、あるいは碇泊ていはくしたりあるいは動いたりしているごちやごちやとした光景が、鴉からすの群れ飛ぶ港の空気と煙とを通してそこに望まれた。二か所の波止場、水先案内の職業、運上所で扱う税関と外交の港務などは、全く新しい港のために現われて来たもので、ちようど入港した一艘そうの外国船も周囲の単調を破っている。

その時、牡丹屋の亭主は波止場の位置から、向こうの山下の方角を瑞見や寛斎にさして見せ、旧横浜村の住民は九十戸ばかりの竈かまどを挙げてそちらの方に退却を余儀なくされたと語った。それほどのこの新開地に内外人の借地の請求が頻ひんぱん繁となつて来た意味を通わせた。大岡川おおおかがわの川尻かわじりから増徳院わきへかけて、長さ五百

八十間ばかりの堀川ほりかわの開鑿かいさくも始まったことを語った。その波止場の位置まで行くと、海から吹いて来る風からして違う。しばらく瑞見は入港した外国船の方を望んだまま動かなかった。やがて、寛斎を顧みて、

「やっぱりよくできていますね。同じ汽船でも外国のはどこか違いますね。」

「喜多村先生のお供はかなわない。」とその時、十一屋の隠居が横よこ槍やりを入れた。

「どうしてさ。」

「いつまでも船なぞをながめていらつしやるから。」

「しかし、十一屋さん、早くわれわれの国でもああいうよい船を

造りたいじゃありませんか。今じや薩州さつしゅうでも、土州としゅうでも、
越前えちぜんでも、二、三艘そうぐらいの汽船を持っていますよ。それがみ
んな外国から買った船ばかりでさ。十一屋さんは昌平丸しょうへいまるとい
う船のことをお聞きでしたらうか。あれは安政二年の夏に、薩州
侯が三本マストの大船を一艘造らせて、それを献上したものでさ。
幕府に三本マストの大船ができたのは、あれが初めてだと思いま
す。ところが、どうでしょう。昌平丸を作る時分には、まだ螺旋ねじ
釘くぎを使うことを知らない。まっすぐな釘くぎばかりで造ったもんです
から、大風雨おおあらしの来た年に、品川沖でばらばらに解けてこわれて
しまいました。」

「先生はなかなかくわしい。」

「函館の方にだつて、二本マストの帆前船がまだ二艘しかできて
いません。一艘は函館丸。もう一艘の船の方は亀田丸かめだまる。高田屋たかだ
嘉兵衛やかへえの呼び寄せた人で、豊治とよじという船大工があれを造りました
がね。」

「先生は函館で船の世話までなさるんですか。」

「まあ、そんなものでさ。でも、こんな藪医者やぶいにかかっちゃかな
わないなんて、函館の方の人は皆そう言っていましたよ。」

この「藪医者」には、そばに立って聞いている寛斎もうなつた。
入港した外国船を迎え顔な西洋人なぞが、いつのまにか寛斎ら
の周囲に集まつて来た。波止場には九年母くねんぼの店をひろげて売って
いる婆さんばあがある。そのかたわらに背中の子供をおろして休んで

いる女がある。どうちゆうぎし道中差を一本腰にぶちこんで、草鞋わらじばきのまま、

何か資本もとでのかからない商売でも見つけ顔に歩き回っている男もあ

る。おもしろい丸帽をかぶり、辮髪べんぱつをたれ下げ、金入れらしい

袋を背負しよいながら、上陸する船客を今か今かと待ち受けているよ

うなシナ人の両替りようがえし商もある。

見ると、定紋じようもんのついた船印ふなじるしの旗を立てて、港の役人を

乗せた船が外国船から漕ぎこ帰つて来た。そのあとから、二、三の

船が波に揺られながら岸の方へ近づいて来た。横浜とはどんなと

ころかと内々想像して来たような目つきのもの、全く生おい立ちを

異にし氣質を異にしたようなもの、本国から来たもの、東洋の植

民地の方から来たもの、それらの雑多な冒険家が無遠慮に海から

陸^{おか}へ上がつて来た。いづれも生命^{いのち}がけの西洋人ばかりだ。上陸するものの中にはまだ一人^{ひとり}の婦人を見ない。中には、初めて日本の土を踏むと言いたそうに、連れの方を振り返るものもある。叔父^{おじ}甥^{おい}なぞの間柄かと見えて、迎えるものと迎えらるものところが男同志互いに抱き合うのもある。その二人^{ふたり}は、寛齋や瑞見の見ている前で、熱烈な頬^ほずり^おりをかわした。

瑞見はなかなかトボケた人で、この横浜を見に来たよりも、実は牛肉の試食に来たと白状する。こんな注文を出す客のことで、あちこち引っぱり回されるのは迷惑らしい上に、案内者側の寛齋

の方でもなるべく日のあるうちに神奈川へ歸りたかった。いつでも日の傾きかけるのを見ると、寛齋は美濃みのの方の空を思い出したからで。

横浜も海岸へ寄った方はすでに区画の整理ができ、新道はその間を貫いていて、町々の角には必ず木戸を見る。歸り路みちには、寛齋らは本町一丁目の通りを海岸の方へ取って、渡し場のあるところへ出た。そこから出る舟は神奈川の宮下というところへ着く。わざわざ野毛山の下の方を遠回りして歸って行かないでも済む。牡丹屋の亭主はその日の夕飯にと言つて瑞見から注文のあつた肉を横浜の町で買い求めて来て、それをさげながら一緒に神奈川行きの舟に移った。

「横浜も鴉からすの多いところですね。」

「蝦夷えぞの方ではゴメです。海の鴟かもめの一種です。あの鳴き声を聞く

と、いかにも北海らしい気持ちが起こって来ますよ。そう言えば、この横浜にはもう外国の宣教師も来てるというじゃありませんか。
」

「二人。」

「なんでも、神奈川の古いお寺を借りて、去年の秋から来ているアメリカ人があります。ブラウンといいましたっけか。横浜へ着いた最初の宣教師です。狭い土地ですからすぐ知れますね。」

「いったい、切支丹宗キリシタンは神奈川条約ではどういうことになりましょう。」

「そりや無論内地のものには許されない。ただ、宣教師がこつちへ来ている西洋人仲間に布教するのは自由だということになっていましょう。」

「神奈川へはアメリカの医者も一人来ていますよ。」

「ますます世の中は多事だ。」

だれが語るともなく、だれが答えるともなく、こんな話が舟の中で出た。

牡丹屋へ帰り着いてから、しばらく寛齋は独りひと居る休息の時を持った。例の裏二階から表側の廊下へ出ると、神奈川の町の一部が見える。晩年の彼を待ち受けているような信州伊那いなの豊かな谷と、現在の彼の位置との間には、まだよほどの隔たりがある。彼

も最後の「隠れ家」にたどり着くには、どんな寂しい路みちでも踏まねばならない。それにしても、安政大獄以来の周囲にある空氣の重苦しさは寛齋の心を不安にするばかりであつた。ますます嚴重になつて行く町々の取り締まり方と、志士や浪人の氣味の悪いこの沈黙とはどうだ。すでに直接行動に訴えたものすらある。前の年の七月の夜には横浜本町で二人ふたりのロシヤの海軍士官が殺され、同じ年の十一月の夕には港崎町こうざきまちのわきで仏国領事の雇い人が刺され、最近には本町一丁目と五丁目の間で船員と商人との二人のオランダ人が殺された。それほど横浜の夜は暗い。外国人の入り込む開港場へ海から何か這はうようにやつて来る闇やみの恐ろしさは、それを経験したものでなければわからない。彼は瑞見のような人

をめずらしく案内して、足もとの明るいうちに牡丹屋へ帰つて来てよかつたと考えた。

「お夕飯のおしたくができてございます。」

という女中に誘われて、寛齋もその晩は例になく庭に向いた階下の座敷へ降りた。瑞見や十一屋の隠居などそこで一緒になった。

「喜多村先生や宮川先生の前ですが、横浜の遊女屋にはわたしもたまげました。」と言ひ出すのは十一屋だ。

「すこしはんじよう繁昌はんじようして来ますと、すぐその土地にできるものは飲

食店と遊郭です。」と牡丹屋の亭主も夕飯時の挨拶あいさつに来て、相あ槌いづちを打つ。

ぎゅうなべ
牛鍋

は庭で煮た。女中が七輪しちりんを持ち出して、飛び石の上

でそれを煮た。その鍋を座敷へ持ち込むことは、牡丹屋のお婆ばあさんがどうしても承知しなかった。

「臭い、臭い。」

奥の方では大騒ぎする声すら聞こえる。

「ここにも西洋ぎらいがあると見えますね。」

と瑞見が笑うと、亭主はしきりに手をもんで、

「いえ、そういうわけでもございませんが、吾家うちのお袋などはも

う驚いております。牛の臭気においがこもるのは困るなんて、しきりに

そんなことを申しまして。この神奈川には、あなた、肉屋の前を

避よけて通るような、そんな年寄りもございません。」

その時、寛齋は自分でも好きな酒をはじめながら、瑞見の方を見ると、客も首を延ばし、なみなみとついである方へとがらしたくちびる口唇を持って行く盃さかずきの持ち方からしてどうもただではないので、この人は話せると思った。

「こんな話がありますよ。」と瑞見は思い出したように、「あれは一昨年おとしの七月のことでしたか、エルジンというイギリスの使節が蒸汽船を一艘幕府に献上そうしたいと言って、軍艦で下田から品川まで来ました。まあ品川の人たちとしてはせつかくの使節をもてなすという意味でしたらう。その翌日に、品川の遊女を多勢で軍艦まで押しかけさしたというものです。さすがに向こうでも面くらったと見えて、あとになっての言い草がいい。あれは何者だ、

いったい日本人は自分の国の女をどう心得ているんだろうって、いかにもイギリス人の言いそうなことじゃありませんか。」

「先生。」と十一屋は膝ひざを乗り出した。「わたしはまたこういう話を聞いたことがあります。こっちの女が齒を染めたり、眉まゆを落としたりしているのを見ると、西洋人は非常にいやな気がするそうですね。ほんとうでしょうか。まあ、わたしたちから見ると、優しい風俗だと思いますがなあ。」

「気味悪く思うのはお互いでしょう。事情を知らない連中と来たら、いろいろなことをこじつけて、やれ幕府の上役のものは西洋人と結託しているの、なんのツて、悪口ばかり。鎖攘さじよう、鎖攘さじよう（鎖港攘夷の略）——あの声はどうです。わたしに言わせると、

幕府が鎖攘を知らないどころか、あんまり早く鎖攘し過ぎてしまった。ばんしょ蕃書は禁じて読ませない、洋学者は遠ざけて近づけない、その方針をよいとしたばかりじやありません、国内の人材まで鎖攘してしまった。御覧なさい、前には高橋作左衛門を鎖攘する。はづげんせき土生玄磧を鎖攘する。後には渡辺華山、わたなべかざん高野長英を鎖攘する。その結果はと言うと、日本国じゆうを実に頑固がんこなものにしちまいしました。外国のことを言うのも恥だなんて思わせるようにまで――」

「先生、肉が煮えました。」

と十一屋は瑞見の話をさえぎった。

女中が白紙を一枚ずつ客へ配りに来た。肉を突ツついた箸はしはそ

の紙に置いてもらいたいの意味だ。煮えた牛ぎゅうなべ鍋は庭から縁側の上へ移された。奥の部屋へやに、牡丹屋の家の人たちがいる方では、障子しょうじをあけひろげるやら、こもった空気を追い出すやらの物音が聞こえる。十一屋はそれを聞きつけて、

「女中さん、そう言ってください。今にこちらのお婆さんでも、おかみさんでも、このにおいをかぐと飛んで来るようになりますよッて。」

十一屋の言い草だ。

「どれ、わたしも一つ薬食くすりぐいとやるか。」

と寛齋は言つて、うまそうに煮えた肉のにおいをかいだ。好きな酒を前に、しばらく彼も一切を忘れていた。盃の相手には、こ

んな頼もしい人物も幕府方にあるかと思われるような客がいる。おまけに、初めて味わう肉もある。

四

当時、全国に浪打つなみような幕府非難の声からすれば、横浜や函館の港を開いたことは幕府の大失策である。東西人種の相違、道徳の相違、風俗習慣の相違から来るものを一概に未開野蛮として、人を食った態度で臨んで来るような西洋人に、そうやすやすとこの国の土を踏ませる法はない。開港が東照宮の遺志にそむくはおろか、朝廷尊崇の大義にすら悖もとると齒はぎしりをかむものがある。

しかし、瑞見に言わせると、幕府のことほど世に誤り伝えられているものはない。開港の事情を知るには、神奈川条約の実際の起草者なる いわせひごのかみ 岩瀬肥後守 に行くに越したことはない。それにはまず幕府で監察（目付）めつけ の役を重んじたことを知ってかかる必要がある。

監察とは何か。この役は禄もそう多くないし、位もそう高くない。しかし、諸司諸職に關係のないものはないくらいだから、きわめて権威がある。老中はじめ三奉行の重い役でも、監察の同意なしには事を決めることができない。どうかして意見のちがうのを顧みずに断行することがあると、監察は直接に將軍なり老中なりに面会して思うところを述べ立てても、それを止めることもで

きない。およそ人の昇進に何がうらやましがられるかと言つて、監察の右に出るものはない。その人を得ると得ないとで一代の盛衰に関する役目であることも想い知られよう。嘉永年代、アメリカの軍艦が渡つて来た日のように、外国関係の一大事変に当たつては、幕府の上のものも下のものも皆強い衝動を受けた。その衝動が非常な任にんせん撰を行なわせた。人材を登庸とうようしなければだめだということをお教えたのも、またその刺激だ。従来親子共に役に就ついているものがあれば、子は賢くても父に超こえることはできなかつたのが旧い規則だ。それを改めて、三人のものが監察に拔擢ばつてきせられた。その中の一人が岩瀬肥後なのだ。

岩瀬肥後は名を忠震ただなりといい、字を百里あざなという。築地つきじに屋敷が

あつたところから、号をせんしゅう蟾州とも言っている。心あるものは
 いずれもこの人を推して、幕府内での第一の人とした。たとえば
 オランダから観光船を贈つて来た時にやたぼりけいぞう矢田堀景蔵、かつりんたろう勝麟太郎
 なぞをこぶしんやく小普請役から抜いて、それぞれ航海の技術を学ばせたのも
 彼だ。しもそねきんざぶろう下曾根金三郎、えがわたろうざえもん江川太郎左衛門には西洋の砲術を訓練さ
 せる。みつくりげんぼ箕作阮甫、すぎたげんたん杉田玄端にはばんしよとりしらべしよ蕃書取調所の教育を任
 せる。そういう類のたぐいことはほとんど数えきれない。松平河内、
かわじさえもん川路左衛門、おおくぼうこん大久保右近、みずのちくご水野筑後、その他の長老でも同輩でも、
 いやしくも国事に尽くす志のあるものには誠意をもつて親しく交
 わらないものはなかったくらいだ。各藩の有為な人物をも延ひいて、
 身をもつて時代に当たろうとしたのも彼だ。

瑞見に言わせると、幕府有司のほとんどすべてが英米仏露をひきくるめて一概に毛唐人けとうじんと言っていたような時に立って、百方その間を周旋し、いくらかでも明るい方へ多勢を導こうとしたものの摧心さいしんと労力とは想像も及ばない。岩瀬肥後はそれを成した人だ。最初の米国領事ハリスが来航して、いよいよ和親貿易の交渉を始めようとした時、幕府の有司はみな尻込みしりごみして、一人として背負しよって立とうとするものがない。皆手をこまねいて、岩瀬肥後を推した。そこで彼は一身を犠牲にする覚悟で、江戸と下田の間を往復して、数か月もかかった後にようやく草稿のできたのが安政の年の条約だ。

草稿はできた。諸大名は江戸城に召集された。その時、井伊大

老が^い出で、和親貿易の避けがたいことを述べて、委細は監察の岩瀬肥後に述べさせるから、とくときいたあとで諸君各自の意見を述べられるようにと言った。そこで大老は退いて、彼が代わって諸大名の前に進み出た。その時の彼の声はよく徹^{とお}り、言うこともはつきりしていて、だれ一人異議を唱えるものもない。いずれも時宜に^{かな}適った説だとして、よろこんで退出した。ところが数日後に諸大名各自の意見書を出すころになると、ことごとく前の日に言^{くつがえ}ったことを覆して、彼の説を破ろうとするものが出て来た。それは多く臣下の手に成ったものだ。君侯といえどもそれを制することができなかつたのだ。そこで彼は水戸^{みと}の御隠居や、尾州^{びしゅう}の徳川慶勝^{よしかつ}や、松平春嶽^{しゅんがく}、鍋島閑叟^{なべしまかんそう}、山内容堂^{ようどう}の諸公

に説いて、協力して事に当たることを求めた。岩瀬肥後の名が高くなつたのもそのころからだ。

しかし、条約交渉の相手方なるヨーロッパ人が次第に態度を改めて来たことをも忘れてはならない。来るものも来るものも、皆ペリイのような態度の人ばかりではなかつたのだ。アメリカ領事ハリス、その書記ヒュウスケン、イギリスの使節エルジン、その書記オリファント、これらの人たちはいずれも日本を知り、日本の国情というものを認めた。中には、日本に來た最初の印象は思いがけない文明国の感じであつたとさえ言つた人もある。すべてこれらの事情は、岩瀬肥後のようにその局に当たつた人以外には多く伝わらない。それにつけても、彼にはいろいろな逸話があ

る。彼が頭脳あたまのよかつた証拠には、イギリスの使節らが彼の聰そうめ明いさに驚いたというくらいだ。彼はイギリス人からきいた言葉を心覚えに自分の扇子せんすに書きつけて置いて、その次ぎの会見のおりには、かなり正確にその英語を発音したという。イギリスの方では、また彼のすることを見て、日本の扇子は手帳にもなり、風を送る器うつわにもなり、退屈な時の手慰みにもなると言つたという話もある。

もともと水戸の御隠居はそう頑かたくなな人ではない。尊王攘夷そのんかうじよういという言葉は御隠居自身の筆に成る水戸弘道館の碑文から来ているくらいで、最初のうちこそ御隠居も外国に対しては、なんでも一つ撃うち懲こらせという方こころざしにばかり志を向けていたらしいが、だんだん

岩瀬肥後の説を聞いて大いに悟られるところがあつた。御隠居はもとより英明な生まれつきの人だから、今日こんにちの外国は古の夷狄いにしえではないという彼の言葉に耳を傾けて、無謀の戦いはいたずらにこの国を害するに過ぎないことを回顧するようになった。その時、御隠居は彼に一つのたとえ話を告げた。ここに一人の美しい娘がある。その娘にしきりに結婚を求めるものがある。再三拒んで容易に許さない。男の心がますます動いて来た時になって、始めて許したら、その二人の愛情はかえつて濃こまやかで、多情な人のすみやかに受けいれるものには勝ろうというのである。実際、あの御隠居が断乎だんことして和親貿易の変更すべきでないことを彼に許した証拠には、こんな娘のたとえを語つたのを見てもわかる。御隠居

がすでにこのとおり、外交のやむを得ないことを認めて、他の親藩にも外様とぎまの大名にも説き勧めるくらいだ。それまで御隠居を動かして鎖攘さじようの説を唱えた二人の幕僚、藤田東湖ふじたとうこ、戸田蓬軒とだほうけんなども遠見とおみのきく御隠居の見識に服して、自分らの説を改めるようになった。そこへ安政の大地震が来た。一藩の指導者は二人とも圧死を遂げた。御隠居は一時に両ふたつの翼を失ったけれども、その老いた精神はますます明るいところへ出て行つた。御隠居の長い生し涯ようがいのうちでも岩瀬肥後にあつたころは特別の時代で、御隠居自身の内部に起こつて来た外国というものの考え直しもその時代に行なわれた。

しかし、岩瀬肥後にとっては、彼が一生のつまずきになるほど

の一大珍事が出^{しゅつたい}来した。十三代將軍（徳川家定^{いえさだ}）は生来多

病で、物言うことも滞りがちなくらいであつた。どうしてもよい世嗣^{よつ}ぎを定めねばならぬ。この多事な日に、内は諸藩の人心を鎮^{しず}

め、外は各国に應じて行かねばならぬ。徳川宗室を見渡したところ、その任に耐えそうなものは、一橋^{ひとつばし}慶喜^{しよしのぶ}のほかにない。こ

とに一代の声望並ぶものがないような水戸の御隠居が現にその父親であるのだから、諸官一同申し合せて、慶喜擁立のことを上請することになった。岩瀬肥後はその主唱者なのだ。水戸はもと

より、京都方面まで異議のあらうはずもない。ところがこれには

反対の説が出て、血統の近い紀州慶福^{よしとみ}を立てるのが世襲伝来の

精神から見て正しいと唱え出した。その声は大奥の深い簾^{すだれ}の内か

らも出、水戸の野心と陰謀を疑う大名有司の仲間からも出た。この形勢をみて取った岩瀬肥後は、血統の近いものを立てるという声を排斥して、年長で賢いものを立てるのが今日こんにちの急務である」と力説し、老中奉行ぶぎようらもその説に賛成するものが多く、それを漏れ聞いた国内の有志者たちも皆大いに喜んで、太陽はこれから輝こうと言い合いながら、いずれもその時の来るのを待ち望んだ。意外にも、その上請をしないうちに、將軍は脚氣かっけにかかって、わずか五年を徳川十三代の一期として、にわかに薨去こうきよした。岩瀬肥後の極力排斥した慶福よしとみ擁立説がまた盛り返して来た日を迎えて見ると、そこに將軍の遺旨を奉じて起たち上がったのが井伊大老その人であったのだ。

岩瀬肥後の政治生涯しょうがいはその時を終わりとした。水戸の御隠居を始めとして、尾州、越前、土州の諸大名、およそ平生へいぜい彼の説に賛成したものは皆江戸城に集まつて大老と激しい議論があつたが、大老は一切きき入れなかつた。安政大獄の序幕はそこから切つて落とされた。彼はもとより首唱の罪で、きびしい譴責けんせきを受けた。屏しりぞけられ、すわらせられ、断わりなしに人と往来ゆききするにとすら禁ぜられた。その時の大老の言葉に、岩瀬輩が軽賤けいせんの身でありながら柱石たるわれわれをさし置いて、勝手に將軍の継嗣問題なぞを持ち出した。その罪は憎むべき大逆無道にも相当する。それでも極刑に処せられなかつたのは、彼も日本国の平安はるかを謀つて、計画することが図に当たり、その尽力の功勞は埋めうづられるも

のでもないから、非常な寛典を与えられたのであると。

瑞見に言わせると、今度江戸へ出て来て見ても、水戸の御隠居はじめ大老と意見の合わないものはすべて^{しりぞ}けられている。諸司諸役ことごとく更替して、大老の家の子郎党ともいうべき人たちが占められている。驚くばかりさかな大老の權威の前には、幕府内のものは皆屏^{へい}息^{そく}して、足を累^{かさ}ねて立つ思いをしているほどだ。岩瀬肥後も今は向^{むこう}島^{しま}に蟄^{ちつき}居^よして、客にも会わず、号を^{おうしよ}鳴^{なり}所と改めてわずかに好きな書画なぞに日々の憂^{うれ}さを慰めていると聞く。

「幕府のことはもはや語るに足るものがない。」

と瑞見は嘆息して、その意味から言っても、罪せられた岩瀬肥

後を憐あわれんだ。そういう瑞見は、彼自身も思いがけない譴責けんせきを受けて、蝦夷移住を命ぜられたのがすこし早かったばかりに、大獄事件の巻き添えを食わなかったというまでである。

十一屋の隠居は瑞見よりも一歩ひとあし先に江戸の方へ歸つて行つた。瑞見の方は腹具合を悪くして、寛齋の介抱などを受けていたために、神奈川を立つのが二、三日おくれた。

瑞見は蝦夷えぞから同行して来た供の男を連れて、寛齋にも牡丹屋ぼたんやの亭主ていしゅにも別れを告げる時に言った。

「わたしもまた函館はこだての方へ行つて、昼寝でもして来ます。」

こんな言葉を残した。

客を送り出して見ると、寛斎は一層さびしい日を暮らすようになった。毎晩のように彗^{すいせい}星が空にあらわれて怪しい光を放つのは、あれは何かの前兆を語るものであろうなどと、人のうわさにくくなことはない。水戸藩へはまた秘密な勅旨が下った、その使者が幕府の嚴重な探^{たんでい}偵を避けるため、行^{あんぎやそ}脚僧に姿を変えてこの東海道を通ったという流言なども伝わって来る。それを見て来たことのようにおもしろがって言い立てるものもある。攘^{じやうい}夷を意味する横浜襲撃が諸浪士によつて企てられているとのうわさも絶えなかった。

暖かい雨は幾たびか通り過ぎた。冬じゅうどこかへ飛び去って

いた白い鴉からすは、また横浜海岸に近い玉楠たまぐすの樹きへ帰つて来る。旧

暦三月の季節も近づいて来た。寛斎は中津川の商人らをしきりに

待ち遠しく思った。例の売り込み商を訪ねるたずたびに、貿易諸相場

は上値うわねをたどっているとのこと、この調子で行けば生糸六十五

匁か七十匁につき金一両の相場もあらわれようとの話が出る。江ご

うしゅう

州、甲州、あるいは信州飯田いいたあたりの生糸商人も追い追ひ入

り込んで来る模様があるから、なかなか油断はならないとの話も

ある。神奈川在留の外国商人——中にもイギリス人のケウスキイ

などは横浜の将来を見込んで、率先して木造建築の商館なりと打

ち建てたいとの意気込みでいるとの話もある。

「万屋よろずやさんも、だいぶごゆつくりでございますね。」

と牡丹屋の亭主は寛齋を見に裏二階へ上がつて来るたびに言つた。

三月三日の朝はめずらしい大雪が来た。寛齋が廊下に出てはながめるのを楽しみにする椎しいの枝なぞは、夜から降り積もる雪に圧おされて、今にも折れそうなくらいに見える。牡丹屋では亭主の孫にあたるちいさな女の子のために初節句を祝うと言つて、その雪の中で、白酒まめいだ豆煎りだと女中までが大騒ぎだ。割子わりご弁当に重詰ぶるまいめ、客振舞さげさかなの酒肴は旅に來ている寛齋の膳ぜんにまでついた。

その日一日、寛齋は椎の枝から溶け落ちる重い音を聞き暮らした。やがてその葉が雪にぬれて、かえつて一層の輝きを見せるころには、江戸方面からの人のうわさが桜田さくらだもん門外の変事を伝えた。

刺客およそ十七人、脱藩除籍の願書を藩邸に投げ込んで永ながいの暇を告げたというから、浪人ではあるが、それらの水戸の侍たちが井伊大老の登城を待ち受けて、その首級を挙げたあ。この変事は人の口から口へと潜むふところように伝わって来た。刺客はいずれも斬ざん奸主意書というを懷ふところにしていたという。それには大老を殺害すべき理由を弁明してあつたという。

「あの喜多村先生なぞが蝦夷えぞの方で聞いたら、どんな気がするだろう。」

と言つて、思わず寛齋は宿の亭主と顔を見合わせた。

井伊大老の横死おうしは絶対の秘密とされただけに、来たるべき時勢の变革を予想させるかのような底気味の悪い沈黙が周囲を支配し

た。首級を挙げられた大老をよく言う人は少ない。それほどの憎まれ者も、亡なくなつたあとになつて見ると、やつぱり大きい人物であつたと、一方には言い出した人もある。なるほど、生前の大老はとかくの評判のある人ではあつたが、ただ、他人にまねのできなかつたことが一つある。外国交渉のことにかけては、天朝の威をも畏おそれず、各藩の意見のためにも動かされず、断然として和親通商を許した上で、それから上奏の手續きを執つた。この一事は天地も容いれない大罪を犯したように評するものが多いけれども、もしこの決断がなかつたら、日本国はどうなつたろう。軽く見積もつて蝦夷はもとより、対州つしまも壱岐いきも英米仏露の諸外国に割さき取られ、内地諸所の埠頭ふとうは随意に占領され、その上に背負しよい切れない

いほどの重い償金を取られ、シナの道光時代どうこうの末のような姿になつて、独立の体面はとても保たれなかつたかもしれない。大老がこの至険至難をしのぎ切つたのは、この国にとつての大功と言わねばなるまい。こんなふうに言う人もあつた。ともあれ、大老は徳川世襲伝来の精神をささえていた大極柱だいごくばしらの倒れるように倒れて行つた。この報知しらせを聞く彦根藩士ひこねの憤激、続いて起こつて来そうな彦根と水戸両藩の葛藤かつとうは寛斎にも想像された。前途は実に測りがたかつた。

神奈川付近から横浜へかけての町々の警備は一層嚴重をきわめるようになった。鶴見つるみの橋詰めには杉すぎの角柱かくばしらに大貫おおぬきを通した関門が新たに建てられた。夜になると、神奈川にある二か所の

関門も堅く閉ざされ、三つ所紋の割羽織わりばおりに裁付袴たつつけばかまもいかめしい番兵が三人の人足を先に立てて、外国諸領事の仮寓かぐうする寺々から、神奈川台の異人屋敷の方までも警戒した。町々は夜ふけて出歩く人も少なく、あたりをいましめる太鼓の音のみが聞こえた。

五

ようやく、その年の閏三月うるうを迎えるころになって、※（角万かくまん）
とした生糸の荷がぽつぽつ寛斎のもとに届くようになった。寛斎は順に来るやつを預かって、適当にその始末をしたが、木曾街道の宿場宿場を経て江戸回りで届いた荷を見るたびに、中津川商人

が出向いて来る日の近いことを思った。毎日のように何かの出来事を待ち受けさせるかのような、こんな不安な周囲の空気の中で、よくそれでも生糸の荷が無事に着いたとも思った。

よろずややすべえ
万屋安兵衛

が手代の嘉吉かきちを連れて、美濃みのの方を立てて来たの

は同じ月の下旬である。二人はやはり以前と同じ道筋を取って、

江戸両国の十一屋泊まりで、旧暦四月にはいつてから神奈川の牡ぼ丹屋たんやに着いた。

にわかに寛斎のまわりもにぎやかになった。旅の落し差おとさしを床の間に預ける安兵衛もいる。部屋へやの片すみに脚絆きやはんの紐ひもを解く嘉吉もいる。二人は寛斎の聞きたいと思う郷里の方の人たちの消息——彼の妻子の消息、彼の知人の消息、彼の旧い弟子ふるでしたちの消息ば

かりでなく、何かこう一口には言ってしまうが、あの東美濃の盆地の方の空気までもなんとなく一緒に寛齋のところへ持ってきた。

寛齋がたったりすわったりしているそばで、嘉吉は働き盛りの手代らしい調子で、

「宮川先生も、ずいぶんお待ちになったでしょう。なにしろ春蚕はるごの済まないうちは、どうすることもできませんでした。糸はでそろいませんし。」

と言うと、安兵衛も寛齋をねぎらい顔に、

「いや、よく御辛抱ごしんぼうが続きましたよ。こんなに長くなるんでしたら、一度国の方へお帰りを願って、また出て来ていただいても

とは思いましたがね。」

百里の道を往復して生糸商売でもしようという安兵衛には、さすがに思いやりがある。

「どうしても、だれか一人ひとりこっちにいないことには、浜の事情もよくわかりませんし、人任せでは安心もなりませんし——やつぱり先生に残っていていただいてよかつたと思いました。」

とも安兵衛は言い添えた。

やがて灯ひともしごろであつた。三人は久しぶりで一緒に食事を済ました。町をいましめに来る太鼓の音が聞こえる。閏三月うるうの晦み日そかまで隠されていた井伊大老の喪もすでに発表されたが、神奈川付近ではなかなか警戒の手をゆるめない。嘉吉は裏座敷から表側

の廊下の方へ見に行つた。陣笠じんがさをかぶつて両刀を腰にした番兵の先には、弓張提灯ゆみはりちようちんを手にした二人の人足と、太鼓をたたいて回る一人の人足とが並んで通つたと言つて、嘉吉は目を光らせながら寛齋のいるところへ戻もどつて来た。

「そう言えば、先生はすこし横浜の匂においがする。」
と嘉吉が戯れて言い出した。

「ばかなことを言つちやいけない。」

この七か月ばかりの間、親しい人のだれの顔も見ず、だれの言葉も聞かないでいる寛齋が、どうして旅の日を暮らしたか。嘉吉の目がそれを言つた。

「そんなら見せようか。」

寛齋は笑つて、毎日のように手習いした反古ほごを行燈あんどんのかげに取り出して来て見せた。過ぐる七か月は寛齋にとつて、二年にも三年にも当たつた。旅籠屋はたごやの裏二階から見える椎しいの木よりほかにこの人の友とするものもなかった。その枝ぶりをながめながめするうちに、いつのまにか一変したと言つてもいいほどの彼の書体がそこにあつた。

寛齋は安兵衛にも嘉吉にも言つた。

「去年の十月ごろから見ると、横浜も見ちがえるようになりましてよ。」

糸目六十四匁につき金一兩の割で、生糸の手合わせも順調に行なわれた。この手合わせは神奈川台の異人屋敷にあるケウスキイの仮宅で行なわれた。売り込み商と通弁の男とがそれに立ち合った。売り方では牡丹屋ぼたんやに泊まっている安兵衛も嘉吉も共に列席して、書類の調製は寛齋が引き受けた。

ケウスキイはめつたに笑わない男だが、その時だけは青い瞳ひとみの目に笑みえをたたえて、

「自分は近く横浜の海岸通りに木造の二階屋を建てる。自分の同業者でこの神奈川に來ているものには、英国人バルベルがあり、米国人ホウルがある。しかし、自分はだれよりも先に、あの商館を完成して、そこにイギリス第一番の表札を掲げたい。」

こういう意味のことを通弁に言わせた。

その時、ケウスキイは「わかつてくれたか」という顔つきをして、安兵衛にも嘉吉にも握手を求め、寛斎の方へも大きな手をさし出した。このイギリス人は寛斎の手を堅く握った。

「手合わせは済んだ。これから糸の引き渡した。」

異人屋敷を出てから安兵衛がホツとしたようにそれを言い出すと、嘉吉も連れだつて歩きながら、

「旦那、^{だんな}それから、まだありますぜ。請け取った現金を国の方へ運ぶという仕事がありますぜ。」

「その事なら心配しなくてもいい。先生が引き受けていてくださる。」

「こいつがまた一仕事ですぞ。」

寛齋は二人のあとから神奈川台の土を踏んで、一緒に海の見えるところへ行つて立つた。目に入るかぎり、ちようど港は発展の最中だ。野毛町、戸部町なぞの埋め立てもでき、開港当時百戸ばかりの横浜にどれほどの移住者が増したと言つて見ることもできない。この横浜は来たる六月二日を期して、開港一周年を迎えようとしている。その記念には、弁天の祭礼をすら迎えようとしている。牡丹屋の亭主の話によると、神輿はもとより、山車、手こまい、蜘蛛の拍子舞などいう手踊りの舞台まで張り出して、できるだけ盛んにその祭礼を迎えようとしている。だれがこの横浜開港をどう非難しようと、まるでそんなことは頓着しないか

のように、いったんヨーロッパの方へ向かつて開いた港からは、世界の潮が遠慮会釈なくどんどん流れ込むように見えて来た。羅紗、唐棧、金巾、玻璃、藥種、酒類などがそこからはいつて来れば、生糸、漆器、製茶、水油、銅および銅器の類などがそこから出て行つて、好かれ悪しかれ東と西の交換がすでにすでに始まつたように見えて来た。

郷里の方に待ち受けている妻子のことも、寛齋の胸に浮かんで来た。彼の心は中津川の香蔵、景蔵、それから馬籠の半蔵などの旧い三人の弟子の方へも行つた。あの血氣壮んな人たちが、このむずかしい時をどう乗ツ切るだろうかとも思ひやつた。

生糸売り上げの利得のうち、小判こばんで二千四百両の金を遠く中津川まで送り届けることが寛斎の手に委ねゆだねられた。安兵衛、嘉吉の二人は神奈川に居残つて、六月のころまで商売を続ける手はずであつたからで。当時、金銀の運搬にはいろいろ難渋した話がある。^{するめ}※にくるんで乾物の荷と見せかけ、かろうじて胡麻ごまの蠅はえの難をまぬかれた話もある。武州川かわ越こえの商人は駕籠かごで夜道を急いそごうとして、江戸へ出る途中で駕籠かごかきに襲われた話もある。五十両からの金を携帯する客となると、駕籠かきにはその重さでわかるという。こんな不便な時代に、寛斎は二千四百両からの金を預かつて行かねばならない。貧しい彼はそれほどの金のかつて見たことも

なかつたくらいだ。

寛齋は牡丹屋の二階にいた。その前へ来てすわつて、手さげのついた煙草盆たばこぼんから一服吸いつけたのが安兵衛だ。

「先生に引き受けていただいて、わたしも安心しました。この役を引き受けていただきたいばかりに、わざわざ先生を神奈川へお誘いして来たようなものですよ。」

と安兵衛が白状した。

しかし、これは安兵衛に言われるまでもなかった。もとより寛齋も承知の上で来たことだ。

寛齋は前途百里の思いに胸のふさがる心地こころちでたちあがつた。迫り来る老年はもはやこの人の半身に上っていた。右の耳にはほと

んど聴^きく力がなく、右の目の視^みる力も左のほどにはきかなかつた。彼はその衰えたからだを起こして、最後の「隠^がれ家」にたどり着くための冒険に当たろうとした。その時、安兵衛は一人の宰^{さいりよ}領^うを彼のところへ連れて来た。

「先生、この人が一緒に行つてくれます。」

見ると、荷物を護^{まも}つて行くには屈強な男だ。千両箱の荷造りに
は嘉吉も来て手伝つた。

四月十日ごろには、寛齋は朝早くしたくをはじめ、旅の落^{おと}し差^{ざし}に身を堅めて、七か月のわびしい旅籠屋住居^{はたごやずまい}に別れて行こうとする人であつた。牡丹屋の亭主の計らいで、別れの盃^{さかずき}なぞがそこへ運ばれた。安兵衛は寛齋の前にすわつて、まず自分で一口飲んだ

上で、その土器かわらけを寛齋の方へ差した。この水盃は無量の思いでかわされた。

「さあ、退どいた。退どいた。」

という声が起こった。廊下に立つ女中なぞの間を分けて、三つの荷が二階から梯子段はしごだんの下へ運ばれた。その荷造りした箱の一つ一つは、嘉吉と宿の男とが二人がかりでようやく持ち上がるほどの重さがあつた。

「オヤ、もうお立ちでございますか。江戸はいずれ両国のお泊まりでございましょう。あの十一屋の隠居にも、どうかよろしくおつしやつてください。」

と亭主も寛齋のところへ挨拶あいさつに来た。

馬荷一駄^だ。それに寛齋と宰領とが付き添って、牡丹屋の門口を離れた。安兵衛や嘉吉はせめて宿^{しゆく}はずれまで見送りたいと言つて、一緒に滝の橋を渡り、オランダ領事館の国旗の出ている長延寺の前を通つて、神奈川御台場の先までついて来た。

その時になつて見ると、郷里の方^{ふる}に在^ある旧^{ふる}い弟子^{でし}たちの思惑^{おもわく}もしきりに寛齋の心にかかつて来た。彼が一歩^{ひとあし}踏み出したところ^{ところ}は、往來^{ゆきき}するものの多い東海道だ。彼は老鶯^{ろうおう}の世を忍^{しの}ぶ風情^{ふぜい}で、とぼとぼとした荷馬^{わらぐつ}の※沓^{くつ}の音を聞きながら、遠く板橋^{いたばし}回りで木曾街道に向かつて行つた。

第五章

一

宮川寛齋みやがわかんさいが万屋よろずやの主人と手代とを神奈川かながわに残して置いて
帰国の途に上ったことは、早く美濃みのの方へ知れた。中津川も狭い
土地だから、それがすぐ弟子でし仲間の香蔵や景蔵きざうの耳に入り、半蔵
はまた三里ほど離れた木曾きその馬籠まごめの方で、旧ふるい師匠が板橋方面か
ら木曾街道を帰って来ることを知った。

横浜開港の影響は諸国の街道筋にまであらわれて来るころだ。

半蔵は馬籠の本陣にいて、すでに幾たびか銭相場引き上げの声を聞き、さらにまた小判こばん買いの声を聞くようになった。古二朱金、保字金なぞの当時に残存した古い金貨の買い占めは地方でも始まった。きのうは馬籠ますだや榊田屋へ江州ごうしゅう辺の買い手が来て貯え置きたくわの保金小判を一両につき一兩三分までに買い入れて行つたとか、きようは中津川大和屋やまとやで百枚の保金小判を出して当時通用の新小判二百二十五両を請け取つたとか、そんなうわさが毎日のように半蔵の耳を打った。金一両で二兩一分ずつの売買だ。それどころか、二兩二分にも、三兩にも買い求めるものがあらわれて来た。半蔵が家の隣に住んで昔気質かたぎで聞こえた伏見屋金兵衛ふしみやきんべえなぞは驚いてしまつて、まことに心ならぬ浮世ではある、こんな姿で子孫が

繁昌 はんじょう

するならそれこそ大慶の至りだと皮肉を言ったり、この上どうなつて行く世の中だろうと不安な語氣をもらしたりした。

半蔵が横浜貿易から帰つて来る旧師を心待ちに待ち受けたのは、この地方の動揺の中だ。

旅人を親切にもてなすことは、古い街道筋の住民が一朝一夕に養い得た気風でもない。椎しいの葉に飯いを盛ると言つた昔の人の旅情は彼らの忘れ得ぬ歌であり、路傍に立つ古い道祖神どうそじんは子供の時分から彼らに旅人愛護の精神をささやいている。いたるところに山嶽さんかくは重なり合い、河川はあふれやすい木曾のような土地に住

むものは、ことにその心が深い。当時における旅行の困難を最もよく知るものは、そういう彼ら自身なのだ。まして半蔵にして見れば、以前に師匠と頼んだ人、平田入門の紹介までしてくれた人が神奈川から百里の道を踏んで、昼でも暗いような木曾の森林の間を遠く疲れて帰って来ようという旅だ。

半蔵は旧師を待ち受ける心で、毎日のように街道へ出て見た。彼も隣宿妻籠^{つまご}本陣の寿平次^{じゅへいじ}と一緒に、江戸から横須賀^{よこすか}へかけての旅を終わって帰って来てから、もう足掛け三年になる。過ぐる年の大火のあとをうけて馬籠^{しゅく}の宿もちょうど復興の最中であつた。幸いに彼の家や隣家の伏見屋は類焼をまぬかれたが、町の向こう側はすっかり焼けて、まっ先に普請^{ふしん}のできた問屋^{といやくだゆう}九太夫の家も目

に新しい。

旧師の横浜出稼でかせぎについては、これまでとても弟子たちの間に問題とされて来たことだ。どうかして晩節を全うするように、とは年老いた師匠のために半蔵らの願いとするところで、最初横浜行きのうわさを耳にした時に、弟子たちの間には寄り寄りその話が出た。わざわざ断わって行く必要もなかったと師匠に言われれば、それまでで、往いきにその沙汰さたがなかったにしても、帰りにはなんとか話があるうと語り合っていた。すくなくも半蔵の心には、あの旧師が自分の家には立ち寄ってくれてせめて弟子だけにはいろいろな打ち明け話があるものと思っていた。

四月の二十二日には、寛齋も例の馬荷一駄だに宰領の付き添いで、

片側に新しい家の並んだ馬籠の坂道を峠の方から下つて来た。寛齋は伏見屋の門口に馬を停とめ、懇意な金兵衛方に亡なくなつた鶴つるま松の悔やみを言い入れ、今度横浜を引き上げるについては二千四百両からの金を預かつて来たこと、万屋安兵衛らの帰国はたぶん六月になろうということ、生糸売り上げも多分の利得のあること、開港場での小判の相場は三両二朱ぐらいには商いのできるかと、そんな話を金兵衛のところに残して置いて、せつかく待ち受けている半蔵の家へは立ち寄らずに、そこそこに中津川の方へ通り過ぎて行つた。

このことは後になつて隣家から知れて来た。それを知つた時の半蔵の手持ちぶさたもなかった。旧師を信ずる心の深いだけ、彼

の失望も深かった。

二

「どうも小判買いの入り込んで来るには驚きますね。今もわたしは馬籠へ来る途中で、おちあい落合でもそのうわさを聞いて来ましたよ

。」

こんな話をもって、中津川の香蔵が馬籠本陣をたず訪ねるために、
落合から十じつきよくとうげ曲峠の山道を登って来た。

香蔵は、まだ家督相続もせずにいる半蔵と違い、すでに中津川の方の新しい問屋の主人である。十何年も前に弟子として、義理

ある兄の寛齋に就いたところから見ると、彼も今は男のさかりだ。三人の友だちの中でも、景蔵は年としうえ長で、香蔵はそれに次ぎ、半蔵が一番若かった。その半蔵がもはや三十にもなる。

寛齋も今は成なりきん金だと戯れて見せるような友だちを前に置いて、半蔵は自分の居間としてゐる本陣の店座敷で話した。

銭相場引き上げに続いて急激な諸物価騰貴をひき起こした横浜貿易の取りざたほど半蔵らの心をいらいらさせるものもない。当時、国内に流通する小判、一分判いちぶばんなどの異常に良質なことは、米国領事ハリスですら幕府に注意したくらいで、それらの古い金貨を輸出するものは法外な利を得た。幕府で新小判を鑄造ちゆうぞうし、その品質を落としたのは、外国貨幣と鈞合つりあいを取るための応急手

段であつたが、それがかえつて財界混乱の結果を招いたとも言える。そういう幕府には市場に流通する一切の古い金貨を蒐しゅうしゅう集

して、それを改鑄するだけの能力も信用もなかったからで。新旧小判は同時に市場に行なわれるような日がやつて来た。目先の利に走る内地商人と、この機会をとらえずには置かない外国商人とがしきりにその間に跳ちようりよう梁し始めた。純粹な小判はどしどし海ベイドの外へ出て行つて、そのかわりに輸入せらるるものは多少の米ル弗銀貨はあるとしても、多くは悪質な洋銀であると言われる。

「半蔵さん、君はあの小判買いの声をどう思います。」と香蔵は言つた。「今までに君、九十万両ぐらいの小判は外国へ流れ出したと言いますよ。そうです、軽く見積もつても九十万両ですとき。

驚くじやありませんか。まさか幕府の役人だつて、異人の言うな
りになつてゐるわけでもありますまいがね、したくも何もなしに、
いきなり港を開かせられてしまつて、その結果はと言うと非常な
物価騰貴です。そりや一部の人たちは横浜開港でもうけたかもし
れませんが、一般の人民はこんなに生活に苦しむようになって来
ましたぜ。」

近づいて来る六月二日、その横浜開港一周年の記念日をむしろ
屈辱の記念日として考えるものもあるような、さかんな排外熱は
全国に巻き起こつて来た。眼のあたりまに多くのものの苦しみを
見る半蔵らは、一概にそれを偏狭頑固がんこなものの声とは考えられな
かつた。

「宮川先生のことは、もう何も言いますまい。」と半蔵が言い出した。「わたしたちの衷情としては、今までどおりの簡素清貧に甘んじていていただきたかったけれど。」

「国学者には君、国学者の立場もあろうじやありませんか。それを捨てて、ただもうけさえすればよいというものでもないでしょう。」と言うのは香蔵だ。

「いったい、先生が横浜なぞへ出かけられる前に、相談してくださいとよかった。こんなになわたしたちを避けなくてもよさそうなものです。」

「出稼でかせぎの問題には触れてくれるなど言うんでしよう。」

にわかな雨で、二人ふたりの話は途切れた。半蔵は店座敷の雨戸を繰って、それを一枚ほど閉めしずに置き、しばらく友だちと二人で表庭にふりそそぐ強い雨をながめていた。そのうちに雨は座敷へ吹き込んで来る。しまいには雨戸もあけて置かれなくなった。

「お民。」

と半蔵は妻を呼んだ。燈火あかりなしには話も見えないほど座敷の内は暗かった。お民ももはや二十四で、二人子持ちの若い母だ。奥から行燈あんどんを運んで来る彼女の後ろには、座敷の入り口までついて来て客の方をのぞく幼いものもある。

時ならぬ行燈のかげで、半蔵と香蔵の二人は風雨の音をききな

がら旧師のことを語り合つた。話せば話すほど二人はいろいろな心持ちを引き出されて行つた。半蔵にしても香蔵にしても、はじめて古学というものに目をあけてもらつた寛斎の温情を忘れずにいる。旧師も老いたとは考えても、その態度を責めるような心は二人とも持たなかつた。飯田いいたの在への隠退が旧師の晩年のためとあるなら、その人の幸福を乱したくないと言うのが半蔵だ。親しんせ戚きとしての関係はとにかく、旧師から離れて行こうと言ひ出すのが香蔵だ。

国学者としての大きな先輩、本居宣長もとりのりながののこした仕事はこの半蔵らに一層光つて見えるようになって来た。なんと言つても言葉の鍵かぎを握つたことはあの大人うしの強味で、それが三十五年にわ

たる古事記の研究ともなり、健全な国民性を古代に発見する端緒ともなった。儒教という形であらわれて来ている北方シナの道德、禅宗や道教の形であらわれて来ている南方シナの宗教——それらの異国の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢^{から}ごころ」をかなぐり捨てて、言^{こと}挙^あげということもさらになかった神ながらのいにしえの代に帰れと教えたのが大人^{うし}だ。大人から見ると、何の道かの道ということとは異国の沙汰^{さた}で、いわゆる仁義礼讓孝悌^{てい}忠信などというやかましい名をくさぐさ作り設けて、きびしく人間を縛りつけてしまった人たちのことを、もろこし方では聖人と呼んでいる。それを笑うために出て来た人があの大人だ。大人が古代の探求から見つけて来たものは、「直^{なお}毘^びの靈^{みたま}」の精神で、その言うところ

を約め^{つづ}て見ると、「自^{おのずから}然に帰れ」と教えたことになる。より
明るい世界への啓示も、古代復帰の夢想も、中世の否定も、人間
の解放も、または大人のあの恋愛観も、物のあわれの説も、すべ
てそこから出発している。伊勢^{いせ}の国、飯高^{いいたか}郡の民として、天^て
明^{かんせい}寛政の年代にこんな人が生きていたということすら、半蔵
らの心には一つの驚きである。早く夜明けを告げに生まれて来た
ような大人は、暗いこの世をあとから歩いて来るものの探るに任
せて置いて、新しい世紀のやがてめぐって来る享^{きやうわ}和元年の秋ご
ろにはすでに過去の人であつた。半蔵らに言わせると、あの鈴^{すず}の
屋^やの翁^{おきな}こそ、「近^{ちか}つ代^よ」の人の父とも呼ばるべき人であつた。

香蔵は半蔵に言つた。

「今になって、想い^{おも}当たる。宮川先生も君、あれで中津川あたりじゃ国学者の牛耳^{ぎゆうじ}を執ると言われて来た人ですがね、年をとればとるほど漢学の方へ戻^{もど}って行かれるような気がする。先生には、まだまだ『漢^{から}ごころ』のぬけ切らないところがあるんですね。」

「香蔵さん、そう君に言われると、わたしなぞはなんと言っていかわからない。四書五経から習い初めたものに、なかなか儒教の殻^{から}はとれませんか。」

強雨はやまないばかりか、しきりに雲が騒いで、夕方まで休みなしに吹き通すような強風も出て来た。名古屋から福島行きの客

でやむを得ず半蔵の家に一宿させてくれと言つて来た人さえもある。

香蔵もその晩は中津川の方へは帰れなかった。翌朝になつて見ると、風は静まつたが、天気は容易に回復しなかった。思ひのほかの大荒れで、奥筋おくすじの道や橋は損じ、福島けづの毛付け（馬市）も日延べになつたとの通知があるくらいだ。

ちようど半蔵の父、吉左衛門きちざえもんは尾張藩おわりはんから御勝手仕法立ての件を頼まれて、名古屋出張中の留守の時であつた。半蔵は家の囲い炉裏ろりばたに香蔵を残して置いて、ちよつと会所の見回りに行つて来たが、街道には旅人の通行もなかった。そこへ下男みの佐吉も蓑みのと笠かさとで田圃たんぼの見回りから歸つて来て、中津川の大橋が流れ失うせ

たとうわさを伝えた。

「香蔵さん、大橋が落ちたと言いますぜ。もうすこし見合わせていたらどうです。」

「この雨にどうなりましょう。」と半蔵が継母のおまんも囲炉裏ばたへ来て言った。「いずれ中津川からお迎えの人も見えましように、それまで見合わせていらつしやるがいい。まあ、そうさない。」

雨のために、やむなく逗とうりゆう留する友だちを慰めようとして、やがて半蔵は囲炉裏ばたから奥の部屋へやの方へ香蔵を誘った。北の坪庭に向いたところまで行つて、雨戸をすこし繰つて見せると、そこに本陣の上段の間がある。白地に黒く雲形を織り出した高こうら

麗縁いべりの畳の上には、雨の日の薄暗い光線がさし入っている。木

曾路を通る諸大名が客間にあててあるのもそこだ。半蔵が横須賀

の旅以来、過ぐる三年間の意味ある通行を数えて見ると、彦根ひこねよ

りする井伊掃部頭いいかもんのかみ、江戸より老中間部下総守まなべしもうさのかみ、林大学はやしだいがく

頭のかみ、監察岩瀬肥後守いわせひごのかみ、等、等——それらのすでに横死したり

または現存する幕府の人物で、あるいは大老就職のため江戸の任

地へ赴おもむこうとし、あるいは神奈川条約上奏のため京都へ急おそこうと

して、その客間に足をとどめて行つたことが、ありありとそこに

たどられる。半蔵はそんな隠れたところにある部屋へやを友だちにの

ぞかせて、目まぐるしい「時」の歩みをちよつと振り返つて見る

気になつた。

その時、半蔵は唐紙からかみのそばに立っていた。わざと友だちが上段の間の床に注意するのを待っていた。相州そうしゅう三浦、横須賀在、公郷村くこうむらの方に住む山七郎左衛門やまがみしちろうざえもんから旅の記念にと贈られた光琳こうりんの軸がその暗い壁のところに隠れていたのだ。

「香蔵さん、これがわたしの横須賀土産みやげですよ。」

「そう言えば、君の話にはよく横須賀が出る。これを贈ったかたがその御本家なんですな。」

「妻籠つまごの本陣じゃ無銘の刀をもらう、わたしの家へはこの掛け物をもらって来ました。まったく、あの旅は忘れられない。あれから吾家うちへ帰って来た日は、わたしはもう別の人でしたよ——まあ、自分のつもりじゃ、全く新規な生活を始めましたよ。」

半日でも多く友だちを引き留めたくてゐる半蔵には、その日の雨はやらずの雨と言つてよかった。彼はその足で、継母や妻の仕事部屋となつてゐる仲の間のわきの廊下を通りぬけて、もう一度店座敷の方に友だちの席をつくり直した。

「どれ、香蔵さんに一つわたしのまずい歌をお目にかけますか。」
と言つて半蔵が友だちの前に取り出したのは、時事を詠じた歌の草稿だ。まだ若々しい筆で書いて、人にも見せずにしまつて置いてあるものだ。

あめりかのどるを御国みくにのしろかねにひとしき品ときだめしや
誰たれ

しろかねにかけておよばぬどるるをひとしと思ひし人は誰

ぞも

国つ物たかくうるともそのしろのいとやすかるを思ひはから
で

ももやそ
百八十の物のことごとたかくうりてわれを富ますとおもひけ
るかな

土のごと山と掘りくるどるらるに御国みくにのたからかへまく惜し
も

どるらるにかふるも悲しかみぐに神国かみくにの人のいとなみ造れるものを
どるらるの品のさだめはおおやしまくぬち大八島国中あまねく問ふべかりし
を

しろかねにいたくおとれるどるらるを知りてさておく世こそ

つたなき

国つ物足らずなりなばどるらるは山とつむとも何にかはせむ
これらの歌に「どる」とか、「どるらる」とかあるのは、外国
商人の手によりて輸入せらるる悪質なメキシコドル、香港^{ホンコン}ドル
などの洋銀をさす。それは民間に流通するよりも多く徳川幕府の
手に入つて、一分銀に改鑄せらるるというものである。

「わたしがこんな歌をつくつたのはめずらしいでしょう。」と半
蔵が言い出した。

「しかし、宮川先生の旧い弟子^{ふるでし}仲間では、半蔵さんは歌の詠^よめる
人だと思つていましたよ。」と香蔵が答える。

「それがです、自分でも物になるかと思ひ初めたのは、横須賀の

旅からです。あの旅が歌を引き出したんですね。詠んで見たら、自分にも詠める。」

「ほら、君が横須賀の旅から贈ってくだすったのがあるじゃありませんか。」

「でも、香蔵さん、吾家うちの阿爺おやじが俳諧はいかいを楽しむのと、わたしが和歌を詠んで見たいと思うのでは、だいぶその心持ちに相違があるんです。わたしはやはり、本居先生の歌にもとづいて、いくらかでも古むかしの人の素直すなおな心に帰って行くために、詩を詠むと考えるたいんです。それほど今の時世に生まれたものは、自然なものを失っていると思うんですが、どうでしょう。」

半蔵らはすべてこの調子で踏み出して行こうとした。あの本居

宣長ののこした教えを祖述するばかりでなく、それを極端にまで
 持つて行つて、実行への道をあげたところに、日ごろ半蔵らが畏
 敬する平田篤胤ひらたあつたねの不屈きはくな気魄がある。半蔵らに言わせると、鈴
 の屋の翁にはなんと言つても天明寛政年代の人の寛濶かんかつさがある。
 そこへ行くと、氣吹いぶきの舎大人やのうしは狭い人かもしれないが、しかしそ
 の迫りに迫つて行つた追求心が彼らの時代の人の心に近い。そこ
 が平田派の学問の世に誤解されやすいところで、篤胤大人の上に
 及んだ幕府の迫害もはなはだしかった。『大扶桑国考』『皇
 朝ようむきゆうれき無窮曆』などの書かれるころになると、絶板を命ぜられ
 るはおろか、著述することまで禁じられ、大人うしその人も郷里の秋
 田へ隠退を余儀なくされたが、しかし大人は六十八歳の生しょうがい涯

を終わるまで決して屈してはいなかった。同時代を見渡したところ、平田篤胤に比すべきほどの必死な学者は半蔵らの目に映つて来なかった。

五月も十日過ぎのことで、安政大獄当時に極刑に処せられたもののうち、あるものの忌日がやつて来るような日を迎えて見ると、亡き梅田雲浜な うめだうんぴん、吉田松陰、頼鴨崖らいおうがいなどの記憶がまた眼前の青葉と共に世人の胸に活いき返つて来る。半蔵や香蔵は平田篤胤没後の門人として、あの先輩から学び得た心を抱いて、互いに革新潮流うずの渦の中へ行こうとこころざしていた。

降りつづける五月の雨は友だちの足をとどめさせたばかりでなく、親しみを増させるなかだちともなった。半蔵には新たに一人の弟子ができて、今は住み込みでここ本陣に來ていることも香蔵をよろこばせた。隣宿落合の稲葉屋の子息、林勝重かっしげというのがその少年の名だ。学問する機運に促されてか、馬籠本陣へ通つて來る少年も多くある中で、勝重ほど末頼もしいものを見ない、と友だちに言つて見せるのも半蔵だ。時には、勝重は勉強部屋の方から通つて來て、半蔵と香蔵とが二人で話しつつづけているところへ用をききに顔を出す。短い袴はかま、浅黄色あさぎいろの襦袢じゅばんの襟えり、前髪をとつた額ひたいご越こしにこちらを見る少年らしい目つきの若々しさは、半蔵らにもありし日のことを思い出させずには置かなかつた。

「そうかなあ。自分らもあんなだったかなあ。わたしが弁当持ちで、宮川先生の家へ通い初めたのは、ちょうど今の勝重さんの年でしたよ。」

と半蔵は友だちに言つて見せた。

そろそろ香蔵は中津川の家の方のことを心配し出した。強風強雨が来たあとの様子が追いつ追いつわかつて見ると、あらまち荒町には風のために吹きつぶされた家もある。峠の村にも半つぶれの家があり、棟に打たれて即死した馬さえある。そこいらのはたけ畠の麦が残らず倒れたなぞは、風あたりの強い馬籠峠の上にしてもめずらしいことだ。

おまんは店座敷へ来て、

「香蔵さん、お宅の方でも御心配なすつていらつしやるでしようが、きようお歸し申したんじや、わたしどもが心配です。吾家の佐吉に風呂でも焚かせますに、もう一日御逗留なすつて下さい。年寄りの言うことをきいてください。」

と言つて勧めた。この継母がはいつて来ると、半蔵は急にすわり直した。おまんの前では、崩している膝でもすわり直すのが半蔵の癖のようになっていた。

「ごめんください。」

と子供に言つて見せる声がして、部屋の敷居をまたこうとする幼いものを助けながら、そこへはいつて来たのは半蔵の妻だ。娘のお糸は五つになるが、下に宗太という弟ができてから、にわか

に姉さんらしい顔つきで、お民に連れられながら、客のところへ茶を運んで来た。一心に客の方をめぐけて、茶をこぼすまいとしながら歩いて来るその様子も子供らしい。

「まあ、香蔵さん、見てやってください。」とおまんは言った。

「お桑があなたのところへお茶を持ってまいりましたよ。」

「この子が自分で持つて行くと云つて、きかないんですもの。」とお民も笑つた。

半蔵の家では子供まで来て、雨に逗留する客をもてなした。

とうとう香蔵は二晩も馬籠に泊まつた。東美濃みのから伊那いなの谷へ

かけての平田門人らとも互いに連絡を取ることに、場合によつては京都、名古屋にある同志のものを応援することを半蔵に約して置

いて、三日目には香蔵は馬籠の本陣を辞した。

友だちが帰って行ったあとになって見ると、半蔵は一層わびしい雨の日を山の上に送った。四日目になっても雨は降り続き、風もすこし吹いて、橋の損所や舞台の屋根を修繕するために村じゅう一軒に一人ずつは出た。雨間あままというものがすこしもなく、雲行きは悪く、荒れ気味で安心がなかった。村には長雨のために、壁がいたんだり、土の落ちたりした土蔵もある。五日目も雨、その日になると、崖がけになった塩沢あたりの道がぬける。香蔵が帰って行った中津川の方の大橋付近では三軒の人家が流失するという騒ぎだ。日に日に木曾川の水は増し、橋の通行もない。街道は往来止めだ。

ようやく五月の十七日ごろになって、上り下りの旅人が動き出した。尾張藩の勘定奉行、普請役御目付、錦織の奉行、いずれも江戸城本丸の建築用材を見分のためとあつて、この森林地帯へ入り込んで来る。美濃地方が風雨のために延引となつていた長崎御目付の通行がそのあとに続く。

「黒船騒ぎも、もうたくさんだ。」

そう思っている半蔵は、また木曾人足百人、伊那の助郷二百人を用意するほどの長崎御目付の通行を見せつけられた。遠く長崎の港の方には、新たにドイツの船がはいって来て、先着のヨーロッパ諸国と同じような通商貿易の許しを求めるために港内に碇泊しているとのうわさもある。

三

七月を迎えるころには、寛齋は中津川の家を養子に譲り、住み慣れた美濃の盆地も見捨て、かねて老後の隠棲いんせいの地と定めて置いた信州伊那の谷の方へ移って行つた。馬籠にはさびしく旧師を見送る半蔵が残つた。

「いよいよ先生ともお別れか。」

と半蔵は考えて、本陣の店座敷の戸に倚よりながら、寛齋が引き移って行つた谷の方へ思いを馳はせた。隣宿妻籠つまごから伊那への通路にあたる清内路せくないじには、平田門人として半蔵から見れば先輩の原

信^{のぶ}好^{よし}がある。御坂峠^{みさかとうげ}、風越峠^{かぜこしとうげ}なぞの恵那山脈^{えな}一帯の地勢

を隔てた伊那の谷の方には、飯田^{いいた}にも、大川原にも、山吹^{やまぶき}にも、

座光寺にも平田同門の熱心な先輩を数えることができる。その中

には、篤胤^{あつせい}大人畢生^{ひっせい}の大著でまだ世に出なかった『古史伝』三

十一卷の^{じようぼく}上木^{じようぼく}を思い立つ座光寺の北原^{きたはら}稲雄^{いなお}のような人があ

る。古学^{こがく}研究^{けんきゅう}の筈^{むしろ}を開いて、先師遺著^{せんしいうしよ}の輪講^{りんかう}を思い立つ山吹^{やまぶき}の片^か

桐春^{たぎりしゅんいち}一^{いち}のような人がある。年々寒露^{かんろ}の節に入る日を会日と定

め、金二分とか、金半分とかの会費を持ち寄つて、地方にいて書

籍を購読するための書籍講というものを思い立つものもある。

半蔵の周囲には、驚くばかり急激な勢いで、平田派の学問が伊

那地方の人たちの間に伝播^{でんぱ}し初めた。飯田の在^{とも}の伴野^{ばんの}という村に

は、五十歳を迎えてから先師没後の門人に加わり、婦人ながらに

勤王の運動に身を投じようとする松尾多勢子まつおたせこのような人も出て来

た。おまけに、江戸には篤胤大人の祖述者をもって任ずる平田鉄か

ねたね

胤ねたねのようなよい相続者があつて、地方にある門人らを指導する

ことを忘れていなかった。一切の入門者がみな篤胤没後の門人として取り扱われた。決して鉄胤の門人とは見なされなかった。半

蔵にして見ると、彼はこの伊那地方の人たちを東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見いだしたのである。賀茂真淵かものみづちから

本居宣長、本居宣長から平田篤胤と、諸大人の承うけ継ぎ承け継ぎ

して来たものを消えない学問の燈火ともしびにたとえるなら、彼は木曾の

ような深い山の中に住みながらも、一方には伊那の谷の方を望み、

一方には親しい友だちのいる中津川から、落合、附智つけち、久々里くくり、大井、岩村、苗木なえぎなぞの美濃の方にまで、あそこにも、ここにもと、その燈火を数えて見ることができた。

当時の民間にある庄屋しょうやたちは、次第にその位置を自覚し始めた。さしあたり半蔵としては、父吉左衛門きちざえもんから青山の家を譲られる日のことを考えて見て、その心じたくをする必要があつた。吉左衛門と、隣家の金兵衛きんべえとが、二人ふたりともそろって木曾福島役所あてに退役願いを申し出たのも、その年、万延まんえん元年の夏のはじめであつたからで。

長いこと地方自治の一単位とも言うべき村方の世話から、交通輸送の要路にあたる街道一切の面倒まで見て、本陣問屋庄屋の三役を兼ねた吉左衛門と、年寄役の金兵衛とが二人ともようやく隠退を思うころは、吉左衛門はすでに六十二歳、金兵衛は六十四歳に達していた。もつとも、父の退役願いがすぐにきき届けられるか、どうかは、半蔵にもわからなかったが。

時には、半蔵は村の見回りに行つて、そこいらを出歩く父や金兵衛にあう。吉左衛門ももう杖つえなぞを手にして、新たに養子を迎えたお喜佐きさ（半蔵の異母妹）の新宅を見回りに行くような人だ。金兵衛は、と見ると、この隣人は袂たもとに珠数じゆずを入れ、かつては半蔵の教え子でもあった亡きな鶴松つるまつのことを忘れかねるというふうで、

位牌所いはいじよを建こんりゆう立するとか、木魚もくぎよを寄付するとかに、何かにつけて村の寺道の方へ足を運ぼうとするような人だ。問屋の九太夫にもあう。

「九太夫さんも年を取ったなあ。」

そう想おもつて見ると、金兵衛の家には美濃の大井から迎えた伊之助いすけという養子ができ、九太夫の家にはすでに九郎兵衛くろべえという後継あとつぎがある。

半蔵は家もどに戻つてからも、よく周囲あたりを見回した。妻をも見て言つた。

「お民、ことしか来年のうちには、お前も本陣の姉あねさまだぜ。」

「わかつていますよ。」

「お前にこの家がやれるかい。」

「そりや、わたしだつて、やれないことはないと思いますよ。」

先代の隠居半六から四十二歳で家督を譲られた父吉左衛門に比べると、半蔵の方はまだ十二年も若い。それでももう彼のそばには、お民のふところへ子供らしい手をさし入れて、乳房ちぶさを探ろうとする宗太がいる。朴ほおの葉に包んでお民の与えた熱い塩結飯しおむすびをうまそうに頬張ほおばるような年ごろのお糸くめがいる。

半蔵は思い出したように、

「ごらん、吾家うちの阿爺おやじはことしで勤続二十一年だ、見習いとして

働いた年を入れると、実際は三十七、八年にもなるだろう。あれで祖父おじいさんもなかなか頑張がんばっていて、本陣庄屋の仕事を阿爺おやじに任

せていいとは容易に言わなかった。それほど大事を取る必要もあるんだね。おれなぞは、お前、十七の歳としから見習いだぜ。しかし、おれはお前の兄さん（寿平次）のように事務の執れる人間じゃない。お大名を泊めた時の人数から、旅籠はたごちん賃がいくらで、燭しよくだ台いが何本と事細かに書き留めて置くような、そういうことに適した人間じゃない——おれは、こんなばかな男だ。」

「どうしてそんなことを言うんでしょう。」

「だからさ。今からそれをお前に断わって置く。お前の兄さんもおもしろいことを言ったよ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に参加すると想おもって見たまえ、とき。しかし、おれも庄屋の子だ。平田先生の門人の一人ひとりだ。ま

あ、おれはおれで、やれるところまでやって見る。」

「半蔵さま、福島からお差紙さしがみ（呼び出し状）よなし。ここはど
うしても、お前さまに出ただかかんけりやならん。」

村方のものがそんなことを言つて、半蔵のところへやつて来た。
村民同志の草山の争いだ。いたるところに森林を見る山間の地
勢で、草刈る場所も少ない土地を争うところから起こつて来る境
界のごたごただ。草山口論つづということさんろんを約めて、「山論」とい
う言葉で通つて来たほど、これまでとてもその紛擾ふんじょうは木曾山
に絶えなかつた。

錢相場引き上げ、小判買い、横浜交易などの声につれて、一方には財界變動の機会に乗り全盛を謳^{うた}わるる成金もあると同時に、細民の苦しみむこともおびた^{だいず}だしい。米も高い。両に四斗五升もした。大豆一駄^だ二両三分、酒一升二百三十二文、豆腐一丁四十二文もした。諸色^{しよしき}がこのとおりだ。世間一統動揺して来ている中で、村民の心がそう静かにしていられるはずもなかった。山論までが露骨になって来た。

しかし半蔵にとつて、大げさ^{おお}に言えば血で血を洗うような、こうした百姓同志の争いほど彼の心に深い悲しみを覚えさせるものもなかった。福島役所への訴訟^{そしょうぎた}沙汰にまでなった山論——訴えた方は隣村湯舟沢の村民、訴えられた方は馬籠宿内の一部落にあた

る峠村の百姓仲間である。山論がけんかになつて、峠村のものが鎌十五挺かま ちようほど奪い取られたのは過ぐる年の夏のこと、いったんは馬籠の宿役人が仲裁に入り、示談になつたはずの一年越しの事件だ。この争いは去年の二百二十日から九月の二十日ごろまで、およそ二か月にもわたつた。そのおりには隣宿妻籠脇本陣わきほんじんの扇おうぎやとくえもん屋得右衛門から、山口村の組頭くみがしらまで立ち合いに来て、草山の境界を見分するため一同弁当持参で山登りをしたほどであつた。ところが、湯舟沢村のものから不服が出て、その結果は福島役所にまで持ち出されるほどもつ紛れたのである。二人の百姓総代は峠村からも馬籠の下町からも福島に呼び出された。両人のものが役所に出頭して見ると、直ちに入牢にゆうろうを仰せ付けられて、八

沢^{さわ}送りとなった。福島からは別に差^さ紙^{しがみ}が来て、年寄役付き添いの上、馬籠の庄屋に出頭せよとある。今は、半蔵も躊^{ちゆう}躇^{うちよ}すべき時でない。

「お民、おれはお父^{とつ}さんの名^み代^{ようだい}に、福島まで行つて来る。」
と妻に言つて、彼は役所に出頭する時の袴^{はかま}の用意などをさせた。
自分でも着物を改めて、堅く帯をしめにかかった。

「どうも人^{にん}氣^きが穏やかでない。」
父、吉左衛門はそれを半蔵に言つて、福島行きのしたくのできるのを待った。

この父は自分の退役も近づいたという顔つきで、本陣の囲炉裏
ばたに続いた寛ぎくつろの間の方まへ行つて、その部屋へやの用筆ようだんす笥から馬
籠湯舟沢両村の古い絵図なぞを取り出して来た。

「半蔵、これも一つの参考だ。」

と言つて子の前に置いた。

「双方入り合いの草刈り場所というものは、むずかしいよ。山論、
山論で、そりや今までだつてもずいぶんごたごたしたが、大抵は
示談で済んで来たものだ。」

とまた吉左衛門は軽く言つて、早く不幸な入牢者を救えという
意味を通わせた。

湯舟沢の方の百姓は、組頭くみがしらとも、都合八人のものが福島

役所に呼び出された。馬籠では、年寄役の儀助、同役与次衛門よじえもん、

それに峠の組頭平助がすでに福島へ向けて立つて行つた。なお、

年寄役金兵衛の名代みようだいとして、隣家の養子伊之助も半蔵のあと

から出かけることになっている。草山口論も今は公おおやけの場処に出て

争おうとする御用の山論一条だ。

これらの年寄役は互いに代わり合つて、半蔵の付き添いとして
行くことになったのだ。

「おれも退役願ひを出したくらいだから、今度は顔を出すまいよ
。」

と父が言葉を添えるころには、峠の組頭平助が福島から引き返

して、半蔵を迎えに來た。半蔵は平助の付き添いに力を得て、脚き絆やはんに草鞋わらじばき尻端折しりはしよりのかいがいしい姿になつた。

諸国には当時の嚴禁なる百姓一揆いつきも起こりつつあつた。しかし

半蔵は、村の長老たちが考えるようにそれを單なる農民の謀反むほんとは見なせなかつた。百姓一揆の処罰と言へば、軽いものは答むち、入れずみ墨えいろう、追ひ払い、重いものは永牢、打ち首のような嚴刑はあり

ながら、進んでその苦痛を受けようとするほどの要求から動く百姓の誠実と、その犠牲的な精神とは、他の社会に見られないものである。当時の急務は、下民百姓を教えることではなくて、あべこべに下民百姓から教えられることであつた。

「百姓には言挙げことあということもさらにない。今こそ草山の争いぐ

らいでこんな内輪げんかをしているが、もつと百姓の目をさます時が来る。」

そう半蔵は考えて、庄屋としての父の名代みようだいを勤めるために、福島役所をさして出かけて行くことにした。

家を離れてから、彼はそこにいない人たちに呼びかけるように、ひとり言つて見た。

「同志打ちはやせ。今は、そんな時世じゃないぞ。」

四

十三日の後には、福島へ呼び出されたものも用済みになり、湯

舟沢峠両村の百姓の間には和解が成り立った。

八沢の牢舎ろうやを出たもの、証人として福島之城下に滞在したもの、いずれも思い思いに帰村を急ぎつつあった。十四日目には、半蔵は隣家の伊之助と連れだって、峠の組頭平助とも一緒に、暑い木曾路を西に帰つて来る人であった。

福島から須原すはら泊まりで、山論和解の報告をもたらしながら、半蔵が自分の家の入り口まで引き返して来た時は、ちょうど門内そうじの庭掃除に余念もない父を見た。

「半蔵が帰りましたよ。」

おまんはだれよりも先に半蔵を見つけて、店座敷の前の牡丹ぼたんの下あたりを掃いている吉左衛門にそれを告げた。

「お父さん、行つてまいりました。」

半蔵は表庭の梨なしの木の幹かきに笠を立てかけて置いて、汗をふいた。その時、簡単に、両村のものの和解をさせて来たあらましを父に告げた。双方入り合いの草刈り場所を定めたこと、新たに土塚つちづかを築いて境界をはつきりさせること、最寄りの百姓ばかりがその辺へは鎌かまを入れることにして、一同福島から引き取つて来たことを告げた。

「それはまあ、よかった。お前の帰りがおそいから心配していたよ。」

と吉左衛門は庭の箒ほうきを手にしたままで言った。

もはや秋も立つ。馬籠あたりに住むものがきびしい暑さを口に

するころに、そこいらの石垣いしがきのそばでは蟋蟀こおろぎが鳴いた。半蔵はその年の盆も福島の方で送って来て、さらに村民のために奔走しなければならぬほどいそがしい思いをした。

やがて両村立ち合いの上で、かねて争いの場処である草山に土塚を築き立てる日が来た。半蔵は馬籠そうやくにんの惣役人こまえと、百姓小前のものを連れて、草いきれのする夏山の道をたどった。湯舟沢からは、庄屋、組頭四人、百姓全部で、両村のものを合わせるとおよそ二百人あまりの人数が境界の地点と定めた深い沢に集まった。

「そんなとろくさいことじゃ、だちかん。」

「うんと高く土を盛れ。」

半蔵の周囲には、口々に言いおのしる百姓の声が起こる。

四つの土塚がその境界に築き立てられることになった。あるものは洞が根先の大石へ見通し、あるものは向こう根の松の木へ見通しというふうに。そこいらが掘り返されるたびに、生々しい土の臭気が半蔵の鼻をつく。工事が始まったのだ。両村の百姓は、藪蚊の襲い来るのも忘れて、いずれも土塚の周囲に集合していた。その時、背後から軽く半蔵の肩をたたくものがある。隣村妻籠の庄屋として立ち合いに来た寿平次が笑いながらそこに立っていた。

「寿平次さん、泊まっていたらどうです。」

「いや、きょうは連れがあるから帰ります。二里ぐらいの夜道はわけありません。」

半蔵と寿平次とがこんな言葉をかわすころは、山で日が暮れた。四番目の土塚を見分する時分には、松^{たいまつ}明をともして、ようやく見通しをつけたほど暗い。境界の中心と定めた樹木から、ある大石までの間に土手を掘る工事だけは、余儀なく翌日に延ばすことになった。

雨にさまたげられた日を間に置いて、翌々日にはまた両村の百姓が同じ場所に集合した。半蔵は妻籠からやって来る寿平次と一緒にになって、境界の土手を掘る工事にまで立ち合った。一年越しにらみ合っていた両村の百姓も、いよいよ双方得心ということに

なり、長い山論もその時になって解決を告げた。

日暮れに近かった。半蔵は寿平次を誘いながら家路をさして歸つて行つた。横須賀の旅以来、二人は一層親しく往来する。義理ある兄きょうだい弟であるばかりでなく、やがて二人は新進の庄屋仲間でもある。

「半蔵さん、」と寿平次は石ころの多い山道を歩きながら言つた。「すべてのものが露骨になつて来ましたね。」

「さあねえ。」と半蔵が答えた。

「でも、半蔵さん、この山論はどうです。いや、草山の争いばかりじゃありません、見るもの聞くものが、実に露骨になつて来ましたね。こないだも、水戸みとの浪人ろうにんだなんていう人が吾家うちへやつ

て来て、さんざん文句を並べたあげくに、何か書くから紙と筆を貸せと言ひ出しました。扇子せんすを二本書かせたところが、酒を五合に、錢を百文、おまけに草鞋わらじ一足ねだられましたよ。早速さつそく追ひ出しました。あの浪人はぐでぐでに酔つて、その足で扇屋へもぐずり込んで、とうとう得右衛門とくえもんさんの家に寝込んでしまったそうですよ。見たまえ、この街道筋にもえらい事がありますぜ。長崎の御目付おめつけがお下りで通行の日でさ。永井様ながいとかいう人の家来が、人足がおそいと言うんで、わたしの村の間屋と口論になつて、都合五人で問屋を打ちすえました。あの時は木刀が折れて、問屋の頭には四か所も疵きずができました。やり方がすべて露骨じやありませんか。君と二人ふたりで相州の三浦へ出かけた時分さ——あのころに

は、まだこんなじやありませんでしたよ。」

「お師匠さま。」

夕闇ゆうやみの中に呼ぶ少年の声と共に、村の方からやつて来る提ちよう灯ちんが半蔵たちに近づいた。半蔵の家のものは帰りにおそくなるのを心配して、弟子でしの勝重かつしげに下男しもなの佐吉をつけ、途中まで迎えによこしたのだ。

山の上の宿場らしい燈火あかりが街道の両側にかがやくところに、半蔵らは馬籠の本陣に帰り着いた。家にはお民が風呂ふろを用意して、夫や兄を待ち受けているところだった。その晩は、寿平次も山登り

の汗を洗い流して、半蔵の部屋へやに来てくつろいだ。

「木曾は蠅はえの多いところだが、蚊帳かやを釣つらずに暮らせるのはいい。水の清いのと、涼しいのと、そのせいだろうかねえ。」

と寿平次が兄らしく話しかけることも、お民をよろこばせた。

「お民、お母さんつかに内証で、今夜はお酒を一本つけておくれ。」

と半蔵は言つた。その年になつてもまだ彼は継母の前で酒をやることを遠慮している。どこまでも継母に仕えて身を慎もうとすることは、彼が少年の日からであつて、努めに努めることは第二天性のようになつてゐる。彼は、経験に富む父よりも、賢い継母のおまんを恐れている。

酒のさかなには、冷豆腐ひややつこ、薬味、摺すり生薑しょうがに青紫蘇あおじそ。それ

に胡瓜きゅうりもみ、茄子なすの新漬しんづけぐらいのところで、半蔵と寿平次とは涼しい風の来る店座敷の軒近いところに、めいめい膳ぜんを控えた。「ここへ来ると思い出すなあ。あの横須賀行きへやの半蔵さんを誘いに来て、一晩泊めていただいたのもこの部屋へやですよ。」

「あの時分と見ると、江戸も変わったらしい。」

「大変わりおおか。こないだも江戸土産みやげを吾家うちへ届けてくれた飛脚があ

りましてね、その人の話には攘夷論じょういろんが大変な勢いだそうですね。

浪人は諸方に乱暴する、外国人は殺される、洋学者という洋学者は脅迫される。江戸市中の唐物店とうぶつやでは店を壊こわされる、実に物すごい世の中になりましたなんて、そんな話をして行きましたつけ

。」

「表面だけ見れば、そういうこともあるかもしれませんが。」

「しかし、半蔵さん、こんなに攘夷なんてことを言い出すようになって来て——それこそ、猫も、杓子もですよ——これで君、いいでしょうかね。」

疲労を忘れる程度に盃さかずきを重ねたあとで、半蔵はちよつと座をたつて、廂ひさしから外の方に夜の街道の空をながめた。田の草取りの季節らしい稲妻のひらめきが彼の目に映った。

「半蔵さん、攘夷なんていうことは、君の話によく出る『漢からころ』ですよ。外国を夷狄いてきの国と考えてむやみに排斥するのは、やつぱり唐土もろこしから教わったことじゃありませんか。」

「寿平次さんはなかなかえらいことを言う。」

「そりや君、今日こんにちの外国は昔の夷狄いてきの国とは違う。貿易も、交通も、世界の大勢で、やむを得ませんさ。わたしたちはもつとよく考えて、国を開いて行きたい。」

その時、半蔵はもとの座にかえつて、寿平次の前にすわり直した。

「あゝあゝ、変な流行だなあ。」と寿平次は言葉を継いで、やがて笑い出した。「なんぞというと、すぐに攘夷をかつぎ出す。半蔵さん。君のお仲間は今日流行の攘夷をどう思いますかさ。」

「流行なんて、そんな寿平次さんのように軽くは考えませんよ。君だつてもこの社会の変動には悩んでいるんですよ。良い小判はさらって行かれる、物価は高くなる、みんなの生活は苦しくな

る——これが開港の結果だとすると、こんな排外熱の起こつて来るのは無理もないじやありませんか。」

二人ふたりが時を忘れて話し込んでいるうちに、いつのまにか夜はふけて行つた。酒はとつくにつめたくなり、井どんぶりの中の水に冷やした豆腐も崩くずれた。

五

平田篤胤あつたね没後の門人らは、しきりに実行を思うころであつた。伊那いなの谷の方のだれ彼は白河家しらかわを足だまりにして、京都の公卿くげたちの間に遊説ゆうぜいを思い立つものがある。すでに出発したものも

ある。江戸在住の平田鉄胤かねたねその人すら動きはじめたとの消息すらある。

当時は井伊大老横死のあとをうけて、老中安藤あんどう対馬守つしまのかみを幕府の中心とする時代である。だれが言い出したとも知れないような流言が伝わって来る。和学講談所（主として有職ゆうそく故実こじつを調査する所）の塙次郎はなわという学者はひそかに安藤対馬の命を奉じて北ほうじよう

条氏廢帝の旧例を調査しているが、幕府方には尊王攘夷説の根源を断つために京都の主上を幽ゆうし奉ろうとする大きな野心がある。こんな信じがたいほどの流言が伝わって来るころだ。当時の外国奉行堀織部ほりおりべの自殺も多くの人を驚かした。そのうわさもまた一つの流言を生んだ。安藤対馬はひそかに外国人と結託してい

る。英国公使アールコックに自分の愛妾まで与え許している、堀織部はそれを苦諫くかんしても用いられないので、刃やいばに伏してその意を致いたしたというのだ。流言は一編の偽作の諫書にまでなつて、漢文で世に行なわれた。堀織部の自殺を憐あわれむものが続々と出て来て、手向たむけの花や線香がその墓に絶えないというほどの時だ。

だれもがこんな流言を疑い、また信じた。幕府の威信はすでに地を掃はらい、人心はすでに徳川を離れて、皇室再興の時期が到来したというような声は、血氣さか壮んな若者たちの胸を打たずには置かなかった。

その年の八月には、半蔵は名高い水戸みとの御隠居（烈公）の墓こうき去よをも知った。吉左衛門親子には間接な主人ながらに縁故の深

い尾張藩主（徳川慶勝^{よしかつ}）をはじめ、一橋慶喜^{ひとつばしよしのぶ}、松平春嶽^{んかく}、山内容堂^{やまのうちにやうどう}、その他安政大獄当時に幽屏^{ゆうへい}せられた諸大名も追い追いと謹慎を解かれる日を迎えたが、そういう中であつて、あの水戸の御隠居ばかりは永蟄居^{えいちつきよ}を免ぜられたことも知らずじまいに、江戸駒込^{こまごめ}の別邸で波瀾^{はらん}の多い生涯^{しょうがい}を終わった。享年六十一歳。あだかも生前の政敵井伊大老のあとを追つて、時代から沈んで行く夕日のように。

半蔵が年上の友人、中津川本陣の景蔵は、伊那にある平田同門北原稲雄の親戚^{しんせき}で、また同門松尾多勢子^{たせこ}とも縁つづきの間柄である。この人もしばらく京都の方に出て、平田門人としての立場から多少なりとも国事に奔走したいと言つて、半蔵のところへも

その相談があつた。日ごろ謙讓な性質で、名^み聞^きを好まない景蔵のような友人ですらそうだ。こうなると半蔵もじつとしていられなかつた。

父は老い、街道も日に多事だ。本陣問屋庄屋の仕事は否^{いや}でも応^{おう}でも半蔵の肩にかかつて来た。その年の十月十九日の夜にはまた、馬籠の宿は十六軒ほど焼けて、半蔵の生まれた古い家も一晩のうちには灰になった。隣家の伏見屋、本陣の新宅、皆焼け落ちた。風あたりの強い位置にある馬籠峠とは言いながら、三年のうちに二度の大火は、村としても深い打撃であつた。

翌文 ぶんきゆう 久元年の二月には、

半蔵とお民は本陣の裏に焼け残った土蔵のなかに暮らしていた。土蔵の前にさしかけを造り、板がこいをして、急ごしらえの下 したへつつい 竈 かまど を置いたところには、下女が炊事をしていた。土蔵に近く残った味噌納屋 みそなや の二階の方には、吉左衛門夫妻が孫たちを連れて仮住居 かりずまい していた。二間ほど座敷があつて、かつて祖父半六が隠居所にあててあつたのもその二階だ。その辺の石段を井戸の方へ降りたところから、木小屋、米倉などのあるあたりへかけては、火災をまぬかれた。そこには佐吉が働いていた。

旧暦二月のことで、雪はまだ地にある。半蔵は仮の雪隠 せつちん を出てから、焼け跡の方を歩いて、周囲を見回した。上段の間、奥の

間、仲の間、次の間、寛くつろぎの間、店座敷、それから玄関先の広い板の間など、古い本陣の母屋もやの部屋へや部屋は影も形もない。灰寄せの人夫が集まつて、釘くぎや金物の類たぐいを拾った焼け跡には、わずかに街道へ接した堀へいの一部だけが残った。

さしあたりこの宿場になくてかなわないものは、会所（宿役人寄合所）だ。幸い九太夫の家は火災をまぬかれたので、仮に会所はそちらの方へ移してある。問屋場の事務も従来吉左衛門の家と九太夫の家とで半月交替に扱って来たが、これも一時九太夫方へ移してある。すべてが仮かりで、わびしく、落ち着かなかつた。吉左衛門は半蔵に力を添えて、大工を呼べ、新しい母屋の絵図面を引けなどと言って、普請工事の下相談もすでに始まりかけていると

ころであつた。

京都にある帝の妹君、みかど和宮内親王かずのみやないしんのうが時の將軍（徳川家いえも茂ち）へ御降嫁とあつて、

東山道御通行の触れ書が到来したのは、村ではこの大火後の取り込みの最中であつた。

宿役人一同、組頭くみがしらまでが福島役所から来た触れ書を前に

置いて、談はなし合あわねばならないような時がやつて来た。この相談には、持病せきの咳せきでこもりがちな金兵衛までが引っぱり出された。

吉左衛門は味噌納屋の二階から、金兵衛は上の伏見屋の仮住かりずま居いから、いずれも仮の会所の方に集まつた。その時、吉左衛門は旧ふるい友だちを見て、

「金兵衛さん、馬籠の宿でも御通行筋の絵図面を差し出せとあり

ますよ。」

と言つて、互いに額ひたいを集めた。

本陣問屋庄屋としての仕事はこんなふうに、あとからあとからと半蔵の肩に重くかかつて来た。彼は何をさし置いても、年取つた父を助けて、西よりする和宮様の御一行をこの木曾路に迎えねばならなかった。

第六章

一

和宮様^{かずのみやさま} 御降嫁のことがひとたび知れ渡ると、沿道の人民の間には非常な感動をよび起こした。従来、皇室と将軍家との間に結婚の沙汰^{さた}のあったのは、前例のないことでもないが、種々な事情から成り立たなかつた。その実現されるようになったのは全く和宮様を初めとするという。おそらくこれは盛典としても未曾^{みぞ}有^う、京都から江戸への御通行としても未曾有のことであろうと言

わるる。今度の御道筋にあたる宿々村々のものがこの御通行を拝しうるといふは非常な光榮に相違なかつた。

木曾谷、きそだに しも下四宿の宿役人としては、

しかしただそれだけでは済まされなかつた。彼らは一度は恐縮し、一度は当惑した。多年の

経験が教えるように、この街道の輸送に役立つ御伝馬おてんまには限りがある。

木曾谷中の人足を寄せ集めたところで、その数はおおよそ知れたものである。それにはどうしても伊那いな地方の村民を動かして、多数な人馬を用意し、この未曾有の大通行に備えなければならぬ。

木曾街道六十九次の宿場はもはや嘉永かえい年度の宿場ではなかつた。年老いた吉左衛門や金兵衛がいつまでも忘れかねているような天

んぼう

保年度のそれではもとよりなかった。いつまで伊那の百姓が道中奉行の言うなりになって、これほど大がかりな人馬の徴集に應ずるかどうかはすこぶる疑問であつた。

馬は四分より一疋^{ひき}出す。人足は五分より一人^{ひとり}出す。人馬共に随分丈夫なものを出す。老年、若輩、それから弱馬などは決して出すまい。

これは伊那地方の村民総代と木曾谷にある下四宿の宿役人との間に取りかわされた文化^{ぶんか}年度以来の契約である。馬の四分とか、人足の五分とかは、石^{こくだか}高に應じての歩合^{ぶあい}をさして言うことであ

つて、村々の人馬はその歩合によつて割り当てを命じられて来た。もつともこの歩合は天保年度になつて多少改められたが、人馬徴集の大体の方針には変わりがなかった。

宿駅のことを知るには、このきびしい制度のあつたことを知らねばならない。これは宿駅常置の御伝馬以外に、人馬を補充し、^{つぎ}継立てを応援するために設けられたものであつた。この制度がい^{すけ}わゆる助郷だ。徳川政府の方針としては、宿駅付近の郷村にある百姓はみなこれに応ずる義務があるとしてあつた。助郷は天下の公役で、^{こうえき}進んでそのお触れ当てに^こ応ずべきお定めのものときられていた。この課役を命ずるために、奉行は時に伊那地方を見分した。そして、助郷を勤めうる村々の石高を合計一万三百十一石

六斗ほどに見積もり、それを各村に割り当てた。たとえば最も大きな村は千六十四石、最も小さな村は二十四石というふうに。天^てりゅうがわ
龍川のほとりに住む百姓三十一か村、後には六十五か村のものは、こんなふうにして彼らの鋤^{くわ}を捨て、彼らの田園を離れ、伊那から木曾への通路にあたる風越^{かざこし}山の山道を越して、お触れ当てることにこの労役に参加して来た。

旅行も困難な時代であるとは言いながら、参観^{さんきんこうたい}交代の諸大名、公用を帯びた御番衆^{おぼんしゅうかた}方なぞの当時の通行が、いかに大げさのものであったかを忘れてはならない。徴集の命令のあるごとに、助郷を勤める村民は上下二組に分かれ、上組は木曾の野尻^{のじり}と^{みどの}三留野の両宿へ、下組は妻籠^{つまご}と馬籠^{まごめ}の両宿へと出、交代に朝勤め

夕勤めの義務に服して来た。もし天龍川の出水なぞで川西の村々にさしつかえの生じた時は、総助郷で出勤するという堅い取りきめであつた。徳川政府がこの伝馬制度を重くみた証拠には、直接にそれを道中奉行所の管理の下に置いたのでもわかる。奉行は各助郷に証人を兼ねるものを出勤させ、また、人馬の公用を保証するためには権威のある印鑑を造つて、それを道中宿々にも助郷加宿にも送り、紛らわしいものもあらば押え置いて早速注進せよさつそくというほどに苦心した。いかんせん、百姓としては、御通行の多い季節がちやうど農業のいそがしいころにあたる。彼らは従順で、よく忍耐した。中にはそれでも困窮のあまり、山抜け、谷崩れ、くず出水なぞの口実にかこつけて、助郷不参の手段を執るような村々

をさえ生じて来た。

そこへ和宮様の御通行があるという。本来なら、これは東海道の經由であるべきところだが、それが模様替えになって、木曾街道の方を選ぶことになった。東海道筋はすこぶる物騒で、志士浪人が途^{みち}に御東下を阻止するというような計画があると伝えられるからで。この際、奉行としては道中宿々と助郷加宿とに厳達し、どんな無理をしても人馬を調達させ、供奉^{ぐぶ}の面々が西から続々殺到する日に備えねばならない。徳川政府の威信の實際に試^{ため}さるるような日が、とうとうやって来た。

寿平次は妻籠の本陣にいた。彼はその自宅の方で、伊那の助郷六十五か村の意向を探りに行つた扇屋得右衛門おうぎやとくえもんの歸りを待ち受けていた。ちようど、半蔵が妻のお民も、半年ぶりで実家のお婆あさんを見るために、馬籠から着いた時だ。彼女はたまの里歸りという顔つきで、母屋もやの台所口から広い裏庭づたいに兄のいるところへもちよつと挨拶あいさつに來た。

「來たね。」

寿平次の挨拶は簡単だ。

そこは裏山につづいた田舎風いなかふうな庭の一隅いちぐうだ。寿平次は十間ばかりの矢場をそこに設け、粗末ながらに小屋を造りつけて、多忙ひまな中に閑ひまを見つけては弓術に余念もない。庄屋しょうやらしい袴はかまをつ

け、片肌かたはだぬぎになつて、右の手に鞆ゆがけの革かわの紐ひもを巻きつけた兄をそんなところに見つけるのも、お民としてはめずらしいことだつた。

お民は持ち前の快活さで、

「兄さんも、のんきですね。弓なぞを始めたんですか。」

「いくらいそがしいたつて、お前、弓ぐらいひかず*に*いられるかい。」

寿平次は妹のしている前で、一本の矢を弦つるに当てがった。おりから雨があがつたあとの日をうけて、八寸ばかりの的まとは安土あづちの方に白く光つて見える。

「半蔵さんも元気かい。」

と妹に話しかけながら、彼は的に向かつてねらいを定めた。その時、弦を離れた矢は的をはずれたので、彼はもう一本の方を試みたが、二本とも安土あづちの砂の中へ行つてめり込んだ。

この寿平次は安土の方へ一手の矢を抜きに行つて、また妹のいるところまで引き返して来る時に言った。

「お民、馬籠のお父さんとつ（吉左衛門）や、伏見屋の金兵衛さんの退役願いはどうなつたい。」

「あの話は兄さん、おきき届けになりませんよ。」

「ほう。退役きき届けがたしか。いや、そういうこともあるう。」
多事な街道のこととも思い合わされて、寿平次はうなずいた。

「お民、お前も骨休めだ。まあ二、三日、妻籠で寝て行くさ。」

「兄さんの言うこと。」

兄きょうだい 妹いもうとがこんな話をしているところへ、つかつかと庭を回つ

て伊那から帰ったばかりの顔を見せたのは、日ごろ勝手を知つた得右衛門である。伊那でも有力な助郷総代を島田村や山村に訪ねるのに、得右衛門はその適任者であるばかりでなく、妻籠脇本陣じんの主人として、また、年寄役の一人ひとりとして、寿平次の父が早く亡なくなつてからは何かにつけて彼の後見役こうけんやくとなつて来たもの、この得右衛門である。得右衛門の家で造り酒屋をしているのも、馬籠の伏見屋によく似ていた。

寿平次はお民に目くばせして、そこを避けさせ、母屋もやの方へ庭を回つて行く妹を見送つた。小屋の荒い壁には弓をたてかけると

ころもある。彼は鞆ゆがけの紐ひもを解いて、その隠れた静かな場所に気の置けない得右衛門を迎えた。

得右衛門の報告は、寿平次が心配して待っていたとおりだった。伊那助郷が木曾にある下四宿の宿役人を通し、あるいは直接に奉行所にあてて愁訴を企てたのは、その日に始まったことでもない。三十一か村の助郷を六十五か村で分担するようになったのも、実は愁訴の結果であつた。ずっと以前の例によると、助郷を勤める村々は五か年を平均して、人足だけでも一か年の石こくだか高百石につき、十七人二分三厘三毛ほどに当たる。しかしこれは天保年度のこと、助郷の負担は次第に重くなつて来ている。ことに、黒船の渡つて来た嘉永年代からは、諸大名公役らが通行もしげく、そ

のたびに徴集されて嶮^{けんそ}岨な木曾路を往復することであるから、自然と人馬も疲れ、病人や死亡者を生じ、^{つぎた}繼立てにもさしつかえるような村々が出て来た。いつたい、助郷人足が宿場の勤めは一日であつても、山を越して行くには前の日に村方を出て、その晩に宿場に着き、翌日勤め、^{こづかいせん}繼ぎ場の遠いところへ^{こづかいせん}繼ぎ送つて宿場へ帰ると、どうしてもその晩は村方へ帰りがたい。一日の勤めに前後三日、どうかすると四日を費やし、あまつさえ泊まりの食物の入費も多く、折り返し使わるる途中で小遣^{こづかいせん}錢もかかり、その日に取つた人馬賃錢はいくらも残らない。ことさら遠い村方ではこの労役に堪^たえがたく、問屋とも相談の上でお触れ当ての人馬を代錢で差し出すとなると、この夫^{ぶせん}錢がまたおびただしい高に上る。

村々の痛みは一通りではない。なかなか宿駅常備の御伝馬ぐらいではおびただしい入用に不足するところから、助郷村々では人馬を多く差し出し、その勤めも続かなくなつて来た。おまけに、諸よしき色は高く、農業にはおくれ、女や老人任せで田畠たはたも荒れるばかり。こんなことで、どうして百姓の立つ瀬があろう。なんとかして村民の立ち行くように、宿方の役人たちにもよく考えて見てもらわないことには、助郷総代としても一同の不平をなだめる言葉がない。今度という今度は、容易に請うけじょう状も出しかねるというのが助郷側の言い分である。

「いや、大やかましおお。」と得右衛門は言葉をついだ。「そこをわたしがよく説き聞かせて、なんとかして皆の顔を立てる、お前た

ちばかりに働かしちや置かない。奉行所に願って、助郷を勤める村数を増すことにする。それに尾州藩だつてこんな場合に黙つて見ちやいまい。その方からお手当ても出よう。こんな御通行は二度とはあるまいから、と言いましたところが、それじゃ村々のものを集めてよく相談して見ようと先方でも折れて出ましてね、そんな約束でわたしも別れて来ましたよ。」

「そいつはお骨折りでした。早速、奉行所あての願書を作ろうじゃありませんか。野尻のじり、三留野みどの、妻籠つまご、馬籠まごめ、これだけの庄屋連名で出すことにしましょう。たぶん、半蔵さんもこれに賛成だろうと思います。」

「そうなさるがいい。今度わたしも伊那へ行つて、つくづくそう

思いました。徳川様の御威光というだけでは、百姓も言うことをきかなくなつて来ましたよ。」

「そりや得右衛門さん、おそい。いったい、諸大名の行列はもつと省いてもいいものでしょう。そうすれば、助郷も助かる。参観交代なぞはもう時世おくれだなんて言う人もありますよ。」

「こういう庄屋が出て来るんですからねえ。」

その時、寿平次は「今一手」と言いたげに、小屋の壁にたてかけた弓を取りあげて、弦に松脂まつやにを塗つていた。それを見ると、得右衛門も思い出したように、

「伊那の方でもこれが大流行おおはやり。武士が刀を質に入れて、庄屋の衆が弓をはじめるか。世の中も変わりましたね。」

「得右衛門さんはそう言うけれど、わたしはもっとからだを鍛えることを思いつきましたよ。ごらんない、こう乱脈な世の中になつて来ては、蛮勇をふるい起こす必要がありますね。」

寿平次は胸を張り、両手を高くさし延べながら、的に向かつて深く息を吸い入れた。左手の弓を押す力と、右手の弦をひき絞る力とで、見る見る血潮は彼の頬に上り、腕の筋肉までが隆起して震えた。背こそ低いが、彼ももはや三十歳のさかりだ。馬籠の半蔵と競い合つて、木曾の「山猿」を發揮しようという年ごろだ。そのそばに立っていて、混ぜ返すような声をかけるのは、寿平次から見れば小父さんおじのような得右衛門である。

「ポツン。」

「そうはいかない。」

とりあえず寿平次らは願書の草稿を作りにかかった。第一、伊
那方面は当分たりとも増助郷ましすけごうにして、この急場を救い、あわせ
て百姓の負担を軽くしたい。次ぎに、御伝馬宿々については今回
の御下向ごげこうのため人馬の継立つぎたて方も嵩かさむから、その手当てとして一
宿へ金百両ずつを貸し渡されるよう。ただし十か年賦にして返納
する。当時米穀も払底で、御伝馬を勤めるものは皆難渋の際であ
るから、右百両の金子きんすで、米、稗ひえ、大豆を買い入れ、人馬役のも
のへ割り渡したい。一か宿、米五十駄だ、稗ひえ五十駄ずつの御救助を

仰ぎたい。願書の主意はこれらの上に尽きていた。

下書きはできた。やがて、下四宿の宿役人は妻籠本陣に寄り合うことになった。馬籠からは年寄役金兵衛の名代として、養子伊之助が来た。寿平次、得右衛門、得右衛門が養子の実蔵じつぞうもそれに列席した。

「当分の増助郷ましすけごうは至極しごくもつともだとは思いますが、これが前例になったらどんなものでしょう。」

「さあ、こんな御通行はもう二度とはありますまいからね。」

宿役人の間にはいろいろな意見が出た。その時、得右衛門は伊那の助郷総代の意向を伝え、こんな願書を差し出すのもやむを得ないと述べ、前途のことまで心配している場合でないと力説した。

「どうです、願書はこれでいいでしょうじゃありませんか。」

と伊之助が言い出して、各庄屋の調印を求めようということになった。

二

例のように寿平次は弓を手にして、裏庭の矢場に隠れていた。

彼の胸には木曾福島役所から来た回状のことが繰り返されていた。それは和かずのみやさま宮様の御通行に關係はないが、当時諸国にやかましくなつた神しんそうさい葬祭の一条で、役所からその賛否の問い合わせが来たからで。

しかし、「うん、神葬祭か」では、寿平次も済まされなかった。早い話が、義理ある兄きょうだい弟の半蔵は平田門人の一人ひとりであり、この神葬祭の一条は平田派の国学者が起こした復古運動の一つであるらしいのだから。

「おれは、てつきり国学者の運動とにらんだ。ほんとに、あのお仲間は何をやり出すかわからん。」

砂を盛り上げる的を置いた安土あづちのところで、十間けんばかりの距離にある小屋との間を往復しながら、寿平次はひとり考えた。

同時代に満足しないということにかけては、寿平次とても半蔵に劣らなかった。しかし人間の信仰と風俗習慣とに密接な関係のある葬祭のことを寺院から取り戻もどして、それを白紙に改めよとな

ると、寿平次は腕を組んでしまう。これは水戸の廃はい仏ぶつ毀き釈しゃくに
一歩を進めたもので、言わば一種の宗教改革である。古代復帰を
夢みる国学者仲間がこれほどの熱情を抱いだいて来たことすら、彼に
は実に不思議でならなかった。彼はひとり言つて見た。

「まあ、神葬祭などは疑問だ。復古というようなことが、はたし
て今の時世に行なわれるものかどうかとも疑問だ。どうも平田派の
お仲間のする事には、何か矛盾がある。」

まだ妹のお民が家に逗とまり留りゆうしていたので、寿平次は弓の道具
を取りかたづけ、的もはずし、やがてそれをさげながら、自分の

妻のお里さとや妹のいる方へ行つて一緒になろうとした。裏庭から母屋やの方へ引き返して行くと、店座敷のわきの板の間から、機はたを織るおさ箴おさの音が聞こえて来ている。

寿平次の家も妻籠の御城山おしろやまのように古い。土地の言い伝えにも毎月三八の日には村市むらいちが立ったという昔の時代から続いて来ている青山の家だ。この家にふさわしいものの一つは、今のおばあさん（寿平次兄きょうだい妹いの祖母）が嫁に来る前からあったというほど古めかしく錆び黒ずんだ機はたの道具だ。深い窓に住むほど女らしいとされていたころのことで、お里やお民はその機はたの置いてあるところに集まって、近づいて来る御通行のおうわさをしたり、十四代將軍（徳川家茂いえもち）の御台所みだいどころとして降嫁せらるるという

和宮様はどんな美しいかただろうなぞと語り合ったりしていると
ころだった。

いくらかでも街道の閑な時ひまを見て、手仕事を樂しもうとするこ
の女たちの世界は、寿平次の目にも樂しかった。織り手のお里は
機に腰掛けている。お民はそのそばにいておな同じ年齢どしの嫂あによめがするこ
とを見ている。周囲には、小娘のお糸くめも母親のお民に連れられて
馬籠の方から来ていて、手鞠てまりの遊びなぞに余念もない。おばあさ
んはおばあさんで、すこしもじつとしていられないというふうで、
あれもこしらえてお民に食わせたい、これも食わせたいと言いな
がら、何かにつけて孫が里歸りの日を樂しく送らせようとしてい
る。

その時、お民は兄の方を見て言った。

「兄さんは弓にばかり凝ってるツて、おばあさんがコボしていますよ。」

「おばあさんじゃないんだろう。お前たちがそんなことを言っているんだろう。おれもどうかしていると見えて、きょうの矢は一本も当たらない。そう言えば、半蔵さんは弓でも始めないかなあ。」

「吾^{うち}夫^ちじゃ暇さえあれば本を読んだり、お弟^{でし}子を教えたりしですよ、男のかたもいろいろですなえ。兄さんは私たちの帯の世話までお焼きなさる方でしょう。吾^{うち}夫^ちと来たら、わたしが何を着いたって、知りやしません。」

「半蔵さんはそういう人らしい。」

割合に無口なお里は織りかけた田舎縞いなかじまの糸をしらべながら、

この兄きょうだい妹の話に耳を傾けていた。お民は思い出したように、

「どれ、姉さん、わたしにもすこし織らせて。この機はたを見ると、

わたしは娘の時分が恋しくてなりませんよ。」

「でも、お民さんはそんなことをしていいんですか。」

とお里に言われて、お民は思わず顔を紅あからめた。とかく多病で

子供のないのをさみしそうにしているお里に比べると、お民の方は肥ふとって、若い母親らしい肉づきを見せている。

「兄さんには、おわかりでしょう。」とお民はまた顔を染めながら言った。「わたしもからだの都合で、またしばらく妻籠へは来

られないかもしれません。」

「お前たちはいいよ。結婚生活が順調に行つてゐる証拠だよ。おれのところをごらん、おれが悪いのか、お里が悪いのか、そこはわからないがね、六年にもなつてまだ子供がない。おれはお前たちがうらやましい。」

そこへおばあさんが来た。おばあさんは木曾の山の中にめずらしい横浜土産^{みやげ}を置いて行つた人があると言つて、それをお民のいるところへ取り出して来て見せた。

「これだよ。これはお洗濯^{せんたく}する時に使うものだそうだが、使ひ方はこれをくれた人にもよくわからない。あんまり美しいものだから横浜の異人屋敷から買って来たと言つて、飯田^{いいだ}の商人が土産

に置いて行つたよ。」

石^{せつけん}鹼という言葉もまだなかつたほどの時だ。くれる飯田の商

人も、もらう妻籠のおばあさんも、シャボンという名さえ知らなかつた。おばあさんが紙の包みをあけて見せたものは、異国の花の形にできていて、薄桃色と白とある。

「御覧、よい香^{におい}気だこと。」

とおばあさんに言われて、お民は目を細くしたが、第一その香^{におい}気に驚^{おどろ}かされた。

「お^{くめ}糸、お前もかいでござん。」

お民がその白い方を女の子の鼻の先へ持つて行くと、お糸はそれを奪い取るようにして、いきなり自分の口のところへ持つて行

こうとした。

「これは食べるものじゃないよ。」とお民はあわてて、娘の手を放させた。「まあ、この子は、お菓子と間違えてさ。」

新しい異国の香気は、そこににいるだれよりも寿平次の心を誘った。めずらしい花の形、横に浮き出している精巧なローマ文字——それはよく江戸土産みやげにもらう錦絵にしきえや雪駄せつたなどの純日本のものがない美しさだ。実に偶然なことから、寿平次は西洋ぎりいでもなくなった。古銭を蒐集しゅうしゅうすることの好きな彼は、異国の銀貨を手に入れて、人知れずそれを愛翫あいがんするうちに、そんな古銭にまじる銀貨から西洋というものを想像するようになった。しかし彼はその事をだれにも隠している。

「これはどうして使うものだろうねえ。」とおばあさんはまたお民に言つて見せた。「なんでも水に溶かすという話を聞いたから、わたしは一つ煮て見ましたよ。これが、お前、ぐるぐる鍋なべの中で回つて、そのうちに溶けてしまったよ。棒でかき回して見たら、すっかり泡あわになつてさ。なんだかわたしは氣味が悪くなつて、鍋ぐるみ土の中へ埋めさせましたよ。ひよつとすると、これはお洗せんたく濯するものじゃないかもしれないね。」

「でも、わたしは初めてこんなものを見ました。おばあさんに一つ分けていただいて、馬籠の方へも持つて行つて見せましょう。」とお民が言う。

「そいつは、よした方がいい。」

寿平次は兄らしい調子で妹を押しとどめた。

文久元年の六月を迎えるところで、さかんな排外熱は全国の人の心を煽り立てるばかりであつた。あおその年の五月には水戸藩浪士らによつて、江戸たかなわとうぜんじ高輪東禅寺にあるイギリス公使館の襲撃さえ行なわれたとの報知しらせもある。その時、水戸側で三人は鬪死し、一人は縛に就き、三人は品川で自刃じじんしたという。東禅寺の衛兵で死傷するものが十四人もあり、一人の書記と長崎領事とは傷ついたともいう。これほど攘夷じょういの声も険しくなつて来ている。どうして飯田の商人がくれた横浜土産の一つでも、うっかり家の外へは持ち出せなかつた。

お民が馬籠をさして帰って行く日には、寿平次も半蔵の父に用事があると言つて、妹を送りながら一緒に行くことになった。彼には伊那助郷いなすけごうの願書の件で、吉左衛門の調印を求める必要があった。野尻のじり、三留野みどのはすでに調印を終わり、残るところは馬籠の庄屋のみとなつたからで。

ちようど馬籠の本陣からは、下男の佐吉がお民を迎えに来た。佐吉はお糸くめを背中へのせ、後ろ手に幼いものを守るようにして、足の弱い女の子は自分が引き受けたという顔つきだ。お民もしたくができた。そこで出かけた。

「寿平次さま、横須賀行きを思い出すなし。」

足掛け四年前の旅は、佐吉にも忘れられなかったのだ。

寿平次が村のあるところは、大河の流れに近く、静母しずもあららぎ、蘭の森

林地帯に倚りよ、木曾の山中でも最も美しい谷の一つである。馬籠

の方へ行くにはこの谷の入り口を後ろに見て、街道に沿いながら二里ばかりの峠を上る。めったに家を離れることのないお民が、

兄と共に踏んで行くことを楽しみにするも、この山道だ。街道の

両側は夏の日で、その奥は山また山だ。木曾山一帯を支配す

る尾張藩おわりはんの役人が森林保護の目的で、禁止林の盗伐を監視する

白木しらぎの番所も、妻籠と馬籠の間に隠れている。

午後の涼しい片影ができるころに、寿平次らは復興最中の馬籠にはいった。どっちを向いても火災後の宿場らしく、新築の工事

は行く先に始まりかけている。そこに積み重ねた材木がある。ここに木を挽く音が聞こえる。寿平次らは本陣の焼け跡まで行つて、そこに働いている吉左衛門と半蔵とを見つけた。小屋掛けをした普請場の木の香の中に。

半蔵は寿平次に伴われて来た妻子をよろこび迎えた。会所の新築ができ上がったことをも寿平次に告げて、本陣の焼け跡の一隅に、以前と同じ街道に添うた位置に建てられた瓦葺かわらぶきの家をさして見せた。会所となえる宿役人の詰め所、それに問屋場といやばなどの新しい建物は、何よりもまずこの宿場になくてならないものだった。

寿平次は半蔵の前に立つて、あたりを見回しながら言った。

「よくそれでもこれだけに工事のしたくができたと思う。」

「みんな一生懸命になりましたからね。ここまでこぎつけたのも、そのおかげだと思えますね。」

ふたり

吉左衛門はこの二人の話を引き取って、「三年のうちに二度も大火が来てごらん、たいていの村はまいってしまふ。まあ、吾家^{うち}でも先月の三日に建^{たて}前^{まえ}の手斧^{ちようなはじ}始めをしたが、これで石場^{いしばづ}搗^うきのできるのは二百十日あたりになろう。和^{かずのみや}宮^{みや}さまの御通行^{ごつうぎょう}までは間に合いそうもない。」

その時、寿平次が助郷願書の件で調印を求めに来たことを告げると、半蔵は「まあ、そこへ腰掛けるさ。」と言つて、自分でも普請場の材木に腰掛ける。お民はそのそばを通り過ぎて、裏の立

ち退き場所にいる姑しゅうとめ（おまん）の方へと急いだ。

「寿平次さん、君はよいことをしてくれた。助郷のことは隣の伊之助さんからも聞きましたよ。阿爺おやじはもとより賛成です。」と半蔵が言う。

「さあ、これから先、助郷もどうなろう。」と吉左衛門も案じ顔に、「これが大問題だぞ。先月の二十二日、大坂のお目付めつけがお下りという時には、伊那の助郷が二百人出た。例幣使（日光への定例の勅使）の時のことを考えてごらん。あれは四月の六日だ。四百人も人足を出せと言われるのに、伊那からはだれも出て来ない。」

「結局、助郷というものは今のままじゃ無理でしょう。」と半蔵

は言う。「宿場さえ繁昌はんじょうすればいいなんて、そんなはずのものじゃないでしょう。なんとかして街道付近の百姓が成り立つようにも考えてやらなけりやうそうですね。」

「そりや馬籠じやできるだけその方針でやって来たがね。結局、東海道あたりと同じように、定助郷じょうすけごうにでもするんだが、こいつがまた容易じやあるまいて。」と吉左衛門が言つて見せる。

「いったい、」と寿平次もその話を引き取つて、「二百人の、四百人のツて、そう多勢の人足を通行のたびに出せと言うのが無理ですよ。」

「ですから、諸大名や公役の通行をもつと簡略にするんですね。」と半蔵が言葉をはさんだ。

「だんだんこういう時世になって来た。」と吉左衛門は感じ深そうに言った。「おれの思うには、参観さんきんこうたい交代こうたいということも今にどうかなるだろうよ。こう御通行が頻ひんぱん繁はんにあるようになったちや、第一そうは諸藩の財政が許すまい。」

しかし、その結果は。六十三年の年功を積んだ庄屋吉左衛門にも、それから先のことはなんとも言えなかつた。その時、吉左衛門は普請場の仕事にすこし疲れが出たというふうで、

「まあ、寿平次さん、調印もしましょうし、お話も聞きましょうに、裏の二階へ来てください。おまんにもあつてやってください。」と言つて誘つた。

隠れたところに働く家族のさまが、この普請場の奥にひらけて

いた。味噌納屋みそなやの前には襷たすき掛け手ぬぐいかぶりで、下女たちを相手に、見た目もすずしそうな新茄子しんなすを漬つけるおまんがいる。そのそばには二番目の宗太を抱おけいてやるお民がいる。おまんが漬つけ物桶おけの板の上で、茄子の蒂へたを切つて与えると、孫のお糸は早速さつそくそれを両足の親指のところにはさんで、茄子の蒂へたを馬にして歩き戯れる。裏の木小屋の方からは、梅の実の色づいたのをもいで来て、それをお糸や宗太に分けてくれる佐吉もいる。

「お父さんとつ、あなたの退役願とついはまだおきき届けにならないそうですね。」

「そうさ。退役きき届けがたしき。」

寿平次は吉左衛門のことを「お父さん^{とつ}」と呼んでいる。その日の夕飯後のことで、一緒に食事した半蔵はちよつと会所の方へ行って来ると言つて、父のそばにいなかった時だ。

「寿平次さん、」と吉左衛門は笑いながら言つた。「吾家^{うち}へはその事でわざわざ公役が見えましてね、金兵衛さんと私を前に置いて、いろいろお話^{せいだ}がありました。二人^{ふたり}とも、せめてもう二、三年は勤めて、役を精出^{せいだ}せ、そう言われて、願書をお下げになりました。金兵衛さんなどは、ありがたく畏^{おそ}れ奉つて、引き下がつて来たなんて、あとでその話が出ましたつけ。」

そこは味噌納屋の二階だ。大火以来、吉左衛門夫婦が孫を連れ

て仮住居かりずまいしているとところだ。寿平次はその遠慮から、夕飯の馳ち

走そうになつた礼を述べ、同じ焼け出された仲間でも上の伏見屋とい

うもののある金兵衛の仮宅の方へ行つて泊めてもらおうとした。

「どうもまだわたしも、お年貢ねんぐの納め時どきが来ないと見えますよ。」

と言いながら、吉左衛門は梯子段はしごだんの下まで寿平次を送りに降

りた。夕方の空に光を放つ星のすがたを見つけて、それを何かの

暗示に結びつけるように、寿平次にさして見せた。

「箒ほうきぼし星ですよ。午年うまとしに北の方へ出たのも、あのとおりでし

たよ。どうも年回りがよくないと見える。」

この吉左衛門の言葉を聞き捨てて、寿平次は味噌納屋の前から
同じ屋敷つづきの暗い石段を上った。月はまだ出なかったが、星

があつて涼しい。例の新築された会所のそばを通り過ぎようとすると、表には板^{いたびさし}庇^ひがあつて、入り口の障子^{しょうじ}も明いている。寿平次は足をとめて、思わずハツとした。

「どうも半蔵さんばかりじゃなく、伊之助さんまでが賛成だとは意外だ。」

「でも結果から見て悪いと知ったことは、改めるのが至当ですよ。」

こんな声が手に取るように聞こえる。宿役人の詰め所には人が集まると見えて、灯^ひがもれている。何かがそこで言い争われている。

「そんなことで、先祖以来の祭り事を改めるといふ理由にはなり

ませんよ。」

「しかし、人の心を改めるには、どうしてもその源みなもとから改めてからんことにはだめだと思えますね。」

「それは理屈だ。」

「そんなら、六十九人もの破戒僧しゆずが珠数じゆずつなぎにされて、江戸の吉原よしわらや、深川ふかがわや、品川しんじゆく新宿しんじゆくのようなところへ出入ではいりするというかどで、あの日本橋で面かおを晒さらされた上に、一か寺の住職は島流しになるし、所化しよけの坊主は寺法によつて罰せられたというのは。」

神葬祭の一条に関する賛否の意見がそこに戦わされているのだ。賛成者は半蔵や伊之助のような若手で、不賛成を唱えるのは馬籠

の間屋九太夫らしい。

「お寺とさえ言えば、むやみとありがたいところのように思つて、昔からたくさんな土地を寄付したり、先祖の位牌いはいを任せたり、宗門帳まで預けたりして、その結果はすこしも措おいて問わないんです。」とは半蔵の声だ。

「これは聞きものだ。」九太夫の声で。

半蔵の意見にも相応の理由はある。彼に言わせると、あの聖徳太子が仏教をさかんに弘ひろめたもうてからは、代々の帝みかどがみな法師を尊信し、大寺大伽藍だいじだいがらんを建てさせ、天下の財用を尽くして御信心が篤あつかったが、しかし法師の方でその本分を尽くしてこれほどの国家の厚意に報いたとは見えない。あまつさえ、後には山法師

などという手合いが日吉七社の神輿をかつぎ出して京都の市中を騒がし、あるいは大寺と大寺とが戦争して人を殺したり火を放つたりしたことは数え切れないほどある。平安期以来の皇族公卿たちは多く仏門に帰依せられ、出世間の道を願われ、ただただこの世を悲しまれるばかりであつたから、救いのない人の心は次第に皇室を離れて、ことごとく武士の威力の前に屈服するようになった。今はこの国に仏寺も多く、御朱印といい諸大名の寄付とあって、寺領となつてゐる土地も広大なものだ。そこに住む出家比丘尼、だいこく、所化、男色の美少年、その他青侍にいたるまで、田畑を耕すこともなくて上白の飯を食ひ、糸を採り機を織ることもなくてよい衣裳を着る。諸国の百姓がどんなに

困窮しても、寺納を減らして貧民を救おうと思う和尚おしょうはない。

凶年などには別して多く米銭を集めて寺を富まそうとする。百姓に餓死するものはあつても、餓死した僧のあつたと聞いたためしはない。長い習慣はおそろしいもので、全国を通じたら何百万からのそれらの人たちが寺院に遊食していても、あたりまえのことのように思われて来た。これはあまりに多くを許し過ぎた結果である。そこで、祭葬のことを寺院から取り戻もどして、古式に復したら、もつとみんなの目もさめようと言うのである。

「今日こんにちほど宗教の濁つてしまった時代もめずらしい。」とまた半蔵の声で、「まあ、諸国の神宮寺じんぐうじなどをのぞいてごらんさない。本地垂跡ほんじすいじやくなぞということが唱えられてから、この国の神

は大日如来だいにちによらいや阿弥陀如来あみだによらいの化身けしんだとされていますよ。神仏はこんなに混淆こんこうされてしまった。」

「あなたがたはまだ若いな。」と九太夫の声が言う。「そりや権ごんげん

現げんさまもあり、妙みょうけん見けんさまもあり、金毘羅こんぴらさまもある。神さ

まだか、仏さままだわからないようなところは、いくらだってある。あらたかでありさえすれば、それでいいじゃないですか。」

「ところが、わたしどもはそうは思わないんです。これが末世まつせの証拠だと思ふんです。金胎こんたい両部りょうぶなどの教えになると、實際ひと

い。仏の力にすぎることによつて、はじめてこの国の神も救われると説くじゃありませんか。あれは実に神の冒瀆ぼうとくというものです。どうしてみんなは、こう平気でいられるのか。話はすこし違

いますが、嘉永六年に異国の船が初めて押し寄せて来た時は、わたしの二十三の歳としでした。しかしあれを初めての黒船と思ったのは間違いでした。考えて見ると遠い昔から何艘なんそうの黒船がこの国に着いたかshれない。まあ、わたしどもに言わせると、伝教でんぎようでも、空海くわかいでも——みんな、黒船ですよ。」

「どうも本陣の跡継ぎともあろうものが、こういう議論をする。そんなら、わたしは上の伏見屋へ行つて聞いて見る。金兵衛さんはわたしの味方だ。お寺の世話をよくして来たのも、あの人だ。よろしいか、これだけのことは忘れないでくださいよ——馬籠の万福寺は、あなたの家の御先祖の青山道斎が建立したものですよ

。」

この九太夫は、平素自分から、「馬籠の九太夫、贅にえがわ川の権ごんだ太夫ゆう」と言つて、太夫を名のるものは木曾十一宿に二人しかないというほどの太夫自慢だ。それに本来なら、吉左衛門の家が今度の和宮様のお小休み所にあてられるところだが、それが普請中とあつて、問屋分担の九太夫の家に振り向けられたというだけでも鼻息が荒い。

思わず寿平次は半蔵の声を聞いて、神葬祭の一条が平田篤胤あつたね没後の諸門人から出た改革意見であることを知った。彼は会所の周囲を往いつたり来たりして、そこを立ち去りかねていた。

その晩、お民は裏の土蔵の方で、夫の帰りを待っていた。山家にはめずらしく蒸し暑い晩で、両親が寝泊まりする味噌納屋の二階の方でもまだ雨戸が明いていた。

「あなた、大変おそかったじゃないですか。」

と言いながら、お民は会所の方からぶらりと戻^{もど}つて来た夫を土

蔵の入り口のところに迎えた。火災後の仮住居^{かりずまい}で、二人ある子

供のうち姉のお糸は納屋の二階の方へ寝に行き、弟の宗太だけが

そこによく眠っている。子供の枕もとには昔風な行燈^{あんどん}なども置

いてある。お民は用意して待っていた山家風なネブ茶に湯をつい

だ。それを夫にすすめた。

その時、半蔵は子供の寝顔をちよつとのぞきに行ったあとで、

熱いネブ茶に咽喉のどをうるおしながら言った。「なに、神葬祭のことで、すこしばかり九太夫さんとやり合った。壁をたたくものは手が痛いぐらいはおれも承知してるが、あんまり九太夫さんがわからないから。あの人は大変な立腹で、福島へ出張して申し開きをするなんて、そう言つて、金兵衛さんのところへ出かけて行つたよ。でも、伊之助さんがそばにいて、おれの加勢をしてくれたのは、ありがたかった。あの人は頼もしいぞ。」

一年のうちの最も短い夜はふけやすいころだった。お民の懐妊はまだ目だつほどでもなかったが、それでもからだをだるそうにして、夫より先に宗太のそばへ横になりに行つた。妻にも知らせまいとするその晩の半蔵が興奮は容易に去らない。彼は土蔵の入

り口に近くいて、石段の前の柿かきの木から通つて来る夜風を楽しみながらひとり起きていた。そのうちに、お民も眠りがたいかして、
ねまき寝衣のままでまた夫のそばへ来た。

「お民、お前はもつとからだをだいじにしないでいいのかい。」
つまぐ「妻籠でもそんなことを言われて来ましたつけ。」

「そう言えば、妻籠ではどんな話が出たね。」

「馬籠のお父さんとつと半蔵さんとは、よい親子ですつて。」

「そうかなあ。」

「兄さんも、わたしも、親には早く別れましたからね。」

「何かい。神葬祭の話は出なかつたかい。」

「わたしは何も聞きません。兄さんがこんなことは言っていまし

たよ——半蔵さんも夢の多い人ですつて。」

「へえ、おれは自分じゃ、夢がすくなさ過ぎると思うんだが——夢のない人の生しょうがい涯あじきほど味気ないものはない、とおれは思うんだが。」

「ねえ、あなたが中津川の香蔵さんと話すのをそばで聞いていますと、吾家うちの兄さんと話すのとは違いますねえ。」

「そりや、お前、香蔵さんとおれとは同じだもの。そこへ行くと寿平次さんの方は、おれの内部なかにいろいろなものを見つけてくれる。おれはお前の兄さんの顔を見ていると、何か言つて見たくなくなるよ。」

「あなたは兄さんがきらいですか。」

「どうしてお前はそんなことを言うんだい。寿平次さんとおれとは、同じように古い青山の家に生まれて来た人間さ。立場は違うかもしれないが、やっぱり兄きょうだい弟は兄弟だよ。」

半蔵はお民のからだを心配して床につかせ、自分でも休もうとして、いったんは妻子のそばに横になって見た。眠りがたいままに、また起き出して入り口の戸をあけて見ると、東南の方角にあたる暗い空は下の方から黄ばんだ色にすこしずつ明るくなって来て、深夜の感じを与える。

遠い先祖代々の位牌いはい、青山家の古い墓地、それらのものを預けてある馬籠の寺のことから、そこに黙って働いている松雲和しょううんおし尚ようのことがしきりに半蔵には問題の人になって来た。彼はあの

万福寺の新住職として松雲を村はずれの新茶屋に迎えた日のことを思い出した。あれは雨のふる日で、六年の長い月日を行脚あんぎやの旅に送って来た松雲が笠かさも草鞋わらじもぬれながら、西からあの峠に着いた時であつたことを思い出した。あのころは彼もまだ若かつたが、すでに平田派の国学にころざして、中世以来学問道徳の権威としてこの国に臨んで来た漢学からまなび風ふうの因習からも、仏の道で教えるような物の見方からも離れよということを深く心に銘ずるころであつたから、新たに迎える住職のことを想像し、その住職の尊信する宗教のことを想像し、その人にも、その人の信仰にも、行く行くは反対を見いだすかもしれないような、ある予感に打たれずにはいられなかつたことを思い出した。とうとう、そ

の日はやって来たのだ。もつとも、廃仏を意味する神葬祭の一条は福島役所からの諮問案で、各村の意見を求める程度にまでしか進んでいなかったが。

いつのまにか暗い空が夏の夜の感じに澄んで来た。青白い静かな光は土蔵の前の冷たい石段の上にまでさし入って来た。ひとり起きている彼の膝ひざの上まで照らすようになった。次第に、月も上った。

八百千年ありこしことも諸人の悪しとし知らば改めてまし
やおちとせ もろびと あ
まがごととみそなはせなば事ごとに直毘なむの御神直みかみしたびてな
眼めのまへに始むることもよくしあらば惑ふことなくなすべか
りけり

まさみち
正道に入り立つ徒^{とも}よおほかたのほまれそしりはものならな
くに

半蔵の述懐だ。

三

旧暦九月も末になって、馬籠峠へは小鳥の来るころになった。
もはや和宮様お迎えの同勢が関東から京都の方へ向けて、毎日の
ようにこの街道を通る。そうになると、定例の人足^{つぎた}だけでは
も行き届かない。道中奉行所の小笠原^{おがさわら}美濃守^{みののかみ}は公役としてす
でに宿々の見分に來た。

十月にはいつてからは、御通行準備のために奔走する人たちが一層半蔵の目につくようになった。尾州方^{びしゅうかた}の役人は美濃路から急いで来る。上松^{あげまつ}の庄屋は中津川へ行く。早駕籠^{はやかご}で、夜中に馬籠へ着くものすらある。尾州の領分からは、千人もの人足が隣宿美濃落合^{おちあい}のお継ぎ所^{つしよ}（継立ての場所）へ詰めることになって、ひどい吹き降り^ぶの中を人馬共にあの峠の下へ着いたとの報知^{しらせ}もある。

「半蔵、どうも人足や馬が足りそうもない。おれはこれから中津川へ打ち合わせに行つて、それから京都まで出かけて行つて来るよ。」

「お父さん^{とつ}、大丈夫ですかね。」

親子はこんな言葉をかわした。道中奉行所から渡された御印書

によつて、越後えちご越えつちゆう中なかつの方面からも六十六万石の高に相当する

人足がこの御通行筋へ加勢に来ることになったが、よく調べて見ると、それでも足りそうもないと言う父の話は半蔵を驚かした。

「美濃の方じゃ、お前、伊勢路いせじからも人足を許されて、もう触れ

当てに出かけたものもあるというよ。美濃の鵜沼うぬましゆく宿から信州本もと

山とやままで、どうしても人足は通しにするよりほかに方法がない。

おれは京都まで御奉行様のあとを追つて行つて、それをお願いして来る。おれも今度は最後の御奉公のつもりだよ。」

この年老いた父の奮発が、半蔵にはひどく案じられてならなかった。そうかと言って、彼が父に代わられる場合でもない。街道

には街道で、彼を待っている仕事も多かつた。その時、継母のおまんも父のそばに来て、

「あなたも御苦労さまです。ほんとに、万事大騒動になりましたよ。」

と案じ顔に言っていた。

吉左衛門はなかなかの元気だった。六十三歳の老体とは言いながら、いざと言えばそばにいるものがびつくりするような大きな声で、

「オイ、駕籠^{かご}だ。」

と人を呼ぶほどの気力を見せた。

宮様お迎え御同勢の通行で、にぎわしい街道の混雑はもはや九

日あまりも続いた。伊那^{いな}の百姓は自分らの要求がいれられたという顔つきで、二十五人ほどずつ一組になって、すでに馬籠へも働きに入り込んで来た。やかましい増助^{ましすけごう}郷の問題のあとだけに朝勤め夕勤めの人たちを街道に迎えることは半蔵にも感じの深いものがあつた。どうして、この多数の応援があつてさえ、続々関東からやつて来る御同勢の継立てに充分だとは言えなかつたくらいだ。馬籠峠から先は落合に詰めている尾州の人足が出て、お荷物の持ち運びその他に働くというほどの騒ぎだ。時には、半蔵はこの混雑の中に立って、怪我人^{けがにん}を載せた四挺^{ちよう}の駕籠が三留野^{みどの}の方から動いて来るのを目撃した。宮様のお泊まりにあてられるという三留野の普請所では、小屋がつぶれて、けがをした尾張の大工た

ちが帰国するところであるという。その時になると、神葬祭の一条も、何もかも、この街道の空気の中に埋め去られたようになってた。和宮様御下向ごげこうのうわさがあるのみだった。

宮様は親子内親王ちかこという。京都にある帝とは異腹はらちがいの御兄ごきょう妹まいである。先帝第八の皇女であらせらるるくらいだから、御姉

妹も多かった。それがだんだん亡なくなられて、御妹としては宮様ばかりになったから、帝の御いつくしみも深かったわけである。

宮様は幼いころから有栖川家ありすがわと御婚約の間柄であつたが、それが徳川将軍に降嫁せらるるようになったのも、まったく幕府の懇

望にもとづく。

もともと公武合体の意見は、当時の老中安藤あんどう対馬つしまなぞのはじ

めて唱え出したことでもない。天璋院てんしょういんといえ、当時すでに

未亡人みぼうじんであるが、その人を先の將軍の御台所みだいどころとして徳川家に

送った薩摩さつまの島津氏などもつとに公武合体の意見を抱いだいていて、

幕府有司の中にも、諸藩の大名の中にもこの説に共鳴するものが

多かった。言わば、国事の多端で艱難かんなんな時にあらわれて来た協

調の精神である。幕府の老中らは宮様の御降嫁をもつて協調の实じつ

を挙あぐるに最も適当な方法であるとし、京都所司代の手を経へ、関か

白はんぱくを通して、それを叡聞えいぶんに達したところ、帝にはすでに有ありす

栖川がわ家と御婚約のある宮様のことを思い、かつはとかく騒がし

い江戸の空へ年若な女子を遣^{つか}わすのは氣づかわれると仰せられて、お許しがなかった。この御結婚には宮様も御不承知であつた。ところが京都方にも、公武合体の意見を抱^{いだ}いた岩倉具視、久我建通^{みち}、千種有文^{ちぐさありぶみ}、富小路敬直^{とみのこうじひろなお}などの有力な人たちがあつて、この人たちが堀河^{ほりかわ}の典侍^{てんじ}を動かした。堀河の典侍は帝の寵妃^{ちやうひ}であるから、この人の奏聞^{そうもん}には帝も御耳を傾けられた。宮様には固く辞して応ずる氣色^{けしき}もなかったが、だんだん御乳の人絵島^{えしま}の言葉を聞いて、ようやく納得せらるるようになった。年若な宮様は健氣^{けなげ}にも思い直し、自ら進んで激しい婦人の運命に当たろうとせられたのである。

この宮様は婿君^{むこぎみ}（十四代將軍、徳川家茂^{いえもち}）への引き出物と

して、容易ならぬ土産みやげを持参せらるることになった。「蛮夷ばんいを防ぐことを堅く約束せよ」との聖旨がそれだ。幕府としては、今日は兵力を動かすべき時機ではないが、今後七、八年ないし十年の後を期し、武備の充実する日を待つて、条約を引き戻すもとか、征伐するか、いずれかを選んで叡慮えいりょを安んずるであろうという意味のことが、あらかじめ奉答してあつた。

しかし、このまれな御結婚には多くの反対者を生じた。それらの人たちによると、幕府に攘夷じやういの意志のあらうとは思われない。その意志がなくて蛮夷ぼうぎの防禦を誓い、国内人心の一致を説くのは、これ人を欺き自らをも欺くものだといふのである。宮様の御降嫁は、公武の結婚というよりも、むしろ幕府が政略のためにす

る結婚だというのである。幕府が公武合体の態度を示すために、帝に供御くごの資を献じ、親王や公卿くげに贈金したことも、かえつて反对者の心を刺激した。

「欺瞞ぎまんだ。欺瞞だ。」

この声は、どんな形になって、どんなところに飛び出すかもしれない。西は天津おおつから東は板橋まで、宮様の前後を警衛するもの十二藩、道中筋の道固めをするもの二十九藩——こんな大げさな警衛の網が張られることになった。美濃の鵜飼うがいから信州本山もとやまでの間は尾州藩、本山から下諏訪しもすわまでの間は松平丹波まつだいらたんばの守み、下諏訪から和田までの間は諏訪因幡守いなばのかみの道固めというふうな。

十月の十日ごろには、尾州の竹腰たけごしやましろのかみ山城守が江戸表から出
発して来て、本山宿の方面から順に木曾路の道橋を見分し、御旅
館やお小休み所にあてらるべき各本陣を見分した。ちようど馬籠
では、吉左衛門も京都の方へ出かけた留守の時で、半蔵が父に代
わつてこの一行を迎えた。半蔵は年寄役金兵衛の付き添いで、問
屋九太夫の家に一行を案内した。峠へはもう十月らしい小雨が来
る。私事ながら半蔵は九太夫と言ひ争つた会所の晩のことを思い
出し、父が名代の勤めもつらいことを知つた。

「伊之助さん、お継立ての御用米が尾州から四十八俵届きました。

これは君のお父さん（金兵衛）に預かっていただきたい。」

半蔵が隣家の伊之助と共に街道に出て奔走するころには、かねて待ち受けていた御用の送り荷が順に到着するようになった。この送り荷は尾州藩の扱いで、奥筋のお泊まり宿へ送りつけるもの、その他諸色しよしきがたくさん数に上った。日によつては三留野泊みどのまりの人足九百人、ほかに妻籠泊つまごまりの人足八百人が、これらの荷物について西からやって来た。

「寿平次さんも、妻籠の方で目を回しているだろうなあ。」

それを思う半蔵は、一方に美濃中津川の方で働いている友人の香蔵を思い、この際京都から帰つて来ている景蔵を思い、その話をよく伊之助にした。馬籠では峠村の女馬まで狩り出して、毎日

のようにやって来る送り荷の継立てをした。峠村の利三郎は牛うしぎ行司ようじではあるが、こういう時の周旋にはなくてはならない人だつた。

世話好きな金兵衛はもとより、問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく与次衛門よじえもん、それらの長老たちから、百姓総代の組頭くみがしら 庄兵衛しょうべえまで、ほとんど村じゅう総がかりで事に当たつた。その時になつて見ると、金兵衛の養子伊之助といい、九太夫の子息むすこ九郎兵衛といい、庄兵衛の子息庄助といい、実際に働けるものはもはや若手の方に多かつた。

十月の二十日は宮様が御東下の途に就つかれるという日である。まだ吉左衛門は村へ歸つて来ない。半蔵は家のものと一緒に父のことを案じ暮らした。もはや御一行が江州ごうしゅう草津くさつまで動いたと

いう二十二日の明け方になって、吉左衛門は夜通し早駕籠はやかごを急がせて来た。

京都から名古屋へ回って来たという父が途中の見聞を語るだけでも、半蔵には多くの人の動きを想像するに充分だった。宮様御出発の日には、帝にもお忍びで桂かつらの御所を出て、宮様の御旅装を御覧になったという。

「時に、送り荷はどうなった。」

という父の無事な顔をながめて、半蔵は尾州から来る荷物ばの莫くだい大なことを告げた。それがすでに十一日もこの街道に続いていることを告げた。木曾の王おう滝たき、西野、末川の辺鄙へんぴな村々、向むかい郡ぐんの附知村つけちむらあたりからも人足を繰り上げて、継立ての困難をし

のいでいることを告げた。

道路の改築もその翌日から始まった。半蔵が家の表も二尺通りいしがき石垣を引つ込め、石垣を取り直せとの見分役けんぶんやくからの達しがあつた。道路は二間にして、道幅はすべて二間見通しということに改められた。石垣は家ごとに取り崩くずされた。この混雑のあとには、御通行当日の大釜おおがまの用意とか、膳飯ぜんぱんの準備とかが続いた。半蔵の家でも普請中で取り込んでいるが、それでも相応なしたくを引き受け、上の伏見屋などでは百人前の膳飯を引き受けた。

やがて道中奉行が中津川泊まりで、美濃の方面から下つて来た。一切の準備は整ったかと尋ね顔な奉行の視察は、次第に御一行の近づいたことを思わせる。順路の日割によると、二十七日、鵜うぬま

沼宿御昼食、太田宿お泊まりとある。馬籠へは行列拝見の客が山口村からも飯田方面からも入り込んで来て、いずれも宮様の御一行を待ち受けた。

そこへ先駆だ。二十日に京都を出発して来た先駆の人々は、八日目にはもう落合宿から美濃境の十曲峠を越して、馬籠峠の上に着いた。随行する人々の中には、万福寺に足を休めて行くものが百二十人もある。先駆の通行は五つ半時であった。奥筋へ行く千人あまりの尾州の人足がそのあとに続いて、群衆の中を通った。それを見ると、伊那から来ている助郷の中には腕をさすつて、ぜひともお輿をかつぎたいというものが出て来る。大変な御人氣だ。半蔵は父と同じように、麻のかみしもをつけ、袴の股立

ちを取つて、親子してその間を奔走した。

「姫君さまのお輿こしなら、おれも一肩ひとかた入れさせてもらいたいな。」
これも篤志家の一人の声ひとりだった。

翌日は中津川お泊まりの日取りである。その日は雨になって、夜中からひどく降り出した。しかしその大雨の中でも、もはや道固めの尾州の家中が続々馬籠へ繰り込んで来るようになったので、吉左衛門も半蔵も全く一晩じゆう眠らなかつた。

いよいよ馬籠御通行という日が来た。本陣の仮住居かりずまいの方では、おまんが孫のそばに目をさますと、半蔵も父も徹夜でいそががつて、ほとんど家へは寄りつかない。嫁のお民は、と見ると、この人は肩で息をして、若い母らしい前垂まえだれなぞにもはや重そうな

からだを隠そうとしている。

おまんは佐吉を呼んで、孫のお糸^{くめ}をおぶわせ、村はずれに宮様をお迎えさせることにした。そこへ来た新宅のお喜佐（おまんの実の娘、半蔵の異母妹）には宗太をつけて、これも家の下女たちと一緒にやることにした。

「糸さま、おいで。」と佐吉はお糸を背中にのせて、その顔をおまんに見せながら、「これで糸さまも、きょうあつたことを——ずっと大きくなるまで——覚えていさつせるずらか。」

「なにしろ、六つじゃねえ。」

「覚えてはいさつせまいか。」

「そうばかりでもないよ。」とお喜佐は二人の話を引き取って言

った。「この子もこれで、夢のように覚えているだろうよ。わたしだって、五つの歳としのことをかすかに覚えているもの。」

「ほんとに、きようはあいにくな雨なこと。」とおまんは言った。「わたしもお迎えしたいは山々だが、お民がこんなじゃ、どうしようもない。わたしたち二人はお留守居しますよ。」

佐吉はお糸を、お喜佐は宗太をまもりながら、御行列拝見の人々が集まる村はずれの石屋の坂あたりまで行つた。なにしろ多勢の御通行で、佐吉らは吉左衛門や半蔵の働いている姿をどこにも見いだすことができなかった。それに、御通行筋は公私の領分の差別なく、旅館の前後里程三日路の旅人の通行を禁止するほどの警戒ぶりだ。

九つ半時に、姫君を乗せたお輿こしは軍旅のごときいでたちの面々に前後を護まもられながら、雨中の街道を通った。いかめしい鉄砲、纏まといばれん馬簾の陣立ては、ほとんど戦時に異ならなかった。供奉ぐぶの御同勢はいずれも陣笠じんがさ、腰弁当で、供男一人ずつ連れながら、そのあとに随したがった。中山大納言だいなごん、菊亭中納言きくてい、千種少将ちぐさのしょうしょう（有文）、岩倉少将（具視ともみ）、その他宰相の典侍てんじ、命婦能登などみょうぶのとが供奉の人々の中にあつた。京都の町奉行関出せきいずものかみ雲守がお輿こしの先を警護し、お迎えとして江戸から上京した若年寄加納遠わかどしよりかのうとおとう江守みのかみ、それに老女らもお供をした。これらの御行列が動いて行つた時は、馬籠の宿場も暗くなるほどで、その日の夜に入るまで駅路に人の動きの絶えることもなかった。

「いや、御苦労、御苦労。」

御通行の翌日、吉左衛門は三留野^{みどの}のお継ぎ所の方へ行く尾州の竹腰山城守を見送ったあとで、いろいろあと始末をするため会所のなかにある宿役人の詰め所にいた。吉左衛門はそこにいる人たちをねぎらうばかりでなく、自分で自分に言うように、

「御苦労、御苦労。」を繰り返した。

連日の過労に加えて、その日も朝から雨だ。一同は疲れて、一人として行儀よくしているものもない。そこには金兵衛もいて、長い街道の世話を思い出したように、

「吉左衛門さんは御存じだが、わたしたちが覚えてから大きな御通行というものは、この街道に三度ありましたよ。一度は水戸みとの姫君さまのお輿こし入れの時。一度は尾州の先の殿様が江戸でお亡なくなりになって、その御遺骸ごいがいがこの街道を通った時。今一度は例の黒船騒ぎで、交易を許すか許さないかの 大評定だいひようじようで、尾州の殿様（徳川慶勝よしかつ）の御出府の時。あの先の殿様の時は、木曾谷中から寄せた七百三十人の人足でも手が足りなくて、伊那の助すけご郷うが千人あまりも出ました。諸方から集めた馬の数が二百二十匹さ。」

「金兵衛さんはなかなか覚えがいい。」と畳の上に頬杖ほおづえつきながら言うものがある。

「まあ、お聞きなさい。今の殿様が江戸へ御出府の時は、木曾寄せの人足が七百三十人、伊那の助郷が千七百七十人、この人数を合わせると二千五百人からの人足が出ましたぜ。あの時、馬籠の宿場に集まった馬の数が百八十四匹だったと思う。あれほどの御通行でも和宮さまの場合とはとうてい比べものにならない。今度のような大きな御通行は、わたしは古老の話にも聞いたことがない。」

「どうです。金兵衛さん、これこそ前代未聞でしょう。」
と混ぜ返すものがある。金兵衛は首を振って、
「いや、前代未聞どころか、この世初まって以来の大御通行だ。」
聞いているものは皆笑った。

いつのまにか吉左衛門は高いびきだ。彼はその部屋へやの片すみに横になって、まるで死んだようになってしまった。

その時になって見ると、美濃路から木曾へかけてのお継ぎ所でほとんど満足なところはなかった。会所という会所は、あるいは損じ、あるいは破れた。これは道中奉行所の役人も、尾州方の役人も、ひとしく目撃したところである。中津川、三留野の両宿にたくさんな死傷者もできた。街道には、途中で行き倒れになった人足の死体も多く発見された。

御通行後の二日目は、和宮様の御一行も福島、やぶはら敷原を過ぎ、とりいとうげ鳥居峠を越え、ならい奈良井宿お小休み、にえがわじゆく贄川宿御昼食の日取りである。半蔵と伊之助の二人は連れだつて、その日三留野お継ぎ

所の方から馬籠へ引き取つて来た。伊之助は伊那助郷の担当役、半蔵も父の名代として、いろいろとあと始末をして来た。ちょうど吉左衛門は上の伏見屋に老友金兵衛を訪ね^{たず}に行つていて、二人茶漬^{ちやづ}けを食いながら、話し込んでいるところだった。そこへ半蔵と伊之助とが歸つて来た。

その時だ。伊之助は声を潜めながら、木曾の下四宿から京都方の役人への祝儀として、先方の求めにより二百二十両の金を差し出したことを語った。祝儀金とは名ばかり、これはいかにも無念千万のことであると言って、お継ぎ所に来ていた福島方の役人衆までが口唇^{くちびる}をかんだことを語った。伊那助郷の交渉をはじめ、越後^{えちご}、越中^{えっちゅう}の人足の世話から、御一行を迎えるまでの各宿の

人々の心労と尽力とを見る目があつたら、いかに強欲ごうよくな京都方の役人でもこんな暗い手は出せなかつたはずであると語つた。

「御通行のどさくさに紛れて、祝儀金を巻き揚げて行くとは——
実に、言語ごんごに絶したやり方だ。」

と言つて、金兵衛は吉左衛門と顔を見合わせた。

若者への関心にかけては、金兵衛とても吉左衛門に劣らなかつた。黒船来訪以来はおろか、それ以前からたといいかに封建社会の墮落と不正とを痛感するような時でも、それを若者の目や耳からは隠ふせそう隠せそうとして来たのも、この二人の村の長老だ。庄屋風情ふうせい、もしくは年寄役風情として、この親たちが日ごろの願いと

して来たことは、徳川世襲の伝統を重んじ、どこまでも權威を權威とし、それを子の前にも神聖なものとして、この世をあるがままに譲って行きたかったのである。伊之助が語って見せたところによると、こうした役人の腐敗沙汰ざたにかけては、京都方も江戸方もすこしも異なるところのないことを示していた。二人の親たちはもはや隠そうとして隠し切れなかった。

六日目になると、宮様御一行は和田宿の近くまで行つたところで、お道固めとして本山までお見送りをした尾州の家中衆も、思い思いに引き返して来るようになった。奥筋までお供をした人足たちの中にも、ぼつぼつ帰路につくものがある。七日目には、もはやこの街道に初雪を見た。

人一人動いたあとは不思議なもので、御年も若く纖弱い宮様の
ひとり
ような女性でありながらも、ことに宮中の奥深く育てられた金
ぎよくよう
枝玉葉の御身で、上方とは全く風俗を異にし習慣を異にす
かみがた
る関東の武家へ御降嫁されたあとには、多くの人心を動かすもの
が残った。遠く江戸城の方には、御母として仕うべき天璋院
てんしょういん
も待っていた。十一月十五日には宮様はすでに江戸に到着され
さつま
たはずである。あの薩摩生まれの剛気で男まさりな天璋院にもす
でに御対面せられたはずである。これはまれに見る御運命の激しさ
あわれ
だとして、憐みまいらせるものがある。その犠牲的な御心の女ら

しさを感ずるものもある。二十五日の木曾街道の御長旅は、徳川家のために計る老中安藤あんどう対馬つしまらの政略を助けたというよりも、むしろ皇室をあらわす方に役立つた。

長いこと武家に圧せられて来た皇室が衰微のうちにも絶えることなく、また回復の機運に向かつて来た。この島国の位置が位置で、たとい内には戦乱争闘の憂いの多い時代があつたにもせよ、外に向かつて事を構える場合の割合に少なかった東洋の端に存在したことは、その日まで皇室の平静を保ち得た原因の一つであると言ふものもある。過去の皇室の衰え方と言へば、諸国に荒廃した山陵を歴訪して勤王の志を起こしたという蒲生がもうくんべい君平や、京都のさびしい御所を拝して哭ないたという高山彦九郎たかやまひこくろうのような人

物のあらわれて来たのでもわかる。応仁^{おうにん}乱後の京都は乱前よりも一層さびれ、公家の生活は苦しくなり、すこし大げさかもしれないが三条の大橋から御所の燈火^{あかり}が見えた時代もあったと言われるほどである。これほどの皇室が、また回復の機運に向かつて来たことは、半蔵にとつて、実に意味深きことであつた。

時代は混沌^{こんとん}として来た。彦根^{ひこね}と水戸とが互いに傷ついてからは、薩州のような雄藩^{ゆうはん}の擡頭^{たいとう}となつた。関ヶ原の敗戦以来、隠忍に隠忍を続けて来た長州藩がこの形勢を黙つてみているはずもない。しかしそれらの雄藩でも、京都にある帝^{みかど}を中心^{みかど}に仰ぎ奉ることなしに、人の心を収めることはできない。天朝の威をも畏^{おそ}れず、各藩の意見のためにも動かされず、断然として外国に通商

を許したというあの井伊大老ですら、幕府の一存を楯^{たて}にして単独な行動に出ることはできなかった。後には上奏の手続きを執った。井伊大老ですらそのとおりだ。薩長二藩の有志らはいずれも争つて京都に入り、あるいは藩主の密書を致^{いた}したり、あるいは御剣^{ぎょけん}を奉獻したりした。

一庄屋の子としての半蔵から見ると、これは理由のないことでもない。水戸の『大日本史』に、尾張の『^{るいじゅうにほんぎ}類聚日本紀』に、あるいは頼氏^{らいし}の『日本外史』に、大義名分を正そうとした人たちのまいた種^{くすのき}が深くもこの国の人々の心にきざして来たのだ。南朝の回想、芳野^{よしの}の懷古、楠氏^{くすのき}の崇拜——いずれも人の心の向かうところを語っていないものはなかった。そういう中であって、本居宣

長のような先覚者をはじめ、平田一門の国学者が中世の否定から出発して、だんだん帝を求め奉るようになって行つたのは、臣子の情として強い綜合そうごうの結果であつたが……

年も文久二年と改まるころには、半蔵はすでに新築のできた本陣の家の方に引き移つていた。吉左衛門やおまんは味噌納屋みそなやの二階から、お民はわびしい土蔵の仮住居かりずまいから、いずれも新しい木の香のする建物の方に移つて来た。馬籠の火災後しばらく落合の家の方に歸つていた半蔵が弟子でしの勝重かつしげなども、またやつて来る。新築の家は、本陣らしい門構えから、部屋へや部屋の間取りまで、火災以前の建て方によつたもので、会所を家の一部に取り込んだところまで似ている。表庭のすみに焼け残つた一株の老松もとうと

う枯れてしまつたが、その跡に向いて建てられた店座敷が東南の
日を受けるところまで似ている。

美濃境にある恵那山えなさんを最高の峰として御坂越みさかごえの方に続く幾つ
かの山嶽さんかくは、この新築した家の南側の廊下から望まれる。半蔵
が子供の時分から好きなのも、この山々だ。さかな雪崩なだれの音は
その廊下の位置からきかれないまでも、高い山壁から谷まで白く
降り埋うずめる山々の雪を望むことはできる。ある日も、半蔵は恵那
山の上の空に、美しい冬の朝の雲を見つけて、夜ごとの没落から
また朝紅の輝きにと変わって行くようなあの太陽に比較すべきも
のを想像した。ただ御一人の帝、その上を措おいて時代を貫く朝日
の御勢にたとうべきものは他に見当たらなかつた。

正月早々から半蔵は父の名代として福島役所へ呼ばれ、木曾十一宿にある他の庄屋問屋と同じように金百両の分配を受けて来た。このお下げ金さきんは各宿救助の意味のものだ。

ちようど家では

二十日正月はつかしょうがつ

を兼ねて、暮れに生まれた男の子

のために

小豆粥あずきがゆ

なぞを祝っていた。

お桑くめ、

宗太、それから今度

生まれた子には正己まさみという名がついて、

吉左衛門夫婦ももはや三

人の孫のおじいさん、おばあさんである。お民はまだ産後の床に

ついていたが、そこへ半蔵が福島から引き取って来た。

和宮かずのみやさ

様の

御通行前に、

伊那助郷総代へ約束した手当ての金子も、

追

追

つて尾州藩から下付せらるるはずであることなぞを父に告げた。

「助郷のことは、これからが問題だぞ。今までのような御奉公じや百姓が承知しまい。」

と吉左衛門は炬燵こたつの上に手を置きながら、半蔵に言つて見せた。その日半蔵はお下げ金のことで金兵衛の知恵を借りて、御通行の日から残つた諸払いをした。やがてそのあと始末もできたところに、人の口から口へと伝わつて来る江戸の方のうわさが坂下門の変事を伝えた。

決死の壮士六人、あの江戸城の外のお濠ほりばたの柳の樹きのかげに隠ひそれていたのは正月十五日とあるから、山家やまがのことで言えば左さぎ義長ようの済ようむころであるが、それらの壮士が老中安藤対馬の登城

を待ち受けて、まず銃で乗り物を狙撃した。それが当たらなかつたので、一人の壮士が馳せ寄つて、刀を抜いて駕籠を横から突き刺した。安藤対馬は運強く、重傷を被りながらも坂下門内に駆け入つて、わずかに身をもつて難をまぬかれた。この要撃の光景をまるで見て来たように言い伝えるものがある。

「またか。」

という吉左衛門にも、思わず父と顔を見合わせる半蔵の胸にも、桜田事変当時のことが来た。

刺客はいずれも斬奸趣意書なるものを懐にしていたという。

これは幕府の手で秘密に葬られようとしたが、六人のほかに長州屋敷へ飛び込んで自刃した壮士の懐から出て来たもので明らかに

され、それからそれへと伝えられるようになった。それには申さるど年の三月に赤心報国の輩ともがらが井伊大老を殺害に及んだことは毛頭もうとうも幕府に対し異心をはさんだのではないということから書き初めて、彼らの態度を明らかにしてあつたという。彼らから見れば、井伊大老は夷狄いてきを恐怖する心から慷慨忠直こうがいの義士を憎み、おのれの威力を示そうがために奸謀かんぼうをめぐらし、天朝をも侮る神州の罪人である、そういう奸臣を倒したなら自然と幕府においても悔いる心ができて、これからは天朝を尊び夷狄を憎み、国家の安危と人心の向背こうはいにも注意せらるるであろうとの一念から、井伊大老を目がけたものはいずれも身命を投げ捨てて殺害に及んだのである、ところがその後になつても幕府には一向に悔心の模様は

見えない、ますます暴政のつるようになって行つたのは、幕府役人一同の罪ではあるが、つまりは老中安藤対馬こそその第一の罪魁ざいかいであるという意味のことが書いてあつたという。その趣意書には、老中の罪状をもあげて、皇妹和宮様が御結婚のことも、おもてむきは天朝より下し置かれたように取り繕い、公武合体の姿を示しながら、実は奸謀と威力とをもつて強奪し奉つたも同様である、これは畢ひつきよう竟皇妹を人質にして外国交易の勅ちよくじよう詔しうを強請する手段であり、もしそれもかなわなかつたら帝の御讓位をすら謀はかろうとする心底であつて、実に徳川將軍を不義に引き入れ、万世の後までも悪逆の名を流させようとする行為である、北ほうじよ条せつし足利あしかがにもまさる逆謀というのほかはない、これには切齒痛

憤、言うべき言葉もないという意味のことが書いてあったという。その中にはまた、外夷^{がい}取り扱いのことをあげて、安藤老中は何事も彼らの言うところに従い、日本沿海の測量を許し、この国の形勢を彼らへ教え、江戸第一の要地ともいふべき品川御殿山を残らず彼らに貸し渡し、あまつさえ外夷の応接には骨肉も同様な親切を見せながら、自国にある忠義憂憤の者はかえつて仇敵^{きゆうてき}のように忌みきらい、国賊というにも余りあるというような意味のことが書いてあったという。

しかし決死の壮士が書きのこしたものは、ただそれだけの意味にとどまらなかった。その中には「明日」への不安が、いろいろと書きこめてあったともいう。もし今日のままで弊政を改革する

こともなかったら、天下の大小名はおのおの幕府を見放して、自己の国のみを固めるようになって行くであろう、外夷の取り扱いにさえ手に余るおりから、これはどう処置するつもりであろうという意味のことも書いてあり、万一攘夷じょういを名として旗を挙げあるような大名が出て来たら、それこそ実に危急の時である、幕府では皇国の風俗というものを忘れてはならぬ、君臣上下の大義をわきまえねばならぬ、かりそめにも天朝の勸意えいにそむくようなところが見えたら、忠臣義士の輩ともがらは一人も幕府のために身命をなげうつものはあるまいという意味のことも書きのこしてあったという。これらの刺客の多くが水戸人であることもわかって来た。いずれも三十歳前後の男ざかりで、中には十九歳の青年がこの要撃に

加わっていたこともわかつて来た。安藤対馬の災難は不思議にもその傷が軽くて済んだが、多くの人の同情は生命^{いのちびろ}拾いをした老中よりも、現場に斃^{たお}れた青年たちの上に集まる。しかし、その人の傷ついたあとになって見ると、一方には世間の誤解や無根の流言がこの悲劇を生む^{もと}因であつたと言つて、こんなに思い詰めた壮士の暴挙を惜しむと言い出したものもあつた。安藤対馬その人を失つたら、あれほど外交の事に当たりうるものは他に見いだせない、アメリカのハリスにせよ、イギリスのオールコックにせよ、彼らに接して滞ることなく、屈することもなく、外国公使らの専横^{くじ}を挫いて、凜^{りんぜん}然とした態度を持ち続けたことにかけては、老中の右に出るものはなかったと言ひ出したものもあつた。

幕府はすでに憚るべき人と、憚るべき実とがない。井伊大老は
斃れ、岩瀬肥後は喀血して死し、安藤老中までも傷ついた。四
方の侮りが競うように起こつて来て、儒者は經典の立場から、武
士劍客は士道の立場から、その他医者、神職、和学者、僧侶な
ぞの思い思いに勝手な説を立てるものがあつても、幕府ではそれ
を制することもできないようになって来た。この中で、露国の船
将が対馬尾崎浦に上陸し駐屯しているとの報知すら伝わつ
た。港は鎖せ、ヨーロッパ人は打ち攘え、その排外の風がいたる
ところを吹きまくるばかりであつた。

四

ひとり 一人の旅人が京都の方面から美濃の中津川まで急いで来た。

この旅人は、近くまで江戸桜田邸にある長州の学塾有備館ゆうびかんのようがか用掛りをしていた男ざかりの侍である。かねて長州と水戸との提携を実現したいと思い立ち、幕府の嫌疑けんぎを避くるため品川沖合の位置を選び、長州の軍艦丙辰丸へいしんまるの艦長と共に水戸の有志と会見した閱歴を持つ人である。坂下門外の事変にも多少の關係があつて、水戸の有志から安藤老中要撃の相談を持ちかけられたこともあつたが、後にはその暴挙に対して危惧きぐの念を抱きいだ、次第に手を引いたという閱歴をも持つ人である。

中津川の本陣では、半蔵が年上の友人景蔵も留守のころであつ

た。景藏は平田門人の一人として、京都に出て国事に奔走しているところであつたからで。この旅人は恵那山えなさんを東に望むことのできるような中津川の町をよろこび、人の注意を避くるにいい位置にある景藏の留守宅を選んで、江戸麻布あざぶの長州屋敷から木曾街道經由で上京の途にある藩主（毛利慶親もうりよしちか）をそこに待ち受けていた。その目的は、京都の屋敷にある長藩世子せいし（定広）の内命を受けて、京都の形勢の激変したことを藩主に報じ、かねての藩論なる公武合体、航海遠略の到底実行せらるべくもないことを進言するためであつた。それよりは従来の方針を一変し、大いに破約攘夷たいとうを唱うべきことを藩主に説き勧めるためであつた。雄藩擡頭たいてうの時機が到つたことは、長いことその機会を待っていた長州人士を雀こおど

躍りさせたからで。

旅にある藩主はそれほど京都の形勢が激変したとは知らない。まして、そんな旅人が世子せいしの内命を帯びて、中津川に自分を待つとは知らない。さきに幕府への建白の結果として、公武間周旋の依頼を幕府から受け、いよいよ正式にその周旋を試みようとして江戸を出発して来たのであった。この大名は、日ごろの競争者で薩摩さつまに名高い中将なりあきら 斎なりあきら 彬なりあきらの弟にあたる島津しまづ久光ひさみつがすでにその勢力を京都の方に扶植し始めたことを知り、さらに勅使左衛門さへもんのか督み大原重徳しげのりを奉じて東下して来たほどの薩摩人の活躍を想像しながら、その年の六月中旬には諏訪すわにはいった。あだかも麻疹はしか流行のころである。一行は諏訪に三日逗とまり留ゆうし、同勢四百人ほ

どをあとに残して置いて、三留野泊まりで木曾路を上つて来た。

馬籠本陣の前まで来ると、その門前には諸大名通行のおりの定例のように、すでに用意した札の掲げてあるのを見た。

まつだいらだいぜんだゆう
松平大膳太夫様 御休所

松平大膳太夫とあるは、この大名のことで、長門国三十六万九千石の領主を意味する。

その時、半蔵は出て、一行の中の用人に挨拶した。

「わたしは吉左衛門の忤でございます。父はこの四月から中風にかかりまして、今だに床の上に臥たり起きたりしております。お昼は申し付けてございますが、何か他に御用もありましたら、わたしが承りましょう。」

「御主人は御病気か。それはおだいじに。ここから中津川まで何里ほどありましょう。」

「三里と申しております。こここの峠からは下りでございますから、そうお骨は折れません。」

この半蔵の言葉を聞くと、用人は本陣の門の内外を警衛する人たちに向かつて、

「諸君、中津川まではもう三里だそうですよ。ここで昼食をやつてください。」

と呼んだ。

馬籠の宿ではその日より十日ほど前に、彦根藩の幼主が江戸出府を送ったばかりの時であつた。十六歳の殿様、家老、用人、そ

の時の同勢はおびただしい人数で、行列も立派ではあったが、もはや先代井伊掃部頭^{かものかみ}が彦根の城主としてよくこの木曾路を往来したところのような氣勢は揚がらない。そこへ行くと、千段巻^{せんだんまき}の柄^えのついた黒鳥毛^{くろとりげ}の鎗^{やり}から、永樂通宝^{えいらくつうほう}の紋じるしまで、はげしい意気込みでやって来た長州人は彦根の人たちといちじるしい対照を見せる。

その日、半蔵は父の名代として、隣家の伊之助や問屋の九郎兵衛と共に、一行を宿はずれの石屋の坂あたりまで見送り、そこから家に引き返して来て、父の部屋^{へや}をのぞきに行つた。病床から半ば身を起こしかけている吉左衛門は山の中へ来る六月の暑さにも疲れがちであつた。半蔵は一度倒れたこの父が回復期に向かい

つあるというだけにもやや胸をなでおろして、なるべく頭を悩まさせるようなことは父の耳に入れまいとした。京都の方にある景蔵からは、容易ならぬ彼地かのちの形勢を半蔵のところへ報じて来た。伏見寺田屋の変をも知らせて来た。王政復古と幕府討伐の策を立てた八人の壮士があゝの伏見の旅館で斃たおれたことをも知らせて来た。公武間の周旋をもつて任ずる千余人の薩摩の精兵が藩主に引率されて来た時は、京都の町々はあだかも戒嚴令の下にあつたことをも知らせて来た。しかし半蔵は何事も父の耳に入れなかった。夕方に、彼は雪隠せつちんへ用を達たしに行つて、南側の廊下を通つた。長州藩主がその日の泊まりと聞く中津川の町の方は早く暮れて、遠い夕日の反射が西の空から恵那山の大きな傾斜に映るのを見た。

病後の吉左衛門には、まだ裏の二階へ行つて静養するほどの力がない。あの先代半六が隠居所となっていた味噌納屋の二階への梯子段はしごだんを昇のぼつたり降りたりするには、足もとがおぼつかなかつた。

この父は四月の発病以来、ずっと寛くつろぎの間に臥ねたり起きたりしている。その部屋は風呂場ふろばに近い。家のものが入浴を勧めるには都合がよい。一方は本陣の囲炉裏いろりばたや勝手に続いている。みんな看護するにも都合がよい。そのかわり朝に晩に用談などを持ち込む人たちが出たりはいったりして、半蔵としてはいつまでも父の寢床をその部屋に敷いて置くことを好まなかった。どうかす

ると頭を冷やせの、足を温めろのという父を見るたびに、半蔵は悲しがった。さびしい病後のつれづれから、父は半蔵に向かつていろいろ耳にしたことの説明を求める。六十四歳の晩年になってこんな思いがけない中風にかかったというふうに。まだ退役願ひもきき届けられない馬籠の駅長の身で、そうそう半蔵任せにして置かれないというふうにも。半蔵は京都や江戸にある平田同門の人たちからいろいろな報告を受けて、そのたびに山の中に辛抱してはいられぬような心持ちにもなるが、また思い返しては本陣問屋庄屋の父の代わりを勤めた。

中津川の会議が開かれて、長藩の主従が従来の方針を一変し、吉田松陰以来の航海遠略から破約攘夷へと大きく方向の転換を試

み始めたのも、それから藩主の上京となつて、公卿くげおとなを訪ひ朝廷の御機嫌ごきげんを伺い、すでに勅使を関東に遣つかわされているから、薩藩と共に叡慮えいりょの貫徹に尽力せよとの御沙汰ごさたを賜わつたのも、六月の二十日から七月へかけてのことであつた。薩藩と共に輦下れんか警衛の任に当たることにかけては、京都の屋敷にある世子せいし定広がすでにその朝命を拝していた。薩長二藩のこれらの一大飛躍は他藩の注意をひかずには置かない。ようやく危惧きぐの念を抱き始めたものもある。強い刺激を受けたものもある。こういう中であつて、薩長二藩の京都手入れから最も強い刺激を受けたものは、言うまでもなく幕府側にある人たちであらねばならない。従来幕府は事あるごとに京都に向かつて干渉するのを常とした。今度勅使の下向げこうを

江戸に迎えて見ると、かねて和宮様御降嫁のおりに堅く約束した
ばんいぼうぎよ 蛮夷防禦のことが勅旨の第一にあり、あわせて將軍の じょうらく 上洛、
 政治の改革にも及んでいて、幕府としては全く転倒した位置に立
 たせられた。干渉は実に京都から来た。しかも数百名の薩摩隼人
さつまはやと を引率する島津久光を背景にして迫つて来た。この干渉は幕府に
 ある上のものにも下のものにも強い衝動を与えた。その衝動は、
 多年の情実と弊害とを払いのけることを教えた。もつと政治は明
 るくしなければだめだということを教えた。

時代はおそろしい勢いで急転しかけて来た。かつて岩瀬肥後が
 井伊大老と争つて、政治生しょうがい涯とを賭してまで擁立しようとした
ひとつばしよしのぶ 一橋慶喜は將軍の後見に、
えちぜん 越前藩主松平春嶽まつだいらしゅんがくは政事

総裁の職に就くようになった。これまで幕府にあつてとかくの評判のあつた安藤対馬あんどうつしま、およびその同伴者なる久世大和くぜやまとの二人は退却を余儀なくされた。天朝に対する過去の非礼を陳謝し、協調の誠意を示すという意味で、安藤久世の二人は隠居急度きつとつし慎みの罰の薄暗いところへ追いやられたばかりでなく、あれほどの大獄を起こして一代を圧倒した井伊大老ですら追罰を免れなかった。およそ安政、万延のころに井伊大老を手本とし、その人の家の子郎党として出世した諸有司の多くは政治の舞台から退却し始めた。あるものは封一萬石ほうを削られ、あるものは禄二千石ろくを削られた。あるものはまた、隠居、蟄居ちつきよ、永蟄居えいちつきよ、差扣さしひかえというふう

に。

この周囲の空気の中で、半蔵は諸街道宿駅の上にまであらわれ
て来るなんらかの改変を待ち受けながら、父が健康の回復を祈つ
ていた。発病後は父も日ごろ好きな酒をぱったりやめ、煙草もへ
らし、わずかに俳諧はいかいや将棋の本などをあけて朝夕の心やりとし
ている。何かこの父を慰めるものはないか、と半蔵は思っている
ところへ、ちようど人足四人持ちで、大きな籠かごを本陣の門内へか
つぎ入れた宰領があつた。

宰領は半蔵の前に立つて言った。

「旦那だんな、これは今度、公儀から越前様へ御拝領になつた綿羊めんようと
いうものです。めずらしい獣です。わたしはこれを送り届け
にまいる途中ですが、しばらくお宅の庭で休ませていただきたい

。
「

江戸の方からそこへかつがれて来たのは、三足びきの綿羊だ。こんな木曾山の中へは初めて来たものだ。早速さっそく半蔵はお民を呼んで、表玄関の広い板の間に座蒲団ざぶとんを敷かせ、そこに父の席をつくった。

「みんな、おいで。」

とおまんも孫たちを呼んだ。

「越前様の御拝領かい。」と言いながら、吉左衛門は奥の方から来てそこへ静かにすわった。「越前様といえば、五月の十一日にこの街道をお通りになったじゃないか。おれは寝ていてお目にもかからなかったが、今度政事総裁職になったのもあのお大名だね。」

ちよつとしたことにも吉左衛門はそれをこの街道に結びつけて、諸大名の動きを読もうとする。

「あなたはそれだから、いけない。」とおまんは言った。「病氣する時には病氣するがいいなんて自分で言っていないながら、そう氣をつかうからいけない。まあ、このやさしい羊の目を御覧なさい。」

街道では癩疹はしかの神を送ったあとで、あちこちに病人や死亡者を出した流行病わづらの煩わづらいから、みんなようやく一息ついたところだ。その年の渋柿しぶがきの出来のうわさは出ても、京都と江戸の激しい争いなどはどこにあるかというほど穏やかな日もさして来ている。宰領の連れて来た三足の綿羊が籠かごの中で顔を寄せ、もぐもぐ鼻の

先を動かしているのを見ると、動物の好きなお柔くめや宗太は大騒ぎだ。持病の咳せきで引きこもりがちな金兵衛まで上の伏見屋からわざわざ見に出かけて来て、いつのまにか本陣の門前には多勢の人だかりがした。

「金兵衛さん、こういうめずらしい羊が日本に渡って来るようになったかと思うと、世の中も変わるはずですね。わたしは生まれて初めてこんな獣を見ます。」

と吉左衛門は言つて、なんとなく秋めいた街道の空を心深げにながめていた。

「半蔵、まあ見てくれよ。おれの足はこういうものだよ。」

と言つて、病み衰えた右の足を半蔵の前に出して見せるころは、吉左衛門もめつきり元氣づいた。早く食事を済ました夕方のことだ。付近の村々へは秋の祭礼の季節も来ていた。

「お父さん^{とつ}が病氣してから、もう百四十日の余になりますものね。」

半蔵は試みに、自分の前にさし出された父の足をなでて見た。健脚でこの街道を奔走したころの父の筋肉はどこへ行つたかといううようになつた。発病の当時、どつと床についたぎり、五十日あまりも安静にしていたあげくの人だ。堅く隆起していたような足の「ふくらっぱぎ」も今は子供のそれのように柔らかい。

「ひどいものじゃないか。」と吉左衛門は自分の足をしまいながら言った。「人が中ちゆうき気すると、右か左か、どっちかをやられると聞いているが、おれは右の方をやられた。そう言えば、おれは耳まで右の方が遠くなったようだぞ。」と笑って、気を変えて、

「しかし、きようはめずらしくよい気持ちだ。おれは金兵衛さんのところへお風呂ふろでももらいに行つて来る。」

これほど父の元気づいたことは、ひどく半蔵をよろこばせた。

「お父さんとつ、わたしも一緒に行きましょう。」

と彼もたち上がった。

この親子の胸には、江戸の道中奉行所の方から来た達しのことゆききが往来ゆききしていた。かねてうわさには上つていたが、いよいよ諸大

名が参覲交代制度の変革も事実となつて来た。これには幕府の諸有司の中にも反対するものが多かったというが、聰明で物に執着することの少ない一橋慶喜と、その相談相手なる松平春嶽とが、惜しげもなくこの英断に出た。言うまでもなく、参覲交代の制度は幕府が諸藩を統御するための重大な政策である。これが変革されるということは、深い時代の要求がなくては叶わ^{かな}ない。この一大改革はもう長いこと上にある識者の間に考えられて来たことであろうが、しかし吉左衛門親子のように下から見上げるものにとつても、この改変を余儀なくされるほどの幕府の衰えが目についた。諸大名が実際の通行に役立つ沿道の人民の声にきいて課役を軽くしないかぎり、ただ徳川政府の威光というだけでは、

多くの百姓ももはや動かなくなつて来た。

本陣の門が出る時、吉左衛門はそのことを半蔵にきいた。

「お前は今度のお達しをよく読んで見たかい。参観交代が全廃というわけではないんだね。」

「お父さん、全廃じゃありません。諸大名は三年目ごとに一度、御三家や溜詰たまりづめは一月ひとつきずつ江戸におれとありますがね、奥方や若様は帰国してもいいと言うんですから、まあほとんど骨抜きに近いようなものでしょう。」

夕方になるとかく疲れが出て引きこもりがちな吉左衛門が、その晩のように上の伏見屋まで歩こうと言い出したことは、病後初めての事と言ってもよかった。この父は久しぶりで家を出て見

るというふうで、しばらく門前にたたずんで、まだ暮れ切らない街道の空をながめた。

「半蔵、この街道はどうなろう。」

「参観交代がなくなったあとにですか。」

「そりや、お前、参観交代はなくなつても、まるきり街道がなくなりもしまいがね。まあ、金兵衛さんにもあつて、話して見るわい。」

心配してついて行く半蔵に助けられながら、吉左衛門は坂になった馬籠の町を非常に静かに歩いた。右に問屋、蓬菜屋ほうらいや、左に伏見屋、梺田屋ますだやなどの前後して新築のできた家々が両側に続いている。その間の宿場らしい道を登って行くと、親子二人ふたりのものは

ある石垣いしがきのそばで向こうからやって来る小前こまえの百姓に あつた。

百姓は吉左衛門の姿を見ると、いきなり自分の頬ほおかぶりしている手ぬぐいを取つて、走り寄つた。

「大旦那おおだんな、どちらへ、半蔵さまも御一緒かなし。お前さまがこ

んなに村を出歩かせるのも、御病氣になつてから初めてだらうに
。」

「あい。おかげで、日に日にいい方へ向いて来たよ。」

「まあ、おれもどのくらい心配したか知れすかなし。御病氣が御病氣だから、井戸の水で頭を冷やすぐらいは知れたものだと思つて、おれはお前さまのために恵那山えなさんまでよく雪を取りに行つて来たこともある。」

吉左衛門から見れば、これらの小前のものはみんな自分の子供だった。

そこまで行くと、上の伏見屋も近い。ちょうど金兵衛は山口村の祭礼狂言を見に二日泊まりで出かけて行って、その日の午後に帰って来たというところだった。

「おゝ、吉左衛門さんか。これはおめずらしい。」
と言つて、金兵衛は後添のちぞいのお玉と共によろこび迎えた。

金兵衛も吉左衛門と同じように、もはや退役の日の近いことを知っていた。新築した伏見屋は養子伊之助に譲り、火災後ずっと上の伏見屋の方に残っていて、晩年のしたくに余念もない。六十六歳の声を聞いてから、なかしんでん中新田へ杉苗すぎなえ四百本、青野へ杉苗百

本の植え付けなどを思い立つ人だ。

「お玉、お風呂ふろを見てあげな。」

という金兵衛の声を聞いて、半蔵は薄暗い湯どのの方へ父を誘った。病後の吉左衛門にとって長湯は大の禁物だった。半蔵は自分でも丸はだかになって、手ばしこく父の背中を流した。その不自由な手を洗い、衰えた足をも洗った。

「お父さんとつ、湯ざめがするといけませんよ、またこないだのようなことがあると、大変ですよ。」

病後の父をいたわる半蔵の心づかいも一通りではなかった。

間もなく上の伏見屋の店座敷では、山家風な行燈あんどんを置いたところに主客のものが集まって、夜咄よばなしにくつろいだ。

「金兵衛さん、わたしも命拾いをしましたよ。」と吉左衛門は言つた。「ひところは、これで明日あしたもあるかと思ひましてね、枕まくらについたことがよくありましたよ。」

「そう言えば、あの和かずのみや宮さまの御通行の時分から弱つていらした。」と金兵衛も茶なぞを勧めながら答える。「吉左衛門さんはあんなに無理をなすつて、あとでお弱りにならなければいいがつて、お玉ともよくあの時分におうわさしましたよ。」

「もう大丈夫です。ただ筆を持てないのと、箒ほうきを持てないのには——これにはほとんど閉口です。」

「吉左衛門さんの庭掃除そうじは有名だから。」

金兵衛は笑つた。そこへ伊之助も新築した家の方からやつて来

る。一同の話は宿場の前途に關係の深い今度の參觀交代制度改革のことに落ちて行つた。

「助郷すけごうにも弱りました。」と言ひ出すのは金兵衛だ。「宮様御

通行の時は特別の場合だ、あれは自分の臨機の処置だなんて言つたつて、そうは時勢が許さない。一度増助郷ましすけごうの例を開いたら、

もう今までどおりでは助郷が承知しなくなつたそうですよ。」

「そういうことが当然起こつて来ます。」と吉左衛門が言う。

「現に、」伊之助は二人の話を引き取つて、「あの公家衆くげしゅうの御

通行は四月の八日でしたから、まだこんな改革のお達しの出ない

前です。あの時は大湫泊おおくわくまりで、助郷人足六百人の備えをしろ

と言うんでしょう。みんな雇い錢でなけりや出て来やしません。」

「いくら公家衆でも、六百人の人足を出せはばかばかしい。」と半蔵は言った。

「それもそうだ。」と金兵衛は言葉をつづける。「あの公家衆の御通行には、差し引き、四両二分三朱、村方の損になったというじゃありませんか。」

「とにかく、御通行はもっと簡略にしたい。」とまた半蔵は言った。「いずれこんな改革は道中奉行へ相談のあったことでしよう。街道がどういうことになって行くか、そこまではわたしにも言えませんかね。しかし上から見ても下から見ても、参観交代のような儀式ばった御通行がそういつまで保存のできるものでもないでしょう。はんぶんじよくれい繁文縟礼を省こう、その費用をもっと有益な事に充あつ

てよう、なるべく人民の負担をも軽くしよう——それがこの改革の御趣意じゃありませんかね。」

「金兵衛さん、君はこの改革をどう思います。今まで江戸の方に人質のようになっていた諸大名の奥方や若様が、お国もとへお帰りになると言いますぜ。」

と吉左衛門が言う、旧い友だちも首をひねつて、

「さあ、わたしにはわかりません。——ただ、驚きます。」

その時になって見ると、江戸から報じて来る文久年度の改革には、ある悲壮な意志の歴然と動きはじめてものがあつた。参観交

代のような幕府にとって最も重大な政策が惜しげもなく投げ出されたばかりでなく、大赦は行なわれる、山陵は修復される、京都の方へ返していいような旧い慣例はどしどし廃ふるされた。幕府から任命していた皇居九門の警衛までも撤去された。およそ幕府の力にできるようなことは、松平春嶽を中心の人物にし山内容堂を相談役とする新内閣の手で行なわれるようになった。

封建時代にあるものの近代化は、後世を待つまでもなく、すでにその時に始まって来た。松平春嶽、山内容堂、この二人はそれふたりぞれの立場にあり、領地の事情をも異にしていたが、時代の趨すうせ勢いに着眼して早くから幕政改革の意見を抱いだいたことは似ていた。その就職以前から幕府に対して同情と理解とを持つことにかけて

も似ていた。水戸の御隠居、肥前ひぜんの鍋島閑叟なべしまかんそう、薩摩さつまの島津久光の諸公と共に、生前の岩瀬肥後から啓発せらるるところの多かつたということも似ていた。あの四十に手が届くか届かないかの若さで早くこの世を去った岩瀬肥後ののこした開国の思想が、その人の死後になってまた働き初めたということにも不思議はない。蕃書ばんしよ調所は洋書調所（開成所、後の帝国大学の前身）と改称される。江戸の講武所こうぶしよにおける弓術や犬追物いぬおものなぞのけいこは廃されて、歩兵、騎兵、砲兵の三兵が設けられる。井伊大老在職の当時に退けられた人材はまたそれぞれの閑却された位置から身を起こしつつある。門閥と兵力とにすぐれた会津藩主松平容保あいつづかたもりは、京都守護職の重大な任務を帯びて、新たにその任地へと向かい

つある。

時には、オランダ留学生派遣のうわさが夢のように半蔵の耳にはいる。二度も火災をこうむった江戸城建築のころは、まだ井伊大老在職の日で、老中水野越前守が造り残した数百万両の金銀のふんどう分銅はその時に費やされたといわれ、公儀の御金庫はあれから全く底を払ったと言われる。それほど苦しい身代のやり繰りの中で、今度の新内閣がオランダまで新知識を求めさせにやるというその思い切った方針が、半蔵を驚かした。

ちょうど、父吉左衛門は家にいて、例の寛くわんぎのま間にこもって、もはや退役の日のしたくなぞを始めていた。祖父半六は六十六歳まで宿役人を勤め、それから家督を譲って隠居したが、父は六十

四歳でそれをするというふうに。半蔵はこの父の様子をちよつとのぞいたあとで、南側の長い廊下を歩いて見た。オランダ留学生のうわさを思いながら、ひとり言つて見た。

「黒船はふえるばかりじゃないかしらん。」

とうとう、半蔵は父の前に呼ばれて、青山の家に伝わった古い書類などを引き渡されるような日を迎えた。父の退役はもはや時の問題であつたからで。

本陣問屋庄屋の三役を勤めるに必要な公用の記録から、田畑家屋敷に関する反別、^{たんべつ}年貢、^{ねんぐ}掟年貢^{おきてねんぐ}などを記^{しる}しつけた帳面の類^{たぐい}

までが否^{いや}応^{おう}なしに半蔵の前に取り出された。吉左衛門は半蔵に
言いつけて、古い箱につけてある革^{かわ}の紐^{ひも}を解かせた。人馬の公用
を保証するために、京都の大^{おお}舎^{とねり}人寮、江戸の道中奉行所をは
じめ、その他全国諸藩から送つてよこしてある大小種々の印鑑が
その中から出て来た。宿駅の合^{あい}印^{じるし}だ。吉左衛門はまた半蔵に
言いつけて、別の箱の紐^{ひも}を解かせた。その中には、遠く慶^{けい}長^{ちやう}
^{きやうほう}享^{きやう}保年代からの御年貢^{かいさいもくろく}皆済目録があり、代々持ち伝えて
も破損と散乱との憂いがあるから、後の子孫のために一卷の軸と
すると書き添えた先祖の遺筆も出て来た。

「これはお前の方へ渡す。」

父は半蔵の方で言おうとすることを聞き入れようとしなかつ

た。親の譲るものは、子の受け取るべきもの。そうひとりできめて、いろいろな事務用の帳面や数十通の書付などをそこへ取り出した。村方の関係としては、当時の戸籍とも言うべき宗門人別にんべつから、検地、年貢、送籍、縁組、離縁、訴訟の手続きまでを記しつけたもの。

「これも大切な古帳だ。」

と吉左衛門は言つて、左の手でそれを半蔵の方へ押しやった。木曾山中の御免荷物として、木材通用の跡を記しつけたものだった。森林保護の目的から伐採を禁じられている五木の中でも、毎年二百駄だずつの檜ひのき、榎えのきの類わらたぐいの馬籠村にも許されて来たことが、その中に明記してあつた。

「なんだかおれも遠く来たような気がする。」と吉左衛門は言つた。「おれの長い道づれはあの金兵衛さんだが、どうやらけんかもせずここまで来た。まあ、何十年の間、おれはほとんどあの人と言ひ合つたことがない。ただ二度——そうさ、ただ二度あるナ。一度はお喜佐と仙十郎せんじゅうろう（上の伏見屋の以前の養子）の間にできた子供のことで。今一度は古い地所のことで。半蔵は覚えがあろう、あの地所のことで金兵衛さんが大変な立腹で、いたい青山の欲心からこんなことが起こる、末長く御懇意に願いたいと思つているのに今からこんな問題が起こるようでは孫子の代が案じられるなんて、そう言つておれを攻撃したそうだ。おれはあとになつて人からその話を聞いた。何にしろあの時は金兵衛さ

んが顔色を変えて、おれの家へ古い書付なぞを見せに持ち込んで来た。あれはおれの覚えちがいだったかもしれないが、あんなに金兵衛さんも言わなくても済むことさ。いくらよい友だちでも、やつぱりあの人と、おれとは違う。今になつて見ると、よく二人はここまで一緒に歩いて来られたものだという氣もするね。おれはお前、このとおりな人間だし、金兵衛さんと来たら、あの人はなかなか細かいからね。土蔵の前の梨の木に紙袋^{かんぶくろ}をかぶせて置いて、大風に落ちた三つの梨のうちで、一番大きい梨の目方が百三匁、ほかの二つは目方が六十五匁あつたと、そう言うような人なんだからね。」

過ぐる年の大火に、馬籠本陣の古い書類も多く焼失した。かろ

うじて持ち出したもの、土蔵の方へ運んであつたものは残った。例の相州三浦にある本家から贈られた光琳こうりんの軸、それに火災前から表玄関の壁の上に掛けてあつた古い二本の鎗やりだけは遠い先祖を記念するものとして残った。その時、吉左衛門は『青山氏系図』としてあるものまで取り出して半蔵の前に置いた。

「半蔵、お前も知つてゐるように、吾家うちには出入りをする十三人の百姓がある。中には美濃みのの方から吾家うちへ嫁に來た人に随ついて馬籠に移住した關係のものもある。正月と言へば吾家うちへ餅もちをつきに來たり、松を立てたりしに來るのも、先祖以來の關係からさ。あの百姓たちには目をかけてやれよ。それから、お前に断わつて置くが、いよいよおれも隱居する日が來たら、何事もお前の量見一つ

でやってくれ——おれは一切、口を出すまいから。」

父はこの調子だ。半蔵の方でもう村方のことから街道の一切の世話まで引き受けてしまったような口ぶりだ。

その日、半蔵は父のいる部屋へやから店座敷の方へ引きさがって来た。こういう日の来ることは彼も予期していた。長い歴史のある青山の家を引き継ぎ、それを営むということが、もとより彼の心をよろこばせないではない。しかし、実際に彼がこの家を背負しよつて立とうとなると、これがはたして自分の行くべき道かと考える。国学者としての多くの同志——ことに友人の景蔵なぞが寝食を忘れて国事に奔走している中で、父は病み、実の兄きょうだい弟はなし、ただ一人お喜佐ひとりのような異はらちがい腹の妹に婿養子の祝次郎はあつて

も、この人は新宅の方にて彼とはあまり話も合わなかった。

秋らしい日が来ていた。店座敷の障子には、裏の竹林の方からでも飛んで来たかと思われるようなきりぎりすがいて、細長い肢^{あし}を伸ばしながら静かに障子の骨の上をはっている。半蔵の目はそのすずしそうな青い羽をながめるともなくながめて、しばらく虫の動きを追っていた。

お民は店座敷へ来て言った。

「あなた、顔色が青いじゃありませんか。」

「そりや、お前、生きてる人間だもの。」

これにはお民も二の句が継げなかった。そこへ継母のおまんが一人の男を連れてはいって来た。

「半蔵、清助さんがこれから吾家へ手伝いに通つて来てくれますよ。」

和田屋の清助という人だ。半蔵の家のものとは遠縁にあたる。

本陣問屋庄屋の雑務を何くれとなく手伝ってもらうには、持つて来いという人だ。清助は吉左衛門が見立てた人物だけあつて、青々と剃り立てた髻の跡の濃い腮をなでて、また福島役所の方から代替り本役の沙汰もないうちから、新主人半蔵のために祝い振舞の時のしたくなぞを始めた。客は宿役人の仲間の衆。それに組頭一同。当日はわざと粗酒一献。そんな相談をおまんにするの、この清助だ。

青山、小竹両家で待たれる福島役所からの剪紙（召喚状）

が届いたのは、それから間もなかった。それには青山吉左衛門^{せがれ}、年寄役小竹金兵衛^{せがれ}、兩人にて役所へまかりいでよとある。付添役二人、宿方惣^{そうだい}代二人同道の上ともある。かねて願つて置いた吉左衛門らの退役と隠居がきき届けられ、跡役は二人の忤^{せがれ}たちに命ずると書いてないまでも、その剪紙^{きりがみ}の意味はだれにでも読めた。

半蔵も心を決した。彼は隣家の伊之助を誘つて、福島をさして出かけた。木曾路に多い栗^{くり}の林にばらばら^{しぐれ}時雨の音の来るころには、やがて馬籠から行つた惣代^{そうだい}の一人、榊田屋^{ますだや}の相続人小左衛門、それに下男の佐吉なぞと共に、一同連れだつて福島からの帰路につく人たちであつた。彼が奥筋から妻籠まで引き返して来ると、

そこの本陣に寿平次が待ち受けていて、一緒に馬籠まで行こうという。

「寿平次さん、とうとうわたしも君たちのお仲間入りをしちまいましたよ。」

「みんなで寄つてたかつて、半蔵さんを庄屋にしないじや置かないんです。お父さんとつも、さぞお喜びでしょう。」

寿平次も笑つたり、祝つたりした。

宮様御降嫁の当時、公武一和の説を抱いて供奉ぐぶの列の中にあつた岩倉、千種ちぐさ、富小路とみのこうじの三人の公卿くげが近く差し控えを命ぜられ、つづいて蟄居ちつきよを命ぜられ、すでに落飾らくしよくの境涯きようがいにあるというほど一変した京都の方の様子も深く心にかかりながら、半蔵

は妻籠本陣に一晩泊まったあとで、また連れと一緒に街道を踏んで行った。妻籠からは、彼は自分を待ち受けてくれる人たちにと
思つて、念のために帰宅を報じて置いた。

寿平次を加えてからの帰路は、一層半蔵に別な心持ちを起こさせた。大橋を渡り、橋場というところを過ぎて、下り谷くだだににかかった。歩けば歩くほど新生活のかどでにあるような、ある意識が彼の内部なかにさめて行つた。

「寿平次さん、君の方へは何か最近に來た便たよりがありますか——江戸からでも。」

「さあ、最近に驚かされたと言へば、生なまむぎ麦事件ぐらいのもので
す。」

「あの報知しらせはわたしの方へも早く来ました。ほら、横須賀よこすかの旅に、あの辺は君と二人で歩いて通ったところなんですがね。」

武州の生麦と言え、勅使に随行した島津久光の一行、その帰国を急ぐ途中での八月二十一日あたりの出来事は江戸の方から知れて来ていた。あの英人の殺傷事件を想像しながら、木曾の尾垂おたるの沢深い山間やまあいを歩いて行くのは薄気味悪くもあるほど、まだそのうわさは半蔵らの記憶になまましい。

「寿平次さん、わたしはそれよりも、あの薩摩さつまの同勢の急いで帰ったというのが気になりますよ。あれほどの事件が途中で起こったというのに、それをうつちやらかして置いて行くくらいですかね。京都の方はどうでしょう。それほど雲行きが変わって来た

んじやありませんかね。」

「さあねえ。」

「寿平次さんは岩倉様のちつきよ蟄居を命ぜられたことはお聞きでしたかい。」

「そいつは初耳です。」

「どうもいろいろなことをまとめて考えて見ると、何か京都の方には起こっている——」

「半蔵さんのお仲間からは何か言つて来ますか。今じや平田先生の御門人で、京都に集まつてる人もずいぶんあるんでしょう。」

「しばらく景蔵さんからもたよ便りがありません。」

「なにしろ世の中は多事だ。これからの庄屋の三年は、お父さんとつ

時代の人たちの二十年に当たるかもしれませぬ。」

二人は話し話し歩いた。

いちこくとち

一石 栃まで帰って行くと、そこは妻籠と馬籠の宿境にも近い。歩き遅れた半蔵らは連れの伊之助や小左衛門などに追いついて、峠の峰まで帰って行つた。

「へえ、旦那^{だんな}、おめでとうございます。」

半蔵はその峰の上で、そこに自分を待ち受けている峠村の組頭、その他二、三の村のものの声を聞いた。

清水というところまで帰って行つた。馬籠の町内にある五人組の重立つたものが半蔵を出迎えた。陣場まで帰って行つた。問屋の九郎兵衛、馬籠の組頭で百姓総代の庄助、本陣新宅の祝次郎、

その他半蔵が内弟子うちでしの勝重かつしげから手習い子供まで、それに荒町あらまち

からのものなぞを入れると、十六、七人ばかりの人たちが彼を出

迎えた。かみまち上町まで帰って行くと、問屋九太夫をはじめ、梼田屋ますだや、

ほうらいや蓬菜屋、梅屋、いずれももう髪かみの白いそれらの村の長老たちが

改まった顔つきで、馬籠の新しい駅長をそこに待ち受けていた。

五

「あなたは勤王家ですか。」

「勤王家かとはなんだい。」

「その方のお味方ですかッて、きいているんですよ。」

「お民、どうしてお前はそんなことをおれにきくんだい。」

半蔵は本陣の奥の上段の間にいた。そこは諸大名が宿泊する部屋やにあてであるところで、平素はめったに家のものもはいらない。お民は仲の間の方から、そこに片づけものをしていおっとる夫を見に來た時だ。

「どうしてということもありませんけれど、」とお民は言つた。

「お母つかさんがそんなことを言つてましたから。」

半蔵は妻の顔をながめながら、「おれは勤王なんてことをめつたに口にしたこともない。今日、自分で勤王家だなんて言う人の顔を見ると、おれはふき出したくなる。そういう人は勤王を売る人だよ。ごらん——ほんとうに勤王に志してるものなら、かる

がるしくそんなことの言えるはずもない。」

「わたしはちよつときいて見たんですよ——お母^{つか}さんがそんなことを言っていましたからね。」

「だからさ、お前もそんなことを口にするんじゃないよ。」

お民は周囲を見回した。そこは北向きで、広い床の間から白地に雲形を織り出した高麗^{こうらい}縁の畳の上まで、茶室のような静かさに厳肅さがある。厚い壁を隔てて、街道の方の騒がしい物音もしない。部屋から見える坪庭には、山一つ隔てた妻籠^{つまご}より温^{あたたか}暖な冬が来ている。

「そう言えば、これは別の話ですけど、こないだ兄さん（寿平次）が来た時に、わたしにそう言っていましたよ——平田先生の

御門人は、幕府方から目をつけられているようだから、氣をおつけッて。」

「へえ、寿平次さんはそんなことを言っていたかい。」

將軍上じょうらく洛

の前触れと共に、京都の方へ先行してその準備を

しようとする一橋ひとつばし慶喜よしのぶの通行筋はやはりこの木曾街道で、旧

曆十月八日に江戸発駕はつがという日取りの通知まで来ているころだつ

た。道橋の見分に、宿割しゆくわりに、その方の役人はすでに何回とな

く馬籠へも入り込んで来た。半蔵はこの山家に一橋公を迎える日

のあるかと想おもつて見て、上段の間を歩き回っていた。

「どれ、お大根でも干して。」

お民は出て行つた。山家では沢庵漬たくあんづけの用意なぞにいそがし

かった。いずれももう冬じたくだ。野菜を貯^{たくわ}えたり、赤^{あか}蕪^{かぶ}を漬^つけたりすることは、半蔵の家でも年中行事の一つのようになっていた。その時、半蔵は妻を見送ったあとで、彼女のそこに残して置いて行つた言葉を考えて見た。深い窓にのみこもり暮らしているような継母のおまんが、しかも「わたしはもうお婆^{ばあ}さんだ」を口癖にしている五十四歳の婦人で、いつのまに彼の志を看破^{みやぶ}つたろうとも考えて見た。その心持ちから、彼は一層あの賢い継母を畏^{おそ}れた。

数日の後、半蔵は江戸の道^{どう}中^{ちゆう}奉^ぶ行^ぎ所^{しよう}から来た通知を受け取つて見て、一橋慶喜の上京がにわかに東海道経由となつたことを知つた。道普請まで命ぜられた木曾路の通行は何かの都合で模

様替えになった。その冬の布告によると、將軍上洛の導従が東海道を通行するものが多いから、十二月九日以後は旅人は皆東山道を通行せよとある。

「半蔵さま、来年は街道もごたごたしますぞ。」

「さあ、おれもその覚悟だ。」

清助と半蔵とはこんな言葉をかわした。

年も暮れて行つた。明ければ文久三年だ。その時になって見ると、東へ、東へと向かつていた多くの人の足は、全く反対な方角に向かうようになった。時局の中心はもはや江戸を去つて、京都に移りつつあるやに見えて来た。それを半蔵は自分が奔走する街道の上に讀んだ。彼も責任のあるからだとなつてから、一層注意

深い目を旅人の動きに向けるようになった。

本馬ほんま六十三文、輕尻からじり四十文、人足四十二文、これは馬籠から

隣宿美濃みのの落合おちあいまでの駄賃だちんとして、半蔵が毎日のように問屋場

の前で聞く声である。將軍上洛じょうらくの日も近いと聞く新しい年の

二月には、彼は京都行きの新撰組しんせんぐみの一隊をこの街道に迎えた。

一番隊から七番隊までの列をつくった人たちが雪の道を踏んで馬

籠に着いた。いずれも江戸の方で浪士ろうしの募集に応じ、尽忠報国を

まっこうに振りかざし、京都の市中を騒がす攘夷党じやういの志士浪人

に対抗して、幕府のために粉骨碎身しようという劍客ぞろいだ。

一道の達人、諸国の脱藩者、それから無頼ぶらいな放浪者なぞから成る

二百四十人からの群れの腕が馬籠の問屋場の前で鳴った。

二月も末になって、半蔵のところへは一人ひとりの訪問者があつた。宵よいの口を過ぎたところで、道に迷つた旅人なぞの泊めてくれという時刻でもなかった。街道もひっそりしていた。

「旦那だんな、大草仙蔵おおぐさせんぞうというかたが見えています。」

囲炉裏いろりばたで※造りわらづくをしていた下男の佐吉がそれを半蔵のところへ知らせに来た。

「大草仙蔵？」

「旦那にお目にかかればわかると言って、囲炉裏いろりばたの入り口の方においでたぞなし。」

不思議に思つて半蔵は出て見た。京都方面で奔走していると聞いた平田同門の一人が、着流しに雪駄せったばきで、入り口の土間のところ立っていた。大草仙蔵とは変名で、実は先輩の暮田正香くれたまさかであつた。

「青山君、君にお願いがあつて来ました。」

と客は言つたが、周囲に気を兼ねてすぐに切り出そうともしない。この先輩は歩き疲れたというふうで、上がり端はなのところに腰をおろした。ちやうど囲炉裏の方には人もいないのを見すまし、土間の壁の上に高く造りつけてある鶏の鳥屋とやまで見上げて、それから切り出した。

「実は、今、中津川から歩いて来たところです。君のお友だちの

浅見（景蔵） 君はお留守ですが、ゆうべはあそこの家に泊めてもらいました。青山君、こんなにおそく上がって御迷惑かもしれないが、今夜一晚御厄介ごやつかいになれますまいか。青山君はまだわたしたちのことを何もお聞きになりますまい。」

「しばらく景蔵さんからも便りたよがありませんから。」

「わたしはこれから伊那いなの方へ行つて身を隠すつもりです。」

客の言葉は短い。事情もよく半蔵にはわからない。しかし変名で夜おそく訪ねたずて来るくらいだ。それに様子もただではない。

「この先輩は幕府方の探偵たんていにでもつけられているんだ。」その考えがひらめくように半蔵の頭へ来た。

「暮田くれたさん、まあこつちへおいでください。しばらく待っていて

ください。くわしいことはあとで伺いましょう。」

半蔵は土間にある草履ぞうりを突ツかけながら、勝手口から裏の方へ通う木戸をあけた。その戸の外に正香まさかを隠した。

とにかく、厄介な人が舞い込んで来た。村には目証めあかしも滞在している。狭い土地で人の口もうるさい。どうしたら半蔵はこの夜道に疲れて来た先輩を救つて、同志も多く安全な伊那の谷の方へ落としてやることができようと考えた。家には、と見ると、父は正月以来裏の二階へ泊まりに行っている。お民は奥で子供らを寝かしつけている。通いで来る清助はもう自宅の方へ帰って行っている。弟子でしの勝重はまだ若し、佐吉や下女たちでは用が足りない。「これはお母さんつかに相談するにかぎる。」

その考えから、半蔵はありのままな事情を打ち明けて、客をか
くまってもらうために継母のおまんをさが探した。

「平田先生の御門人か。一晚ぐらいのことなら、土蔵の中でもよ
ろしかろう。」

おまんは引き受け顔に答えた。

暮田正香は半蔵と同国の人であるが、かつて江戸に出て水戸藩
士藤田ふじたとうこ東湖じゆくの塾に学んだことがあり、東湖没後に水戸の学問から
離れて平田派の古学に目を見開いたという閱歴を持っている。信
州北伊那郡小野村の倉沢くらさわ義よし髓ゆきを平田鉄胤かねたねの講筵こうえんに導いた
のも、この正香である。後に義髓は北伊那における平田派の先駆
をなしたという関係から、南信地方に多い平田門人で正香の名を

知らないものはない。

この人を裏の土蔵の方へ導こうとして、おまんは提ちようちん灯を手
にしながら先に立つて行つた。半蔵も座ざ蒲団なぞを用意して
そのあとについた。

「足もとにお気をつけくださいよ。石段を降りるところなぞがご
ざいますよ。」

とおまんは客に言つて、やがて土蔵の中に用でもあるように、
大きな鍵かぎで錠前をねじあけ、それを静かに抜き取つた。金網の張
つてある重い戸があくと、そこは半蔵夫婦が火災後しばらく仮かり
住居まいにもあてたところだ。座ざでも敷けば、客のいるところぐら
い設けられないこともなかつた。

「お客さんはお腹なかがおすきでしたらうね。」

それとなくおまんが半蔵にきくと、正香はやや安心したというふうで、

「いや、したくは途中でして来ました。なにしろ、京都を出る時は、二昼夜歩き通しに歩いて、まるで足が棒のようでした。それから昼は隠れ、夜は歩くというようにして、ようやくここまでたどり着きました。」

おまんは提灯の灯ひを片すみの壁に掛け、その土蔵の中に二人ふたりのものを置いて立ち去った。

「半蔵、お客さんの夜具はあとから運ばせますよ。」
との言葉をも残した。

「青山君、やりましたよ。」

二人ぎりになった時、正香はそんなことを言い出した。その調子が半蔵には、実に無造作にも、短気にも、とつぴにも、また思ひ詰めたようにも聞こえた。

同志九人、その多くは平田門人あるいは準門人であるが、等持院に安置してある足利^{あしかが}尊^{たかうじ}氏以下、二將軍の木像の首を抜き取つて、二十三日の夜にそれを三^{さん}条^{じよう}河^が原^{わら}に晒^{さら}しものにしたという。それには、今の世になつてこの足利らが罪状の右に出るものがある、もし旧悪を悔いて忠節を抽^{ぬき}んでることがないなら、天下

の有志はこぞつてその罪を糺ただすであろうとの意味を記し添しるえたという。ところがこの事を企てた仲間のうちから、会津方あいつ（京都守護の任にある）の一人の探偵があらわれて、同志の中には縛に就いたものもある。正香は二昼夜兼行でその難をのがれて来たことを半蔵の前に白状したのであつた。

正香に言わせると、將軍 上じょう 洛らくの日も近い。三条河原の光景は、それに対する一つの示威である、尊王の意志の表示である、死んだ武将の木像の首を晒さらしものにするようなことは子供らしい戯れとも聞こえるが、しかしその道德的な効果は大きい、自分らはそれをねらつたのであると。

この先輩の大胆さには、半蔵も驚かされた。「物学びするとも

がら」の実行を思う心は、そこまで突き詰めて行つたかと考えさせられた。同時に、平田大人^{うし}没後の門人と一口には言つても、この先輩に水戸風な学者の影響の多分に残っていることは争えないとも考えさせられた。

「だれか君を呼ぶ声がする。」

正香は戸に近づく人のけはいを聞きとがめるようにして、耳のところへ手をあてがった。半蔵も耳を澄ました。お民だ。彼女は佐吉に手伝わせて客の寝道具をそこへ持ち運んで来た。

「暮田さん、非常にお疲れのようですから、これでわたしも失礼します。お話はあす伺います。お休みください。」

そのまま半蔵は正香のそばを離れて、母屋^{もや}の方へ歸つて行つた。

どれほどの人の動き始めたとも知れないような京都の方のことを考え、そこにある友人の景蔵のことなぞを考えて、その晩は彼もよく眠られなかった。

翌日の昼過ぎに、半蔵はこつそり正香を見に行つた。御膳何人前、皿何人前と箱書きのしてある器物の並んだ土蔵の棚を背後にして、座蒲団の上に正香がさびしそうにすわっていた。前の晩に見た先輩の近づきがたい様子とも違って、多感で正直な感じのする一人の国学者をそこに見つけた。

その時、半蔵は腰につけて持つて行つた瓢箪を取り出した。木盃を正香の前に置いた。くたぶれて来た旅人をもてなすようにして、酒を勧めた。

「ほ。」と正香は目をまるくして、「君はめずらしいものをごちそうしてくれますね。」

「これは馬籠の酒です。伏見屋と^{ますだや}榊田屋と、二軒で今造っています。一つ山家の酒を味わって見てください。」

「どうも瓢箪のように口の小さいものから出る酒は、音からして違いますね。コツ、コツ、コツ、コツ——か。長道中でもして来た時には、これが何よりですよ。」

まるで子供のようなよろこび方だ。この先輩が瓢箪から出る酒の音を口まね^{かが}までしてよろこぶところは、前の晩に拳^{こぶし}を握り固め、五本の指を^{かが}屈め、後ろから^{たぶさ}髻でもつかむようにして、木像の首を引き抜く手まねをして見せながら等持院での現場の話を半蔵に聞

かせたその同じ豪傑とも見えなかつた。

そればかりではない。京都麴屋町の染め物屋で伊勢久いせきゆうと言え

ば理解のある義気に富んだ商人として中津川や伊那地方の国学者

で知らないもののない人の名が、この正香の口から出る。平田門

人、三輪田綱一郎みわたつないちろう、師岡正胤もろおかまさたねなどのやかましい連中が集まつ

ていたという二条衣の棚ころも たな——それから、同門の野代広助のしろひろすけ、梅村

真一郎、それに正香その人をも従えながら、秋田藩物頭ものがしら役と

して入京していた平田鉄胤てつぎよが寓居ぐうきよのあるところだという錦小

路うじ——それらの町々の名も、この人の口から出る。伊那から出

て、公卿くげと志士の間の連絡を取ったり、宮廷に近づいたり、鉄胤

門下としてあらゆる方法で国学者の運動を助けている松尾多勢子たせこ

のような婦人とも正香は懇意にして、その人が帯の間にはさんでいる短刀、地味な着物に黒^{くろ}縷^{じゆす}子の帯、長い筭^{こう}、櫛^{くし}巻^まきにした髪の姿までを話のなかに彷彿^{ほうふつ}させて見せる。日ごろ半蔵が知りたく思っている師鉄胤や同門の人たちの消息ばかりでなく、京都の方の町の空気まで一緒に持つて来たようなのも、この正香だ。

「そう言えば、青山君。」と正香は手にした木^も盃^{くはい}を下に置いて、^{ひざ}膝をかき合わせながら言った。「君は和^{かずのみや}宮さまの御降嫁あた^りからの京都をどう思いますか。薩^{さつ}摩^まが来る、長州が来る、土佐が来る、今度は会津が来る。諸大名が動いたから、機運が動いて来たと思うのは大違いさ。機運が動いたからこそ、薩州公などは鎮撫^{ちんぶ}に向かつて来たし、長州公はまた長州公で、藩論を一変して

乗り込んで来た。そりや、君、和宮さまの御降嫁だつても、この機運の動いてることを関東に教えたのさ。ところが関東じや目がさめない。勅使げこう下向となつて、慶喜公は將軍の後見に、越前公えちぜんは政事總裁にと、手を取るように言つて教えられて、ようやくいくらか目がさめましたろうさ。しかし、君、世の中は妙なものじやありませんか。あの薩州公や、越前公や、それから土州公などがいくらやきもきしても、名君と言われる諸大名の力だけでこの機運をどうすることもできませんね。まあ薩州公が勅使を奉じて江戸の方へ行つてゐる間にですよ、もう京都の形勢は一変してしましたよ。この正月の二十一日には、大坂にいる幕府方の名高い医者だいなごんやしきを殺して、その片耳を中山大納言の邸に投げ込むものがある。

二十八日には千種家ちぐさの臣けらいを殺して、その右の腕を千種家の邸に、左の腕を岩倉家の邸に投げ込むものがある。攘夷の血祭りだなんて言つて、そりや乱脈なものさ。岩倉様なぞが恐れて隠れるはずじゃありませんか。まあ京都へ行つて見たまえ、みんな勝手な気き焰えんを揚げていますから。中にはもう関東なんか眼中にないものもありますから。こないだもある人が、江戸のようなところから来て見ると、京都はまるで野蛮人の巢だと言つて、驚いていましたよ。そのかわり活気はあります。参政寄人よりうどというような新しいお公家く様の政事団体もできたし、どんな草深いところから出て来た野人でも、学習院へ行きさえすれば時事を建白することができる。見たまえ——今の京都には、なんでもある。公武合体から破約攘

夷まである。そんなものが渦うずを巻いてる。ところでこの公武合体ですが、こいつがまた眉唾まゆつば物ですて。そこですよ、わたしたちは尊王の旗を高く揚げたい。ほんとうに機運の向かうところを示したい。足利尊氏のような武将の首を晒さらしものにして見せたのも、実を言えばそんなところから来ていますよ。」

「暮田くれたさん。」と半蔵は相手の長い話をさえぎった。「鉄胤先生は、いったいどういう意見でしょう。」

「わたしたちの今度やった事件にですか。そりや君、鉄胤先生にそんな相談をすれば、笑われるにきまつてる。だからわたしたちは黙って実行したんです。三輪田元綱がこの事件の首唱者なんですけれど、あの晩は三輪田は同行しませんでした。」

沈黙が続いた。

半蔵はそう長くこの珍客を土蔵の中に隠して置くわけに行かなかった。暮れないうちに早く馬籠を立たせ、すくなくもその晩のうちに清内路せいないじまでは行くことを教えねばならなかった。清内路まで行けば、そこは伊那道にあたり、原信好のぶよしのような同門の先輩が住む家もあったからで。

半蔵は正香にきいた。

「暮田さんは、木曾路きそじは初めてですか。」

「権兵衛ごんべえ街道から伊那へはいったことはありますが、こつちの方

は初めてです。」

「そんなら、こうなさるといい。これから妻籠つまごの方へ向かつて行きますと、橋場はしばというところがありますよ。あの大橋を渡ると、道が二つに分かれていまして、右が伊那道です。実は母とも相談しまして、橋場まで吾家うちの下男に送らせてあげることになりました。」

「そうしていただければ、ありがたい。」

「あれから先はかなり深い山の中ですが、ところどころに村もありますし、馬も通います。中津川から飯田いいたへ行く荷物はあの道を通るんです。蘭あちらぎがわ川について東南へ東南へと取っておいでなさればいい。」

おまんは着流しでやって来た客のために、脚絆きやはんなどを母屋もやの方から用意して来た。粗末ではあるが、と言って合羽かっぱまで持つて来て客に勧めた。佐吉も心得ていると見えて、土蔵の前には新しい草鞋わらじがそろえてあった。

正香は性急な人で、おまんや半蔵のしている前で無造作に合羽へ手を通した。礼を述べるとすぐ草鞋をはいて、その足で土蔵の前の柿かきの木の下を歩き回った。

「暮田さん、わたしもそこまで御一緒にまいります。」

と言って、半蔵は表門から出ずに、裏の木小屋の方へ客を導いた。木戸を押すと、外に本陣の稲荷いなりがある。竹藪たけやぶがある。石いしが垣きがある。小径こみちがある。その小径について街道を横ぎって行っ

た。樋をつたう水の奔り流れて来ているところへ出ると、静かな村の裏道がそこに続いている。

その時、正香はホツと息をついた。半蔵や佐吉に送られて歩きながら、

「青山君、篤胤先生あつたねの古史伝を伊那の有志が上木じようぼくしているように聞いていますが、君もあれには御関係ですかね。」

「そうですよ。去年の八月に、ようやく第一帙ちっを出しましたよ。」

「地方の出版としては、あれは大事業ですね。秋田（篤胤の生地）でさえ企てないようなことを伊那の衆が発起してくれたと言って、鉄胤先生などもあれには身を入れておいででしたつけ。なにしろ、伊那の方はさかんですね。先生のお話じゃ、毎年門人がふえると

いうじやありませんか。」

「ある村なぞは、全村平田の信奉者だと言ってもいいくらいでしょう。そのくせ、まつぎわよしあき松沢義章という人が行商して歩いて、こま小間物類をあきないながら道を伝えた時分には、まだあの谷には古学というものはなかったそうですが。」

「機運やむべからずさ。もとおり本居、平田の学説というものは、それを正しいとするか、あるいは排斥するか、すくなくも今の時代に生きるもので無関心ではいられないものですからねえ。」

あわただしい中にも、送られる正香と、送る半蔵との間には、こんな話が尽きなかった。

半蔵は峠の上まで客と一緒に歩いた。別れぎわに、

「暮田さんは、宮川寛齋という医者を御存じでしょうか。」

「美濃みのの国学者でしょう。名前はよく聞いていますが、ついあつたことはありません。」

「中津川の景蔵さん、香蔵さん、それにわたしなぞは、三人ともふるでし古い弟子ですよ。鉄胤先生に紹介してください。つたのも宮川先生です。あの先生も今じゃ伊那の方ですが、どうしておいででしょうか——」

「そう言えば、青山君は鉄胤先生に一度あつたきりだそうですね。一度あつたお弟子でも、十年そばにいろお弟子でも、あの鉄胤先生には同じようだ。君の話もよく出ますよ。」

この人の残して置いて行つた言葉も、半蔵には忘れられなかつ

た。

もはや、暖かい雨がやって来る。二月の末に京都を発^たつて来たという正香は尾張^{おわり}や仙^{せん}台^{だい}のような大藩の主人公らまで勅命に応じて上京したことは知るまいが、ちようどあの正香が夜道を急いで来るころに、この木曾路には二藩主の通行もあつた。三千五百人からの尾張の人足が来て馬籠の宿に詰めた。あの時、二百四十匹の継^{つぎ}立ての馬を残らず雇い上げなければならなかつたほどだ。木曾街道筋の通行は初めてと聞く仙台藩主の場合にも、時節柄同勢やお供は減少という触れ込みでも、千六百人の一大旅行団が京

都へ向けてこの宿場を通過した。しかも応接に困難な東北弁で。

「半蔵、お前のところへ来たお客さんも、無事に伊那の小野村まで落ち延びていらしたろうか。」

こんなうわさをおまんがするころは、そこいらは桃の春だった。一橋慶喜の英断に出た参覲交代制度の変革の結果は、驚かれるほどの勢いでこの街道にあらわれて来るようになった。旧暦三月のよい季節を迎えて見ると、あの江戸の方で上巳じょうみの御祝儀を申し上げるとか、御能拝見おのうを許されるとか、または両山の御霊屋おたまやへ参詣んけいするとかのほかには、人質も同様に、堅固で嚴重な武家屋敷のなかにこもり暮らしていたどこの簾れんちゅう中とかどこの若殿とか、というような人たちが、まるで手足の鎖を解き放たれたようにして、

続々帰国の旅に上つて来るようになった。

越前の女中方、尾張の若殿に簾中、紀州の奥方ならびに女中方、それらの婦人や子供の一行が江戸の方から上つて来て、いずれも本陣や問屋の前に駕籠かごを休めて行つた。尾州の家中なるせはやとのしよ成瀬隼人正うの女中方、肥前島原の女中方、因いんしゅう州の女中方なぞの通行が続きに続いた。これが馬籠峠というところかの顔つきの婦人もある。ようやく山の上の空気を自由に吸うことができたと言いたげな顔つきのものもある。半蔵の家に一泊ときめて、五、六人で比丘尼寺びくにでらの蓮池はすいけの方まで遊び回り、谷川に下帯洗濯せんたくなぞをして来る女中方もある。

上の伏見屋の金兵衛は、半蔵の父と同じようにすでに隠居の身

であるが、持つて生まれた性分しょうぶんからじつとしていられなかった。きのうは因州の分家にあたる松平隠岐守おきのかみの女中方が通り、きようは岩村の簾中方が子供衆まで連れての通行があると聞くと、そのたびに旧い友ふるだちを誘いに来た。

「吉左衛門さん、いくら御静養中だって、そう引ッ込んでばかりいなくてもいいでしょう。まあすこし出てごらんさい。おきれいと言つていいか、おみごとと言つていいか、わたしは拝見しているうちに涙がこぼれて来ますよ。」

毎日のような女中方の通行だ。半蔵や伊之助は見物どころではなかった。この帰国する人たちの通行にかぎり、木曾下四宿へ五百人の新助郷しんすけごうが許され、特にお定めより割のよい相対雇あいたいやといの

賃錢まで許され、百人ばかりの伊那の百姓は馬籠へも来て詰めていた。町人四分、武家六分と言われる江戸もあとに見捨てて来た屋敷方の人々は、住み慣れた町々の方の財界の混乱を顧みるとまもないようであつた。

「国もとへ、国もとへ。」

その声は——解放された諸大名の家族が揚げるその歓呼は——過去三世紀間の威力を誇る東照宮の覇業はぎようも、内部から崩れくずかけて行く時がやって来たかと思わせる。中には、一団の女中方が馬籠の町のなかだけを全部徒歩おひろいで、街道の両側に群がる普通の旅行者や村の人たちの間を通り過ぎるのもある。桃から山桜へと急ぐ木曾の季節のなかで、薩州の御隠居、それから女中の通行のあ

とには、また薩州の簾れんちゆう中の通行も続いた。

第七章

一

文ぶん久きゆう 三年は当時の排外熱の絶頂に達した年である。かねて
うわさのあつた將軍家いえもち茂もちの上じょうらく洛らくは、その声のさわがしいま
つ最中に行なわれた。

二月十三日に將軍は江戸を出発した。時節柄、万事質素に、と
いう触れ込みであつたが、それでもその通行筋にあたる東海道で
は一時旅人の通行を禁止するほどの嚴重な警戒ぶりで、三月四日

にはすでに京都に到着し、三千あまりの兵に護^{まも}られながら二条城にはいった。この京都訪問は、三代將軍家^{いえみつ}光の時代まで怠らなかつたという入朝の儀式を復活したものであり、当時の常識とも言ふべき大義名分の声に聴^きいて幕府方においてもいささか鑑^{かん}みるところのあつた証拠であり、王室に対する過去の非礼を陳謝する意味のものでもあつて、同時に公武合体の意をいたし、一切の政務は従前どおり関東に委任するよしの御沙汰^{ごさた}を拝するためであつた。宮様御降嫁以来、帝^{みかど}と將軍とはすでに義理ある御兄弟^{ごきょうだい}の間柄である。もしこれが一層王室と將軍家とを結びつけるなかだちとなり、政令二途に出るような危機を防ぎ止め、動揺する諸藩の人心をしずめることに役立つなら、上洛に要する莫^{ばく}大^{だい}な費用も

惜しむところではないと言つて、關東方がこの旅に多くの望みをかけて行つたというに不思議はない。遠く寛永時代かんえいにおける徳川將軍の上洛と言へば、さかんな關東の勢いは一代を圧したもので、時の主上ですらわざわざ二条城へ行ぎようこう幸せられたという。いよいよ將軍家参内さんだいのおりには、多くの公卿衆くげはお供の格で、いずれも装束しょうぞく着用で、先に立つて案内役を勤めたものであつたという。二百十余年の時はこの武將の位置を変えたばかりでなく、その周囲をも変えた。三条河原に残る示威のうわさに、志士浪人の徘徊はいかいに、決死の覚悟をもつてする種々さまざまな建白に、王室回復の志を抱く公卿たちの策動に、洛中の風物がそれほど薄暗い空氣に包まれていたことは、實際に京都の土を踏んで見た關東方

の想像以上であつたと言わるる。ちようど水戸藩主も前後して入^じ洛^{ゆるく}したが、

將軍家の入洛はそれと比べものにならないほどのひそやかさで、道路に拝観するものもまれであつた。そればかりではない。近臣のものは家^{いえもち}茂の身を案じて、なんとかして將軍を護^{まも}らねばならないと考えるほどの恐怖と疑心とにさえ駆られたという。將軍はまだ二十歳にも達しない、宮中にはいつてはいかに思われても武士の随^{したが}い行くべきところでない、それには鋭い懷劍を用意して置いて参内の時にひそかに差し上げようというのが近臣のものの計画であつたという。さすがに家茂はそんなもの^{ふところ}を懐にする人ではなかつた。それを見るとたちまち顔色を変えて、その劍を座上に投げ捨てた。その時の家茂の言葉に、朝廷を尊崇し

て参内する身に危害を加えようとするもののあるべき道理がない、もしこんな懷劍を隠し持つとしたら、それこそ朝廷を疑い奉るにもひとしい、はなはだもつて無礼ではないかと。それにはかたわらに伺候していた老中いたくらいがのかみ板倉伊賀守も返す言葉がなくて、その懷劍をしりぞけてしまったという。その時、將軍はすでに朝服を着けていた。参内するばかりにしたくができた。麻あさがみしもを着けた五十人あまりの侍さむらいしゅう衆がその先を払つて、いずれも恐れ入った態度を取つて、ひそやかに二条城を出たのは三月七日の朝のことだ。台徳公の面影おもかげのあると言わるる年若な將軍は、小御所こごしよの方でも肅然と威儀正しく静座せいざせられたというが、すべてこれらのことは当時の容易ならぬ形勢を語つていた。

この将軍の上洛は、最初長州侯の建議にもとづくという。しかし京都にはこれを機会に、うんと関東方の膏あぶらを絞ろうという人たちが待っていた。もともと真木和泉まきいずみらを急先鋒きゅうせんぽうとする一派の志士が、天下変革の兆きざしもあらわれたとし、王室の回復も遠くないとして、攘夷をもつてひそかに討幕の手段とする運動を起こしたのは、すでに弘化こうか安政のころからである。あの京都寺田屋の事変などはこの運動のあらわれであつた。これは次第に王室回復の志を抱く公卿たちと結びつき、歴史的にも幕府と相いれない長州藩の支持を得るようになって、一層組織のあるものとなった。尊王攘夷は実にこの討幕運動の旗じるしだ。これは王室の衰微を嘆き幕府の専横を憤る烈はげしい反抗心から生まれたもので、その出発点

においてまじりけのあつたものではない。その計画としては攘夷と討幕との一致結合を謀^{はか}り、攘夷の名によつて幕府の破壊に突進しようとするものである。あの水戸藩士、藤田東湖^{ふじたとうこ}、戸田蓬軒^{とだほうけん}らの率先して唱え初めた尊王攘夷は、幾多の屈折を経て、とうとうこの実行運動にまで来た。

排外の声も高い。もとより開港の方針で進んで来た幕府当局でも、海岸の防備をおろそかにしていいとは考えなかつたのである。参^{さん}覲^{きん}交^{こう}代^{たい}のような幕府にとって最も重大な政策が惜しげもなく投げ出されたというのも、その一面は諸大名の江戸出府に要す

る無益な費用を省いて、兵力を充実し、武備を完全にするためであつた。いかにせん、徳川幕府としては諸藩を統一してヨーロッパよりする勢力に対抗しうるだけの信用をも実力をも持たなかつた。それでも京都方を安心させるため、宮様御降嫁の当時から外夷いはいの防禦ぼうぎよを誓い、諸外国と取り結んだ条約を引き戻すもどか、無法な侵入者を征伐するか、いずれかを選んで叡慮えいりよを安んずるであらうとの言質げんちが与えてある。この一時の気休めが京都方を満足させるはずもない。周囲の事情はもはやあいまいな態度を許さなかつた。將軍の上洛に先だつてその準備のために京都に滞在していた一橋慶喜ひとつばしよしですら、三条実美さんじようさねとみ、阿野公誠あのきんみを正使とし、滋し野井実在おおぎまちきんただ、正親町公董あねのこうじきんとも、姉小路公知を副使とする公卿た

ちから、將軍入洛^{じゅらく}以前にすでに攘夷期限を迫られていたほどの時である。今度の京都訪問を機会に、家茂^{いえもち}の名によつてこの容易ならぬ問題に確答を与えないかぎり、たとい帝御自身の年若な將軍に寄せらるる御同情があり、百方その間を周旋する慶喜の尽力があるにしても、將軍家としてはわずか十日ばかりの滞在の予定で京都を辞し去ることはできない状態にあつた。

しかし、その年の二月から、遠く横浜の港の方には、十一隻から成るイギリス艦隊の碇泊^{ていはく}していたことを見のがしてはならない。それらの艦隊がややもすれば自由行動をも執りかねまじき態度を示していたことを見のがしてはならない。それにはいわゆる^{なまむぎ}生麦事件なるものを知る必要がある。

横浜開港以来、足掛け五年にもなる。排外を意味する横浜襲撃が諸浪士によつて企てられているとのうわさは幾回となく伝わつたばかりでなく、江戸高輪東禅寺にある英国公使館は襲われ、外人に対する迫害沙汰も頻々として起こつた。下田以来の最初の書記として米国公使館に在勤していたヒュウスケンなどもその犠牲者の一人だ。彼は日米外交のそもそもからハリスと共にその局に当たつた人で、日本の国情に対する理解も同情も深かつたと言われるが、江戸三田古川橋のほとりで殺害された。これらの外人を保護するため幕府方で外国御用の出役を設置し、三百

余人の番衆の子弟をしてそれに当たらせるなぞのことがあればあるほど、多くの人の反感はますます高まるばかりであつた。そこへ生麦事件だ。

生麦事件とは何か。これは意外に大きな外国関係のつまずきを引き起こした東海道筋での出来事である。時は前年八月二十一日、ところは川崎駅に近い生麦村、ホンコン香港在留の英国商人リチャードソン、同じホンコン香港より来た商人の妻ボロオデル、横浜在留の英国商人マアシャル、およびクラアク、この四人のものが横浜から川崎方面に馬を駆つて、おりから江戸より帰西の途にある薩摩さつまの島津まつひさみつ久光ひさみつが一行に行きあつた。勅使大原左衛門督おおはらさえもんのかみに随行して来た島津氏の供衆も数多くあつて帰りの途中も混雑するであろう

から、ことに外国の事情に慣れないものが多くて自然行き違いを生ずべき懸念けねんもあるから、当日は神奈川辺かながわの街道筋を出歩くなどは、かねて神奈川奉行から各国領事を通じて横浜居留の外国人へ通達してあったというが、その意味がよく徹底しなかったであろう。馬上の英国人らは行列の中へ乗り入れようとしたのでもなかった。言語の不通よりか、習慣の相違よりか、薩摩のお手先衆から声がかかったのをよく解しなかったらしい。歩行の自由を有する道路を通るにさしつかえはあるまいというふうで、なおも下りの方へ行き過ぎようとしたから、たまらない。五、六百人の同勢に護まもられながら久光の駕籠かごも次第に近づいて来る時で、二人ふたりの武士の抜いた白刃がたちまち英国人らの腰の辺にひらめいた。そ

れに驚いて、上りの方へ走るものがあり、馬を止めてまた走り去るものがあり、残り一人のリチャードソンは松原というところで落馬して、その馬だけが走り去った。薩摩方の武士は落馬した異人の深手ふかてに苦しむのを見て、六人ほどでその異人の手を取り、畑中へ引き込んだという。傷つきのがれた三人のうち、あるものは左の肩を斬きられ、あるものは頭部へ斬りつけられ、一番無事な婦人も帽子と髪の毛の一部を斬られながら居留地までたどり着いた。この変報と共に、イギリス、フランスの兵士、その他の外国人は現場に急行して、神奈川奉行支配取締りなどと立ち会いの上、リチャードソンの死体を担架に載せて引き取った。翌日は横浜在留の外人はすべて業を休んだ。莊嚴な行列によつて葬儀が営まれた。

そればかりでなく、外人は集会して強い態度を執ることを申し合
わせた。神奈川奉行を通じて、凶行者の逮捕せられるまでは島津
氏の西上を差し止められたいとの抗議を持ち出したが、薩摩の一
行はそれを顧みないで西に帰ってしまった。

この事件の起こった前月には仏国公使館付きの二人の士官が横
浜港崎町の辺で重傷を負わせられ、同じ年の十二月の夜には品しなが
川御殿山の方に幕府で建造中であつた外国公使館の一区域も

長州人士のために焼かれた。排外の勢いはほとんど停止するところ
を知らない。当時の英国代理公使ニイルは、この日本人の態度
を改めさせなければならぬとでも考えたものか、横浜在留外人
の意見を代表し、断然たる決心をもって生麦事件の責任を問うた

めに幕府に迫つて来た。海軍少将クロパアの率いる十一隻からの艦隊が本国政府の指令のもとに横浜に到着したのは、その結果だ。

このことが將軍家茂滞在中の京都の方に聞こえた。イギリス側の抗議は強硬をきわめたもので、英国臣民が罪なしに殺害せられるような惨酷さんこくな所業に対し、日本政府がその当然の義務を怠るのみか、薩州侯をして下手人げしゅにんを出させることもできないのは、英国政府を侮辱するものであるとし、第一明らかにその罪を陳謝すべき事、償金十万ポンドを支払うべき事、もし満足な答えが得られないなら、英国水師提督は艦隊の威力によつて目的を達するに必要な行動を執るであろうと言ひ、のみならず日本政府の力で薩摩の領分に下手人を捕えることもできないなら、英国は直接に

薩州侯と交渉するであろう、それには艦隊を薩摩の港に差し向け、下手人を捕え、英国海軍士官の面前において斬首ざんしゅすべき事、被害者の親戚しんせきおよび負傷者の慰藉料いしやりようとして二万五千ポンドを支払うべき事をも付け添えて来た。この通牒つうちようの影響は大きかった。のみならず、諸藩の有志が評定のために参集していた学習院へ達した時は、イギリス側の申し出はいくらかゆがめられた形のものとなって諸有志の間に伝えられた。それは左の三か条について返答を承りたい、とあつたという。

一、島津久光をイギリスに相渡し申さるべきや。

二、償銀として十萬ポンド差し出さるべきや。

三、薩摩の国を征伐いたすべきや。

「関東の事情切迫につき、英艦防禦ぼうぎよのため大樹たいじゆ（家茂のこと）
帰府の儀、もつともの訳わけがらに候えども、京都ならびに近海の守
備警衛は大樹において自ら指揮これあるべく候そうろう。かつ、攘夷決
戦のおりから、君臣一和にこれなく候ては相叶あいかなわざるのところ、
大樹関東へ帰府せられ、東西相離れ候ては、君臣の情意相通ぜず、
自然隔離の姿に相成るべく、天下の形勢救うべからざるの場合に
たちいたり申すべく候。当節、大樹帰城の儀、叡慮えいりよにおいても
安んぜられず候間、滞京ありて、守衛の計略厚く相運あいめぐらされ、
宸襟しんきんを安んじ奉り候よう思し召おほされ候。英艦応接の儀は浪華なにわみ

港^{など}へ相回し、拒絶談判これあるべく、万一兵端を開き候節は大

樹自身出張、万事指揮これあり候わば、皇国の志気挽回^{ばんかい}の機会

にこれあるべく思し召され候。関東防禦の儀は、しかるべき人^{にんて}

体^い相選み申し付けられ候よう、御沙汰^{ごさた}に候事。「これは小御所^{こごしよ}

において関白から一橋慶喜に渡されたというものである。学習院

に参集する有志はいずれもこれを写し伝えることができた。とり

あえず幕府方は海岸の防備を嚴重にすべきことを諸藩に通達し、

イギリス側に向かつては返答の延期を求めた。打てば響くような

京都の空気の中で、人々はいずれも伝^{てん}奏^{そう}からの触れ書を読み、

所司代がお届けの結果を待った。あるものはイギリスの三か条が

すでに拒絶せられたといい、あるものは仏国公使が調停^たに起つた

といい、あるものは必ず先方より兵端を開くであろうと言った。諸説は紛々^{ふんぷん}として、前途のほども測りがたかった。

四人の外人の死傷に端緒を發する生麦事件は、これほどの外交の危機に推し移った。多年の排外熱はついにこの結果を招いた。

けれどもこのことは攘夷派の顧みるところとはならなかった。討幕へと急ぐ多くの志士は、むしろこの機会を見のがすまいとしたのである。当時、京都にあつた松平春嶽^{まつだいらしゅんがく}は、公武合体の成功もおぼつかないと断念してか、事多く志と違^{たが}うというふうで、

政事総裁の職を辞して帰国したといい、急を聞いて上京した島津久光もかなり苦しい立場にあつて、これも国もとの海岸防禦を名目に、わずか数日の滞在で帰ってしまったという。近衛忠熙^{このえただひろ}は

潜み、中川宮（青蓮院しょうれんいん）も隠れた。

二

香藏は美濃中津川といやの問屋に、半藏は木曾馬籠きそまづこめの本陣に、二人は同じ木曾街道筋あつたねにいて、京都の様子を案じ暮らした。二人の友人で、平田篤胤あつたね没後の門人仲間なる景藏は、当時京都の方にあつて国事のために奔走していたが、その景藏からは二人あてにした報告がよく届いた。いろいろなことがその中に報じてある。帝みかどには御祈願のため、すでに加茂かもへ行幸せられ、そのおりは家茂および一橋慶喜以下の諸有司、それに在京の諸藩士が鳳輦ほうれんに供奉くぶし

たことが報じてあり、さらに石清水いわしみずへも行幸の思し召おぼしがあつて、攘夷の首途かどとして男山八幡おとこやまはちまんの神前で將軍に節刀を賜わるであらうとおうわさも報じてある。これらのことは、いずれも攘夷派の志士が建白にもとづくという。のみならず、場合によつては帝の御親征をすら望んでゐる人たちのあることが報じてある。この京都便りだよを手にするたびに、香蔵にしても、半蔵にしても、いずれも容易ならぬ時に直面したことを感じた。

四月のはじめには、とうとう香蔵も景蔵のあとを追つて、京都の方へ出かけて行つた。三人の友だちの中で、半蔵一人だけが馬籠の本陣に残つた。

「どうも心が騒いでしかたがない。」

半蔵はひとり言つて見た。

その時になると、彼は中津川の間屋の仕事を家のものに任せて置いて京都の方へ出かけて行くことのできる香蔵の境きょうがい涯をうらやましく思った。友だちが京都を見うるの日は、師と頼む平田鉄胤かねたねと行動を共にしうる日であろうかと思ひやつた。あの師の企図し、また企図しつつあるものこそ、まことの古代への復帰であらうと思ひやつた。おそらく国学者としての師は先師平田篤胤の遺志をついで、紛々としたほまれそしりのためにも惑わされず、諸藩の利害のためにも左右されず、よく大局を見て進まれるであらうとも思ひやつた。

父吉左衛門は、と見ると、病後の身をいたわりながら裏二階の

梯子段はしごだんを昇のぼったり降りたりする姿が半蔵の目に映る。馬籠の本

陣庄屋問屋の三役を半蔵に譲つてからは、全く街道のことに口を出さないというのも、その人らしい。父が発病の当時には、口も言うことができない、足も起たつことができない、手も動かすことができない。治療に手を尽くして、ようやく半身だけなおるにはなおった。父は日ごろ清潔好きで、自分で本陣の庭や宅地をよく掃除そうじしたが、病が起こつてからは手が萎しおれて箒ほうきを執るにも不便であつた。父は能筆で、お家流をよく書き、字体も婉えん麗れいなものであつたが、病後は小さな字を書くこともできなかつた。まるで七つか八つの子供の書くような字を書いた。この父の言葉に、おかげで自分も治療の効によつて半身の自由を得た、幸いに食事も便

事も人手をわずらわさないで済む、しかし箒と筆とこの二つを執ることの不自由なのは実に悲しいと。この嘆息を聞きたびに、半蔵は胸を刺される思いをして、あの友の香蔵のような思い切った行動は執れなかった。

八畳と三畳の二部屋へやから成る味噌納屋みそなやの二階が吉左衛門の隠居所にあててある。そこに父は好きな美濃派の俳書やにながわりゆう蜷川流うづまがわの将棋の本などをひろげ、それを朝夕の友として、わずかに病後をなぐさめている。中風患者の常として、とかくはかばかしい治療の方法がない。他目よそめにももどかしいほど回復もおそかった。

「お民、おれは王滝おうたきまで出かけて行つて来るぜ。あとのことは、清助さんにもよく頼んで置いて行く。」

と半蔵は妻に言つて、父の病を禱^{いの}るために御嶽神社^{おんたけ}への参^{さん}籠^うを思い立つた。王滝村とは御嶽山のすそにあたるところだ。

木曾の総社の所在地だ。ちようど街道も参観交代制度変革のあとをうけ、江戸よりする諸大名が家族の通行も一段落を告げた。半蔵はそれを機会に、往復数日のわずかな閑^{ひま}を見つけて、医薬の神として知られた御嶽の神の前に自分を持って行こうとした。同時に、香蔵の京都行きから深く刺激された心を抱いて、激しい動揺の渦^{かちゅう}中へ飛び込んで行つたあの友だちとは反対に、しばらく寂しい奥山の方へ行こうとした。

王滝の方へ持つて行つて神前にささげるための長歌もできた。

半蔵は三十一字の短い形の歌ばかりでなく、時おりは長歌をも作つたので、それを陳情^{きとう}祈祷の歌と題したものに試みたのである。

「いよいよ半蔵もお出かけかい。」

と言つてそばへ来るのは継母のおまんだ。おまんは裏の隠居所と母屋^{もや}の間を往復して、吉左衛門の身のまわりのことから家事の世話まで、馬籠の本陣にはなくてはならない人になっている。高^{たか}

遠^お藩の方に聞こえた坂本家から来た人だけに、相応な教養もある。

つて、取つて八つになる孫娘のお糸^{くめ}に古今集の中の歌などを諳^あ

誦^{んしょう}させているのも、このおまんだ。

「お母^{つか}さん、留守をお願いしますよ。」と半蔵は言った。「わた

しもそんなに長くかからないつもりです。三日も参籠さんろうすればすぐに引き返して来ます。」

「まあ、思い立った時に出かけて行つて来るがいい。お父さんとつも大層よろこんでおいでのようだよ。」

家にはこの継母があり、妻があり、吉左衛門の退役以来手伝いかよに通つて来る清助がある。半蔵は往復七日ばかりの留守を家ものかよに頼んで置いて、王滝の方へ向かうとした。下男の佐吉は今度も供をしたいと言ひ出したが、半蔵は佐吉も家に残して置いて、弟子の勝重かつしげだけを連れて行くことにした。勝重も少年期から青年期に移りかける年ごろになつて来て、しきりに同行を求めるからで。

神前への供米、『静の岩屋』二冊、それに参籠用の清潔で白い衣裳などを用意するくらいにとどめて、半蔵は身軽にしてくれた。勝重は、これも半蔵と一緒に往くことを楽しみにして、「さあ、これから山登りだ」という顔つきだ。

本陣の囲炉裏では、半蔵はじめ一同集まってこういう時の習慣のような茶を飲んだ。そこへ思いがけない客があつた。

「半蔵さん、君はお出かけになるところですかい。」

と言つて、勝手を知つた囲炉裏の入り口の方からはいつて来た客は、他の人でもない、三年前に中津川を引き揚げて伊那の

方へ移つて行つた旧い師匠だ。みやがわかんさい 宮川寛斎だ。

寛斎はせっかく楽しみにして行つた伊那の谷もおもしろくなく、そこにある平田門人仲間とも折り合わず、飯田いいたの在に見つけた最後の「隠れ家」がまであとに見捨てて、もう一度中津川をさして歸つて行こうとする人である。かつては横浜貿易を共にした中津川の商人万屋安兵衛よろずややすべえの依頼をうけ、二千四百両からの小判を預かり、馬荷一駄だに宰領の付き添いで帰国したその同じ街道の一部を、多くの感慨をもつて踏んで来た人である。以前の伊那行きには細君も同道であつたが、その人の死をも見送り、今度はひとりで馬籠まで歸つて来て見ると、旧いなじみの伏見屋金兵衛ふしみやきんべえはすでに隠居し、半蔵の父も病後の身でいるありさまだ。そういう寛斎もめ

つきり年を取つて来た。

「先生、そこはあまり端近はしぢかです。まあお上がりください。」

と半蔵は言つて、上がり端はなのところはなに腰掛けて話そうとする旧師を囲炉裏ばたに迎えた。寛斎は半蔵から王滝行きを思い立つたことを聞いて、あまり邪魔すまいと言つたが、さすがに長い無沙汰ぶさのあとで、いろいろ話が出る。

「いや、伊那の三年は大失敗。」と寛斎は頭をかきかき言つた。

「今だから白状しますが、横浜貿易のことが崇たつたと見えて、どこへ行つても評判が悪い。これにはわたしも弱りましたよ。あの当時、君らに相談しなかつたのは、わたしが悪かつた。横浜の話はもう何もしてくださるな。」

「そう先生に言っていたかとありがたい。実は、わたしはこういう日の来るのを待っていました。」

「半蔵さん、君の前ですが、伊那へ行つてわたしは自分の持つてゐるものまで失つちまいしましたよ。おまけに、医者にはやらず、手習い子供は来ずサ。まあ三年間の土産みやげと言えば、古史伝じょうぼの上じょうぼ木くを手伝つて来たくらいのもんです。前島正弼まさすけ、岩崎長世、

北原稲雄、片桐春一かたぎり、伊那にある平田先生の門人仲間はみんな

あの仕事を熱心にやっていますよ。あの出板しゅっぱんは大変な評判で、

津和野藩つわのはんあたりからも手紙が来るなんて、伊那の衆はえらい意気

込みさ。そう言えば、暮田正香くれたまさかが京都から逃げて来る時に、君の

家にもお世話になったそうですね。」

「そうでした。着流しに雪駄せったばきで、吾家うちへお見えになった時は、わたしもびつくりしました。」

「あの先生も思い切ったことをやったもんさ。足利あしかが將軍の木像の首を引き抜くなんて。あの事件には師岡もろおか正胤まさたねなども関係していますから、同志を救い出せと言うんで、伊那からもわざわざ運動に京都まで出かけたものもありましたつけ。暮田正香も今じや日陰の身でさ。でも、あの先生のことだから、京都の同志と呼応して伊那で一旗あげるなんて、なかなか黙ってはいられない人なんですネ。とにかく、わたしが出かけて行つた時分と、今とじや、伊那も大違い。あの谷も騒さわがしい。」

寛齋しりは尻しりを持ち上げたかと思うとまた落ちつけ、煙草たばこ入れを腰

に差したかと思うとまた取り出した。そこへお民も茶を勧めに来て、夫の方を見て、

「あなた、店座敷の方へ先生を御案内したら。お母^{つか}さんもお目にかかりたいと言っていますに。」

「いや、そうしちやいられません。」と寛齋は言つた。「半蔵さんもお出かけになるところだ。わたしはこんなにお邪魔するつもりじゃなかった。きょうお寄りしたのはほかでもありませんが、実は無^む尽^{じん}を思い立ちまして、上の伏見屋へも今寄つて来しました。あの金兵衛さんにもお話して来しました。半蔵さん、君にもぜひお骨折りを願いたい。」

「それはよろこんでいたしますよ。いずれ王滝から帰りました上

で。」

「そうどころじやない。あいにく香蔵も京都の方で、君にでもお骨折りを願うよりほかに相談相手がない。どうも男の年寄りというやつは具合の悪いもので、わたしも養子のやっかい厄介にはなりたくないと思うんです。これから中津川に落ちつくか、どうか、自分でも未定です。そうです、今ひと奮発です。ひよつとすると伊勢いせの国の方へ出かけることになるかもしれません。」

無尽加入のことを頼んで置いて、やがて寛斎は馬籠の本陣を辞して行つた。あとには半蔵が上がり端はなのところ立って、客を見送りに出たお民や彼女が抱いて来た三番目の男の子の顔をながめたまま、しばらくそこに立ち尽くした。「気の毒な先生だ。数奇すうき

な生^{しょうがい}涯だ。」と半蔵は妻に言った。「国学というものに初め

ておれの目をあけてくれたのも、あの先生だ。あの年になって、奥さんに死に別れたことを考えてごらんな。」

「中津川の香蔵さんの姉さんが、お亡^なくなりになった奥さんなんですか。よほど年の違^{ちが}う姉^{きょうだい}弟と見えますね。」

「先生には娘さんがたつた一人^{ひとり}ある。この人がまた伶俐^{りこう}な人で、中津川でも才女と言われた評判な娘さんさ。そこへ養子に來たのが、今医者をしている宮川さんだ。」

「わたしはちつとも知らなかった。」

「でも、お民、世の中は妙なものじゃないか。あの宮川先生がおれたちを捨てて行ってしまうとは思われなかったよ。いずれは旧^{ふる}

い弟子のところへもう一度帰って来てくださる日のあるだろうと思つていたよ。その日が来た。」

三

京都の方のことも心にかかりながら、半蔵は勝重かつしげを連れて、王滝おうたきをさして出かけた。その日は須原泊まりすはらということにして、ちようどその通り路みちにあたる隣宿妻籠本陣つまごの寿平次が家へちよつと顔を出した。お民の兄であるからと言うばかりでなく、同じ街道筋の庄屋仲間として互いに心配を分けあうのも寿平次だ。

「半蔵さん、わたしも一緒にそこまで行こう。」

と言いながら、寿平次は草履ぞうりをつツかけたまま半蔵らの歩いて行くあとを追つて来た。

旧暦四月はじめの旅するによい季節を迎えて、上り下りの諸講こうじゅう中が通行も多い。伊勢いせへ、金毘羅こんぴらへ、または善光寺へところざす参詣者さんけいしやの団体だ。奥筋へと入り込んで来る中津川の商人も見える。荷物をつけて行く馬の新しい腹掛け、赤革あかがわの馬具から、首振るたびに動く麻の蠅はえはらいまでが、なんとなくこの街道に活気を添える時だ。

寿平次は半蔵らと一緒に歩きながら言った。

「御嶽おんたけ行きとは、それでも御苦労さまだ。山はまだ雪で、登れますまいに。」

「えゝ、三合目までもむずかしい。王滝まで行つて、あそこの里で二、三日参籠さんろうして来ますよ。」

「馬籠のお父さんとつはまだそんなですかい。君も心配ですね。そう言えば、半蔵さん、江戸の方の様子は君もお聞きでしたらう。」

「こんなことになるんじゃないかと思つて、わたしは心配してしました。」

「それさ。イギリスの軍艦が来て江戸は大騒ぎだそうですね。来月の八日とかが返答の期限だと言うじやありませんか。これは結局、償金を払わせられることになりましたようね。むやみと攘夷じやういなんてことを煽りあお立てるものがあるから、こんな目にあう。そりや攘夷党だつて、国を憂えるところから動いているには相違ない

でしようが、しかしわたしにはあのお仲間の気が知れない。いたい、外交の問題と国内の政事をこんなに混同してしまってもいいものでしょうかね。」

「さあねえ。」

「半蔵さん、これでわたしが庄屋の家に生まれなかったら、今ごろは京都の方へでも飛んで行つて、鎖港攘夷だなんて押し歩いてゐるかもしれませんよ。街道がどうなろうと、みんながどう難儀をしようと、そんなことにおかまいなしでいられるくらいなら、もともと何も心配することはなかったんです。」

妻籠の宿はずれのところまでついて来た寿平次とも別れて、さらに半蔵らは奥筋へと街道を進んだ。翌日は早く須原をたち、道を急いで、昼ごろには^{かけはし}棧まで行つた。雪解の水をあつめた木曾川は、渦を^{うず}巻いて、無数の岩石の間に流れて来ている。休むにいい茶屋もある。^{うぐいす}鶯も鳴く。王滝口への山道はその対岸にあつた。御嶽登山をこころざすものはその道を取つても、^{こしだち}越立、^{しもじょう}下条、黒田なぞの山村を経て、^{ときわ}常磐の渡し^{やまあい}の付近に達することができた。間もなく半蔵らは街道を離れて、山間に深い林をつくる谷に分け入った。^{ひのきけやき}檜、樺にまじる雑木も芽吹きの時で、さわやかな緑が行く先によみがえっていた。王滝川はこの谷間を流れる木曾川の支流である。登り一里という^{さわどとうげ}沢渡峠まで行くと、^{ようはいじよ}遙拝所が

その上にあつて、麻利支天まりしてんから奥の院までの御嶽全山が遠く高く容かたちをあらわしていた。

「勝重さん、御嶽だよ。山はまだ雪だね。」

と半蔵は連れの少年に言つて見せた。層々相重なる幾つかの三角形から成り立つような山々は、それぞれの角度をもつて、剣ヶ峰を絶頂とする一大巖頭がんとうにまで盛り上がっている。隠れたところにあるその孤立。その静寂。人はそこに、常なく定めなき流転るてんの力に対抗する偉大な山嶽さんかくの相貌そうぼうを仰ぎ見ることができ。かくみようぎようじゃ
覚明行者のような早い登山者が自ら骨を埋めたといい伝えらるるのもその頂上にある谿谷けいこくのほとりだ。

「お師匠さま、早く行きましょう。」

と言ひ出すのは勝重ばかりでなかつた。そう言われる半蔵も、自然のおごそかさに打たれて、長くはそこに立つていられなかつた。早く王滝の方へ急ぎたかつた。

御嶽山のふもとにあたる傾斜の地勢に倚^より、王滝川に臨み、里宮の神職と行者の宿とを兼ねたような禰^ね宜^ぎの古い家が、この半蔵らを待っていた。川には橋もない。山から伐^きつて来た材木を並べ、^{いかだ}筏に組んで、村の人たちや登山者の通行に備えてある。半蔵は三^み沢^{さわ}というところでその渡しを渡つて、日の暮れるころに禰^ね宜^ぎの宮下の家に着いた。

「皆さんは馬籠の方から。それはよくお出かけくださいました。馬籠の御本陣ということはわたしもよく聞いております。」

と言つて半蔵を迎えるのは宮下の主人だ。この禰宜^{ねぎ}は言葉をついで、

「いかがです。お宅の方じやもう花もおそいでしょうか。」

「さあ、山桜が三分ぐらいは残つていましたよ。」と半蔵が答える。

「それですもの。同じ木曾でも陽気は違いますね。南の方の花の便り^{たよ}を聞きましてから、この王滝辺のものが花を見るまでには、^{ひとつき}一月もかかりますよ。」

「ね、お師匠さま。わたしたちの来る途中には、紫色の山つつじ

がたくさん咲いていましたつけね。」

と勝重も言葉を添えて、若々しい目つきをしながら周囲を見回した。

半蔵らは夕日の満ちた深い谷を望むことのできるような部屋へやに来ていた。障子の外へは川かわ鵲せき鴿いも来る。部屋の床の間には御嶽山ざおうだいごんげん蔵王大権現と筆太に書いた軸が掛けてあり、壁の上には注連しめ縄なわなども飾つてある。

「勝重さん、来てごらん、これが両部神道というものだよ。」

と半蔵は言つて、二人してその掛け物の前に立った。全く神仏を混こん淆こうしてしまつたような床の間の飾り付けが、まず半蔵をまごつかせた。

しかし、気の置けない宿だ。ここにはくたぶれて来た旅人や参詣者^{んけいしや}なぞを親切にもてなす家族が住む。当主の禰宜^{ねぎ}で十七、八代にもなるような古い家族の住むところでもある。髯^{ひげ}の白いお爺^{じい}さん、そのまたお婆^{ばあ}さん、幾^{いく}人^{たり}の古い人たちがこの屋根の下に生きながらえているとも知れない。主人の宮下はちよいちよい半蔵を見に来て、風呂^{ふろ}も山家での馳走^{ちそう}の一つと言つて勧めてくれる。七月下旬の山開きの日を待たなければ講中も入り込んで来ない、今は谷もさびしい、それでも正月十五日より二月十五日に至る大寒の季節をしのいで^{かんもう}の寒詣^{かんもう}でに続いて、ぽつぽつ祈願をこめに来る参詣者が絶えない、と言つて見せるのも主人だ。行者や中座^{なかざ}に引率されて来る諸国の講中が、吹き立てる法螺^{ほら}の貝の音と共に、

この谷間に活気をそそぎ入れる夏季の光景は見せたいようだ、と言つて見せるのもまた主人だ。

夕飯後に、主人はまた半蔵を見に来て言つた。

「それじゃ、御参籠ごさんろうはあすからとなさいますか。ここに来てい

る間、塩断しおだちをなさるかたがあり、五穀をお断ちになるかたがあ

り、精進しょうじん潔斎けつさいもいろいろです。火の氣を一切おつかいになら

ないで、水でといった蕎麦粉そばこに、果実くだものぐらいで済ませ、木食もくじきの

行ぎようをなさるかたもあります。まあ、三度の食は一度ぐらいになす

つて、なるべく六根ろっこんを清浄にして、雑念を防ぎさえすれば、そ

れでいいわけですね。」

ようやく。そうだ、ようやく半蔵は騒ぎやすい心をおちつけるにいいような山里の中の山里とも言うべきところに身を置くことができた。王滝はことに夜の感じが深い。暗い谷底の方に燈火のあかりもれる民家、川の流れを中心にわき立つ夜の靄、すべてがひっそりとしていた。旧暦四月のおぼろ月のあるころに、この静かな森林地帯へやって来たことも、半蔵をよろこばせた。

半蔵が連れて来た勝重は、美濃落合の稲葉屋から内弟子として預かってからもはや三年になる。短い袴^{はかま}に、前髪をとって、せつせと本を読んでいた勝重も、いつのまにか浅黄色の襦袢^{じゅばん}の襟^{えり}のよく似合うような若衆姿になって来た。彼は綿密な性質で、服^{なりふ}

装りなぞにあまりかまわない方の勉強家であるが、持って生まれ
た美しさは宿の人の目をひいた。かわるがわるこの少年をのぞき
に来る若い娘たちのけはいはしても、そればかりは半蔵もどうす
ることもできなかった。

「勝重さん、君は、くたぶれたら横にでもなるさ。」

「お師匠さま、勝手にやりますよ。どうもお師匠さまの足の速い
には、わたしも驚きましたよ。須原すはらから王滝まで、きょうの山道
はかなり歩きがありました。」

間もなく勝重は高いびきだ。半蔵はひとり行燈あんどんの灯ひを見つめ
て、長いこと机の前にすわっていた。大判の薄藍うすあいろ色の表紙から、
古代紫の糸で綴とじてある装幀そうていまで、彼が好ましく思う意匠の本

がその机の上にひろげてある。それは門人らの筆記になる平田篤胤の講本だ。王滝の宿であけて見たいと思つて、馬籠を出る時にふろしきづつ風呂敷包みの中に入れて来た上下二冊の『静の岩屋』だ。

さびしく聞こえて来る夜の河かわの音は、この半蔵の心を日ごろ精神の支柱と頼む先師平田大人うしの方へと誘つた。もしあの先師が、この潮流の急な文久三年度に生きるとしたら、どう時代の暗あんしよ礁うを乗り切つて行かれるだろうかと思ひやつた。

攘夷——戦争をもあえて辞しないようなあの殺気を帯びた声はどうだ。半蔵はこのひっそりとした深山幽谷の間へ来て、敬慕する故人の前にひとりの自分を持って行つた時に、馬籠の街道であくせくと奔走する時にもまして、一層はつきりとその声を耳の底

に聞いた。景蔵、香蔵の親しい友人を二人までも京都の方に見送った彼は、じつとしてはいられなかつた。熱する頭をしずめ、逸^{はや}る心を抑^{おさ}えて、平田門人としての立場に思いを潜めねばならなかつた。その時になると、同じ勤王に志すとは言つても、その中には二つの大きな潮流のあることが彼に見えて来た。水戸の志士藤田東湖から流れて来たものと、本居平田諸大人に源を発するものと。この二つは元来同じものではない。名高い弘道館の碑文にもあるように、神州の道を敬い同時に儒者の教えをも崇^{あが}めるのが水戸の傾向であつて、国学者から見れば多分に漢^{から}意^{ころ}のまじつたものである。その傾向を押し進め、国家無窮の恩に報いることを念とし、楠^{なんこう}公父子ですら果たそうとして果たし得なかつた武

將の夢を実現しようとしているものが、今の攘夷を旗じるしにする討幕運動である。もとより攘夷は非常手段である。そんな非常手段に訴えても、真木和泉まきいずみらの志士が起こした一派の運動は行くところまで行かずに置かないような勢いを示して来た。

この国ははたしてどうなるだろう。明日は。明後日は。そこま
で考え続けて行くと、半蔵は本居大人がのこした教えを一層尊い
ものに思った。同時代に満足しなかったところから、過去に探求
の目を向けた先人はもとより多い。その中でも、最も遠い古代に
着眼した宣長のような国学者が、最も新しい道を発見して、その
方向をあとから歩いて出て行くものにさし示してくれたことをあ
りがたく思った。

「勝重さん、風引くといけないよ。床にはいつて、ほんとうにお休み。」

半蔵は行燈あんどんのかげにうたた寝している少年を起こして、床につかせ、それからさらに『静の岩屋』を繰って見た。この先師のこした著述は、だれにでもわかるように、また、ひろく読まれるように、その用意からごく平易な言葉で門人に話しかけた講本の一つである。その中に、半蔵は異国について語る平田大人を見た。先師は天保十四年に没した故人のことで、もとより嘉永六年の夏に相州浦賀に着いたアメリカ船の騒ぎを知らず、まして十一

隻からのイギリス艦隊が横浜に入港するまでの社会の動揺を知りようもない。しかし平田大人のような人の目に映るヨーロッパから、その見方、その考え方を教えられることは半蔵にとって実にうれしくめずらしかった。

『静の岩屋』にいわく、

「さて又、近ごろ西の極^{はて}なるオランダといふ国よりして、一種の学風おこりて、今の世に蘭学と称するもの、則^{すなわ}ちそれでござる。元来その国柄と見えて、物の理^{ことわり}を考へ究^{きわ}むること甚^{はなは}だ賢く、仍^{よっ}ては発明の説も少なからず。天文地理の学は言ふに及ばず、器械の巧みなること人の目を驚かし、医薬製^{せい}煉^{れん}の道殊^{こと}にくはしく、その書^{ふみ}どももつぎつぎと渡^{きた}り来りて世に弘^{ひろ}まりそめたるは、即^{すなわ}ち神

の御心であらうでござる。然るに、その渡り来る藥品どもの中には効能の勝れたるもあり、又は製煉を尽して至つて猛烈なる類もありて、良医これを用ひて病症に応ずればいちじるき効驗をあらはすもあれど、もとその薬性を知らず、又はその薬性を知りてもその用ふべきところを知らず、もしその病症に應ぜざれば大害を生じて、忽ち人命をうしなふに至る。これは、譬へば、猿に利刀を持たせ、馬鹿に鉄砲を放たしむるやうなもので、まことに危いことのはなはだ甚しいでござる。さて、その究理のくはしきは、悪しきことにはあらざれども、彼の紅夷ら、世には真の神あるを知らず。人の智は限りあるを、限りなき万づの物の理を考へ究めんとするにつけては、強ひたる説多く、元よりさかしらなる国風な

る故に、^{ゆえ}現在の小事にかかはつて、かへつて幽神の大義を悟らず。
 それゆへにその説至つて究屈にして、我が古道の妨げとなること
 も多いでござる。さりながら、^{せけん}世間の有様を考ふるに、今は物ごと
 と新奇を好む風俗なれば、この学風も儒仏の道の榮えたるごとく、
 だんだんと弘まり行くことであらうと思はれる。しからんには、^{ひろ}
 世のため、人のためとも成るべきことも多からうなれども、又、
 害となることも少なかるまいと思はれるでござる。^{これ}是こそは彼の^か
^{よきこと}吉事^こに是の凶事^{まがごと}のいつぐべき世の中の道なるをもつて、さや
 うには推し量り知られることでござる。そもそもかく^{とつくにぐに}外国々よ
 り万づの事物の我が^{おおみくに}大御国に参り来ることは、^{すめらみかみ}皇神たちの
 大御心にて、その御神徳の広大なる故に、^{ゆえ}善き^よ悪しき^あの選みなく、

森羅万象しんらばんしょうことごとく皇國すめらみくにに御引寄せあそばさるる趣きを
 能く考へ弁わきまへて、外国とつくにより来る事物はよく選み採りて用ふべき
 ことで、申すも畏かしこきことなれども、是これすなはち大神等おおみかみたちの御みここ
 心ろおきて掟と思ひ奉られるでござる。」

半蔵は深いため息をついた。それは、自分の浅学と固陋ころうとばかり
 正直とを嘆息する声だ。先師と言え、外国よりはいって来るも
 のを異端邪説として蛇蝎だかつのように憎みきらった人のように普通に普通に
 思われているが、『静の岩屋』なぞをあけて見ると、近くは朝鮮、
 シナ、インド、遠くはオランダまで、外国の事物が日本に集まっ
 て来るのは、すなわち神の心であるというような、こんな広い見
 方がしてある。先師は異国の借り物をかなぐり捨てて本然ほんねんの日

本に帰れと教える人ではあつても、むやみにそれを排斥せよとは教えてない。

この『静の岩屋』の中には、「夷^{えびす}」という古言まで引き合いに出して、その言葉の意味が平常目に慣れ耳に触れるとは異なつた事物をさしているに過ぎないことも教えてある。たとえば、ありやこりやに人の前にすえた膳^{ぜん}は「えびす膳」、四角であるべきところを四角でなく裁ち合わせた紙は「えびす紙」、元来外用の薬種とされた芍^{しゃくやく}薬が内服しても病のなおるところから「えびす薬」（芍薬の和名）というふうになつてゐる。黒くてあるべき髪^{あか}の毛が黒く、黒くてあるべき瞳^{ひとみ}が青ければこそ、その人は「えびす」である、とも教えてある。

半蔵はひとり言つて見た。

「師匠はやつぱり大きい。」

半蔵の心に描く平田篤胤とは、あの本居宣長を想い見るたびに想像せらるるような美丈夫という側の人ではなかった。彼はある人の所蔵にかかる先師の画像というものを見たことがある。広い角^{かくびたい}額、大きな耳、遠いところを見ているような目、彼がその画像から受けた感じは割合に面^{おもな}長で、やせぎすな、どこか角張^{かくば}ったところのある容^{ようぼう}貌の人だ。四十台か、せいぜい五十に手の届く年ごろの面影^{おもかげ}と見えて、まだ黒々とした髪も男のさかりらしく、それを天保^{てんぽう}時代の風俗のような髻^{たぶさ}に束ねてあつた。それは見台をわきにした座像^{ざざう}で、三蓋菱^{さんがいびし}の羽織^{はおり}の紋や、簡素な線が

あらわした着物の襷ひだにも特色があつたが、ことに、その左の手を寛くつろいだ形に置き、右の手で白扇をついた膝ひざこそは先師のものだ、と思つて、心をとめて見た覚えがある。見台の上に、先師畢ひつせい生の大きな著述とも言うべき『古史伝』稿本の一つが描いてあつたことも、半蔵には忘れられなかつた。あだかも、先師はあの画像から膝ひざを乗り出して、彼の前にいて、「一切は神の心であらうでござる」とでも言っているように彼には思われて来た。

四

いよいよ参籠さんろうの朝も近いと思うと、半蔵はよく眠られなかつ

た。夜の明け方には、勝重のそばで目をさました。山の端^はに月のあるのを幸いに、水垢離^{みずごり}を執つて来て、からだを浄め終わると、温^{あた}かくすがすがしい。着物も白、袴^{はかま}も白の行衣^{ぎょうい}に着かえただけでも、なんとなく彼は厳肅な心を起こした。

まだあたりは薄暗い。早く山を発^たつ二、三の人もある。遠い国からでも祈願をこめに來た参詣者^{さんけいしや}かと見えて、月を踏んで歸途につこうとしている人たちらしい。旅の笠^{かさ}、金剛杖^{こんごうづえ}、白い着物に白い風呂敷包みが、その薄暗い空気の中で半蔵の目の前に動いた。

「どうも、お粗末さまでございました。」
と言つて見送る宿の人の声もする。

その明け方、半蔵は朝勤めする禰宜^{ねぎ}について、里宮のあるところまで数町ほどの山道を歩いた。社殿にはすでに数日もこもり暮らしたような二、三の参籠者が夜の明けるのを待っていて、禰宜の打つ太太鼓が付近の山林に響き渡るのをきいていた。その時、半蔵は^{ふつぎよう}払暁の参拝だけを済まして置いて、参籠のしたくやら勝重を見ることがやらにいったん宿の方へ引き返した。

「お師匠さま。」

そう言つて声をかける勝重は、着物も白に改めて、半蔵が山から降りて来るのを待っていた。

「勝重さん、君に相談がある。馬籠^{まごめ}を出る時にわたしは清助さんに止められた。君のような若い人を一緒に参籠に連れて行かれま

すかつて。それでも君は来たいと言うんだから。見たまえ、この禰宜^{ねぎ}さまだつて、すこし無理でしょうツて、そう言つていますぜ。」

「どうしてですか。」

「どうしてツて、君、お宮の方へ行けば祈祷^{きとう}だけしかないよ。そのほかは一切沈黙だよ。寒さ^{ひも}饑^{ひも}じさに耐える行者の行くところだよ。それでも、君、わたしにはここへ来て果たしたいと思うことがある。君とわたしとは違うサ。」

「そんなら、お師匠さま、あなたはお父^{とつ}さんのためにお禱^{いの}りなさるがいいし、わたしはお師匠さまのために禱りましょう。」

「弱つた。そういうことなら、君の自由に任せる。まあ、眠りた

いと思う時はこの禰宜さまの家へ歸つて寝てくれたまえ。ここにはお山の法則があつて、なかなか里の方で思つたようなものじゃない。いいかい、君、無理をしないでくれたまえよ。」

勝重はうなずいた。

神前へのお初穂、^{はつほ}供米、^{くまい}その他、着がえの清潔な行衣^{ぎょうい}などを
持つて、半蔵は勝重と一緒に里宮の方へ歩いた。

梅の咲く禰宜^{ねぎ}の家から社殿までの間は坂になった細道で、王滝口よりする御嶽参道に続いている。その細道を踏んで行くだけでも、ひとりでに参詣者の心の澄むようなところだ。山中の朝は、

空に浮かぶ雲の色までだんだん白く光って来て、すがすがしい。坂道を登るにつれて、霞かすみ渡った大きな谷間ふたりが二人の目の下にあるようになった。

「お師匠さま、雉子きじが鳴いていますよ。」

「あの覚かくみよう明行者や普寛ふかん行者などが登ったところには、どんなだったろうね。わたしはあの行者たちが最初の登山をした人たちかとばかり思っていた。ここの禰宜さまの話で見ると、そうじやないんだね。講こうじゅう中ちゅうというものを組織して、この山へ導いて来たのがあの人たちなんだね。」

二人は話し話し登った。新しい石の大鳥居で、その前年（文久二年）に尾州公びしゅうこうから寄進になったというものの前まで行くと、

半蔵らは向こうの山道から降りて来る一人の修行者にもあつた。珠数じゆずを首にかけ、手に杖つえをつき見るからに荒々しい姿だ。肉体を苦しめられるだけ苦しめているような人の相貌そうぼうだ。どこの岩窟がんくの間から出て来たか、雪のある山腹の方からでも降りて来たかというふうで、山にはこんな人が生きているのかということが、半蔵を驚かした。

間もなく半蔵らは、十六階もしくは二十階ずつから成る二町ほどの長い石段にかかった。見上げるように高い岩壁を背後うしろにして、里宮の社殿がその上に建てられてある。黒々とした残雪の見られる谷間の傾斜と、小暗い杉おぐらや檜すぎの木立ひのきとにとりまかれたその一区域こそ、半蔵が父の病を瘳いるためにやって来たところだ。先師

の遺著の題目そのままともいうべきところだ。文字どおりの「静しずの岩屋いわや」だ。

とうとう、半蔵は本殿の奥の靈れい廟びようの前にひざまずき、かねて用意して来た自作の陳情祈禱きとうの歌をささげることができた。他の無言な参籠者さんろうしやの間に身を置いて、社殿の片すみに、そこに置いてある円く簡素な※蒲団わらぶとんの上にすわることもできた。

あたりは静かだ。社殿の外にある高い岩の間から落ちる清水しみずの音よりほかに耳に入るものもない。ちようど半蔵がすわったところからよく見える壁の上には、二つの大きな天狗てんぐの面が額にして

掛けてある。その周囲には、嘉永年代から、あるいはもつとずっと古くからの講社や信徒の名を連ねた種々さまざまな額が奉納してあつて、中にはこの社殿を今見る形に改めた造営者であり木曾福島の名君としても知られた山村蘇門そもんの寄進にかかる記念の額なぞの宗教的な気分を濃厚ならしめるのもあるが、ことにその二つの天狗の面が半蔵の注意をひいた。耳のあたりまで裂けて牙齒きばのある口は獣のものに近く、隆たかい鼻は鳥のものに近く、黄金の色に光った目は神のものに近い。高山の間に住む剛健な獣の野性と、翼を持つ鳥の自由と、深秘しんぴを体得した神人の靈性とを兼ねそなえたようなのがその天狗だ。製作者はまたその面に男女両性を与え、山さん嶽く的な風貌ふうぼうをも付け添えてある。たとえば、杉すぎの葉の長くた

れ下がったような粗い髪、延び放題に延びた草のような髯。あだ
 かも暗い中世はそんなところにも残つて、半蔵の目の前に光つて
 いるかのように見える。

いつのまにか彼の心はその額の方へ行つた。ここは全く金胎
 両部の霊場である。山嶽を道場とする「行の世界」である。神と
 仏とのまじり合つた深秘な異教の支配するところである。中世以
 来の人の心をとらえたものは、こんな両部を教えとして発達して
 来ている。父の病を瘳りに来た彼は、現世に超越した異教の神よ
 りも、もっと人格のある大己貴、少彦名の二神の方へ自分を
 持つて行きたかつた。

ぬるで
 白膠木の皮の燃える香気と共に、護摩の儀式が、やがてこの霊

場を莊嚴にした。本殿の奥の厨子ずしの中には、大日だいにちによらい如来の仏像でも安置してあると見えて、参籠者はかわるがわる行つてその前にひざまずいたり、珠数をつまぐる音をさせたりした。御簾みすのかげでは心しんぎよう経も読まれた。

「これが神の住居すまいか。」

と半蔵は考えた。

彼が目に触れ耳にきくものの多くは、父のために禱いのることを妨げさせた。彼の心は和宮様御降嫁のころに福島役所から問い合わせのあつた神葬祭の一条の方へ行ったり、国学者仲間にやかましい敬神の問題の方へ行ったりした。もつとも、多くの門弟を引きつれて来て峻嶮しゅんけんを平らひらげ、山道を拓ひらき、各国に信徒を募つ

たり、講中を組織したりして、この山のために心血をささげた覚明、普寛、一心、一山なぞの行者らの気魄きはくと努力とには、彼とても頭が下がったが。

終日静座せいざ。

いつのまにか半蔵の心は、しばらく離れるつもりで来た馬籠の宿場の方へも行つた。高札場がある。二軒の問屋場がある。伏見屋の伊之助、問屋の九郎兵衛、その他の宿役人の顔も見える。街道の継立つぎたても困難になつて来た。現に彼が馬籠を離れて来る前に、仙せん台だい侯こうが京都の方面から下つて来た通行の場合がそれだ。あの

時の仙台の同勢は中津川泊まりで、中通しの人足二百八十人、馬百八十疋びきという触れ込みだった。継立ての混雑、請け負いのものの心配なぞは言葉にも尽くせなかった。八つ時過ぎまで四、五十駄だの継立てもなく、人足や牛でようやくそれを付け送ったことがある。

こんなことを思い浮かべると、街道における輸送の困難も、仙台侯の帰東も、なんとなく切迫して来た関東や京都の事情と関係のないものはない。時ならぬ鐘の音が馬籠の万福寺からあの街道へがながん聞こえて来ている。この際、人心を善導し、天下の泰平を禱いのり、あわせて上じょう洛らく中の將軍のためにもその無事を祈れとの意味で、公儀から沙汰さたのあった大般若だいはんやの莊嚴おごそかな儀式があ

の万福寺で催されているのだ。手兼村てがのむらの松源寺、妻籠つまごの光徳寺、湯舟沢の天徳寺、三留野みどのの等覚寺、そのほか山口村や田立村の寺々まで、都合六か寺の住職が大般若に集まつて来ているのだ。

物々しいこの空気を思い出しているうちに、半蔵の胸には一つの悲劇が浮かんで来た。峠村の牛行司うしぎょうじで利三郎と言えば、彼には忘れられない男の名だ。かつて牛方事件の張本人として、中津川の旧問屋角屋かどや十兵衛を相手に血戦を開いたことのある男だ。それほど腰骨こしぼねの強い、黙って下の方に働いているような男が、街道に横行する雲助くもすけ仲間と衝突したのは、彼として決して偶然な出来事とも思われなかった。ちようど利三郎は、尾州の用材を牛につけて、清水谷下しみずだにしたというところにかかった時であつたという。

三人の雲助がそこへ現われて、竹の杖つえで利三郎を打ち擲ようちやくした。

二、三か所も打たれた天窓あたまの大疵おおきずからは血が流れ出て、さすが

の牛行司も半死半生の目にあわされた。村のものは急を聞いて現

場へ駆けつけた。この事が宿方へも注進のあつた時は、二人ふたりの宿

役人が目証めあかしの弥平やへえを連れて見届けに出かけたが、不幸な利三郎

はもはや起たてない人であらうという。一事が万事だ。すべてこれ

らのことは、参観さんきん交代こうたい制度の变革以来に起こつて来た現象だ。

あわれ
「憐むべき街道の犠牲。」

と半蔵は考えつづけた。上は浪人から、下は雲助まで、世襲過

重の時代が生んだ特殊な風俗と形態とが目につくだけでも、なん

となく彼は社会変革の思いを誘われた。庄屋しやうやとしての彼は、い

ろいろな意味から、下層にあるものを護らねばならなかった……ふとわれに返ると、静かな読経どきようの声が半蔵の耳にはいった。にわかに明るい日の光は、屋外そとにある杉の木立ちすぎを通して、社殿に満ちて来た。彼は、単純な信仰に一切を忘れているような他の参籠者を目の前にながめながら、雑念の多い自己おのれの身を恥じた。その夕方には、禰宜ねぎが彼のそばへ来て、塩握飯しおむすびを一つ置いて行つた。

四日目には半蔵はどうやら心願を果たし、神前に終わりの禱りいのちをささげる人であつた。たとい自己おのれの寿命を一年縮めてもそれを

父の健康に代えたい、一年で足りなくば二年三年たりともいえないというふうに。

社殿を出るころは、雨が山へ来ていた。勝重は傘かさを持って、禰ね宜ぎの家の方から半蔵を迎えに来た。乾燥した草木をうるおす雨は、参籠後の半蔵をい活き返るようにさせた。

「勝重さん、君はどうしました。」

社殿の外にある高い岩壁の下で、半蔵がそれを言い出した。彼も三日続いた沈黙をその時に破る思いだ。

「お師匠さま、お疲れですか。わたしは一日だけお籠こもりして、あとはちよいちよいお師匠さまを見に来ました。きのうはこのお宮のまわりをひとりで歩き回りました。いろいろなめずらしい草を

集めましたよ——じじばば（春蘭^{しゅんらん}）だの、しようじようばか
 まだの、姫龍胆^{ひめりんどう}だの。」

「やつぱり君と一緒に来てよかった。ひとりでいる時でも、君が
 来ていると思うと、安心してすわつていられた。」

二人が帰つて行く道は、その路傍^{みちばた}に石燈籠^{いしどうろう}や石造の高麗犬^{こまいぬ}
 なぞの見いださるるところだ。三面六臂^{めんろくぴ}を有し猪^{いのしし}の上に踊る三宝

荒神のように、まぎれもなく異国伝来の系統を示す神の祠^{ほこら}もある。

十二権現^{ごんげん}とか、神山靈神とか、あるいは金剛道神とかの石碑は、

不動尊の銅像や三十三度供養塔なぞにまじつて、両部の信仰のい
 かなるものであるかを語っている。あるものは飛驒^{ひだ}、あるものは

武州、あるものは上州、越後^{えちご}の講中の名がそれらの石碑や祠^{ほこら}に記

しつけてある。ここは名のみの本曾の総社であつて、その実、御嶽大権現である。これが二柱の神の住居すまいかと考えながら歩いて行く半蔵は、行く先でまごついた。

禰宜ねぎの家の近くまで山道を降りたところで、半蔵は山家風なかるさん姿の男にあつた。みのかさ傘をさして、そこまで迎えに来た禰宜の子息だ。その辺には蓑笠で雨をいとわず往来する村の人たちもある。重い物を背負しよい慣れて、山坂の多いところに平気で働くのは、本曾山中いたるところに見る図だ。

「オヤ、お帰りでございますか。さぞお疲れでございましょう。」
禰宜の細君は半蔵を見て声をかけた。山登りの多くの人を扱い慣れていて、いろいろ彼をいたわってくれるのもこの細君だ。

「御参籠のあとでは、皆さまが食べ物に気をつけますよ。こんな山家で何もございせんけれど、芹^{せり}粥^{がゆ}を造つて置きました。落とし味噌^{みそ}にして焚^たいて見ました。これが一番さっぱりしてよいかと思ひますが、召し上がつて見てください。」

こんなことを言つて、芹^{せり}の香のする粥^{かゆ}などを勧めてくれるのもこの細君だ。

温^{あた}暖^{たか}い雨はしとしと降り続いていた。その一日はせめて王滝に逗^{とうり}留^{ゆう}せよ、風呂^{ふろ}にでもはいつてからだを休めて行けという禰宜の言葉も、半蔵にはうれしかった。

「へい。床屋でございます。御用はこちらでございますか。」

宿の人に呼んでもらつた村の髪結いが油じみた台箱をさげなが

ら半蔵の部屋へやにはいつて来た。ぐっすり半日ほど眠ったあとで、半蔵は参籠に乱れた髪を結い直してもらった。元結もとゆいに締められた頭には力が出た。気もはつきりして来た。そばにいる勝重を相手に、いろいろ将来の身の上の話なぞまで出るのも、こうした静かな禰宜の家なればこそだ。

「勝重さん、君もそう長くわたしのそばにはいられまいね。来年あたりは落合おちあいの方へ帰らにやなるまいね。きっと家の方では、君の縁談が待っていましたよ。」

「わたしはもつと勉強したいと思います。そんな話がありましたけれど、まだ早いからと言って断わりました。」

勝重はそれ言うにも顔をあか紅らめる年ごろだ。そこへ禰宜が半

蔵を見に來た。禰宜は半蔵のことを「青山さん」と呼ぶほどの親しみを見せるようになった。里宮参籠記念のお札、それに神饌しんせんの白米などを用意して來て、それを部屋へやの床の間に置いた。

「これは馬籠へお持ち歸りを願います。」と禰宜は言つた。「それから一つお願いがあります。あの御神前へおあげになつた歌は、結構に拝見しました。こんな辺鄙へんぴなところで、ろくな短冊たんざくもありませんが、何かわたしの家へも記念に残して置いていただきたい。」

禰宜はその時、手をたたいて家のものを呼んだ。自分の子息むすこをその部屋に連れて來させた。

「青山さん、これは八つになります。おそ生まれの八つですが、

手習いなぞの好きな子です。ごらんのとおりな山の中で、よいお師匠さまも見当たらないでいます。どうかこれを御縁故に、ちよくちよく王滝へもお出かけを願いたい。この子にも、本でも教えてやっていただきたい。」

禰宜はこの調子だ。さらに言葉をついで、

「福島からここまで五里と申しておりますが、正味四里半しかありません。青山さんは福島へはよく御出張でしょう。あの行ぎよう人にん橋ばしから御嶽山道について常磐ときわの渡しまでお歩きになれば、

今度お越しになったと同じ道に落ち合います。この次ぎはぜひ、福島の方からお回りください。」

「えゝ。王滝は気に入りました。こんな仙せんきよう郷が木曾にあるか

と思うようです。またおりを見てお邪魔にあがりますよ。わたしもこれでいそがしいからですし、御承知の世の中ですから、この次ぎやって来られるのはいつのことですか。まあ、王滝川の音をよく聞いて行くんですね。」

半蔵はそばにいる勝重に墨を磨^すらせた。彌宜から求めらるるままに、自作の歌の一つを短冊に書きつけた。

梅の花匂^{にお}はざりせば降る雨にぬるる旅路^{たびじ}は行きがてましを

半蔵

そろそろ半蔵には馬籠の家の方のことが氣にかかつて来た。一ひとつき

月からして陽氣の遅れた王滝とも違い、彼が御嶽の話を持つて父吉左衛門をよろこばしうる日は、あの木曾路の西の端はもはや若葉の世界であろうかと思ひやつた。將軍上じょうらうく洛中の京都へと飛び込んで行つた友人香蔵からの便りたよは、どんな報告をもたらし、そこに自分を待つだらうかとも思ひやつた。万事不安のうちに、むなしく春の行くことも惜しまれた。

「そうだ、われわれはどこまでも下から行こう。庄屋には庄屋の道があろう。」

と彼は思ひ直した。水垢離みずごりと、極度の節食と、時には滝にまで打たれに行つた山籠やまごもりの新しい経験をもつて、もう一度彼は馬

籠の駅長としての勤めに当たろうとした。

御嶽のすそを下ろうとして、半蔵が周囲を見回した時は、黒船のもたらす影響はこの辺鄙な木曾谷の中にまで深刻に入り込んで来ていた。ヨーロッパの新しい刺激を受けるたびに、今まで眠っていたものは目をさまし、一切がその価値を転倒し始めていた。急激に時世遅れになって行く古い武器がある。眼前に潰えて行く旧くからの制度がある。下民百姓は言うに及ばず、上御一人かみごいちにんですら、この驚くべき分解の作用をよそに、平静に暮らさるるとは思われないようになって来た。中世以来の異国の殻からもまだ脱ぎ切らないうちに、今また新しい黒船と戦わねばならない。半蔵は『静の岩屋』の中にのこった先師の言葉を繰り返して、測りがた

い
神の心を畏^{おそ}れた。

青空文庫情報

底本：「夜明け前 第一部（上）」岩波文庫、岩波書店

1969（昭和44）年1月16日第1刷発行

底本の親本：「改版本『夜明け前』」新潮社

1936（昭和11）年7月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「ポルトガル」は、第二部ではすべて「ホルトガル」と表記されています。

入力：菅野朋子、小林繁雄

校正：高橋真也

2001年5月24日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜明け前

第一部上

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 島崎藤村

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>